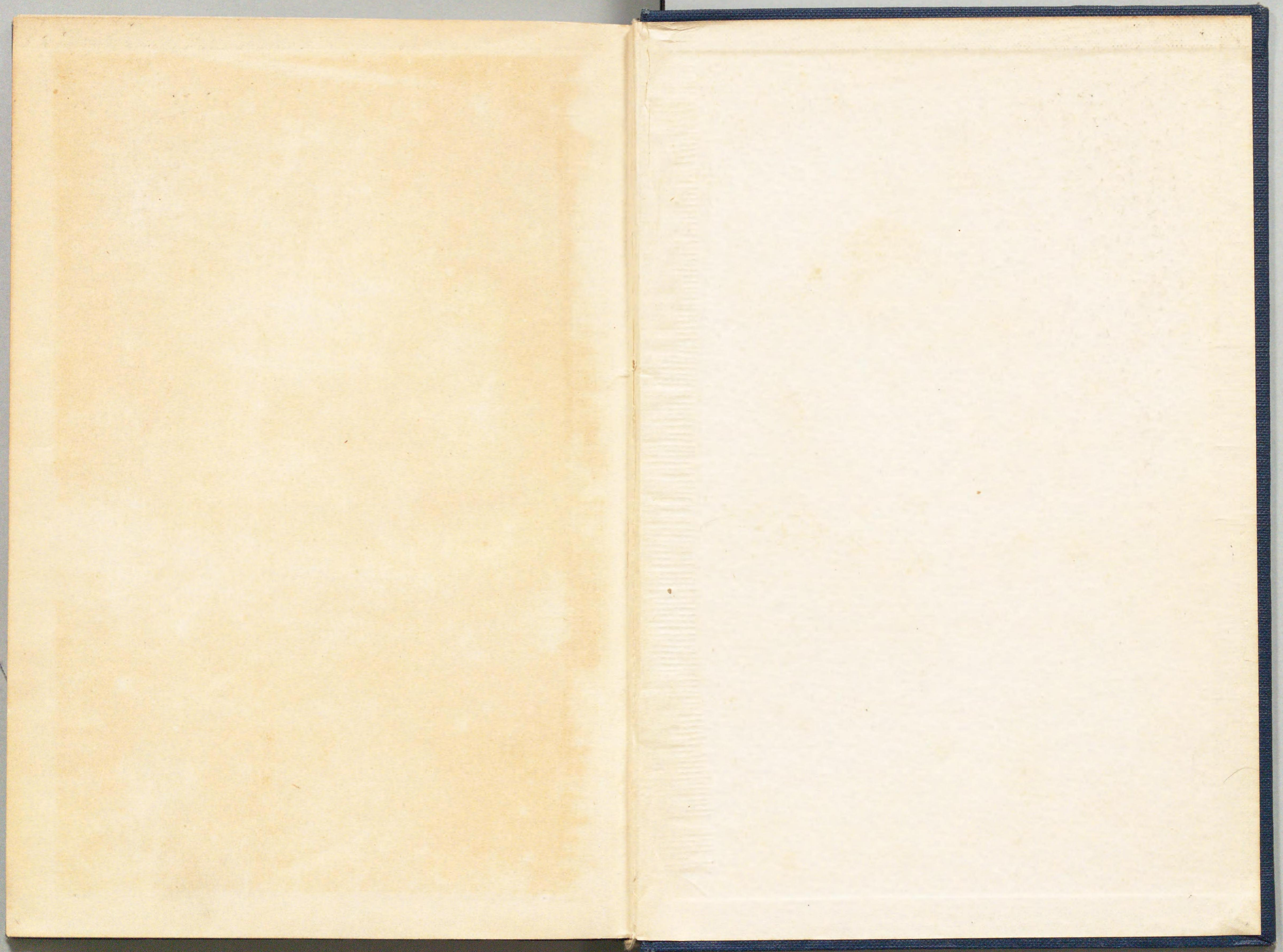


210.3
R472
S



00001458



編纂顧問 三上參次
編纂主任 佐伯有義

六國史 卷六

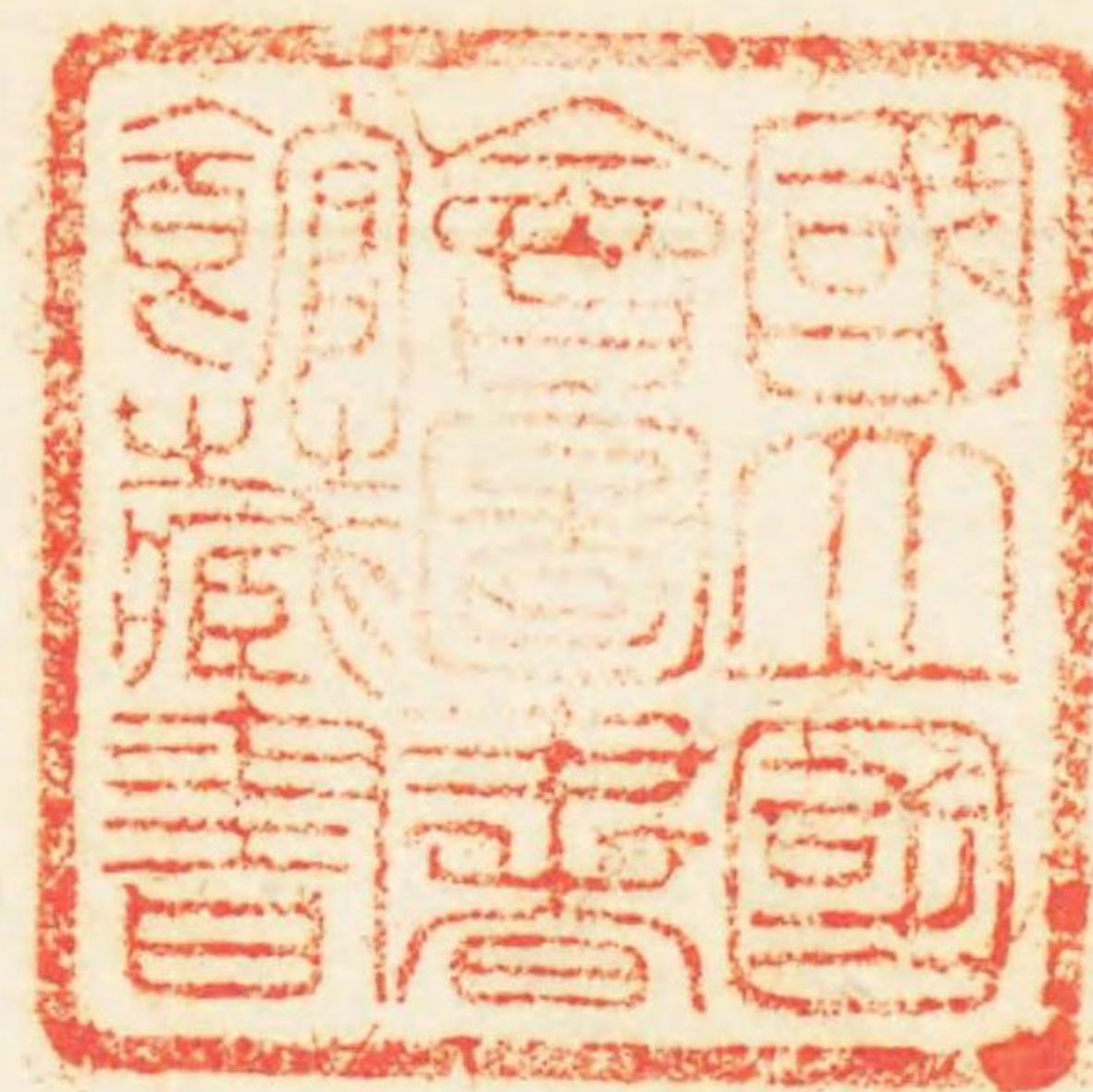
朝日新聞社藏版

編纂顧問 三上參次
編纂主任 佐伯有義

六國史 卷六

朝日新聞社藏版

210.3
R492
S



續日本後紀

全

8221

1458

續日本後紀

解説

一、書名

續日本後紀は、仁明天皇御一代の記録にて、天長十年二月より嘉祥三年三月に至るまで、十八年間の事を前史の體に倣ひて編修せり。序文に起自天長十年二月乙酉、訖于嘉祥三年三月己亥、惣十八年、據春秋之正體、聯甲子以銓次、考以始終、分其首尾、都爲廿卷、名曰續日本後紀と見え、書名及卷數に就きて、釋日本紀本朝書籍目錄等、諸書の記載するところ何れも同じ。

二、編修

此書は、文德天皇齊衡二年二月勅撰の詔を下され、清和天皇貞觀十一年八月撰修功成りて奏上せり。今其の沿革を考ふるに、序文に

伏惟先皇帝^中承和撫運、歷稔惟長、善政森羅、嘉暮狼藉、未編簡牘、恐或湮淪、爰詔太政

大臣從一位臣藤原朝臣良房右大臣從二位兼左近衛大將臣藤原朝臣良相大納言從三位民部卿兼太皇太后宮大夫臣伴宿禰善男參議正四位下行式部大輔臣春澄朝臣善繩散位從五位下臣縣犬養大宿禰貞守等因循故實令以撰修と見えて、勅命せられし氏名は明かなれど、其の年月を記されざるが、文德實錄卷七に、

齊衡二年二月丁卯、詔右大臣正二位兼左近衛大將藤原朝臣良房、參議從三位兼行中宮大夫讚岐守伴宿禰善男從四位下行刑部大輔春澄朝臣善繩、正六位上行少外記安野宿禰豐道等、修國史、

と見え、之に依りて此書撰修の勅命ありし年月は明かなり。實錄に據るに良房善男善繩の名は見ゆれど、良相貞守の名のもれたるは、此の二人は是より以後に此の事に與らしめられしならむ。文德天皇は、此の勅命ありし後五年にて崩御あらせられしかば、御在位中には未だ完成に至らず。尋いで清和天皇御即位あらせられ、先旨の未だ竟へざるを恨み、速に之を成すべしと重ねて勅ありしが、善男は貞觀八年九月應天門を焼きし罪によりて、伊豆國に配流せられ、右大臣良相は同九年十月薨去あり、貞守は是より先同五年駿河守となりて赴任せしかば、良房善繩の二人、少外記安

野豐道以下を指揮して編修を急ぎ、十一年八月に至り、始めて功成りて奏上せり。此の史奏上の事は、三代實錄にも記載すべきに、其の事の見えざるはいかゞせしにか。貞觀格式奏上の事は、詳かに載せられ、本史奏上の記録の少しも見えざるは、蓋し不審しき事なりと云ふべし。

三、撰者

此の書勅撰の命を蒙りしは、

- 太政大臣 藤原朝臣良房
- 右大臣 藤原朝臣良相
- 大納言 伴宿禰善男
- 參議 春澄朝臣善繩
- 散位 縣犬養宿禰貞守
- 少外記 安野宿禰豐道

以上の人々なるが、參議以上の顯職に在りし人は、此にあらためて贅せず。其の他の人々が官途に於ける閱歷を述べむに、

縣犬養宿禰貞守は、姓氏錄左京神別に、縣犬養宿禰神魂命八世孫阿居太都命之後也と見えて、左京に住み天神の裔なるが、漢藉に通じ、文筆に達したるを以て、少内記に任せられ、散位頭、駿河守等を歴任せり。此の人の文筆に長じたることは、嘉祥二年二月丙戌紀に以少内記正七位上縣犬養大宿禰貞守爲存問渤海使發遣於能登國、同三月壬午紀に以存問使少内記正七位下縣犬養大宿禰貞守爲兼領渤海客使など見えたるにて知らる。國史編修の事に與らしめ給ひしも、内記として其の道に通じたるに因れるなるべし。然るに本史編修の半途にして、地方官に任じたることは、貞觀五年二月十日癸卯紀に、散位頭從五位下縣犬養大宿禰貞守爲駿河守とあるにて明かなり。又此の人の從五位下に叙せられしことは、文德紀齊衡二年正月戊子紀に見え、本史勅撰の命ありし前月なり。

安野宿禰豐道は、初め内記に任せられ、後外記に轉じたり。少内記たりし事は、嘉祥二年五月乙丑紀に、遣少内記從七位下安野宿禰豐道等於鴻臚館賜勅書并太政官牒と見えたるが、後外記に轉じ、位階は從七位下より漸次昇進して、齊衡二年には正六位上に至れり。

四、異本

續日本後紀の寫本はいと多し。されど現存するものは、いづれも天文本の複寫にて、其の年代に多少の差あれど、同一系統のものなり。唯こゝに東山御文庫本の十五十六の兩卷のみは、些か系統を異にせりと思はる。依りて其の由を少しく述べむに、天文本は天文中三條西公條公が書寫せられし本なるが、其の原本は、大治の古寫本にて、神祇伯顯仲の子源忠季の所持せしものなり。其の證は内閣本谷森本等の奥書を考ふるに

卷三、本云保、二年二月三日未時、梳頭髮間、偃見之事、宮内大輔源忠季(關本)

卷四、本云保延二年三月二日未時見了、(關本、尾本)

卷五、保延二年三月二日酉刻見、于時雨降、(關本)

卷七、本云保延四年七月披閱了、(西本)

卷十、本云大治元年四月十七日、以已剋書寫了、

保延二年七月廿九日見了、司農侍郎源判、(西本、谷本)

右の如く見えたり、但し谷森本は大治の治を始と誤り、七月廿九日の九を六とせり、卷十に司農侍郎源判とある司農侍郎は宮内大輔の唐名なり、されば卷三に宮内大

輔源忠季とあると同人なること疑なく、忠季は尊卑分脈に據るに、神祇伯顯仲の子にして、金葉及詞花集の撰者の一人なり。今其の系譜を左に示さむ。

具平親王右大臣—師房右大臣—顯房顯房公子(二男)雅實公常弟—顯仲神祇伯從三位、金葉以下作者
正五下大輔
 忠季母安守藤定成女
保延四三十九載

此に擧げたる五卷以外には、保延云々の奥書無ければ、忠季所傳の本なりとは断定し難けれど、其の他の十五卷も恐くは忠季所傳の本にて、大治元年或は其の前後に亘りて書寫せしものなるべし。大治保延は并に崇徳天皇の御宇の年號にて、大治元年は保延二年より十一年前なり。忠季の父顯仲は神祇伯にて、金葉集以下の作者なるが、其の妹には待賢門院堀川大夫典侍待賢門院兵衛等女流の歌人輩出し、其の弟にして天台座主權僧正俊堯あり。文學に秀でたる血統の人なるは大方疑ひなきもの、如く、此書も恐らくは父顯仲より譲られしものなるべし。

斯くて其の後幾度か轉變して、天文中三條西公條公が、國史古寫本の蒐集に苦心せられし際に、之を原本として謄寫せられしもの即ち天文本なり。今諸本の奥書を閱するに

卷 三、天文二六廿日卒馳筆(閣本)

卷 四、天文二八十六未時終書了(閣本、尾本、終書了の三字は尾本のみにあり)

卷 五、天文二十月五日終書(閣本)

卷 六、天文二年小春廿六日直禁中小番於灯下馳筆終書功了(西本)

卷 七、天文二十一廿二夜了(西本)

卷 八、天文三上元日書功了(西本)

卷 九、天文三正廿八了(西本)

卷 十、天文三閏正月六日於禁中番衆所灯下終書了、今夜甚雨(西本、谷本)

卷 十一、天文三閏正月九日夜於灯下終功了(西本)

卷 十二、天文三九四了此間數月懈怠(西本)

卷 十六、天文四二八日於灯下終(宮本、谷本、中本、安本)

卷 十七、天文四二十五書寫了(宮本、谷本、中本、安本)

卷 十八、天文四三二了(版本、閣本、前本、宮本、中本、淀本、安本)

卷 十九、天文四三六日(谷本、中本、但中本には二日とす)

卷 二十、天文四年三月七日已刻立筆申剋終功了(中本、谷本、安本)

とあり、此の奥書に據るに、卷一及二には奥書見えねど、三以下を通覽して、天文二年

より始め、四年三月までに書寫を終られしこと明かなり。是即ち天文の原本にて、三條西家に之を傳へられたり。公條は實隆の子にて、天文二年には四十七歳にて權大納言正二位たりき。同十年内大臣に任じ、十一年右大臣に轉ず。十二年辭官、十三年二月落飾す。内閣慶長寫本を始め、尾州本、前田本、谷森本、中原本、宮崎本、安田本等何れも此の天文本の複寫なること、此の奥書にて明かなるが、以下現存の古寫本版本等に就きて、其の概要を述べむ。

(一) 寫本

(一) 三條西本

即ち天文本の原本なるが、今三條西家に存せずといふ。谷森翁校合本に、嘉永六年二月二日以稱名院右大臣眞蹟御本、遂批校了、平種案とあり、當時尙ほ同家に存せしこと明かなるが、其の後にいかになりしか詳ならず。此の外に高柳光壽氏所藏の本二卷あり、卷五と卷八となり、卷八の首端に、保延二卷之内、壹卷、三條西傳來、弘化二寫とあり、されば此の二卷は弘化二年に三條西家本を寫せるものにて、眞本の面影を傳へたるものといふべし。

(二) 一條家本

三條西本と酷類せる良本なりと思へど、今一條公爵家に存せずといふ。井上頼圀翁校合本卷一奥書に、天保十五年六月卅日以桃華本三條西本校合了、文會堂主人とありて、卷六に至るまで桃華本の名見ゆ。蓋桃華は一條家なり。

(三) 内閣本 二十卷十册

慶長の寫本にて、來歴志本と稱し、天文本の複寫なり。纂話には慶長二年寫本とあり。

(四) 尾州家本 二十卷十册

内閣本に能く相似たり。同じく天文本の複寫なり。内藤廣前之を校合して同志に示したるより、學者間に大いに之を尊重せり。

(五) 前田家本 二十卷四册

内閣本尾州家本と能く類似せり。書寫の年代詳ならざれど、寛永を下らざるべし。松雲公時代に蒐集せられし寫本の一なり。

(六) 中原本 二十卷四册

中原職忠の藏本にて、谷森善臣翁の手に歸し、現に其の令息建男氏所藏せらる。職忠は寛永頃の人なれば、書寫の年代も是より下らざるべし。體裁其の他前田本とよく

相似たれど奥書は無し。

(七) 谷 森 本 二十卷四册

谷森翁の蒐集せられしものにて、堂上華族の家にありしものなるべし。中原本とよく相似たり。

(八) 石 山 本 二十卷十册

是も谷森翁の蒐められし本にて、石山氏閑齋の印あり。よりて假に石山本と名づく。書寫の年代は古からざれど、内容前掲の諸本と相似たり。

(九) 林崎文庫本 三卷卷一二三

天明四年村井古巖の林崎文庫に奉納せし本にて、書寫の年代詳ならざれど善本なり。唯惜むらくは卷一以下僅に三卷を存するのみ。

(一〇) 宮崎文庫本 二十卷二十册

慶安二年荒木田盛澄以下十名の有志自ら書寫して奉納せし本なり。出口延佳を始め岩出末清・與村弘正等類史紀略等を以て校合せり。水戸校訂本と似類せる所多きは此の故なるべし。

(一一) 淀 本 二十卷十册

舊淀藩主稻葉子爵家の藏本にて、今神道本局の所藏となる。奥書なし。

(一二) 埴 本 二十卷十册

一も奥書なく、書寫の年代詳ならざれど、石山本と彷彿たり。和學講談所及淺草文庫の印あり。内閣文庫に所藏せらる。

(一三) 堀 本

近江の人堀杏庵の藏本なり。山崎氏校合本に天保癸卯五月廿六日以堀氏本一校、元融とあり、村尾元融親しく原本に就きて校合せりといふ。今其の所在詳ならず。

(一四) 細 井 本

細井昌阿の藏本なり。狩谷掖齋の校合本に、文政七甲申年十月十五日、友人細井昌阿所遺古鈔本を以て校合すとあり。山崎氏も亦細本を以て親しく校合せりといふ。今所在詳ならず。以下脇坂本に至るまで何れも同じ。

(一五) 安 田 本

安田躬弦の藏本なり。同じく掖齋の校合本に、寛政八年八月安田躬弦の藏本を以て校合すと見ゆ。

(一六) 井 上 本

井上作左衛門の藏本なり。狩谷校本に寛政八年之を以て校合せりといふ。

(七) 大橋本

大橋正樹の藏本なり。狩谷校本に大本とあるもの是なり。但し校合の年月を記さず。

(八) 脇坂本

八雲軒脇坂淡路守安元の遺本なり。十七卷以下は缺けたりといふ。伴氏校合本に天保十三年十月本書を以て校合すとあり。

(二) 版本

(一) 寛文版本 二十卷

寛文八年十月立野春節の跋あり。但し塙本には春節の書ける明暦四年の跋文あり。之に據れば明暦三年續日本紀出版の翌年之に續きて出版せむとせしが、故ありて遷延し、寛文八年に至りて上梓せしものなるべし。

(二) 寛政再刻本 二十卷十册

卷二十の卷尾に、天明八申春焼失、寛政七乙卯春再刻、洛三條出雲寺林元章とあり。再刻なれば原版と同一なるべきに、誤字いと多し。山崎氏之を知らずして底本とせし

が故に、同氏校訂本には徒勞頗る多し。

(三) 校訂本

(一) 水戸校訂本 二十卷十册

奥書に元祿肆年歲次辛未正月貳拾陸日前中納言從三位水戸侯源朝臣光圀謹識とあり。

(二) 山崎知雄校訂本 二十卷十册

本書凡例に安政四年孟冬望後一日とあれど、卷四に安政改元歲次甲寅十二月七日書寫成、知雄同五に安政三年歲次丙辰正月三日起筆同月廿七日成、知雄とあり。以下每册書寫の年月日を書し、卷二十の終に安政四年歲次丁巳後五月書寫卒業、同五年歲次戊午夏六月廿七日一校了、全部卒業、山崎知雄時年六十一とあり。されば安政元年より起業、其の事の全く成りしは同五年六月なり。無窮會に現存のものは知雄自筆の原本にて、之を閲覽するに、其の勞苦の跡歴々たり。

(三) 續日本後紀纂註 二十卷十册 村岡良弼

明治三十七年一月に成り、之を刊行したるは四十五年三月なり。

五、錯簡と脱漏

日本書紀を始め、其の他にも多少の錯簡なきにあらざれど、本史の如く甚しきはなし。就中卷一の如きは殆ど亂麻の如く、手を束ねて茫然たらしむるものあり。いかにして斯く錯亂せしか、徴すべきものなけれど、應仁の亂若しくは其の他の事變に遭ひて、毎紙飛散し、或は寸斷せられしものありしを、拾ひ集めて卷冊となせるより、斯くの如き錯亂を來せるなるべし。

次に本書には脱文頗る多し。類聚國史及日本紀略と對照するに、事實の干支と共に缺けたるもの少からず。或は云々と書して本文を略したるものあり、是は傳寫の際に勞を厭ひて省きしものなり。此の例は三代實錄にも多し。省略の年代は詳ならざれど、蓋天文以前なるべし。其は天文中三條西公條卿が書寫せられしは、此の書の散逸せむことを恐れ、勞苦を厭はずして精勵せられしを見れば、一字一句と雖も之を省略せらるゝことあるまじ。又大治保延は延喜以後既に二百餘年を経たれど、日本紀略の成りし時代とは、さまで距たらず、然るに紀略には本書に缺けたる文を摘録せるに徴すれば、當時は未だ省略せられざりしなるべし。されば保延以後天文以前

書寫の際に省略したりと見るを穩當とすべし。之に據りて考ふるに、現在の本史及三代實錄は完本なりといふを得ず。されど日本後紀の四十卷中三十卷を失へるに比すれば幸なりといふべし。

校訂
標注
續日本後紀

凡例

一、本書は六國史中錯亂誤脱最も多く、何人も之を通讀するに苦しまざるはなし。故に之を校訂して、其の勞を省かむとしたる人少からず。元祿中已に徳川光圀卿の校訂本あり、(但し水戸校訂本は續後紀のみならず、書紀以下の五國史を通じて校訂せられたれば自ら異なる所あり)安政中山崎知雄氏の校訂續日本後紀あり、(解説を參看すべし)近くは村岡良弼氏の纂註あり、其の他諸氏の校合本も、一二に止まらず、依りて其の先蹤を尋ね、諸書を通覽するに、錯簡を訂すに當りて、各、其所見を異にし、適從する所を知らざるもの多し。故に予はまた予の見る所を以て、之を決したり。第二に脱文を補ふに當りて、類聚國史、日本紀略の文は悉く之を探りたれど、紀略中某日任官とあるものは除けり。其は任官の文字は全く紀略編纂者の補文にして、本史の原文に非ざればなり。されど之に據りて任官ありし事を知るに便なれば、標注には一々之を擧げたり。又纂註には類聚三代格、公卿補任等

を採りて、文を成したるもの多けれど、予は山崎校本の例に倣ひて之を採らず。第三に十五十六の兩卷中古寫本に據りて補ひしもの十數箇條あり、其の補綴の文は、私記には悉く之を載せたるが、一云として書名を記さず、纂詰は一云とせずして、所據の書名を挙げたれど、的確ならざるものなり、然るに其の逸文は某文庫秘本には悉く存す、故に標注には秘本と稱して之を注せり。

二、本書刊本は寛文八年の本と、寛政七年の再刻本とあり、山崎校本は、再刻本を底本としたれど、舊本に比して誤謬頗る甚し、依りて寛文本を底本とし、左の諸本を以て校訂せり。

一、古寫本

- 一 内閣本 内閣文庫所藏 二十卷 (閣本)
- 一 三條西本 谷森翁書入本に據る (西本)
- 一 一條本 井上翁書入本に據る (條本)
- 一 高柳本 高柳光壽氏所藏 卷五・八 (柳本)
- 一 尾張本 尾張徳川侯爵所藏 二十卷 (尾本)

符號

- 一 前田本 前田侯爵所藏 二十卷 (前本)
- 一 中原本 谷森建男氏所藏 二十卷 (中本)
- 一 谷森本 同上 二十卷 (谷本)
- 一 石山本 同上 二十卷 (石本)
- 一 塙本 内閣文庫所藏 二十卷 (塙本)
- 一 林崎文庫本 神宮文庫所藏 卷一・二・三 (林本)
- 一 宮崎文庫本 同上 二十卷 (宮本)
- 一 淀本 神道本局所藏 二十卷 (淀本)
- 一 細井本 狩谷自筆校本に據る (細本)
- 一 安田本 同上 (安本)
- 一 井上本 同上 (井本)
- 一 大橋本 同上 (大本)
- 一 堀本 山崎校本に據る (堀本)

二、校合本

續日本後紀凡例

- 一 水戸校 訂本 内閣文庫所藏
- 一 伴信友校合本
- 一 狩谷棧齋校合本 無窮會神習文庫所藏
- 一 校訂續日本紀 同 上山崎知雄校訂
- 一 井上頼圀翁校合本 同上
- 一 谷森善臣翁校合本 谷森建男氏所藏

三、注釋書

- 一 續日本後紀私記 矢野玄道著
- 一 續日本後紀纂詁 村岡良弼著

三、本書の校訂に當りて底本と校合し、或は参照したる諸書は大略續日本紀に同じ、故に此には之を略す。

昭和四年十二月

佐伯有義識

續日本後紀序

臣良房等竊惟、史官記事、帝王之跡攢興、司典序言、得失之論對出、憲章稽古、設沮勸而備遠圖、貽鑒將來、存變通而垂不朽者也、伏惟先皇帝體元膺籙、司契脩機、夢想華胥之疆、拱默大庭之觀、以爲承和撫運、歷稔惟長、善政森羅、嘉暮狼藉、未編簡牘、恐或湮淪、爰詔太政大臣從一位臣藤原朝臣良房、右大臣從二位兼左近衛大將臣藤原朝臣良相、大納言從三位民部卿兼太皇太后宮大夫臣伴宿禰善男、參議正四位下行式部大輔臣春澄、朝臣善繩、散位從五位下臣縣犬養大宿禰貞守等、因循故實、令以撰修、筆削之初、宮車晏駕、白雲之馭不返、蒼梧之望已遙、今上陛下、河清而後興、社鳴而乃出、其道德則堯與舜、其城郭則義將仁、四海常夷、萬機多暇、校文芸閣、嫌舊史之有虧、留睞蘭臺、恨先旨之未竟、重勅臣

【續日本後紀序】序、閣本此字なし
 ○史官記事云々、史官は記載を司る官なり禮記玉藻に動則左史書之、言則右史書之とあり司典は左傳昭十五年に見え典籍即ち史書を司る官なり以下數句は唐高祖敕中書令蕭瑀等修史詔に司典序言史官記事考論得失究盡變通所以裁成義類懲惡勸善多識前古貽鑑將來云々あるに據れるなるべし
 ○憲章稽古、文選東都賦に出づ憲は法也章は明也稽古は單に古の意
 ○沮勸、沮は原本阻に作る類史に據て改む左傳襄廿七年に賞罰無章何以沮勸、注に沮は止也さあり惡を止めて善を勸むるなり
 ○變通、易繫辭傳に化而裁之謂之變、推而行之謂之通とあり
 ○體元、左傳隱元年注に凡人君即位欲其體元居正とあり
 ○膺籙、籙は原本錄に作る閣本西本等に據て改む文選應貞の詩に五德更運膺籙受符とあり

○司契、老子七十九章に有、德司契無德司徹とあるに出つ
 ○脩機、承和元年十二月辛巳紀の詔に脩機之玄屬云々あり
 ○夢想華胥之疆云々、列子黃帝篇に黃帝憂天下之不治於是放萬機退而閉居大庭之館齋心服形三月不親政事晝寢而夢遊於華胥氏之國既覺怡然自得(節略)とあるに據れり謹は原本増に作る類史に據て改む
 ○承和撫運云々、仁明天皇は御治世長く善政多かりしことを稱贊し奉れるなり撫運は御宇に同じ
 ○嘉慕狼藉、嘉慕は原本嘉譽に作る西本及類史に據て改む善謀也善政に對して云森羅狼藉は共に盛多なるを云
 ○未編簡牘云々、其事を史に記さざれば善言美事も埋れ失せむかとなり
 ○爰詔云々、文德實錄齊衡二年二月丁卯紀に見ゆ
 ○臣藤原朝臣良房、原本藤上に臣字を脱す西本林本及類史に據て補ふ
 ○良相、良房の弟
 ○太皇太后宮大夫、后上

貞觀十一年八月十四日
 太政大臣從一位臣藤原朝臣良房
 參議正四位下行式部大輔臣春澄朝臣善繩

の太字は原本大に作る閣本西本林本に據て改む
 ○行式部大輔、行字は原本なし林本及類史に據て補ふ
 ○善繩、繩は澁本綱に作る

○縣犬養大宿禰、大字は諸本及類史に據て補ふ
 ○筆削之初、筆削は史記孔子世家に孔子爲春秋筆則筆削則削子夏之徒不能贊一辭とあるに出づ

○宮車晏駕、文德天皇の崩御を申す史記范睢傳、注に凡初崩爲晏駕と者臣

子之心猶謂宮車當駕而晚出とあり ○白雲之馭不返云々、莊子天地篇に聖人千歲厭世去而上僊乘彼白雲至於帝鄉また史記五帝本紀に舜踐帝位三十九年南巡狩崩於蒼梧之野とあるに據れり ○河清而後興云々、文選運命論に黃河清而聖人生里社鳴而聖人出とあるに據れり ○校文芸閣云々、天皇御親ら秘閣の書を閱し給ひて舊史の完からざるを嫌はせ給ふとなり芸閣は書を藏する閣を云芸は香草にて以て紙魚の蠹を辟くべしと云 ○留瞻蘭臺云々、先帝修史の大御心の未だ達せざるを恨ませ給ふなり蘭臺は漢書百官表に御史大夫奏官有兩丞一曰中丞在殿中蘭臺掌圖籍秘書と見え秘書を藏する所なり瞻は原本藤上に作る諸本及類史に據て改む ○責以亟成、原本責を責に亟を函に作る諸本に據て改む類史亟を遂に作る ○差互、齟齬するをいふ、原本互を牙に作るは互の俗體より訛せるなり故に改む ○嬰痾里第、第は原本弟に作る類史に據て改む林本痾を病に作る ○差收彰北邙、良相の薨去を云良相は貞觀九年十月十日薨す北邙は文選張載七哀詩の注に北邙山名とあり後漢の王侯公卿の葬地なり、邙は原本功に作る諸本及類史に據て改む ○犯罪公門云々、貞觀八年九月廿二日應天門を燒ける罪に依て伊豆國に配流せられしを云 ○出吏邊州云々、貞觀五年二月十日駿河守と爲りて任に赴けるを云、蹤は原本從に作る山崎校本に據て改む ○春秋之正體、編年體を云 ○銓次、銓は原本詮に作る類史に據て改む ○米鹽、漢書黃霸傳注に米鹽言碎而且細とあり瑣細なる事を云 ○不收、閣イ本尾イ本及類史收を取に作る ○牢籠、一切を包括する意なり、牢は原本窄に作る林本及類史に據て改む ○讒非南董、南は南史なり左傳襄廿五年に大史書曰崔杼弑其君崔子殺之其弟嗣書而死者二人其弟又書乃舍之南史氏聞大史盡死執簡以往聞既書矣乃還とあり董は董狐なり左傳宣二年に出づ修史上の識見は南史氏董狐の輩に及ばずとなり ○才謝馬班、馬は司馬遷班班固にて史筆は此兩人に及ばずとなり ○謹序、此二字は纂話に蓋淺人所益今刪といひて削れり ○行式部大輔臣、行及臣の二字は林本及類史に據て補ふ

校訂
標注
六國史第六卷目次

解說

凡例

序文

續日本後紀

仁明天皇

卷第一【起天長十年二月盡同五月】

天長十年(自二月)

卷第二【起天長十年六月盡同十二月】

天長十年(自六月)

卷第三【起承和元年正月盡同十二月】

承和元年

三三

二二

卷第 四	【起承和二年正月盡同十二月】	五五
承和二年	
卷第 五	【起承和三年正月盡同十二月】	七三
承和三年	
卷第 六	【起承和四年正月盡同十二月】	九九
承和四年	
卷第 七	【起承和五年正月盡同十二月】	一一五
承和五年	
卷第 八	【起承和六年正月盡同十二月】	一三三
承和六年	
卷第 九	【起承和七年正月盡同十二月】	一五七
承和七年	
卷第 十	【起承和八年正月盡同十二月】	一八七
承和八年	

卷第十 一	【起承和九年正月盡同六月】	二〇九
承和九年	
卷第十 二	【起承和九年七月盡同十二月】	二二一
承和九年(自七月)	
卷第十 三	【起承和十年正月盡同十二月】	二四七
承和十年	
卷第十 四	【起承和十一年正月盡同十二月】	二七一
承和十一年	
卷第十 五	【起承和十二年正月盡同十二月】	二八三
承和十二年	
卷第十 六	【起承和十三年正月盡同十二月】	二九七
承和十三年	
卷第十 七	【起承和十四年正月盡同十二月】	三二七
承和十四年	

卷第十八【起承和十五年正月盡嘉祥元年十二月】

承和十五年

三三一

嘉祥元年(自六月庚子)

三四五

卷第十九【起嘉祥二年正月盡同十二月】

嘉祥二年

三五五

卷第二十【起嘉祥三年正月盡同三月廿一日】

嘉祥三年

三七九

扉題字

三上參次筆

續日本後紀卷第一

起天長十年二月盡五月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉 勅撰

仁明天皇

天皇諱正良^{アサハラ}先太上^{ノミコト}天皇之第二子也母太皇太后贈太政大臣正一位
 橘朝臣清友之女也太后曾夢自引圓座積累^{ツクリ}之其高不知極每一加累^{ツクリ}
 且誦言卅三天因誕^{ユフツ}天皇云弘仁十四年夏四月甲午^{乙酉朔}皇太弟^{仁明}受禪^大
 即帝位壬寅立諱爲皇太子天長十年春二月戊午朔乙酉^{淳和}皇帝於淳和
 院讓位于皇太子詔曰現神止大八洲國所知倭根子天皇我詔良万止勅
 御命乎親王諸王諸臣百官乃人等天下公民衆諸聞食止宣太上天皇
 朕我不德乎不棄賜^志天寶位乎授賜^{開理}忝鍾重^瞻且日日畏慎太麻布春
 秋乃往隨爾舊疹^毛稍發^流故機務乃暫^毛虧忘^牟許止乎恐賜^朝夕煩懷念
 須許止久矣今念行^{佐久}皇太子止定太流正良親王賢明夙彰禮仁孝^毛兼

○仁明、周書諡法照臨四方曰明、譖訴不行曰明、文選頌延之陽瓊珠に苟有レ概、於貞孝、者實事感於仁明、とあり一代要記皇年代略記紹運錄等に國風の御諡號を日本根子天璽豐聰惠尊と申奉る
 【即位前紀】太皇太后、原本に上の太字闕く紀略に據て補ふ御諡は嘉智子世に檀林皇后と申す
 ○圓座、原本座を坐に作る關本西本尾本及紀略に據て改む抄調度部坐臥具に圓座孫福曰菴(俗云圓座二云和良布太)圓草褥也とあり
 ○卅三天、初利天を云佛家にて帝釋の居處とす此は帝位に喩ふ
 ○甲午、原本甲子に作れど是月乙酉朔にて甲子なし甲午の誤なるべし紀略弘仁十四年四月條には甲午帝遷于冷然院庚子帝御前殿引今上一日云々

詔曰現神止大八洲所レ知云々あり受禪即位は四月庚子なれど紀略仁明紀には甲子あり午を子と誤る例多ければ改む

○皇太弟、原本太の下に后字あり衍なり紀略に據て削る

○諱大伴、原本本文とす關本及紀略に據て注とす

〔天長十年〕淳和院、拾芥抄中末に淳和院、天長十一年上皇離宮、今西院或云橋大后宮あり淳和天皇の離宮なり後寺なる舊趾葛野郡西院村大字西院にあり

○忝鍾重賤、賤は原本膝に作る關本西本尾本等に據て改む

○舊珍、紀略弘仁十四年三月庚子條に身嬰_ニ疹疾_一彌留不瘳_ニ見_レ字書_ニ疹_一は熱病也とあり

○久矣、宣命にかくの如き用字珍らし

○於太比之久、御心の穩穩に坐すを云

○上多支時爾波云々、藤原冬嗣の奏言に若奉_ニ一帝二太上皇_ニ天下難堪_ニあるに同じ意なり

○己氏門云々、氏門は家門と云に同じ

厚_ク久_ク之_レ天_ヲ、太能_ク毛_ノ之_レ久_ク於_レ太比_ノ之_レ久_ク在_レ是以_レ撫安_ニ國家_一牟_レ止_ニ之_レ天_ヲ、此位_ニ乎_一授賜_ス布_ヲ、諸_レ此狀_ヲ乎_レ悟_テ天_ヲ、清直_ニ心_一乎_レ毛_ノ知_ル互_ニ、此皇子_ヲ乎_レ輔導_ス支_レ奉_テ天_ヲ、天下_ニ乎_レ平_ニ介_ケ久_ク令_レ有_レ余_、又_レ古_レ人_ノ有_レ言_、利_ニ上_ニ多_ク支_レ時_、爾波_ニ下_ニ苦_シ止_ニ奈_モ所_レ聞_、是以_レ太上_ノ天皇_ヲ止_ニ伊_布號_ト停_ト米_、亦_レ諸_レ乃_レ服_{御_ニ乃_、物_ヲ停_{賜_ト布_、皇后_ノ宮_ヲ毛_ノ如_シ是_レ有_レ倍_{之_、又_レ如此_{時_、爾當_{都_、人_ノ不_レ好_レ留_{謀_{懷_{天_、天下_ニ乎_レ毛_ノ亂_{利_{己_{氏_{門_{乎_レ毛_ノ滅_{人_{等_{毛_ノ前_{前_{有_{若_{毛_ノ如此_{有_{牟_{人_{乎_{波_{己_{我_{教_{諭_{訓_{直_{天_、各_{乃_{己_{祖_{祖_{門_{不_{滅_{彌_{高_{仁_{仕_{奉_{彌_{繼_{爾_{繼_{止_{思_{愼_{天_、无_{二_{心_{志_{天_、仕_{奉_{倍_{志_{止_{詔_{天皇_、我_{勅_{旨_{乎_、衆_{聞_{食_{止_{宣_、是_{夕_、今_{上_{抗_{表_、辭_{竇_{位_{曰_、臣_{某_{言_、照_{以_{明_{鏡_{妍_{蚩_{難_{逃_、逼_{以_{恩_{綸_{喜_{懼_{失_{據_、臣_{某_{誠_{恐_{誠_{惶_{頓_{首_{頓_{首_{死_{罪_{死_{罪_、臣_{道_{德_{兩_{燕_{進_{退_{多_{躡_、情_{性_{双_{味_、執_{守_{无_{常_、誰_{昔_{扈_{先_{皇_{於_{姑_{射_{優_{遊_{霜_{雪_{之_{光_、順_{聖_{后_{於_{後_{園_、匍_{匍_{章_{珮_{之_{陰_、而_{皇_{帝_{陛_{下_、枉_{恩_{紫_{霄_、延_{登_{分_{外_{啓_{榮_{耀_{於_{欲_{隱_、導_{慈_{訓_{於_{未_{知_、悲_{深_{而_{父_、愛_{鍾_{猶_{子_、辭_{不_{獲_{免_、久_{辱_{洊_{雷_、露_{往_{霜_{來_、十_{載_{於_{此_{德_、誘_{不_{倦_、顧_{恤_{殊_{甚_、思_{欲_{隨_{形_{逐_{聲_、心_{神_{是_{役_、終_{天_{畢_{地_、身_{命_{不_{疲_、今_{亦_{推_{大_{寶_、以_{錫_{昭_{華_{避_。}}}

○照以明鏡云々、漢書韓安國傳に清水明鏡不可_レ以_レ形_{逃_{とあるに據れり蚩_{は_{蚩_{の_{偏_{を_{省_{き_{し_{なり○逼_{以_{恩_{綸_{云々_、愚_{なる_{我_{身_{に_{皇_{位_{を_{繼_{げ_{詔_{給_{へ_{る_{こ_{と_{且_{は_{喜_{び_{且_{は_{懼_{れて_{爲_{す_{所_{を_{知_{ら_{ず_{な_り}}

○道德兩蕪、道德は道と徳とにて兩蕪とは兩なから闕けたりとあり

○情性双味、情も性も雙びに味とさなり

○誰昔、毛詩陳風墓門章に誰昔然矣、箋に誰昔昔也とあり、關本西本尾本等昔謂に作る恐くは非

○扈先皇於姑射云々、姑射は藐姑射の山にて神仙の居所、上皇の居させ給ふ仙洞を云

○章珮、皇后の御服寶帯を云

○枉恩紫霄云々、紫は紫宸紫微の紫、霄は天空の境、天恩を垂れて分外に高く引上げ給へる意

○悲深而父、慈悲深くして父の如しとさなり而は孟子荀子左傳等に如字に用ひし例多し關本西本等而父を所天に作る漢書に臣以君爲_レ天とあれば其意

樞極以授乾象、前愧未已、後懼更頻、實以縷織塗重、翰徹任博、施之人事、尚有負乘之慙、求之天途、何无害盈之釁、伏願日月貞明之景、每煦蒼生、雲雨行施之恩、永潤品彙、然則世寢喧譁、臣免譴誚、若不蒙允容、悉纏衆、君臣之議謂天下何、不勝傾戰憂懼之至、拜表以聞、後太上天皇不聽

○丙戌、今上重抗表曰、臣某言、人之所願、天必隨、道之所通、物不擁、臣承恩詔、伏瀝血誠、既踰匝辰、未蒙允亮、臣某、謝夫大陽方照、空履將泮之冰、悚汗頻流、猶臨不測之底、蹈焦非懼、涉呂須傾、大道无私、冀垂鑒許、若不獲已、猶御閑蹤、則民獸善仁、世倦聖治、然後逐洞庭之野、於事纔宜也、當今群品得所、黔首繫心、覆燾之恩、江海可謝、亭毒之德、乾坤惟均、加以雷門之下、布鼓失聲、朝陽之餘、螢火難照、意窮詞盡、不知所爲、君舉必書、恐違物議、伏申丹誠、非敢矯飾、懇懇之深、重表陳請、後太上天皇遂亦不許

於是天皇乃命車駕拜謁先太上天皇、及太皇太后宮於冷然院、還御東宮、○丁亥、立恒貞親王爲皇太子、詔曰、天皇我詔旨、良万止、勅御命乎、親王等王等諸臣等、百官人等、天下公民衆、聞食止宣、朕以拙弱、且掛畏支

○愛鐘猶子、鐘愛猶ほ子の如しなり
 ○久辱海震、易震卦の象傳に海雷震、説卦傳に震謂之長男、さあり皇太子さ坐すな云
 ○露往霜來、露往の二字は諸本に據て補ふ
 ○大寶、易繫辭傳に聖人之大寶曰位、さあり天位を云
 ○錫昭華、淮南子に堯贈舜以昭華之玉、さあるに據れり乾象と對して共に皇位を云り
 ○避極極以授乾象、御位を避て皇太子に授け給ふを云極極は極は北極星極は天樞なり其紐星を云
 ○縷織塗重云々、其任に堪へざるを云縷は馬腹帶也、縷は細きを云朝は車轅也徹は毀也細き腹帶毀れたる轅にて重き荷を遠く運ぶが如しなり
 ○有負乘之懸、易解卦の六三に負且乘致寇至、さあるに據れり負は原本貞に作る開本に據て改む
 ○害盈之變、易謙卦の家傳に鬼神害盈而福謙、さあるに據れり變は原本體に作るは俗字なり

倭根子天皇我朝廷乃厚慈乎蒙天皇太子止成禮利因畏万利貴比賜已止
 晝夜止无之然乎慮外爾天日嗣乎授賜布依不堪流狀乎再比三比畏利申
 賜戸止毛容賜比許賜波須今思行佐久厚恩乎蒙人波必報倍支理利有故是
 以正嗣止有戸支恒貞親王乎皇太子止定賜布故此之狀乎悟天百官乃人
 等仕奉止宣布天皇我御命乎衆聞食止宣以參議從四位上文室朝臣
 秋津爲春宮大夫左大辨左近衛中將武藏守如故從五位上藤原朝臣
 貞守爲亮讚岐介如故後太上天皇遣權中納言從三位藤原朝臣吉
 野奉書天皇辭立皇太子曰恭觀今日詔册立愚子恒貞爲皇太子叡旨
 謬降盛典曲施夫海雷位重承祧事尊非德不昇非賢何守恒貞年實
 蒙幼器非夙慧安可妄鍾大禮猥主七鬯肅奉周遑內知云冥請停嚴
 命更擇賢才在於重情寔知免噴縱使天綸不駐上令必行則失萬國
 以貞之望虧三辰日敬之職從五位下藤原朝臣良房爲左近衛權少
 將加賀守如故侍從從五位上藤原朝臣長良爲左兵衛權佐是日賜
 典藏從四位下大宅水取臣繼主等三人朝臣姓繼主臣八腹木事命後

○日月貞明之景云々、易繫辭傳下に日月之道貞明者也さあるに據り雲雨云々は乾卦象傳に雲行雨施品物流形さあるに據れり既臨原照に作るを閣本西本等に據て改む字書に照は熱也又温潤也さあり品彙さ萬物を云
 ○衆譚、譚は誹謗也
 ○人之所願云々、尙書秦誓に民之所願云々欲天必從之さあるに出つ
 ○物不擁、擁は壘に同じ
 ○既臨既辰、既は浹に同じ左傳成九年に出つ疏に浹辰謂周子亥十二辰故爲十二日也さあり
 ○(注)中謝、上表文には必ず誠惶誠懼頓首頓首と書く文集等に之を略して中謝の二字を分注にするなり
 ○空履將泮之水、漢書宣帝紀に警猶踐薄冰以待白日豈不殆哉さあるに據れり泮は散也
 ○猶臨不測之底、毛詩小雅小旻章に如臨深淵さある意を取りて句を成せり
 ○蹈焦非懼云々、水火を避けざるを云堀本呂を河に作るさ云

也庚午右京人上野權少掾從八位上尾張連年長位子无位尾張連豐野留省无位尾張連豐山等賜姓忠宗宿禰改多治比真人氏賜姓丹墀真人左京人圖書頭從五位上秋篠朝臣雄繼右京人散位從七位上秋篠朝臣雄繼右京人散位從七位上癸酉右京人音博士從五位下六人部連門繼弟六人部連大常六人部連秋主妹六人部連鷹刀自六人部連磐子等男女五人賜姓高貞宿禰甲戌攝津國人散位從六位上凡河內忌寸紀主兄留省從八位上凡河內忌寸紀鷹弟留省大初位下凡河內忌寸福長等三人賜姓清內宿禰攝津國豐嶋郡人散位從七位下出雲連男山河邊郡人正六位上出雲連雄公出雲連伊都岐鷹等男女廿二人賜姓於出雲宿禰丙子常陸國筑波郡人散位正六位上丈部長道一品式部卿親王家令外從五位下丈部氏道下總少目從七位下丈部繼道左近衛大初位上丈部福道四人賜姓有道宿禰己卯左京人左大史正六位上秦忌寸貞仲賜姓宿禰甲申左京人上毛野公道信賜姓上毛野朝臣丙戌右近衛將曹

伴林宿禰御園等四人賜姓伴宿禰

○大道无私、原本无在天に作る諸本に據て改む大は恐らくは天の誤なるべし晉語に天道無親唯德是授あり ○倦聖治、原本聖を全に作る諸本に據て改む ○逐洞庭之野云々、莊子天運篇に黄帝張咸池之樂於洞庭之野とあるに據れり ○群品得所云々、群品は萬物、黔首は人民なり萬物各其所を得て安するを云原本群を郡に作る諸本に據て改む ○覆養之恩、養は字書に與轉同覆也普覆照也とあり此句中庸に出づ ○亭毒之德、老子注に亭謂品其形毒謂成其實とあり ○雷門之下云々、漢書王尊傳に母持布鼓過雷門注に師古曰雷門會稽城門也有大鼓越擊此鼓聲聞洛陽云々布鼓謂以布爲鼓故無聲とあるに據れり ○意窮、原本窮を究に作る諸本西本等に據て改む ○君舉必書、原本書を盡に作る諸本に據て改む ○恐違物議、原本違を遣に作る宮本に據て改む ○伏申丹誠、原本申を用に作るは申の訛なれば改む ○乃命車駕、乃字は闕本西本及類史紀略に據て補ふ ○大皇太后宮、紀略に宮字なし ○冷然院、拾芥抄中末に冷泉院大炊御門南堀川西嵯峨天皇御宇此院累代後院弘仁亭本名冷然院云々而依火災改然字爲泉云々とあり ○恒貞親王、淳和天皇第二皇子御母は皇后正子内親王、時に御年九歳承和九年七月廢せられ給ふ ○王等、諸本に據て補ふ ○朕、仁明天皇 ○倭根子天皇、淳和天皇 ○厚慈、闕本西本條本等慈を受に作るは愛の訛ならむ ○貴比賜已止、賜已止の三字は闕本西本尾本宮本等に據て補ふ ○必報倍支理利有、厚恩を蒙る人は云々とは淳和天皇未だ寶算に當ませ給ひ且皇子も坐し乍ら御弟仁明天皇に御位を譲り給ひし故かく申させ給へり原本報を敬に作る諸本西本等に據て改む ○恭親、原本恭を暴に作る山崎校本に據て改む ○册立、原本册を再に作る闕本西本等に據て改む ○誤降、原本降を隆に作る隆にても通ずれど西本に據て改む ○承禋事尊、禋は遠祖の廟なり祖宗の統を承くるを云 ○夙慧、原本慧を惠に作る闕本西本に據て改む ○猥主七鬯、易震卦に不喪七鬯朱注に七所以舉鼎實鬯以和黍酒和鬱金所以灌地降神者也不喪七鬯以長子言也とあるに據れり、原本七を二に作るは訛なり易に據て改む下同 ○周邊、文選潘岳悼亡詩注に周章惶懼とあり ○云冥、暗愚なるを云謙遜の辭、闕本宮本等冥を眞に作る纂語に沈約爲長城公主謝表徵命降臨愬妄眞云冥疑妄眞之譌と云 ○在於重情、纂語重を量に改め西本尾本在を存に作る ○免暗、字書に暗本作諂、諂は相惡也妄言也とあり ○縱使天綸云々、天綸は綸言、上令は上よりの命令を云強ひて上令を行ひ給はざる萬國の望を失はむとなり以眞は禮記文王世子篇に一有元良萬國以貞世子之謂也と云に據れり ○虧三辰日敬之職、漢書律歷志に太極運三辰五星於上而元氣轉三統五行於下其於人皇極統三德五事故三辰之合於三統也とあるに據れり、原本此下に戊子以の三字あり闕本西本尾本林本に據て削る ○良房、原本房を方に作る林本水本及卷二八月丙戌條に據て改む ○藤原朝臣長良、朝臣の二字は尾本宮本に據て補ふ ○是日云々、尾本是日以下後也に至る卅二字下文丙戌條の次に丁亥賜典藏云々とあり ○大宅水取臣、小野朝臣等と同祖 ○庚午、以下丙戌に至る七條錯簡にして此にあるべきにあらず庚午を二月十三日癸酉を同十六日と以下丙戌に至る各條を天長十年二月三日と改む以下丙戌の記事なりとするものあれど序文に起自天長十年二月乙酉とあり乙酉は廿八日なれば其以前の記事の此にあるべきにあらず或は庚午を四月十三日と改む以下丙戌の記事なりとする説もあれど四月とすれば干支は合へど他に確證あるにあらず水戸校訂本に改丹治比氏爲丹墀三代實錄以爲天長九年四月山田古岡天長六年任少外記九年轉大見文德實錄而此猶爲少外記據此等文斷不可擊是年一故削此附卷末とあり錯簡なることは疑なれど諸本同ければ姑く此に存して他日の考定を俟つ ○尾張連年長、錄左京神別尾張連大明命之男天賀吾山命之後也とあり ○位子、六位以下八位以上の人の子を云既に注す ○忠宗宿禰、何に據れるか詳ならず ○六人部連、錄山城神別六人部連火明命之後也とあり ○高貞宿禰、高貞氏他史に見えず ○凡河内忌寸、錄河内神別凡河内忌寸天穗日命十三世孫可美乾飯根命之後也とあり ○清内宿禰、據る所詳ならず ○文部、錄左京皇別文部天足彥國押人命孫比古意都豆命後也とあり ○一品式部卿親王、葛原親王なり天長八

年一品に叙せらる ○家令、家令職員令に家令一人掌知家事とあり ○左近衛、原本左を下に作る諸本に據て改む纂語に衛下恐脫府生等字と云り ○有道宿禰、姓氏錄に載せず ○上毛野公、公字は諸本に據て補ふ ○伴林宿禰、大伴宿禰同祖、錄河内神別に林宿禰は室屋大連公男御物宿禰之後也とあり

○三月伏覽詔旨、原本覽を願に作る諸本に據て改む西本願に作る ○夙慧、原本慧を惠に作る闕本西本に據て改む ○魏宮岐疑、魏志明帝紀注に帝生數歲而有岐疑之姿とあるに據れり岐は峻、疑は識なり幼にして伶俐峻茂なるを云 ○晉儲神姿、淵鑑類函所引王隱晉書に初武帝未爲世子文帝問裴秀人有相否秀曰中撫軍(武帝)立髮至地手過於膝云々此非入臣之相とあるに據れるなるべし即ち晉の世祖なり ○猗誰爲助、猗は原本滂に作る尾本水本に據て改む字彙に猗は嘆辭又語辭又與倚同とあり ○重明、易離卦の象傳に見ゆ日月を云 ○至愚、闕本尾本等至を專に作り大本安本惠に作るに據れば蠢の訛なるべきか ○聖表、原本表を哀に作る闕本西本に據て改む

○三月戊子朔、日有蝕之、天皇緣後太上天皇辭立太子、奉答表曰、臣某言伏覽詔旨曰、恒貞年實蒙幼器非夙慧、安可妄鍾大禮、猥主七鬯、夫輕者重之端、小者大之本、故魏宮岐疑、非老大之情、晉儲神姿、是幼稚之謂、然則聰慧在性、不限年齡、伏稽前言、既有故實、臣頗表懷抱、心事共違、家賓之慙、猗誰爲助、伏願假彼重明、照朦昧、資其寬博、備遺忘、臣之至愚、聖衷所驗、雖云无德、庶幾有隣、冀垂矜憐、賜緩憤憤、至誠不飾、至敬无文、伏表丹愿、无地取喻、後太上天皇重復奉書曰、内揆已審、請易太子、冲鑒未廻、憂心如灼、易曰、主器莫若長子、禮曰、登俊則以上嗣、斯皆溫文既習、聖敬克躋、然後正位前星、贊業束序者也、今恒貞漢莊難擬、周儲不追、將何以裨光聖明、助聰天辰、而恩哀逾屈、血訴不成、獨謂非宜、輿談孰許、恐龍樓之守、爰墜、鮑俎之譏、有聞、望昭丹辭、必收紫渙、山朝事隔、无可關言、父子體同、理當分疏、異於嫠不恤緯、尸不越樽之義、是以重復鋪陳、佇蒙

○有隣、論語里仁爲美、不孤必有鄰、あるに據り、憤憤、憤は怒満也、憤は心亂也、丹慝、丹は赤心、慝は敬也、慝也、○重復奉書、重字は西本尾本等に據りて補ふ、○内探、探は度也、○冲鑿、深く鑿るを云、○主器云々、易序卦傳に出づ、○登餞云々、禮記文王世子篇に宗人授事以官尊賢也、登餞受爵以尊尊云々、あり説文に饒食之餘也、あり祭畢りて神の餘を食するなり、原本則を受爵の二字に作る、閣本西本等に據りて改む、○温文既習、禮記文王世子に凡三王教世子、中以禮樂云々、禮樂交錯於中、發於外、是故其成也、懽恭敬而温文、あるに據れり、○聖敬克濟、毛詩商頌長發章に聖敬日濟、箋に其聖敬之德日進、あるに據れり、原本聖を致に作る、閣本尾本等に據りて改む、○前星、原本星を皇に作る、諸本に據りて改む、漢書五

矜聽、天皇不許、奉還其書、僧綱以下、高僧數十人、來會闕庭、奉賀踐祚、○己丑、詔曰、朕不免、叡託馭朽、乘奔瞻公、卿而兢懷、顧兆庶而軫念、思弘國憲、无虧成規、後、太上天皇、憲章千古、含育萬邦、仁化未饒、機事遄脫、今檢詔旨云、天下多尊、百姓所苦、避位之號、勿隨舊典、夫太上尊號、非唯一時、秦日漢年、稱謂尙矣、朕以禮之爲用、所以達天道、順人情之大寶也、其在人也、如竹箭之有筠也、如松柏之有心也、故貫四時、不改柯易葉、是以聖人知禮之不可以已也、冀脩先王之禮制、不私至公之典、要朕先日重表、遂蒙拒逆、空庸之軀、謗讟忽集、若猶奉順聖慮、改易正名、天下仰瞻、何用取信、宜上尊號、爲太上天皇、皇太后曰、太皇太后、皇后爲皇太后、普告天下、令知朕意、後、太上天皇辭尊號曰、今摹古典、猶加尊號、已違本圖、翻孤元誓、何者、事期自足、老聃杜企、跨之塗、量不可強、莊叟開性、分之城、謬以太上天皇之授也、經理萬機、夕惕多稔、神勞于用、形倦于勤、至於將攝之方、眇邈其遠、所以釋彼負重、保茲閑放、揖風月而爲友、偶煙蘿而遣日、然則收視反聽、煩不嬰心、峻號崇名、貪豈攸樂、況大道之行、稟性咸遂、

行志に星傳曰、心大星天王也、其前星太子後星庶子也、あるに據れり、○東序、禮記文王世子篇に凡學世子及學士必時云々、皆於東序、あるに據れり、東序は大學在王宮之東、注す、○漢莊難擬云々、梁簡文帝謝立爲皇太子表に魏平非擬漢莊難繼、あり、漢莊は後漢の孝明帝諱莊なり、十歳能く春秋に通ず、さいふ、周儲は周武王を云、○天辰、禮記明堂位に天子負斧扆、南鄉而立、注に斧扆爲斧文、屏風於戶牖之間、あり、○恩哀、哀は喪に同じ揚美也、○血訴、原本訴を謝に作る、諸本に據りて改む、○輿談、輿は左傳僖廿八年、輿人の注に榮也、あり、衆人の談之を許さず、あり、原本輿を輿に作る、諸本に據りて改む、○龍樓之守、漢書成帝紀に上管急召太子(成帝)出龍樓門、不、敢絶、馳道、西至直城門、得絶、乃度還入作室門、上連之間、其故、以狀對上大説、あるに據り、云馳道は天子專用の道

去邁悠然、蓋有之矣、請廻先後、詔必允所辭、深閑固距、言匪矯飭、天皇不聽、是日以正五位下賀茂朝臣今子、從五位下大和宿禰館子、並爲掌侍、外從五位下海直家繼爲掌膳、○辛卯、天皇御大極殿、奉幣伊勢大神宮、爲應即位也、○壬辰、頒遣中納言從三位兼行民部卿藤原朝臣愛發、從三位行權中納言藤原朝臣吉野、從四位下因幡守高枝王、從四位下式部大輔安倍朝臣吉人等、於柏原長岡二山陵、豫告可即位之狀曰、天皇恐、恐、毛、申賜部止申久、後、太上天皇厚矜、垂賜、天之日嗣、乎、授賜、閉利、不堪、流、狀、再、比、三、比、申賜、閉止、許賜、波、須、故、是以、大御座處、乎、掃、潔、侍、而、天之日嗣、乎、戴、荷、知、守、仕、奉、倍、支、事、乎、恐、恐、毛、申賜、久、止、奏、又、申、久、掛、畏、支、柏原御門、乃、天朝、矜、賜、波、牟、厚、慈、乎、蒙、戴、天之、日、嗣、乃、政、者、平、久、天地、日月、止、共、爾、守、仕、奉、部、之、止、思、食、事、乎、恐、恐、毛、申賜、久、止、奏、辭、別、申、久、正、嗣、止、有、閉、支、恒、貞、親、王、乎、皇、太子、止、定、賜、布、狀、恐、恐、美、毛、申賜、止、奏、○癸巳、天皇即位於大極殿、詔曰、明神止、大八洲國所知、天皇、我、詔、旨、良、万、止、宣、勅、乎、親、王、諸

なれば敢て之を横切らざりしなり
 ○鮑俎之譏、賈誼新書に周太子發嗜鮑魚、大公望曰鮑不登于俎、安有非禮之物可養太子哉、釋名に鮑魚鮑屬也、こあり
 ○紫渙、柳宗元爲、樊左丞、讓官表に垂收、紫渙、書一也、こあり、原本渙、漁に作る諸本に據て改む
 ○山朝事隔云々、山は仙洞、朝は朝廷を云、關は通也、こあり、言語を通じ難し、こなり、原本關を關に作る西本に據て改む
 ○慶不恤緯云々、左傳昭廿四年に慶不恤其緯、注に慶寡婦也、織者常苦緯少、寡婦所宜憂恐、禍及己、こあり、不越、緯は莊子逍遙遊篇に庖人雖不恤庖戶視不越、權組而代、之矣、こあり、に據れり、庖人は料理人、尸視は神を祀る人、即ち他人の職權を犯さず、こなり
 ○奉賀踐祥、原本此下に三月庚子出雲連賜、宿禰四月庚辰山代忌寸賜、宿禰丙戌賜、姓紀直、五月甲寅賜、姓清原真人、八月甲午賜、姓菅原宿禰、戊戌賜

王諸臣百官人等、天下公民衆諸聞食止宣、掛畏、倭根子天皇我宣、此天日嗣高座之業、掛畏、近江大津乃宮、爾御宇、之、天皇乃初賜、比定賜部留法隨、爾仕奉止、仰賜比授賜、布大命、乎受賜、利、恐、美、受賜、利、懼、利、進、母、不知、爾退、毛、不知、爾恐、美、坐、久、止、宣、布、勅、乎、衆、聞、食、止、宣、然、皇、止、坐、天、天、下、治、賜、君、波、賢、人、乃、良、佐、乎、得、且、之、天下、乎、波、平、久、安、久、治、賜、爾、在、止、奈、毛、聞、行、須、故、是以、大、命、坐、宣、久、朕、雖、拙、劣、親、王、等、乎、始、氏、王、等、臣、等、乃、相、穴、奈、比、奉、利、相、扶、奉、事、依、天、之、此、乃、仰、賜、比、授、賜、聞、食、國、乃、天下、之、政、波、平、久、安、久、仕、奉、倍、之、止、所、念、行、是、以、以、正、直、之、心、天、皇、朝、庭、乎、衆、助、仕、奉、止、宣、天、皇、勅、衆、聞、食、止、宣、辭、別、宣、久、仕、奉、人、等、中、爾、其、仕、奉、狀、隨、爾、冠、位、上、賜、比、治、賜、布、又、大、神、宮、乎、始、天、諸、社、乃、爾、宜、祝、等、爾、給、位、一、階、又、僧、綱、及、京、畿、內、乃、諸、寺、僧、尼、乃、智、行、有、聞、流、并、年、八、十、已、上、爾、施、物、太、万、布、又、五、位、已、上、子、孫、乃、年、廿、已、上、奈、留、爾、賜、當、蔭、之、階、布、左、右、京、五、畿、內、乃、鰥、寡、孤、獨、不、能、自、存、人、等、爾、給、御、物、天、下、給、侍、留、高、年、爾、給、御、物、布、力、田、之、輩、乃、其、業、超、衆、者

姓眞道宿禰、十二月己丑賜、姓清原真人、戊申山田浩等賜、宿禰姓、の八條二百八十三字あり、錯簡なること明なり、關本尾本に據り之を削りて各其所に移す
 ○不免叡託、仁明天皇皇位を辭し給ひしも、淳和天皇の之を免し給はざるを云
 ○取朽乘奔、尙書五子之歌に予臨兆民、稟乎若朽索之馭、六馬爲一人、上者奈何不敬、こあり、に據れり
 ○仁化未饒云々、御仁政未だ洽らざるに、速くも御讓位ありしを云、原本饒を澆に作る伴、イ本類史に據て改む
 ○避位之號云々、御讓位の後、大上天皇と稱し奉るは、舊典なるを其尊號を避け給はむと給ふを云、勿は原本に作る西本及類史に據て改む
 ○太上尊號、老子に太上立德、禮記に太上貴德、漢書匡衡傳に太上者民之父母等見ゆるに據れるか
 ○秦日漢年云々、史記秦始皇紀に追尊莊襄王爲太上皇、(廿六年紀)同く漢高祖紀に高祖乃尊、太

カ、フ、リ、ク、ラ、ホ、ヒ、シ、タ、マ、フ、ケ、ウ、シ、ズ、ム、ソ、ム、ギ、ブ、セ、ツ、フ、ナ、バ、ミ、ナ、ハ、ル、マ、デ、ニ、ツ、カ、ヘ、マ、フ、シ、ム、ル、コ、ナ、カ、レ、マ、タ、ト、ツ、ク、ニ、ホ、フ、シ、ア、マ、ノ、ト、シ、ヤ、ソ、チ、ヨ、リ、カ、ミ、ナ、ル、ニ、モ、フ、ホ、ド、コ、シ、タ、マ、ハ、ク、ト、ノ、リ、ボ、フ、ス、ラ、ガ、オ、ホ、ミ、コ、ト、ク、モ、ロ、ク、キ、コ、シ、メ、サ、ヘ、ト、リ、ボ、フ、年、八、十、已、上、奈、留、爾、施、物、之、賜、波、久、止、勅、天、皇、大、命、乎、衆、聞、食、止、宣、授、四、品、阿、保、親、王、賀、陽、親、王、並、三、品、從、二、位、藤、原、朝、臣、緒、嗣、正、二、位、正、三、位、清、原、眞、人、夏、野、藤、原、朝、臣、三、守、並、從、二、位、從、三、位、源、朝、臣、常、藤、原、朝、臣、吉、野、並、正、三、位、正、四、位、下、源、朝、臣、信、從、三、位、无、位、正、行、王、從、四、位、下、從、五、位、下、岡、屋、王、從、五、位、上、正、四、位、下、小、野、朝、臣、野、主、正、四、位、上、從、四、位、下、安、倍、朝、臣、吉、人、正、四、位、下、從、四、位、下、藤、原、朝、臣、文、山、橋、朝、臣、弟、氏、並、從、四、位、上、正、五、位、下、伴、宿、禰、友、足、從、四、位、下、從、五、位、上、滋、野、朝、臣、貞、主、正、五、位、上、從、五、位、上、甘、南、備、眞、人、高、繼、伴、宿、禰、宅、麻、呂、伴、宿、禰、氏、上、橋、朝、臣、氏、人、橋、朝、臣、永、名、從、五、位、下、藤、原、朝、臣、助、並、正、五、位、下、從、五、位、下、伴、宿、禰、清、世、安、野、宿、禰、眞、繼、佐、伯、宿、禰、春、海、並、從、五、位、上、正、六、位、上、良、岑、朝、臣、高、行、藤、原、朝、臣、勢、多、雄、藤、原、朝、臣、高、仁、藤、原、朝、臣、富、士、麻、呂、藤、原、朝、臣、宗、吉、橋、朝、臣、常、道、縣、犬、養、宿、禰、廣、濱、外、從、五、位、下、清、岑、宿、禰、門、繼、飯、高、宿、禰、全、雄、並、從、五、位、下、正、六、位、上、山、邊、宿、禰、岑、麻、呂、外、從、五、位、下、是、日、授、三、品、有、智、子、內、親、王、二

公爲太上皇(六年紀)等見ゆるを云
 ○禮之爲用云々、禮記禮運篇に禮義也者云々所下以達天道順人情之大寶也、注に寶孔穴也さあり物の通る穴の義也
 ○其在人也云々、禮記禮器篇に出づ箭は竹の小なる者、筠は竹の青皮、柏は柏の俗字柏には扁柏側柏檜柏等の別あり心は樹心、柯は枝なり
 ○先日、原本日を自に作る類史に據て改む
 ○本圖、本よりの謀なり原本圖を面に作る諸本及類史に據て改む
 ○元誓、元の誓なり本圖に對して云
 ○老聃杜企跨之塗、老聃は老子、其言に知不足辱知止不殆とあり字書に企は舉、踵望也跨は越也とあり
 ○莊叟開性分之域、莊叟は莊子、其書概れ寓言にして物皆其性能に安ずべきを説けり開、性分之域は即ち其意なり
 ○夕惕多稔、夕惕は易乾卦九二に君子終日乾々夕惕若と見え稔は年なり終日勤め夕に之を省みて恐

品、河内國人大外記外從五位下長岑宿禰茂智麻呂等五人、改本居貫附右京、○甲午、天皇遷自東宮、權御松本院、遣使解關門警固、○乙未、天皇始臨朝、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣上表、請辭官職、不許、是日頒使諸國、奉幣天神地祇、以有卽位事也、○丙申、肥後國葦北郡少領外從八位上他田繼道叙三階、同郡白丁眞髮部福益賜出身焉、以各輸私物、濟飢民也、○戊戌、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣乞歸、不許、以三品秀良親王爲中務卿、中納言從三位直世王爲兼彈正尹、從二位行大納言藤原朝臣三守爲兼皇太子傅、○庚子、以從五位上丹墀眞人清貞爲右少弁、云云、正五位上滋野朝臣貞主爲內藏頭、下總守如故、云云、從五位下小野朝臣篁、從五位下春澄宿禰善繩、並爲東宮學士、善繩所帶大內記如故、云云、左衛門醫師從七位上出雲連永嗣改連賜宿禰、○辛丑、左大臣緒嗣上表、請減職封五百戶、不聽、○壬寅、天皇御紫宸殿、賜群臣酒、有圍碁之興、訖賜親王以下御衣被、各有差、是日罷權中納言藤原朝臣吉野所兼右大將之任、令以陪奉淳和院、○乙巳、天皇御紫宸殿、皇太

る、こと多年なりとなり
 ○將攝之方、將は養なり將攝は休息するを云唐書裴度傳に春時俗說難于將攝勉加調護速就和平と見ゆ
 ○釋彼負重、負重は任重き太上天皇の稱號を云
 ○閑放、類史閑散に作る○揖風月、揖は聚也、原本揖を楫に作る閣本林本及類史に據て改む
 ○前視反聽、文選文賦に出づ注に言不視聽也とあり原本聽を能に作る閣本尾本宮本及類史に據る○去邁、年老ゆるを云、原本尾本西本及類史去を玄に作る恐くは非
 ○蓋有之矣、原本蓋を憲に作る閣本西本に據て改む
 ○先後詔、原本先後を光從に作る類史に據て改む
 ○必允、原本必を心に作る諸本及類史に據て改む
 ○不聽、原本不下に能字あり閣本宮本及類史紀略に據て削る
 ○掌侍、後宮職員令に掌侍掌同尙侍、唯不得奏請宣傳
 ○掌膳、同令に掌膳掌知御膳進食失嘗惣攝膳

子始朝覲、拜舞昇殿、東宮采女羞饌、未及下箸、勅賜御衣、受之拜舞、早退、以當日須拜謁兩太上天皇也、于時皇太子春秋九齡矣、而其容儀禮數、如老成人、賜學士及坊官進以上并乳母衣被、各有差、又以商布五千段、賜見參五位以上各有差、皇太子及坊官亦預焉、○丁未、延百口僧於大極殿、轉讀大般若經、以祈年穀兼攘疫氣也、普告天下、禁斷殺生、限以三箇日、○己酉、卜定大嘗會事、以近江國高鳴郡爲悠紀、備中國下道郡爲主基、○辛亥、以中納言從三位直世王爲兼中務卿、三品秀良親王爲彈正尹、參議從三位橘朝臣氏公爲右近衛大將、正五位下伴宿禰氏上爲右中弁、云云、從五位下小野朝臣篁爲彈正少弼、正五位下藤原朝臣助爲右近衛權中將、從五位下長田王爲伊勢守、從五位下藤原朝臣貞雄爲甲斐守、從四位上源朝臣弘爲信濃守、宮內卿如故、云云、○癸丑、以久子內親王爲伊勢齋宮、高子內親王爲賀茂齋院、○甲寅、遠江國飢疫、賑恤之、○乙卯、詔曰、盛德无沫、必資加等之榮、徽烈惟昭、聿修崇號之制、故使敬宗尊祖、義煥曩篇、追遠飾終、不隔異代、朕外祖父從三位橘朝臣疏

○差酒醴諸餅蔬菓之事
 ○爲應即位、紀略應可
 ○從三位兼行民部卿、原
 ○本兼を廣に作る諸本に據
 ○て改む
 ○從三位行、原本從正
 ○に作る西本に據て改む
 ○從四位下式部大輔、原
 ○本從正に作る下文に據
 ○て改む
 ○安倍朝臣、原本倍を陪
 ○に作る閣本細本に據て改
 ○む

○柏原長岡二陵、柏原は
 桓武天皇山陵山城國紀伊
 郡堀内村大字堀内にあり

長岡は桓武天皇の皇后乙牟漏の陵にて同郡乙訓郡向日町にあり ○恐恐毛、原本毛の上に巳字あり諸本に據て削る ○後大上天皇、淳和天皇を申す
 原本後を復に作る西本に據て改む ○蒙戴天之、原本戴を載に作る西本條本に據て改む ○天之日嗣乃政者、原本乃字なく政を岐に作る閣本西本及
 文德紀深草陵即位奉告策命に據て改め補ふ ○諸王、原本なし西本條本宮本等に據て補ふ ○百官人、人字は諸本に據て補ふ ○高座、原本座を坐
 に作る諸本に據て改む ○近江大津乃宮云々、天智天皇 ○賜利懼利、懼利の二字は文德天皇即位の詔に據て補ふ ○恐美坐久止、原本久を世に作
 る諸本に據て改む ○宣布勅乎、細本勅上に天字あり下文及文德紀の詔に據るに天皇勅とあるべきなり ○治賜君波、原本波字なし諸本に據て補ふ
 ○拙劣、原本劣を幼に作る堀本に據て改む ○相穴奈比、穴奈比は助くる意原本比を利に作る西本に據て改む ○扶奉卒、原本卒を乎に作る西本に
 據て改む ○智行、原本知行に作る文德紀及桓武天皇即位詔に據て改む ○當隆之階、當隆とは五位以上の人の子に父祖の餘慶に依て叙せらるる
 を云、隆は原本陰に作る諸本に據て改む ○給御物天、天字衍なるべし ○天下給侍留高年、戶令に凡年八十及篤疾給侍一人九十二人百歳五人皆
 先盡子孫とある是なり ○力田、農耕に特に力を用ふる人を云 ○義夫、纂詔天を艾に作り艾は僕字の譌なるべしとあれど賦役令に義夫節婦志行
 聞於國郡者申太政宮奏聞表其門閭云々とあり義夫は譌にあらざる ○阿保親王、平城天皇の皇子 ○賀陽親王、桓武天皇の皇子 ○藤原朝臣三
 守、三守の二字は諸本及類史に據て補ふ ○並正三位、原本三を二に作る諸本及類史に據て改む ○正行王、萬多親王の御子 ○從四位下安倍朝
 臣、原本倍を陪に作る閣本宮本及類史に據て改む下は上の誤なるべし ○弟氏並、並字は宮本に據て補ふ ○友足、原本友を支に作る林本宮本及類
 史に據て改む ○清世、諸本世を臣に作る類史は此に同じ ○宗吉、宮本閣本吉を能に作る ○全雄、原本全を今に作る宮本及類史に據て改む ○
 有智子内親王、嵯峨天皇の皇女賀茂の齋院 ○外從五位下長岑宿禰、原本外字なし山崎校本に據て補ふ、承和三年十月紀に左京人民首氏主に此姓を

基顯族、驤首高衢、外祖母從三位田口氏、毓彩芝田、騰芳蕙圃、但屬運謝、
 已從閔川、朕以菲薄、丕承洪業、緬尋既往、想清渾之眇焉、乃詢舊章、宣縹
 禮而有貴、宜外祖父及外祖母並追贈正一位也、橋朝臣位記狀曰、地居
 貴戚、爵既隆而加榮、德蘊餘芳、人雖謝而追遠、宜申朝典、式賁泉局、田
 口氏位記狀曰、曾慶潛行、誕茲婉嫗、粉川行閱、蘭郁猶流、欽若舊章、睦親
 斯在、宜崇寵贈、允迪追榮、勅山城國相樂郡持山墓、河內國交野郡小
 山墓、並宜置守冢一烟、丁巳、授正五位下橋朝臣井手子從四位下、

賜はりし事見ゆ ○甲午、原本午を子に作る林本宮本及類史紀略に據て改む ○松本院、紀略に寛弘元年四月十日癸亥有少辨輔尹以下向松本曹
 司と見え又小右記長和三年二月十日丙寅にも見ゆれど所在は詳ならず ○關門、鈴鹿不破愛發の三關なり此時三關既に廢せられしも朝廷に大事あり
 れば固關使を立つること令制に同じ、原本關を關に作る林本宮本及類史に據て改む ○他田繼道、録和泉皇別に他田、膳臣同祖大彥命之後也とあり
 ○眞髮部、録右京皇別眞髮部稚武彥命吉備武彥命之後也とあり ○出身、選叙令に詳なり ○乞歸、官職を辭すること云 ○秀良親王、嵯峨天
 皇の皇子 ○直世王、長田王の孫にて淨原王の子 ○清貞、原本清を諸に作る西本宮本及類史に據て改む ○爲右少辨云々、此に云々の二字あるは
 傳寫の時本文を省略せしものなり以下之に同じ此例三代實錄にも見ゆ纂註には此を始めて以下悉く削りたれど之を存せざれば省略せしこと明ならず故
 に之を存す ○滋野朝臣貞主、文德紀仁壽二年二月乙巳紀に傳あり ○小野朝臣篁、同年十二月癸未紀に傳あり ○左衛門醫師云々、以下賜宿禰に
 至る十九字原本に三月庚子を冠して戊子朔條奉賀踐祚の下に置けり尾本林本に據て此に移す ○左大臣緒嗣、林本臣の下七字空白とす正二位藤原朝
 臣の七字を補ふべき ○職封、祿令に左右大臣各職封二千戸と見ゆ ○不聽、原本不下に能字あり宮本及類史に據て削る ○圍碁、抄術藝部に傳
 物志云堯造圍碁(音期字亦作碁此間云五)一云舜之所造也とあり ○御衣被、御字疑くは衍 ○右大將、原本大を少に作る諸本及類史に據て改む
 ○朝觀、禮記曲禮に天子當依而立諸侯北面而見天子曰觀、周禮大宗伯の注に觀之言動也欲其動主之事とあり其儀禮は西宮記江次第に詳なり ○學
 士及坊官、職原抄に傳及學士を東宮官といひ大夫亮進屬を坊官と爲すとあり ○兩布、抄布帛部に商布本朝式云商布(多邊)とあり調庸に納むる外自
 用と又交易に用ふる布なり ○參議從三位橋朝臣氏公、清友三男是年六月癸亥參議に拜す此に參議とあるは追書せるなり ○久子内親王、仁明天
 皇の皇女 ○高子内親王、久子内親王の御妹條本及類史紀略高を亮に作る ○賀茂齋院、嵯峨天皇藤原藥子の事ありしより平城上皇との御申らひよ
 からざるを以て皇女有智子内親王を賀茂の齋院とす上皇の大御心を和げ奉らむと祈請せさせ給ひしに訪まりし者なり、原本院字を脱す西本及類史に
 據て補ふ ○遠江國飢疫賑恤之、此條原本乙卯の次にありしは林本及類史に據て此に移す ○无沫、離騷注に沫已也とあり盛德止むことなきをいふ
 ○敬宗尊祖、禮記大傳に尊祖故敬宗敬宗尊祖之義也とあるに據れり ○煥義篇、古書に明なりとあり ○追遠飾終、論語學而篇に慎終追遠民德
 歸厚矣とあるに出づ ○疏基顯族、疏は分也橋氏は敏達天皇の裔孫なる故に顯族と云り、原本顯を顯に作る諸本に據て改む ○驤首高衢、驤は舉
 也晉書孔愉傳贊に策名霸府驤足高衢歷試清階遂登顯要とあるに據れり ○田口氏、神祇伯田口朝臣佐波主の女 ○毓彩芝田云々、拾遺記に崑
 崙山下有芝田蕙圃皆數百頃群仙種穉焉とあり毓は育に同じ女性なれば彩といひ芳と云り原本毓を敏に蕙を薰に作る毓は水戸校本蕙は西本尾本に據
 て改む ○運謝、時運の遷謝を云 ○從閔川、文選歎逝賦に悲夫川閱水以成川水滔々而日度世閱人而爲世人再々而行暮とあるに據れり注に閔忽
 也滔々水流自忽衆水而成其川終日流去而後水續とあり ○清渾、渾は此にては當らず或は暉の誤か ○宣縹禮、縹は説文に繁采色也とあり、原
 本宜を宜に縹を縹に作る諸本に據て改む ○餘芳、西本條本等芳を芬に作る ○式賁泉局、泉局は墓なり、原本局を扁に作る諸本に據て改む ○誕
 茲婉嫗、嫗は嫗の誤か婉嫗は晉書武悼楊后傳に婉嫗有婦德と見え柔順貌、婦德を云誕は大也 ○粉川行閱、上文閔川の文字を潤飾し女性なるを以
 て粉川と云り卒去の事を云 ○蘭郁猶流、郁は芳也遺芳の尙殘る意 ○持山墓、諸陵式に加勢山墓贈太政大臣正一位橋朝臣清友仁明天皇外祖父と見
 ゆ今木津村鹿背山にあり、原本墓を葉に作る諸本及類史に據て改む下同じ ○小山墓、同式に小山墓贈正一位田口氏仁明天皇外祖母と見ゆ、今北河
 内郡山田村田口の南に荒墳あり此處なるべし ○守冢、原本冢を家に作る諸本及類史に據て改む ○井手子、原本手子倒置諸本に據て改む、橋氏の
 祖諸兄相樂郡井手里に居れるに據り世に井手左大臣とよび清友の子氏公亦井手右大臣と稱するに據れば井手子は蓋氏公の姉妹なごにや

○四月賜侍臣酒、孟夏
 旬宴なり公事根源に是は
 天子夏冬の季のあらたま
 る始に臣下に御酒をたび
 政なきこめす義なりと
 あり
 ○隕霜、原本隕を降に作
 る諸本に據て改む
 ○伊豫權守、類史豫を勢
 に作る
 ○眞綱、清麻呂の子是れ
 和氣使の始なり
 ○宜子女王、仲野親王女
 天長五年二月齊宮に卜定
 ○賀茂大神宮、原本大を
 太に作る諸本及類史に據
 て改む宮字は類史になし
 従ふべし
 ○告以高子内親王云々、
 原本以告と倒置す類史に
 據て改む
 ○奏樂、原本奏を奏に作
 る諸本及類史に據て改む
 ○身長、長字は諸本に據
 て補ふ
 ○奉獻奏樂、原本奏字
 を脱す西本尾本及類史に
 據て補ふ
 ○十禪師、戒律智德高き
 僧を宮中の内道場に供奉
 せしむる者なり其數十人
 なるを以て十禪師と云續
 紀寶龜三年三月丁亥紀を
 參看すべし

○夏四月戊午朔、天皇御紫宸殿、賜侍臣酒、音樂之次、右京大夫從四位
 下百濟王勝義奏百濟國風俗舞、晚頭酒罷、賜四位已上御被、五位御衣、
 ○庚申、隕霜、○壬戌、遣從四位下行伊豫權守和氣朝臣眞綱、奉御劔幣
 帛於八幡大菩薩宮及香椎廟、告新即位也、○甲子、遣内匠頭正五位下
 楠野王於伊勢大神宮、告齋宮宜子女王之替、定久子内親王之狀、○乙
 丑、投化新羅人金禮眞等男女十人貫附左京五條、○丁卯、遣參議從四
 位下右大弁藤原朝臣常嗣、奉幣於賀茂大神宮、告以高子内親王定齋
 院之狀、○丙子、左近衛府奉獻奏樂、夕暮而止、賜群臣御衣及商布各有
 差、是日勅喚大舍人穴太馬麻呂與内豎橘吉雄、双立量其身長、吉雄
 甚短而其頭首不及馬麻呂腋下焉、○丁丑、授常陸國鹿嶋大神祝外從
 八位上勳八等中臣鹿嶋連川上外從五位下、○戊寅、左衛門左兵衛二
 府奉獻奏樂、賜群臣祿有差、是日延十禪師於内裏轉經、爲可遷御故、
 先鎮之焉、爲嵯峨院、下詔曰、鷄觀之上、日照先被、龍輅所過、恩典便降、嵯
 峨院者、先太上天皇光臨之地、第宮聳構、分東西之名區、芝蓋駐蔭、追汾

○鷄觀之上云々、泰山記
 に山頂東南巖爲日觀、日
 觀者雞一鳴時見日始欲
 出又玄中記に桃都山有
 大樹上名天雞日初出
 照此木即鳴天下雞皆隨
 之云々ある云々
 ○龍輅所過云々、文選東
 京賦に龍輅充庭、注に龍
 輅天子之車也とあり車駕
 の過ぐる所は恩典を下さ
 るを云、便は類史曲に
 作る亦通す
 ○嵯峨院、嵯峨天皇の離
 宮、貞觀十八年二月癸酉
 淳和太后請以嵯峨院爲
 大覺寺とあり今山城國
 葛野郡嵯峨村大覺寺即是
 なり
 ○第宮聳構、原本第を弟
 に作る西本西本及類史に
 據て改む
 ○分東西之名區、殿舎多
 く東西に分立するを云
 ○芝蓋駐蔭云々、文選西
 京賦注に芝蓋は以芝爲
 蓋とあり、芝形蓋の如く
 なる故なり汾陽之高賞と
 は莊子逍遙遊篇に堯往
 見四子注云王倪瞽瞍被
 衣許由、藐姑射之山汾水
 之陽とあるに出づ
 ○宣遊斯在、文選顔延之侍遊蒜山作の注に宣は偏とあり、原本宣を宜に作る西本宮本及類史に據て改む

陽之高賞、宣遊斯在、引年其深、然則當邑之毗、須霑慶幸、近壤之戶、豈无
 優恤、時惟長贏、方申亭育、思順天序、式施惠澤、宜山城國葛野郡貧民、去
 年借貸未入者、及雜賦未進等、特免之、從五位下菅野朝臣人數爲掌
 侍、天長元年有詔、廢五月五日節、爲隣近皇太后昇遐之日也、但事在
 練武、不可闕如、所以改用四月廿七日、至是太政官論奏、停彼權制、仍舊
 宣遊、許之、○己卯、天皇遷御内裏、以攝津國百濟郡荒廢田廿七町野
 賜源朝臣勝、○庚辰、奉授伊勢國從五位下多度大神正五位下、皇太
 子始讀孝經、參議已上、會集東宮有宴焉、山城國人山代忌寸淨足、同姓
 五百川等八人、改忌寸賜宿禰淨足等、天津彥根命之苗裔也、○壬午、出
 雲國司率國造出雲豐持等奏神壽、并獻白馬一疋、生鶴一翼、高机四前、
 倉代物五十荷、天皇御大極殿、受其神壽、授國造豐持外從五位下、○丙
 戌、紀伊國名草郡人正七位上湯直國立、同姓眞針、國作等三人、賜姓紀
 直、

○引年其深、引年の文字は禮記王制に凡

三王養老皆引年さあるに出づ此には年老て隱退する意に用ひたり ○當邑之叱、叱は田民也、原本畝に作る西本條本及類史に據て改む ○時惟長贏、爾雅釋天に春爲發生夏爲長贏さあり、原本惟を惟に、贏を贏に作る開本本條本に據て改む ○方申亭育、亭育は化育するを云申は致也、原本申を甲に作る宮本及類史紀略に據て改む ○式施惠澤、原本式を或に作る開本西本及類史に據て改む ○貧民、原本貧を貧に作り民字なし諸本及類史に據て補訂す ○雜賦、原本雜を雖に作る宮本及類史紀略に據て改む ○五月五日節、端午節なり既に注せり ○皇太后、桓武天皇の夫人藤原旅子なり延暦七年五月四日薨す淳和天皇即位後贈皇太后さし詔して五月節を停む ○權制、一時の假りの制詔なり ○宣遊、原本宣を宜に作る上文及開本西本に據て改む ○百濟郡、後廢郡さなり住吉東生の兩郡に入る ○源朝臣勝、嵯峨天皇の皇子後剃髮して由蓮竹田禪師さ稱す ○多度大神、神名式に桑名郡多度神社さあり今官幣中社に列す所在多度村 ○山城國人云々、以下苗裔也に至る三十六字原本及諸本文上三月戊子朔下三月庚子記事の次に置けるを林本尾本に據て此に移す ○出雲國司、此下姓名を闕く ○奉國造出雲豐持等、奉は原本卒に作る諸本及類史に據て改む出雲の下恐くは宿禰の二字を脱す ○奏神壽、既に注す ○生鶴、原本鶴を雉に作る宮本及類史に據て改む ○倉代物、倉は座(くら)にて座代物なるべし ○紀伊國名草郡人云々、以下賜姓紀直に至る二十八字原本上文三月戊子朔下四月庚辰記事の次に之を載せ亦此に出づ尾本に上になくして此にあるは是なり、今之に據りて彼を除き之を存す ○賜姓紀直、姓字は林本宮本に據て補ふ

○五月御武德殿觀馬射、端午節なり ○多磨、原本磨を麻呂の二字に作る林本宮本に據て改む今多磨及南北西の三多磨さなり ○悲田處、光明皇后悲田院を置きて孤兒病者を養ふ所に充てられたれど仁慈の及ぶ所京及其附近に止まりしが此に倣ひて地方に及ぼせるなり支那にては唐書武宗紀に見ゆ處は所に作るべし ○六箇人、民部式に據るに武藏は大國なり大國には守介大少掾大少目各一人を置けるを寶龜六年三月乙未に少目を二員さす故に介以下六人なり

○五月丁亥朔以右少弁從五位下丹墀真人清貞爲左少弁勸解由次官從五位下藤原朝臣諸成爲右少弁大監物從五位下藤原朝臣大津爲散位頭 ○辛卯天皇御武德殿觀馬射 ○壬辰亦御同殿閱覽種種馬藝 ○甲午叙左衛門少尉正六位上田中朝臣許侶繼從五位下 ○丙申以從五位下水上真人井作爲大監物云云 ○丁酉武藏國言管内曠遠行路多難公私行旅飢病者衆仍於多磨入間兩郡界置悲田處建屋五宇介從五位下當宗宿禰家主以下少目從七位上大丘秋主已上六箇人各割公廩以備餬口之資須附帳出舉以其息利充用相承受領輪轉

○出舉以其息利充用、主稅式に武藏國悲田料稻四千五百束さ見ゆ ○相撲、垂仁紀七年及天平六年七月辛丑紀に見ゆ ○簡練、原本練を練に作る纂註に據て改む ○玄雲、黑雲を云 ○襖子、抄裝束部衣服類に唐令云諸給時服冬則白襖子一領(阿乎之)さあり今俗に所謂綿入なり ○例舉、例年の如く出舉するを云 ○周急憐絶、論語雍也篇に周急不繼富さあるに出づ絶は之絶なり貧窶せるものを憐むを云 ○一穀不贖云々、贖は給也足也贖は慊さ通すあき足る也 ○遵救乏之典、遵は原本導に作る諸本及類史に據て改む ○勸穡之義、文選籍田賦に勸穡以足百姓所固本也さあり原本穡を構に作る林本宮本及類史に據て改む ○救瘼恤隱、原本瘼を廣に作る水戸校本及類史に據て改む瘼は病也隱は痛也病に憫み憂ふるものを救恤するを云

不斷許之、勅相撲之節、非啻娛遊、簡練武力、寂在此中、宜令越前加賀能登佐渡上野下野甲斐相摸武藏上總下總安房等國、搜求膂力人貢進 ○辛丑北山玄雲黯靄山嶺不見終日天寒衆人多著襖子 ○戊申主計寮言寮中置厨苦於慎火賜散位寮東面地廣七丈長十丈將爲置厨之處許之 ○辛亥聖躬不豫 ○壬子大和國言頻年不登例舉有欠准弘仁十年官符借國中富人稻三萬八千束將賑飢民許之仍勅曰夫富豪所貯是貧窶之資也如聞先來所行吏非其人只事借用无意返給所以貧富俱弊周急憐絶宜至秋收特遣使者悉令返給 ○甲寅京師五畿內七道諸國並飢疫焉下詔曰夫一穀不贖百姓不慊必遵救乏之典兼明勸穡之義是則救瘼恤隱固本厚生雖沿革有時而斯塗莫爽者也朕虔膺明命撫字黔黎思脩和平之猷以登仁壽之域如聞諸國去年穀稼頗乖豐稔今茲元元阻飢且疫朕爲之司牧未克綏之靖言念焉憮然何弭況小暑甫至藝殖鼎盛不有矜情恐失肆力宜京畿內七道諸國飢民量加賑給令獲支濟事委守宰必也審察務崇簡惠允副朕意六世長岡

○固本厚生、尙書五子之歌に民惟邦本本固邦寧また大禹謨に正徳利用厚生惟和 注に厚生謂薄征徭輕賦稅不奪農時令民生計溫厚衣食豐足と見え國の本たる人民の生活を安定にし鞏固ならしむるを云

○慶曆明命、尙書太甲に願諶天之明命とあるに出づ、慶は原本虛に作る宮本に據て改む

○撫字、字は愛育する意 ○脩和平之猷云々、毛詩小雅伐木章に神之聽之終和且平また漢書禮樂志に驅一世之民濟之仁壽之域とあるに出で民心を平和ならしむる謀を脩め幸福にして長く壽を保つ境涯に登らしめむことを思ふことなり、或は原本城に作るを諸本及類史に據て改む宮本水戸校本及類史脩を繕に作る

○元元阻飢、元々は人民をいひ阻飢は飢に憐むを云 殖鼎盛、種時き植付けの方に盛なるを云、宮本及類史鼎を斯に作る ○六世長岡云々、以下真人に至る十九字原本に上文三月戊子朔の次に出で亦此に出づ上文は錯簡なれば彼を削りて此を存す ○長岡岡於王、共に世系詳ならず ○一万五千株、原本千を十に作る諸本に據て改む ○充東西堀河杣料、充字は原本なし紀略に據て補ふ堀河は東西にあり故に東西堀河と云杣は字類抄に杣クヒ、杣俗用之非也とあり ○皇子、名闕く ○殤、短折せるをいふ字書に未成人喪也とあり八歳以下は無服の殤なり ○滋氏、滋野氏を修して滋氏と云り滋氏は女御從四位上滋野朝臣繩子にして參議貞主の女なり

岡於王等男女廿七人、賜姓清原真人、太政官處分、課左右京戶、令輸檜柱一万五千株、以充東西堀河杣料、乙卯、皇子年六歲者殤焉、侍女滋氏所產育也。

續日本後紀卷第一

續日本後紀卷第一

起天長十年六月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉 勅撰

○起天長十年、天長の二字原本及諸本なし各卷を通考するに初卷のみ年號を擧げ次卷以下は之を略する例なれど今宮本水戸校本に據て補ふ

○天長十年、丙辰朔、紀略に據て補ふ

○丁巳、以下機槍に至る二十二字は類史百八十二及紀略に據て補ふ

六月丙辰朔丁巳、禁斷山城近江丹波等國近都之山施作坑穿機槍、○庚申、彈正臺言、天長三年減巡察二員加屬二員、既有典員、何無史生、許之、令置二員、○壬戌、天皇不豫、公卿陪候殿上、西山苾芻、其名仙樹、以咒驗稱、與僧都等、俱奉加持聖躬也、分遣被七條、綿七百屯於七寺、轉經薰修、以祈翌日之瘳、○癸亥、公卿率衆僧、共侍殿上、勅引右近衛大將從三位橘朝臣氏公、并前大宰大貳從四位上朝野宿禰鹿取於御床下、拜爲參議、是日爲聖體有間、使神祇伯從四位下大中臣朝臣淵魚、奉幣於賀茂大神、又令天下諸國、修理寺塔破壞者及神社、勅曰、如聞諸國疫癘、天亡者衆、自非修善、何以攘災、宜令諸國、各請練行僧、大國廿人、上國十七人、中國十四人、下國十人、三箇日內、晝轉金剛般若經、夜修藥師

○七寺、東大、興福、元興、大安、藥師、西大、法隆寺を云
 ○祈翌日之瘳、尙書金藤に公歸乃納、册于金藤之匱中、王翌日乃瘳、あるに據り、原本之の字祈下にあり、諸本に據て改む
 ○聖體有間、原本體を休に作る、諸本に據て改む
 ○從四位下大中朝臣淵魚、原本從正に作り、大中臣を藤原に作る、從は宮本及下文に據り、大中臣は宮本及類史紀略に據て改む
 ○賀茂大神、原本大を太に作る、諸本及類史三十四に據て改む、同じ
 ○令天下諸國、原本令を命に作る、類史百八十二及紀略に據て改む
 ○三箇日內、紀略內を間に作る
 ○般若經、經字は類史百七十三及紀略に據て補ふ
 ○藥師悔過、聖武天皇の御時始めて行ひ給ひしより後、諸國分寺にて行はるゝに至れり
 ○正稅、租は田賦なり之を貯積するを稅と云、正稅は一に大稅と云之を出舉して諸般の公費に充つるなり

悔過其布施者、三寶穀十斛、僧三斛、以正稅充行、俾致精進、○甲子、詔曰、雲行雨施、穹蒼所以宣慈、含垢匿瑕、元后於焉播澤、朕肅承丕構、詢以政塗、大庇生靈、期於寧濟、夫赦令者、本稱姦人之幸、亦有奔馬之喻、朕非不知之、但欲令其悔惡、自新變舊、遷善加之、特有所念、感事興懷、宜流肆眚之恩、式暢作解之典、可大赦天下、自天長十年六月八日昧爽以前、大辟以下、罪无輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫囚見徒、咸赦除之、唯犯八虐、故殺謀殺、私鑄錢、強竊二盜、常赦所不原者、不在赦限、又去弘仁元年坐事配流者、雖自陷朝憲、而久憐淪翳、安倍朝臣清繼、百濟王愛筌、故藤原朝臣仲成男等、並量徙入近國、從五位下藤原朝臣貞本、殊放還京、速告赤縣、莫後青衣、敢以赦前事告言者、以其罪罪之、勅、比來疫癘間發、夭折屢聞、宜令天下諸國、謝彼疫氣、攘此不祥、但加藥致齋、須依前格、○乙丑、聖體平復、○己巳、罪人安倍朝臣清繼、元配伯耆國、今移美作國、百濟王愛筌、元安房國、今移參河國、○庚午、兵部省奏、造兵司雜工廿人之中、割二人、鼓吹々部卅四人之中、割大小角鼓生各一人、將爲省書生、

○精進、煩惱の心を雜へず、專一に道に進むこと
 ○雲行雨施、易乾卦の象傳に雲行雨施、品物流形とあるに據り
 ○含垢匿瑕、左傳宣十五年に諺曰高下在心、川澤納汗、山藪藏疾、瑾瑜匿瑕、國君含垢、天之道也とあるに據り
 ○元后云々、元后は君なり、菜庶に罪あれども之を宥め赦して德澤を天下に播き施すを云
 ○承不構、父祖の大業を繼承するを云、尙書大誥の肯堂肯構の語に據り、原本不を本に作る、宮本に據て改む
 ○大庇生靈、原本大を陰に作る、水戸校本に據て改む、○寧濟、安じ救ふを云、○稱姦人之幸、潛夫論に今日賊良民之甚者莫大於數赦、赦贖數則惡人昌而善人傷矣、舊唐書太宗紀に凡赦宥之恩、唯及不軌之輩、古語曰小人之幸、君子之不幸と云、○有奔馬之喻、管子法法篇に凡赦者小利而大害者也、故久而不勝其禍、云々、故赦者奔馬之委、輻輳あり、○變舊、原本舊を音に作る、宮本作イ本に據て改む、○加之、之字は宮本に據て補ふ、○特有所念、原本特を特に作る、西本宮本及類史に據て改む、○感事興懷、事に感して思を興すなり、原本感を盛に、懷を壞に作る、感は閣本及類史に據り、懷は類史に據て改む、○肆眚之恩、尙書舜典に眚災肆赦とあるに據り、注に肆は緩也、昔は過也とあり、原本昔を青に作る、西本尾本及類史に據て改む、○式暢作解之典、易解卦の象傳に雷雨作、君子以赦過宥罪とあるに據り、式は原本或に作る、諸本及類史に據て改む、○弘仁元年坐事配流者、藤原藥子の亂に連坐せし人々を云、○淪翳、俗にいふ日蔭者なり、○愛筌、原本筌を堅に作る、諸本及類史に據る、宮本岑に作る、孰れか是なるを知らず、○徙入近國、流罪に遠流中流近流あり、徙入近國とは遠流を中流に中流を近流とするを云、原本徙を徒に作る、西本宮本及類史に據て改む、○還京、原本還を還に作る、諸本及類史に據て改む、○赤縣、史記孟荀傳に中國曰赤縣神州とあるに據り、此は天下と云ふべきに、赤縣の文字を用ひしは、下に青衣と云るより其對句と見たるなり、○青衣、支那にては古へ青衣を賤者の服とす、故に賤者を青衣と云、○勅、比來疫癘間發云々、勅以下須依前格に至る卅四字は、類史百七十三に據て補ふ、○加藥、服藥療養せしむるを云、○致齋、潔齋を爲すを云、○乙丑、原本己丑に作る、宮本水戸校本及紀略に據て改む、○愛筌、上文愛筌に作る、○庚午、此條は宮本及類史百七に據て補ふ、○雜工、鍛工、甲作弓削矢作等八色の工を云、○鼓吹々部卅四人、職員令に鼓吹司吹部三十人とあり

許之、○辛未、罪人藤原永主、同山主、藤主等、天長二年、從日向國、迂配豐前國、今移備前國、永野淨津、元配越前國、伊勢安麻呂、元配能登國、今並移若狹國、○戊寅、山城國民、卷藻爲漁、勅、豺獮已祭、虞人入澤、鷹隼初擊、獵者因山、是故殺不以禮、曰暴天物、取不以義、爲逆時候、如聞藻卷之爲體也、惠薄潛鱗、害及昆蟲、微物失所、既非德政之美、下民天命、殆是濫殺之報、嚴加禁斷、莫令更然、○壬午、詔奉授坐尾張國、從三位、熱田大神正三位、并納封十五戶、○癸未、地震、○乙酉、因幡國言、百姓之僛、卅日爲限、至于事力、竟年、駟使、比之平民、受弊殊重、請停差調、丁、駟使、僛人許之、

り延曆十五年十月四人を加へ卅四人とす ○大小角、抄調度部征戰具に角兼名苑注云角(楊氏漢語抄云大角波良乃布江小角久太之布江)本出胡中或云出吳越、以象龍吟也 ○戊寅、此條は類史百八十二に據り補ふ、紀略に亦見ゆ ○豺獮已祭云々、禮記王制に獮祭魚然後虞人入澤梁、豺祭獸然後田獵、鳩化為鷹然後設罝羅とあるに據り疏に獮祭魚則十月中也豺祭獸則九月末十月之初とあり鷹隼初擊は月令に孟秋之月鷹乃祭鳥とある時、則ち八月申なり虞人は山澤及苑囿田獵を主る官を云 ○殺不以禮云々、同く王制に田不以禮曰暴天物とあり ○熱田大神、熱田神宮なり原本大を太に作る諸本に據り改む ○卅日爲限、僞は人夫に出づるを云賦役令に凡正丁歳役十日須留役者滿三十日、租調俱免、慶雲三年三月格に凡身役十日以上免庸卅日以上調庸俱免役日雖多不過卅日とあり ○事力、軍防令に上戸より正丁一人を採り其庸を免じて職分田の耕作に力を致さしむるを云

(七月)文殊會、文殊菩薩を供養する法會なり ○公家、朝廷を申す ○便安置綱所、綱所は僧綱の居所なり原本便を史に綱を納に作る諸本及類史紀略に據り改む ○開請、開字は類史百七十七及紀略に據り補ふ ○佐伯王卒、大同元年四月右兵庫頭從五位下、同年十月大監物四年二月再び右兵庫頭弘仁元年九月又大監物となる ○伊夜比古神、神名式に越後國蒲原郡伊夜比古神社(名神大)、西蒲原郡彌彦村に祀り國幣中社に列す ○有觸諱者云々、桓武天皇御諱山部因て山部氏を山氏と改め平城天皇御諱安殿因て紀伊國阿提郡を在田郡と改めし類是なり ○相撲節、天平六年より毎年七月七日に行はれし

○秋七月丙戌朔、先是傳燈大法師位泰善設文殊會、公家相助而行之、至是甫造文殊影像備之瞻仰、會事畢、便安置綱所、臨會開請、永爲恒例、
○丁亥、散位從四位下佐伯王卒、正五位下水内王男也、○戊子、越後國蒲原郡伊夜比古神預之名神、以彼部每有旱疫、致雨救病也、○癸巳、天下諸國、人民姓名及郡鄉山川等號、有觸諱者、皆令改易、○乙未、第一親王田朝親于時春秋纔是七歲、而動止端審、有若成人、觀者異之、○辛丑、天皇幸神泉苑、觀相撲節、○壬寅、御紫宸殿、令盡昨節之餘將夕乃罷、是日左馬寮走卒將日奏板札、入自春華門、比至延政門、頓仆而死、○閏七月乙卯朔、勅至于秋序、洪水敗稼、大風害物、古來尙在、宜令天下諸國、奉幣名神、豫爲攘防、勿損年穀、○戊寅、越後國言、去年疫癘旁發、藝耕失

が天長三年以後國忌(平城)を避て十六日を用ふ、 ○昨節之餘、之を拔出と云 ○將夕乃罷、原本將を性にする關本西本及類史七十三に據り改む ○春華門、宮城南面の外門なり ○比至延政門、延政門は東面の門なり原本比を北にする宮本に據り改む ○頓仆、原本仆を爾に作る關本西本に據り改む (閏七月)豫爲攘防、爲字は諸本及類史紀略に據り補ふ ○藝耕、原本藝を華にする宮本に據り改む藝は藝と通じ種なり ○秋稼、原本此二字倒置す類史に據り改む ○窮民許之、窮は原本究にする諸本及類史に據り改む許は關本西本等聽にする ○仍令大和山城云々、以下祈霽焉に至る三十八字は紀略に據り補ふ ○丹生川上兩師神、神名式に大和國吉野郡丹生川上神社とあり ○松尾、同式に山城國葛

時、寒氣早侵、秋稼不稔、今茲飢疫相仍、死亡者衆、凶年之弊、雖賑猶乏、望請被許糶糶資、此窮民許之、○壬午、霖雨涉旬不息、仍令大和山城二國介已上、親奉幣帛於丹生川上兩師神、松尾、賀茂上下、及貴布禰社、以祈霽焉、○癸未、勅弘仁年中、犯罪僧藥師寺良勝、被配多禰嶋、西大寺泰山隱岐國、興福寺康信、石見國、元興寺永繼、信濃國、今並特放還入京都、太政官處分、在大和國廣濇郡西安寺、俗號久度宜令僧綱攝之、○八月甲申朔、日有蝕之、○丙戌、勅穀倉院西南角地、東西各廿丈、南北各卅丈、宜爲內藏寮染作之處、○辛卯、叙從五位下藤原朝臣良房正五位下、從四位下和氣朝臣眞綱爲木工頭、伊豫權守如故云云、○癸巳、天皇謁觀先太上天皇及太皇太后於冷然院、賜扈從五位已上祿、有恙、是日太上天皇幸姬大原真人全子、橘朝臣春子、阿保親王母氏葛井宿禰藤子、並叙從五位下云云、○甲午、散位從六位上土師連豐道、從六位上同姓道吉等四人、賜姓菅原宿禰、○乙未、有狐走入內裏、到清涼殿下、近衛等打殺之、○丙申、天皇御紫宸殿、供常膳間、有魚虎鳥飛入集殿梁上、羅得之、○

野郡松尾神社
 ○貴布禰社、同式に山城國愛宕郡貴布禰神社、鞍馬村貴船にあり官幣中社に列す
 ○良勝、以下四人は蓋樂子の亂に坐して流されしなるべし
 ○特放還入、西本尾本放を令に作る
 ○京都、宮本京師に作る
 ○太政官處分、以下攝之に至る二十一字及分注四字類史及紀略に據て補ふ但し紀略に七月癸未とありれど癸未は閏七月廿九日なり故に干支を推して此に收む
 ○西安寺、大和志に定琳寺在河合村爲廣瀨神宮寺とあり是か
 ○八月穀倉院、拾芥抄中末に二條南朱雀西在大學西
 ○冊文、冊は原本冊に作る今關本西本及類史百七に據る
 ○冷然院、嵯峨上皇の始に坐しし宮なり
 ○大原真人全子、嵯峨天皇に仕へて源融勳等を生む原本全を金に作る諸本及類史紀略に據て改む
 ○橘朝臣春子、詳ならず

戊戌、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣上表辭職、不許之、備前國人直講博士正六位上韓部廣公、賜姓眞道宿禰也、廣公之先百濟國人也、○庚子、河内國人戸主外從五位下御船宿禰氏主等、改本居貫附右京六條、攝津國人戸主外從五位下菅原宿禰梶吉等、貫附右京二條、○丙午、奉幣伊勢大神宮、○戊申、先太上天皇御淳和院、與後太上天皇遊讌、親王以下咸萃於彼、命文人令賦詩幽居山水之題、兩太上天皇俱有御製、以大藏省綿一萬屯賜群臣祿、是日以從三位源朝臣定爲參議、美作守如故、○辛亥、飛驒國貢松實御贄、○九月甲寅朔辛酉、以在近江國栗太郡金勝山大菩提寺、預定額寺、○壬戌、是重陽節也、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、令文人同賦秋風歌之題、宴訖賜祿、○壬申、參議刑部卿從三位兼信濃守南淵朝臣弘貞薨、年五十七、○戊寅、天皇幸栗栖野遊獵、右大臣清原真人夏野在御輿前、勅令著笠、便幸綿子池、令神祇少副從五位下大中臣朝臣儀守、放所調養隼拂水禽、仙輿臨覽而樂之、日暮還宮、賜扈從者祿、

○阿保親王、平城天皇の皇子 ○葛井宿禰藤子、正五位下道依の女 ○甲午、此條原本卷一三月戊子と己丑の間に收む林本尾本に據て此に移す ○紫宸殿、原本殿下に下字あり林本水戸校本及紀略に據て削る ○魚虎鳥、抄羽族部に鳩爾雅集注云鳩(和名曾比今按魚虎見兼名苑等)小鳥也色青翠而食魚とあり今俗にかはせみと云原本魚を燕に作り鳥字なし諸本及類史紀略に據て改め補ふ ○羅得之、羅は鳥類 ○備前國人云々、以下百濟國人也に至る三十二字は原本卷一三月戊子と己丑の間に收む尾本林本に據て此に移す ○攝津國人戸主、主原本王に作る諸本に據て改む ○奉幣、類史幣下に帛於の字あり ○成宰於彼、原本成字なく萃を卒に作る成は關本西本宮本及類史に據て補ひ萃は類史に據て改む ○松實御贄、抄果藏部に五粒松子楊氏漢語抄云五粒松子(五粒五葉也松子末都乃美)、後訓菜に今も飛驒に大木ありと云り今朝鮮松といふ和名抄に五葉松とあれど別種にて今いふ日向松なるべしと云 ○九月大菩提寺、興福寺官務帳に大菩提寺在栗太郡號金勝山養老二年金齋菩薩開基後定爲平城宮鎮鬼門承和聖帝特施燈分賜額金勝とあり今も現存す ○定額寺、官寺を云 ○重陽節、類書纂要に九爲陽數九日與九月並應故曰重陽と見ゆ天武天皇九年九月行幸朝陽乃俾馬的射と見えしが始なるべきか大同二年九月幸神泉苑觀射詔停正月射禮移于是日と見え天長八年以後は紫宸殿にて行はせらる ○壬申、此條は紀略に據て補ふ ○兼信濃守、此四字は補任に據て補ふ ○弘貞薨、弘貞は從四位下坂田朝臣奈良麻呂の子弘仁十四年今の姓を賜はる ○令著笠、君前に笠を著るは異數なり原本著を差に作る諸本に據て改む ○便幸綿子池、便は便宜によりてなり綿子池は子の手の誤なるべし山田氏は葛野郡縣代(タカ)なりと云綿子は今葛野郡花園村及衣笠村の邊なりと云 ○辛、仁德紀四十年に見え抄羽族部に隼(和名八夜布佐)鷲鳥也と云

○十月賜侍臣酒、孟冬旬宴なり
 ○内命婦、職員令義解に婦人帶五位以上曰内命婦とあり
 ○辛卯勅、勅以下爲圓提寺地に至る十七字は類史百八十二に據て補ふ
 ○區毗岳、神名式に緩喜郡昨岡神社見ゆ其地なり今草内村飯岡なりと云
 ○圓提寺、相樂郡掛山にあり
 ○富鷹、原本富を審に作る關本西本に據て改む
 ○禊事、大嘗祭の御禊なり
 ○鹵簿、宮衛令義解に鹵者楯也簿文籍也言簿列

○冬十月癸未朔、天皇御紫宸殿、賜侍臣酒、至大臣以下五位已上及內命婦、賜祿綿各有差、○辛卯、勅、山城國綴喜郡區毗岳一處爲圓提寺地、安藝國言賀茂郡人風早富鷹、德行懿美、孝養自厚、父母歿後、口絶五味、哀慕之情、无暫忘時、勅叙三階、免戶田租、又言、力田佐伯郡人伊福部五百足、同姓豐公、若櫻部繼常等、所耕作田各卅町已上、貯積之稻亦各四萬束已上、並立性寬厚、周施困乏、往還糧絕、風雨寄宿之輩、皆得賴焉、詔各叙一階、○辛丑、爲大嘗會將修禊事、行幸賀茂河、鹵簿之儀、具如式文、皇太子先在禊處、及聞蹕聲、出幄而立、迎謁天皇、禊事畢、御直相幄、

楯圖以爲部隊也。○如式文、文の字は諸本及紀略に據て補ふ。
 ○直相、祭事終りて會宴するを云。
 ○賜扈從五位已上大官饌、原本賜字なく大官を天皇に作る諸本及類史に據て改む。大官饌は大膳職より供する御饌なり。
 ○著當色、原本著を差に作る諸本に據て改む。
 ○圓澄卒、元亨釋書二にも傳見ゆ。
 ○年六十二、釋書に六十六あり。
 ○延曆十七年、以下大成之初也に至る迄は類史百七十八灌頂に據て補ふ。釋書に據るに類史載する所は其一節にて此前後にも文あること明かなり宜しく釋書を參看すべし。
 ○灌頂、菩薩等覺究竟して妙覺に遷る時諸佛大悲の水を以て頂に灌ぎ自行圓滿して佛果を證するを得しむ是即ち灌頂の義なり。
 ○清瀧峯、山城國葛野郡にあり即ち高雄山なり。
 ○高雄寺、後神護寺と改む下文に見ゆ。
 ○止觀院、俗に根本中堂

賜扈從五位已上大官饌焉。三四孟後、賜五位及神祇官長上以上、山城國司、并非侍從著當色者祿各有差。○壬寅、延曆寺座主僧傳燈大法師位圓澄卒。時年六十二、云々、延曆十七年、陟到叡山、最澄法師、々大悅、卽落髮爲弟子、取自名一號、爲圓澄。時年二十七焉。廿四年春、最澄師入唐以後、法師依詔於紫宸殿、修念五佛頂法、卽預得度。其夏四月、就唐泰信大僧都受具戒。六月、大唐使歸朝、秋八月、宣勅令最澄師修入唐所受灌頂秘法。是大法師修圓勤操等七人、爲受法弟子。於清瀧峯高雄寺、奉爲桓武天皇、修毗盧遮那秘法。法師亦在其中、共稟灌頂三摩耶戒。是則本朝灌頂始興之日也。大同元年冬十一月、於叡山止觀院、法師爲上首、與百餘人、受圓頓菩薩大戒。此亦天臺師々相傳大戒之初也。○乙巳、山城國綴喜郡空閑地五町、賜正三位中納言源朝臣常。○丁未、以從四位下大中臣朝臣淵魚爲兼攝津守、神祇伯如。故云云。○戊申、緣景雲六年八幡大菩薩所告、至天長年中、仰大宰府、寫得一切經。至是便安置彌勒寺、今更復令寫一通、置之神護寺。授正六位上大川王從五位下、正五位

○云山門堂舍記に延曆七年傳教大師建立とあり。
 ○源朝臣常、嵯峨天皇の皇子。
 ○爲兼攝津守、爲字は關本西本に據て補ふ。
 ○戊申、此二字原本には下文神護寺の下に置けるを類史五及紀略に據て此に移せり。
 ○景雲六年、原本六を之に作る宮本に據て改む。
 ○寫得、原本得寫に作る諸本及類史に據て改む。
 ○便安置彌勒寺、便字諸本及類史紀略に據て補ふ。彌勒寺は宇佐神宮の傍にあり。
 ○神護寺、高雄山にあり。初め和氣清瀧河内國に神願寺を建立す。天長元年、其子仲世等此地に移す。翌年、空海を住持とし、尋いで神護寺と改む。
 ○文操、原本又授に作る類史九十九に據て改む。
 ○十一月、癸丑朔、朔字は林本宮本に據て補ふ。
 ○美作守如故、纂註は補任に據て此下に從四位上參議清原真人長谷爲兼信濃守、正四位下、右京大夫百濟王勝義爲左衛門督の卅五字を補ふ。

下百濟王安義從四位下、正六位上百濟王文操從五位下。○十一月癸丑朔、以參議從四位上朝野宿禰鹿取爲式部大輔、參議從三位源朝臣定爲治部卿、美作守如故。云云。左近衛權少將正五位下藤原朝臣良房爲權中將、加賀守如故。云云。○甲寅、雷。○丙辰、雷電良久。○庚申、爲行大嘗會事、奉伊勢大神宮幣帛。○辛酉、雷電。○丁卯、天皇御八省院、修禋祀之禮。○戊辰、御豐樂院終日宴樂、悠紀主基共立標、其標悠紀、則山上栽梧桐、兩鳳集其上、從其樹中起五色雲、雲上懸悠紀、近江四字、其上有日像、日上有半月像、其山前有天老及麟像、其後有連理吳竹、主基、則慶山之上、栽恒春樹、樹上泛五色卿雲、雲上有霞、霞中掛主基備中四字、且其山上有西王母獻益地圖、及偷王母仙桃童子、鸞鳳麒麟等像、其下鶴立矣。於是悠紀標、忽被風吹折、工人扶持、乃興復之。悠紀樂標、則大象之背、結構小臺、命兩童子、擎書障子、其書曰、周禮曰、旄人掌樂也、禮記曰、民勞其舞綴短、民逸其舞綴遠、故觀舞而知民治不、其障子後起煙霞、霞中造機、隨舞人之出進、而舉其舞名、其象之左、有一胡人、而馭象。○己巳、悠紀

○辛酉、原本西を丑に作る林本宮本に據て改む
 ○丁卯、原本丁を癸に作る林本宮本及類史八に據て改む
 ○修禮祀之禮、大嘗祭を唐めかして斯く云り尙書舜典に禋于六宗と見え説文に精意以享爲禋と云
 ○立標、代始和抄に之を標山と云り
 ○山上、主基の例に據らば慶山之上とあるべきなり類史八も原本に同じ
 ○五色雲、色字は西本宮本及類史に據て補ふ
 ○半月像、原本此下に其山上有半月像の七字あるは衍なり諸本及類史に據て削る
 ○天老、後漢書張衡傳注に帝王紀曰黃帝以風后配上天老配中台五聖配下台謂之三公道あり列子雲笈七籤にも見ゆ、黃帝の臣下の名なり
 ○吳竹、抄草木部竹類に竹竹文字集略云管（楊氏漢語抄云吳竹也和語久禮太計）似葦而下節茂葉者也とあり
 ○卿雲、史記天官書に若

獻屏風四十帖、主基獻御挿頭華二机、和琴二机、厨子十基、屏風廿帖、是日親王已下、五位以上、朝賜悠紀祿、夕主基祿、各有差、○庚午、天皇御豐樂殿、宴于群臣、詔授正三位紀朝臣百繼從二位、從四位下藤原朝臣常嗣從四位上、從四位下磐田王從四位上、從五位上峯成王正五位下、正六位上氏雄王、豐前王、並從五位下、從四位下大中臣朝臣淵魚、長岡朝臣岡成、並從四位上、正五位下甘南備真人高繼、橘朝臣氏人、橘朝臣永名、藤原朝臣良房、並從四位下、正五位下紀朝臣深江正五位上、從五位上藤原朝臣長良、安倍朝臣安仁、藤原朝臣清澄、並正五位下、從五位下高道宿禰鯛釣、大中臣朝臣永嗣、藤原朝臣春津、良岑朝臣高行、並從五位上、外從五位下良岑宿禰茂知麻呂、正六位上藤原朝臣秋常、坂上大宿禰廣雄、藤原朝臣高扶、小野朝臣千株、坂上大宿禰河内麻呂、橘朝臣宅繼、大原真人眞甘、惟良宿禰貞道、並從五位下、正六位上余河成、豐岡宿禰眞黑麻呂、並外從五位下、宴畢賜祿各有差、夜闌還宮、○辛未、授從三位繼子女王正二位、无位藤原朝臣貞子從四位下、无位菅野朝臣

煙非煙若雲非雲郁々紛々蕭索綸困是謂卿雲卿雲見喜氣也とあり原本卿を慶に作る諸本に據て改む
 ○益地圖、西王母傳に舜即位（王母）又授地圖遂廣黃帝之九州爲十有二州とある是なるべし
 ○偷王母仙桃童子、道藏本漢武外傳に東郡送一短人朔（東方朔）至短人因指謂帝曰王母種桃三千年一作子此兒不長已三過偷之失王母意故被謫來此帝知朔非世上人也（節略）とあり
 ○周禮曰、周禮春官に旌人掌教舞散樂舞夷樂とあり旌は原本旌に作る水戸校本及周禮に據て改む
 ○禮記曰、禮記樂記に其治民逸者其舞行綴短故觀其舞知其德と云々とあり本文と相反せり
 ○其舞名、原本名を各に作る閣本谷本宮本等に據て改む此次に主基の樂標あるべきが脱ちたるべし
 ○御挿頭華、抄術藝部雜藝具に楊氏漢語抄云鈔頭花（賀佐之俗用挿頭花）

人數從五位下云云、賜女王及命婦祿有差、○癸酉、於本宮有悠紀之奉獻、終日奏樂舞、賜親王以下、次侍從已上祿、○十二月癸未朔、道場一處在山城國愛宕郡賀茂社以東一許里、本號岡本堂、是神戶百姓奉爲賀茂大神所建立也、天長年中、檢非違使盡從毀廢、至是勅曰、佛力神威、相須尙矣、今尋本意、事緣神分、宜彼堂宇特聽改建、○乙酉、天皇御建禮門分使者奉唐物於後田原、八嶋、楊梅、柏原等山陵、○丁亥、外從五位下大宅臣宮廬麻呂爲近江掾、○戊子、陰陽寮進御曆并頒曆也、恒例在十一月朔、而曆博士外從五位下刀伎直淨濱卒後、忽无相繼之人、遣召識曆術者遠江介正六位上大春日良棟、乃令造之、所以于今延引、○己丑、右衛門權佐從四位下橘朝臣永名爲刑部大輔、內藏頭正五位上滋野朝臣貞主爲宮內大輔、下總守如故、云云、左京人六世王豐宗豐方等七人賜姓清原真人、○辛卯、大宰府言、陰陽師土師雄成言、幸沐天恩、已霑厚祿、但有宿心、猶未得果、解所帶職、出俗歸眞、勅許之、詔曰、如聞諸國糴糶、有利於民、无損於公、自今以後、不立年限、永俾行之、○乙未、行幸芹川野

さありカザシは頭挿にて頭髪の飾りの義御字は關本西本及類史に據て補ふ。○和琴、抄音樂部に日本琴萬葉集云梧桐日本琴一面(天平元年十月云々體似爭而短小有六絃)俗用後琴二字。夜萬止古止大歌所有(鳴尾琴)。○厨子、抄器皿部に辨色立成云堅櫃厨子別名也。○主基祿、祿字は西本條本宮本及類史に據て補ふ。○天皇御豐樂殿、天皇の二字は宮本及類史紀略に據て補ふ。○深江、原本深を深に作る諸本に據て改む。

栗隈山遊獵、賜扈從者祿各有差。○庚子、天皇御建禮門、奉唐物於長岡山陵、爲漏先日之頒幣也。○戊申、左京人少外記山田造古嗣、紀伊國介外從五位下大藏忌寸橫佩、大外記從六位上內藏忌寸秀嗣等、並賜宿禰姓、就中橫佩秀嗣之先、出自後漢靈帝曾孫阿智王、洎譽田天皇、馭寓之年、歸化者也。

續日本後紀卷第二

○從五位上藤原朝臣長良、從五位上の四字は尾本宮本及類史に據て補ふ。○並從五位上、原本上を下に作る林本宮本及類史に據て改む。○良岑宿禰、西本良を長に作る。○秋常、秋字は諸本及類史に據て補ふ。○高扶、原本扶を快に作る宮本及類史に據て改む。○眞甘、諸本及類史甘を耳に作る。○余河成、承和七年六月紀に余河成等賜姓百濟朝臣、と見ゆ河は原本阿に作る宮本及類史に據て改む。○宴華、關本西本等華を了に作る。○各有差、各字は宮本及類史に據て補ふ。○還宮、原本還を歸に作る類史に據て改む。○繼子女王、女字は宮本に據て補ふ。○十二月、岡本堂、山城志に岡本廢堂在上賀茂岡本町、今稱藥師堂、者是とあり。○奉爲賀茂大神、奉字は諸本及類史に據て補ふ。○盡從毀廢、原本從を從に作る西本及類史に據て改む。○緣神分、原本分を力に作る諸本及類史に據て改む。○乙酉、原本辛酉に作る尾本宮本に據て改む。○天皇云々、纂詁に按原丁亥上有辛酉奉唐物於山陵之一條、然月無辛酉、又無唐使來貢事、源義公以爲承和六年十二月辛酉事、似是故姑刪之と云り。○丁亥、此條原本戊子條の次にあり尾本及類史に據て改移す。○戊子、原本甲子に作れど是月癸未朔にて甲子なし尾本水戸校本に據て改む。○外從五位下刀伎直、刀伎直は錄に載せず類史に天長十年正月授外從五位下刀伎直外正五位下とあり、此從は正の誤なるべし刀は原本力に作る宮本に據て訂す。○遣召、原本遣言に作る關本西本等に據て改む。○大春日、本林本に據る。○陰陽師、大宰府の陰陽師なり。○諸國羅羅云々、寶字三年紀及寶龜四年三月紀等を參照すべし。○栗隈山、山城國久世郡にあり。○庚子、原本庚午に作る條本宮本に據て改む、本林本此條無し。○戊申、此條原本卷一三月己丑條の上により尾本林本は彼處になくして此處にあり、今兩本に據る。

續日本後紀卷第三

起承和元年正月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉 勅撰

○從一位臣、原本臣字なし諸本に據て補ふ。○承和元年、抄羽族部に鶴兼名苑云鶴一名鶴鶴也野王家鶴(漢語抄云波之太加又兄鶴古能利)似鷹而小也とあり。○二聯、聯は字書に對偶謂之聯とあり。○吠鳥犬、所謂獵犬なり。○三微、白虎通に正朔有三微、天有三統、謂三微之月、也三微者何謂也、陽氣始施、黃泉、萬物動微而未著也十一月之時陽氣始養、萬物皆赤、故周爲天正、色尚赤也十二月之時萬物始牙、而白、故殷爲地正、色尚白也十三月之時萬物始達、皆黑、故夏爲人正、色尚黑(節略)とあり。十一月は仲冬にて周の正月十二月は季冬にて殷の正月十二月は孟春にて夏の正月なり、迭は原本進に作る諸本に據て改む。○五運、木火土金水の五徳の運行なり。○以徽號、原本以を次に作る諸本に據て改む。

承和元年春正月壬子朔、天皇御大極殿受朝賀、畢宴侍從已上於紫宸殿、賜御被。○癸丑、天皇朝覲後太上天皇於淳和院、太上天皇逢迎、各於中庭拜舞、乃共昇殿、賜群臣酒、兼奏音樂、左右近衛府更奏舞、既而太上天皇、以鷹鶴各二聯、嗅鳥犬四牙、獻于天皇、天皇欲還宮、降自殿、太上天皇相送、到南屏下也。○甲寅、後太上天皇賀先太上天皇於冷然院、以入新年也、先太上天皇乍驚、逢迎中庭、是日改年號、下詔曰、三微迭代、必制之以嘉名、五運因循、終甄之以徽號、是知正始重本之典、千帝同符、履端建號之規、百王合契、朕恭膺明命、續守鴻基、分至推遷、節候亟換、方今攝提發歲、天紀更始之辰、大簇報春、品彙惟新之日、宜有草創、以光舊章、其改天長十一年爲承和元年。○乙卯、天皇朝謁先太上天皇、及太皇

○履端、左傳文元年先王之正時也履端於始舉正於中一歸餘於終あり
 ○分至推遷、分は春分秋分、至は夏至冬至にて四時の推移るを云
 ○亟換、原本垂換に作る諸本に據て改む亟は疾也
 ○攝提發歲、爾雅に太歲在寅曰攝提格あり今年は寅年なればかく云り
 ○天紀更始之辰、歳は甲寅を以て元とす故にかく云り
 ○大簇報春、禮記月令に孟春之月律中「大簇」あり正月を云
 ○宜有草創云々、舊き制に從ひて年號を新にするを云
 ○其改、原本其を宜に作る諸本に據て改む
 ○及太皇太后、以下先太上天皇に至る十六字は類史二十八に據て補ふ
 ○中納言從三位、以下年五十八に至る十八字は紀略に據て補ふ但兼中務卿の四字は補任に據る
 ○觀青馬、青馬節始て此に見ゆ公事根源に白馬の節會を或は青馬の節會とも申なり其故は馬は陽の

太后於冷然院、是日先太上天皇、亦御淳和院、以相賀也、中納言從三位兼中務卿直世王薨、年五十八、○戊午、天皇御豐樂殿、觀青馬、宴群臣、詔授正五位下岑成王從四位下、正六位上助雄王從五位下、從四位上源朝臣弘正四位下、正五位上滋野朝臣貞主、紀朝臣深江、正五位下藤原朝臣眞川、藤原朝臣助、並從四位下、從五位上安倍朝臣高繼、從五位下田口朝臣佐波主、並正五位下、從五位下眞苑宿禰雜物從五位上、外從五位下御船宿禰氏主、正六位上藤原朝臣岳守、藤原朝臣諸氏、大中臣朝臣磯守、橘朝臣本繼、並從五位下、外從五位下紀朝臣國守、外正五位下、正六位上清村宿禰淨豐、春宗連繼繩、朝妻造清主、秦宿禰眞仲、讚岐公永直、風早直豐宗、並外從五位下、○己未、天皇御大極殿、聽講、叡勝王經、皇太子侍焉、崇朝之講竟而還、御內裏、是日授正六位上大神朝臣船公從五位下、正六位上卜部嶋繼外從五位下、无位爲奈真人乙刀自、菅生朝臣氏刀自、並從五位下、○癸亥、以從五位下丹墀真人興宗爲左少弁、從五位下田中朝臣許侶繼爲左衛門權佐、從五位上長田王爲

獸なり青は春の色なり是によりて正月七日に青馬を見れば年中の邪氣を除くといふ本文侍なり云々あり
 ○從四位上源朝臣弘、類史上を下に作る
 ○眞苑宿禰、系詳ならず藤原朝臣岳守、朝臣の二字は類史に據て補ふ岳は原本兵に作る宮本水戸校本及類史に據て改む
 ○外從五位下紀朝臣國守、外從五位下の五字は類史に據て補ふ
 ○外正五位下、原本正を從に作る諸本及類史に據て改む
 ○清村宿禰淨豐、淨字は性靈集に據て補ふ
 ○永直、原本直を眞に作る諸本及類史に據て改む
 ○風早直、原本直を眞人の二字に作る諸本及類史に據て改む
 ○聽講叡勝王經、是御齋會なり延曆廿一年正月庚午紀に始見
 ○崇朝、崇は終なり且より食時に至るを云毛詩廊風螽蟴章に出づ
 ○大神朝臣、朝字は諸本及類史に據て補ふ
 ○興宗、原本興を眞に作

大和守、從五位下春澄宿禰善繩爲兼攝津介、東宮學士大內記如故、正五位下安倍朝臣高繼爲山城守、從五位上丹墀真人清貞爲伊勢守、從五位下小野朝臣千株爲尾張介、從五位下百濟公繩繼爲參河介、駿河介從五位下賀茂朝臣伊勢麻呂爲守、從五位下清岑宿禰門繼爲介、外從五位下上毛野公清湍爲伊豆守、參議從四位上藤原朝臣常嗣爲兼相摸守、右大弁如故從五位下藤原朝臣眞繩爲安房守、四品葛井親王爲常陸大守、云云、正五位下藤原朝臣長良爲兼加賀守、左衛門佐如故、從五位下石川朝臣越智人爲越中介、從五位上眞苑宿禰雜物爲因幡守、云云、○丁卯、月有蝕之、先是大宰府上言、慶雲見於筑前國、至是太政官左大臣正二位臣藤原朝臣緒嗣、右大臣從二位兼行左近衛大將臣清原真人夏野、從二位行大納言兼皇太子傅臣藤原朝臣三守、正三位行中納言兼兵部卿臣源朝臣常正、三位行權中納言臣藤原朝臣吉野、中納言從三位兼行民部卿臣藤原朝臣愛發、參議從三位行治部卿兼美作守臣源朝臣定、參議右近衛大將從三位臣橘朝臣氏公、參議正

○諸本に據て改む
 ○駿河介、原本河を何に
 作る諸本に據て改む
 ○真繩、原本繩を綱に作
 る諸本に據て改む
 ○西本谷本等直に據て改む
 ○葛井親王、桓武天皇の
 第十二皇子、文德實錄嘉
 祥三年四月條に傳見ゆ
 ○長良、良字は水戸校本
 及上文に據て補ふ
 ○越智人、智は原本知に
 作る諸本に據て改む
 ○月有蝕之、原本月を日
 に作るされど十六日は日
 蝕せず故に改む
 ○緒詞、原本緒を諸に作
 る諸本及類史紀略に據る
 ○正三位行權中納言、原
 本三を二に作る林本宮本
 及類史に據て改む
 ○橘朝臣氏公、補任に據
 るに此下參議從三位行左
 兵衛督源朝臣信の十四字
 あるべし
 ○春上、狩谷氏曰は月癸
 亥條藤原常嗣爲相摸守
 而此春上曰相摸守常嗣
 爲下野守共可疑
 ○泰以應而爲象云々、易
 泰卦の象に泰小往大來吉
 亨則是天地交而萬物通也
 上下交而其志同也また成
 卦の象傳に咸感也云々天

四位下行相摸守臣三原朝臣春上、參議從四位上行式部大輔勳六等
 臣朝野宿禰鹿取、參議左大弁從四位上兼行左近衛中將春宮大夫武
 藏守臣文室朝臣秋津、參議從四位上行下野守臣藤原朝臣常嗣等上
 表言、臣聞、泰以應而爲象、咸以感而成卦、明聖人在上、鬼神不能違其感、
 至德傍通、天地有以從其應、伏惟皇帝陛下、承累聖之皇基、纂重光之寶
 祚、握鏡揚蕤、燭貞輝於就日、懷珠韜慶、襄景曜於望雲、道冠二儀、歸功先
 德、化孚四表、推美神宗、伏見大宰大貳、從四位下藤原朝臣廣敏等奏、偁
 慶雲見於筑前國那珂郡、玄黃蕭索之光、丹紫輪困之采、豈止唐帝沉璧、
 氣合於金方、姬后望河、形摸於車蓋而已哉、臣等謹檢孫氏瑞應圖曰、慶
 雲太平之應、禮斗威儀曰、政和平則慶雲至、孝經援神契曰、天子孝亦德
 至山陵、景雲出、夫自非仁露、幽顯德配乾坤、亦何上符、網緼呈茲靈祉、臣
 等時屬休明、恩叨簪紱、預聞嘉氣、非常洗心、蓋韶夏發曲、而不嗟至美
 者、誠非賞音之客也、靈符舒彩、而不稱神功者、恐非叶贊之臣也、無任抃
 躍鳧藻之至、謹詣闕奉表陳賀、勅報曰、禎符之應、不肯虛行、靈貺攸臻、

地感而萬物化生聖人感
 人心而天下和平あり
 ○聖人在上、原本聖に至
 り、在右に作る諸本及
 類史に據て改む
 ○重光、尙書顧命に文王
 武王宣重光、注に言文武
 布其重光累聖之德、さあ
 り
 ○握鏡揚蕤、握鏡は南齊
 書明帝紀に握鏡臨宸と
 あり揚蕤は唐楊炯明詩碑
 文に四德揚蕤載闡、中閨
 之訓、さあり原本蕤を蕤
 に作る諸本西本及類史に
 據て改む字書に蕤は草木
 華垂貌と注す
 ○就日、家語五帝德篇に
 高辛氏之子曰陶唐云々
 就之如日望之如雲と
 あるに出づ
 ○懷珠韜慶、懷珠は藝文
 類聚(十一)引雜書靈准聽
 注に懷珠、石推懷、神珠
 也とあり韜は原本稱に作
 る諸本及類史に據て改む
 ○道冠二儀、文選任昉到
 大司馬記室牋に出づ注に
 冠猶高也二儀天地也と
 あり
 ○推美神宗、列聖の御德
 に歸し給ふなり
 ○那珂郡、今筑紫郡に入

必鍾實德、所以唐堯上聖、猶讓而不矜、漢光中興、固拒而鮮記、朕丕承
 寶曆、司牧寰區、化謝暨幽、感乖動物、而今景雲著見、公卿表賀、朕之菲薄、
 何以當之、論不云乎、百姓寧輯、風雨調和、此亦瑞也、然則安危在乎人事、
 吉凶繫於政術、政術或忒、休祥未能成其美、王道欽明、咎徵不能致其惡、
 以此談之、策勵爲可冀也、日慎一日、雖休勿休、賀瑞之言、閉而不聽、○戊
 辰、天皇御豐樂院觀射、○己巳、亦御同院、閱覽四衛府賭射、○庚午、山城
 國葛野郡上林郷地方一町賜伴宿禰等、爲祭氏神處、是日任遣唐使、
 以參議從四位上右大弁兼行相摸守藤原朝臣常嗣爲持節大使、從五
 位下彈正少弼兼行美作介小野朝臣篁爲副使、判官四人、錄事三人、○
 辛未、主上內宴於仁壽殿、教坊奏態、中貴陪觀、殊喚五位已上詞客兩三
 人并內史等、同賦早春花月之題、是夕勅授正六位上大戸首清上外從
 五位下、清上能吹橫笛、故鍾此恩獎、○甲戌、於永安門裏西掖廊前、新作
 棚備于御射、紫宸殿西南端廊被徹毀、以礙箭道也、○丙子、加賀國疫癘、
 賑給之、○庚辰、勅維摩會立義得第僧、宜依舊例、請爲諸寺安居講師、

る、原本珂を河に作る開本西本及類史に據て改む。○玄黃蕭索之光云々、玄黃は易說卦傳に震爲玄黃疏に爲支黃取其相雜而成蒼色とあり蕭索輪困は史記天官書に若煙非煙若雲非雲郁々紛紛蕭索輪困是謂卿雲とあるに據れり困は原本困に作る諸本及類史に據て改む。○豈止唐帝沉璧云々尙書中候(學津本)に(堯)沈璧於河禮備至于日稷榮光出河休氣四塞白雲起回風搖と云に據れり唐帝は堯を云止は原本上に作る諸本及類史に據て改む。○姫后望河云々、同尙書中候(學津本)に武王觀于河沈璧禮畢且退至于日昧榮光並塞河青雲浮洛云々と見ゆ。○孫氏瑞應圖、既に出づ。○禮斗威儀、原本禮を札に作る林本及類史に據て改む。○政和平云々、太平御覽卷八所引に人君乘水而王其政和平則景雲見とあり。○天子孝氣の合するなり原本烟熅に作る水戸校本に據て改む。○恩明簪紱、衣冠を著けて朝臣に列するを云紱は原本紱に作る諸本及類史に據て改む。○洗心、易繫辭傳に出づ。○留夏發曲云々、留は舜の樂、夏は禹の樂なり左傳襄廿九年に吳公子札來聘見舞大夏者曰美哉非禹其誰能脩之見舞韶節者曰德至矣哉大矣云々(節略)とあるに據れり原本韶を詔に作る諸本及類史に據て改む。○靈符舒彩、慶雲を云。○神功、天皇の聖德を云。○叶贊、叶は協の古字君を翼くる意なり。○覺藻、後漢書杜詩傳に出で和陸歡悅するを云既に注す原本覺を鳥に作る宮本及類史に據て改む。○頑符、原本頑符に作る西本林本に據て改む。○攸臻、原本攸を彼に作る西本宮本及類史に據て改む。○上聖、原本聖を至に作る諸本及類史に據て改む。○不矜、原本矜を預に作る諸本及類史に據て改む。○漢光、後漢光武帝、原本光を先に作る諸本及類史に據て改む。○固拒、諸本拒を距に作る拒距相通す。○司牧寰區、天下に君たるを云。○化謝暨幽云々、事物を感動すべき徳なきを云。○政術或貳、政術の二字は諸本及類史に據り貳は宮本水戸校本に據て補ふ山崎校本に據て改む。○不能致其惡、原本其惡を于茲に作る宮本水戸校本及類史に據て改む。○閣本西本惡を慈に作る。○策勵、原本儀を榮に作る諸本及類史に據て改む。○日慎一日、淮南子人門訓に出づ。○雖休勿休、尙書呂刑に出づ。○觀射、是を大射又は射禮と云其儀内裏式廢存平野及龍安寺と見ゆ。○氏神、神名式葛野郡伴氏神社(大月次新嘗)是なり山城志に在龍安寺村今稱住吉とあり。○内宴、公事根源に内宴と申はうちへの節會なり仁壽殿にて行はる云々とあり。○教坊奏態、教坊は内教坊を云態は歌舞なり。○中貴陪觀、史記李將軍傳注に中貴は内官之幸貴者とあり原本觀を歡に作る纂詁に從て改む。○花月、原本花月を華同に作る諸本及類史に據て改む。○正六位上大戸首、下文に據るに正上に外字あるべし大戸首は録河内皇別大彥命男比毛由比命之後也云々とあり。○恩獎、原本獎を非に作る諸本及類史に據て改む。○永安門、拾芥抄中末に永安門謂之右廂門承明西とあり。○西掖、原本西を兩に作る諸本及類史に據て改む。○堀、原本堀に作る諸本及類史に據て改む。○安居、又結夏と云一夏九旬の間禁足籠居するを云、釋氏要覽に南山鈔云形心靜攝曰安、要期此住曰居、偏約夏月云々と見ゆ。

○二月壬午朔、日有蝕之。○癸未、新羅人等、遠涉滄波、泊著大宰海涯、而百姓惡之、彎弓射傷、由是太政官譴責府司、其射傷者、隨犯科罪、被傷痕者、遣醫療治、給糧放還、是日任造船使、以正五位下丹墀真人貞成爲

○會見郡、抄國郡部伯耆國會見、安不美とあり今西伯郡に入る。○有智子内親王、嵯峨天皇の皇女、母は交野女王。○乙酉、原本乙を丁に作る宮本に據て改む。○物集、集下疑くは連字を脱す。○從三位源朝臣定、纂詁に補任に據て從上に參議の二字を補へり。○遷放、放字は諸本及類史に據り補ふ。○勤修、西本中本宮本勸修に作る。○壬辰、此條紀略に據て補ふ。○磐田王卒、天長十年十一月庚午紀に從四位下磐田王叙從四位上と見ゆ。○金銀薄泥、薄は箔なり狩谷氏曰薄俗作箔品字箋箔薄也金銀銅之錘之極薄故曰薄。○設賭物、原本設を詔に作る諸本及類史に據て改む。○中鶴、鶴は的なり。○明日香親王薨焉、焉字は衍なるべし。○朝衣、即ち朝服なり。○櫃上走馬、原本櫃を極に作る開本尾本に據て改

長官、主稅助外從五位下朝原宿禰嶋主爲次官、且以左中弁從四位下笠朝臣仲守、右少弁從五位下伴宿禰成益、並爲遣唐裝束司。○甲申、伯耆國會見郡荒廢田百廿町、賜有智子内親王。○乙酉、山城國葛野郡人從八位上物集廣永、同姓豐守等、賜姓秦忌寸。○丙戌、正三位權中納言藤原朝臣吉野爲正、從三位源朝臣定爲中務卿、美作守如故。云云、三品阿保親王爲治部卿。云云。○己丑、行幸芹川野、遞放鶴隼、覽其接擊。○辛卯、勅曰、万民安樂、五穀垂穎、不如最勝希有之力、宜令諸寺有封戶及田園、堪資供者、勤修最勝王經法。○壬辰、從四位上磐田王卒。○癸巳、勅曰、金銀薄泥、用之公私、有費无益、宜禁斷之。○甲午、上始御射場、左右衛府相共奉獻、兼設賭物、上先射之、一箭中鶴、獻新錢二万文、大臣已下至近習、以次射之、隨其能不、分賜賭物、各有差。今夜、三品明日香親王薨焉、桓武天皇第七皇子也、母紀氏、贈正二位右大臣船守朝臣之女、從四位下若子是也、親王天資質朴、不尙浮華、弘仁年中、世風奢麗、王公貴人頗好鮮衣、親王獨至夏日、朝衣再三澣濯、或亦賣却櫃上走馬、以支藩邸費。

む纂詰に走は其字の譌か
 ○藩邸、原本邸を部に作
 る諸本に據て改む
 ○祈、原本祈に作る諸本
 に據て改む
 ○財逆女、堀本逆を道に
 作る云
 ○敷智、原本到置、林本
 及抄に據て訂す
 ○冠也、加冠即ち元服す
 るを云
 ○俊哲、原本俊を後に作
 る諸本に據て改む
 ○貴命、仁壽元年九月甲
 戌紀に傳見ゆ
 ○播羅郡、抄郡郷部に播
 羅(原)あり今大里郡に入
 る、關本尾本播羅に作る
 ○之官、之は往也赴任す
 るを云
 ○御襖子、御字は諸本に
 據て補ふ、襖子は天長十
 年五月辛丑紀に注す
 ○三原朝臣春上、狩谷氏
 曰春上は年七月爲彈正
 大弼按公卿補任天長八
 年再兼彈正大弼九年十
 一月罷至是年七月三兼
 之而此書曰彈正大弼蓋
 誤
 ○振給、振は賑に通ず
 ○小野氏神社、神名式滋
 賀郡小野神社(名神大)是

用其省約節儉皆此類也、先太上天皇在祚時、親王上表、自請除親王號、
 同之諸臣、不見許、更祈所生男女賜朝臣姓、感其懇誠、乃聽之、孫王賜
 姓、從此競效之、當于薨時、朝廷悼之、遣刑部大輔從四位下紀朝臣深江、
 治部大輔從四位下和氣朝臣仲世、并五位二人、監護喪事、加賀國石
 川郡人財逆女一產三男、給正稅三百束、及乳母一人公糧、令以育養、
 遠江國敷智郡古荒田卅三町、賜阿保親王、○乙未、忠良親王冠也、即叙
 四品、先太上天皇第四子也、母百濟氏、從四位下勳三等俊哲之女、從四
 位下貴命是也、○戊戌、武藏國播羅郡荒廢田百廿三町奉充冷然院、○
 庚子、伊勢守從五位上丹墀真人清貞之官、喚於殿上、賜御襖子、令參議
 正四位下行彈正大弼三原朝臣春上傳勅語云、拜舞退出、○辛丑、越後
 國飢、振給之、小野氏神社在近江國滋賀郡、勅聽彼氏五位已上、每至
 春秋之祭、不待官符、永以往還、○丁未、忠良親王朝觀拜舞、以新冠也、天
 皇御紫宸殿、賜親王酒、大臣以下侍從已上陪焉、酣暢之後、賜御被及襖
 子、石見國言、去年不登、百姓飢饉、賑給之、○三月壬子朔丁巳、勅女官

なり同郡和邇村大字小野
 にあり
 ○彼氏、原本氏を民に作
 る林本宮本水戸校本及類
 史に據て改む
 ○陪焉、紀略陪宴に作る
 事錯簡多し原本壬子を丙
 申に作り尾本辛亥に作る
 今長曆に三月小壬子朔さ
 云るに從へり
 ○丁巳、原本丁酉に作る
 此月壬子朔なれば丁酉な
 り尾本宮本に據て改む此
 條林本になし
 ○丙寅、此條原本二月丙
 戌の次にあり林本及紀略
 に據て此に移す
 ○丁卯、此條原本二月丁
 未の次にあり林本及紀略
 に據て此に移す
 ○便令、原本便令に作る
 諸本に據て改む
 ○辛未、原本此條亦前條
 に續きて二月に出づ今林
 本及紀略に據て此に移す
 ○是日、以下褒造曆之才
 也に至る廿四字原本辛未
 の下に重出す彼を削りて
 之を存す
 ○中禁、原本禁中に作る
 關本西本中本等に據て改
 む
 ○鴨女、抄羽族部に唐韵

別當、雖非職員、所掌之物、不異諸司、宜准侍從厨、四年爲限、遷代之日、責
 解由狀、○丙寅、始充穀倉院印一面、○丁卯、勅、在大宰府、唐人張繼明、便
 令肥後守從五位下粟田朝臣飽田麻呂相率入京、○辛未、從五位上藤
 原朝臣長岡爲兼右馬頭、但馬守如故、三品阿保親王爲上野大守、治部
 卿如故、是日授正六位上大春日朝臣良棟從五位下、褒造曆之才也、
 是夕當于中禁之上、有飛鳴者、其聲似世俗所謂海鳥鴨女者、其類數百
 群、或言非海鳥、是天狐也、宿衛人等、仰天窺望、夜色冥朦、唯聞其聲、不弁
 其貞焉、○夏四月辛巳朔、天皇御大極殿聽告朔、○壬午、公卿重上賀慶
 雲表曰、臣聞、叡道格宇、靈貺所以自臻、皇德動天、禎應由其方降、故靈鳥
 集社、姬周延歷運之期、甘露凝階、陶唐照休明之德、伏惟皇帝陛下、宅三
 才而子物、參四大而君臨、德化被於乾坤、仁風扇於幽顯、解網而流恩、
 懸旌而佇善、國邁偃伯之期、家溢思皇之頌、天以不愛其祥、地以不藏其
 瑞、可謂應圖合牒之符、史无虛記者也、陛下謙讓而不當、徒拒休徵、天鑒
 孔明、珍符何辭焉、伏望鴻恩、照顧、下惟納群臣之丹款、上則叶皇天之玄

云鳴(加毛米)水鳥也兼名苑云一名江鷺さあり
 ○數百群、原本群を郡に作る諸本に據て改む
 ○天狐、原本天を天に作る諸本及紀略に據て改む
 天狐は西陽雜俎に天狐九尾金色役、於日月宮、有符有醜、自可洞達陰陽、又相應傳に染殿皇后被惱、天狐諸寺有驗之僧無、敢能降之者、天狐放言云、自非三世諸佛出現者誰敢降我和尚(相應)依召參入兩三日候無レ有其驗、還本山對明王啓、白事由、慈恨祈禱明王像背而向、西和尚隨坐、西明王復背云々和尚流涙彈指稽首白言乞願垂悲愍、幸告示明王告曰昔紀僧正存生之日持我明咒而今以邪執、故墮天狐道、著惱皇后、今汝到宮中一密告、天狐言非、汝是紀僧正後身柿本天狐、哉後低頭之頃以大威德咒加持將得結縛(節略)さありなほ今妖魅考天狗論等に出下
 ○不弁其貞焉、原本此下辛酉鑄錢司言云々の文あり二年三月辛酉條に重出寸故に之を削りて彼を存す

貶制可之、○丙戌、勅防、災未萌、兼致豐稔、修善之力、職此之由、宜令畿内七道諸國、擇國內行者、於國分僧寺、三箇日內、晝則轉金剛般若經、夜則修藥師悔過、迄于事畢、禁斷殺生、又如有疫癘處、各於國界攘祭、務存精誠、必期靈感、○庚子、勅宜、停紀傳博士、加置文章博士一員、其紀傳得業及生徒亦停之、○辛丑、先太上天皇降臨、右大臣清原真人夏野双岡山莊、愛賞水木、大臣奉獻慇懃、用展情禮、是日勅、增授大臣男息三人榮爵、從五位下瀧雄從四位下、正六位上澤雄、秋雄、並從五位下、○丙午、疫癘頗發、疾苦稍多、仍令京城諸寺、爲天神地祇轉讀大般若經一部、金剛般若經十萬卷、以攘災氣也、勅賜美濃國荒廢田并空閑地五十町於諱、
 ○五月辛亥朔乙卯、天皇御武德殿、閱覽四衛府馬射、○丙辰、亦御同殿、觀親王以下五位已上所貢競馳馬、○戊午、亦御同殿、令四衛府騁盡種種馬藝及打毬之態、○癸亥、以遣唐大使參議從四位上藤原朝臣常嗣爲兼備中權守、右大弁如故、大工外從五位下三嶋公鳴繼爲造船次官、遣唐使判官錄事、及知乘船事等、兼外任者九人、大宰府司公廨、元來

式に凡天皇孟月臨軒視朝大臣預點殿上侍從四人奏事者一人一所司各供其事其日辨一人執公文函率諸司五位以上執函者就版各置案上云々さあり又儀制令にも見ゆ山崎校本に聽堀氏曰宜作視さあり
 ○格字、格は至也字は天地四方なり
 ○靈鳥集社、呂氏春秋卷十三名類に周文王時天先見火赤鳥銜丹書集於周社さあり
 ○姬周云々、姬は周王の姓、周朝八百年の歴史を保ちしを云
 ○甘露凝階、帝王世紀に堯治天下天和景星曜於天甘露降於地さあり
 ○陶唐、堯を云原本陶君に作る諸本及類史に據る
 ○宅三才而子物、三才は天地人、子は字也養也物は群品を云
 ○四大、老子第二十五章に見ゆ道大天地大王大是なり
 ○解網、史記殷本紀に見え湯王の故事、神護二年(續紀下二三三頁)に注す
 ○懸旌、管子に舜有告

班給六國、至天長八年、依民部省起請、停給六國、混給肥後國、至是勅曰、如聞、轉送之勞、民受其費、混給一國、事乖穩便、宜復舊給之、○乙丑、勅、令相摸、上總、下總、常陸、上野、下野等國司、勦力寫取一切經一部、來年九月以前奉進、其經本在上野國綠野郡綠野寺、○己巳、授主殿允正六位上、物部匝瑳連熊猪外從五位下、爲鎮守府將軍、○壬申、无品貞子內親王薨、後太上天皇第一皇女而贈皇后所誕育也、遣勸解由長官從四位下藤原朝臣雄敏、兵部少輔正五位下安倍朝臣安仁、常陸介從五位上永野王、左京亮從五位下吉田宿禰書主等、監護喪事、○丙子、賜右京人外從五位下菅原宿禰梶吉、大初位下梶成等二人朝臣姓、伊豫國人正六位上浮穴直千繼、大初位下同姓眞德等、賜姓春江宿禰、千繼之先、大久米命也、近江國人從五位下志賀忌寸田舍麻呂等四人、賜姓下毛野朝臣、五十瓊殖、天皇皇子、豐城入彥命之苗裔也、左京人正七位下文忌寸歲主、无位同姓三雄等、賜姓淨野宿禰、河内國人正六位上文忌寸繼立、改忌寸賜宿禰焉、歲主、三雄、繼立等之先、並百濟國人也、

善之旌而主不蔽也。○假伯之期、後漢書馬融傳注に司馬法曰古者武軍三年不與凱樂凱歌假伯靈臺答人之勞告不與也假休也伯謂師節也。○思皇之頌、毛詩大雅文王章に思皇多士生此王國云々注に思願也皇天也。○不愛、原本愛を受に作る諸本に據て改む。○合牒、原本牒を誤に作る山崎校本に據て改む。○支取、原本支を法に作る西本宮本及類史に據て改む。○制可之、原本此下に辛丑丙午の二條あり錯簡なり類史に據て下文庚子の次に移せり。○丙戌、原本此上に四月の二字あり行なり故に削る。○又、原本亦に作る類史に據て改む。○務存精誠、原本存を在に、誠を進に作る類史に據る。○庚子、此條林本宮本及及類史紀略に據て補ふ。○生徒、類史生字なし紀略に據る。○双岡山莊、山城志に雙岡在愛宕郡仁和寺南三丘相連とあり今葛野郡花園村に屬す。○愛賞、賞字は西本及類史に據て補ふ。○正六位上深雄、原本正及上の二字なし貞觀五年正月十一日の條瀧雄傳に據て補ふ。○并空閑地、并字は諸本に據て補ふ。○五月辛亥朔、此三字宮本に據て補ふ。○外任、國司を云。○班給、原本班を班に作る類史に據て改む。○六國、筑前筑後豐前豐後肥前肥後なるべし。○起請、原本起を所に作る關本西本中本及類史に據て改む。○鎮府府將軍、府字は山崎校本に據て補ふ。○贈皇后、高志内親王なり。○書主、原本主を生に作る諸本に據て改む。○丙子、原本壬子に作る尾本條本に據て改む山崎校本には壬子として五月の最初に收む壬子は二日なり。○眞德、原本德を能に作る關本中本宮本等に據て改む。○春江宿禰、春江は伊豫國久米郡の地名なるべし。○志賀忌寸、姓氏錄に蕃別に見ゆれど此に豐城入彦命之裔とあれば異族なり。○歲主三雄繼立等之先、姓氏錄に漢高帝の後とせり此に百濟人と云るは同國を経て歸化せしに因れるなるべし。

○六月庚辰朔、此三字宮本及類史に據て補ふ。○講説、諸本及類史講を吼に作る。○八省院諸堂、八省院は大極殿なり諸堂は昌福、含章、承光、明章、康樂、朝集堂等云。○東西寺、纂詰に恐東西市之譌と云り。○惣是百講座也、御一代一度の仁王會なり齊明天皇の御世始て行ひ給ふ。○祈甘雨、延喜の制祈雨

○六月庚辰朔甲午、講説仁王經於紫宸殿常寧殿及建禮門八省院諸堂宮城諸司諸局東西寺并羅城門惣是百講座也。○丙申奉幣群神以祈甘雨旱也。○丁酉地震。○庚子從四位下紀朝臣興道卒故中納言從三位勝長朝臣男也弘仁四年叙從五位下天長九年累加四位歷職兵部大輔左中弁右兵衛督興道門風相承能傳射禮之容儀大同年中有從五位上伴宿禰和武多麻呂亦傳此法由是後生武士長效兩家之法

神八十五座、其社名及幣物の制は臨時祭式に見ゆ。○紀朝臣興道卒、興は原本真に作る諸本及類史に據て改む。○勝長、初名梶長、贈右大臣船守の長子。○從五位下、原本從及下の二字を脱す西本及類史に據て補ふ。○門風相承云々、父勝長は補任に歩射容儀應爲師摸と見ゆ。○伴宿禰和武多麻呂、大同四年正月左近衛少將兼常陸權介たり後武藏權介日向權守と云。○兩家、紀氏伴氏を云。○大和國人云々、以下左京に至る廿五字は原本和泉國人云々の條の次にあり尾本山崎校本に據て移し易ふ。○眞足、原本直足に作る宮本及下文に據て改む。○文主、主字は關本西本尾本に據て補ふ。○其先百濟國人也、其先の二字は伴本考異に據て補ふ。○乙巳、此條原本丁未の次にあり尾本林本に據て此に移す。○七月安義、紀略安を

頗有異同大體惟一也。○辛丑大和國人外從五位下伴宿禰眞足等卅五人改本居貫附左京和泉國人正六位上峰田藥師文主從八位下同姓安遊等賜姓深根宿禰其先百濟國人也。○乙巳丹後國飢賑給之。○丁未奉伊勢大神宮及畿内七道名神幣以祈雨也。○戊申伊勢國飢賑給之。○己酉延百僧於大極殿限三箇日轉讀大般若經爲祈澍雨兼防風災也。○秋七月庚戌朔以參議從四位上朝野宿禰鹿取爲左大弁參議正四位下三原朝臣春上爲彈正大弼云云從四位下百濟王安義爲右兵衛督丹波守如故云云遣唐大使參議右大弁從四位上藤原朝臣常嗣爲兼近江權守云云。○辛亥初爲祈雨轉讀大般若經期日已滿晴而無應由是轉經更延二日以効精誠。○丁巳天无片雲炎氣如熏比及晡辰天陰雨零從此漸至滂沛。○戊午以左近衛權中將從四位下藤原朝臣良房爲參議勅聽穀倉院預人等寓棲其院西南區地長廿丈廣十二丈之內。○庚申是中旬之初也上御紫宸殿賜侍臣酒乃至設親王大臣座於御床下令以圍碁焉夕暮而罷賜親王大臣御衣次侍從已上

勝に作る下文十一月辛亥紀此に同じ或はまた奉に作るものあり
 ○如薫、原本薫を燻に作る諸本及紀略に據る
 ○哺辰、哺は申時にて今の午後四時
 ○寓樓、原本樓を樓に作る閣本西本に據て改む
 ○賜侍臣酒、句宴なり
 ○設親王大臣座、原本設を促に作る水戸校本及類史に據て改む
 ○汎溢、原本汎を況に作る諸本に據て改む
 ○壬戌、紀略壬子に作る○辛未、此條原本甲戌の次にあり尾本林本に據て此に移す
 ○元用國印、原本元を无に作る林本谷本等に據て改む國印は陸奥國印なり
 ○陳力就列云々、論語季氏篇に出づ
 ○故劔、漢書外戚傳許皇后條に霍將軍有「小女公卿議」更立「皇后」皆心儀「霍將軍女」亦未有言上乃詔求「徵時故劔」大臣知「指白」立「許健仔」爲「皇后」さあり此故事を指せるか山崎校本は奈佐勝華の説に據て放叙に作り纂詰故叙に作る

祿各有差○辛酉雨水汎溢○壬戌走幣畿内名神亦命諸大寺及諸國講師修法以防淫霖○甲子左大舍人寮廢來已久徒爲空閑處勅中分其地以西賜式部省以東賜主稅寮○乙丑右京人正七位上和邇子眞麻呂等十二人賜姓大神朝臣○丙寅天皇御紫宸殿觀相撲節越前出雲二國飢賑給之○辛未賜陸奥鎮守府印一面元用國印今殊賜之
 ○甲戌右大臣從二位兼行左近衛大將清原眞人夏野抗表請褫宿衛職曰臣聞守分有地益之則損陳力就列不能者止臣才略无聞度量有缺後太上天皇愛憐故劔枉賜殊私拔自同班忝斯上將警陳侍衛九載于今鬢髮變衰非帶兵之像瞳眼朦暗無講武之明而陛下御曆寶命惟新喘息歧行无不飲化是則臣之一心百君竭力之秋也屬此時來寔難自退所以欲謝不能僂俛從事也夫近衛者禁兵攸存任要折衝義切禦侮臣之衰邁何可久堪若論腰下之佩刀豈異螻蟻之舉斧自顧多媿誰云厥宜況乃大臣之務統理爲宗所希解免此職專勤一官退食之間服餌自養伏願特廻昭鑒垂賜允矜則私志得申朝章無紊在於微臣良爲

○枉賜殊私、枉は原本特に作る閣本西本尾本に據て改む
 ○無講武之明、諸本無を寧に作る
 ○御曆、御字に意同じ
 ○喘息歧行、文選洞簫賦注に周書曰歧行喘息說文曰歧徐行さあり原本跋を蚊に作るは譌なり
 ○飲化、全唐文李子卿飲至賦に遐荒必通飲化向風さあり
 ○一心百君、晏子春秋に一心可以事百君三心不可以事一君云々さあるに據れり
 ○僂俛、僂勉さ同じ
 ○任要折衝、任は原本住に作る諸本に據て改む折衝は晏子春秋に出で敵を拒ぐを云
 ○切禦侮、毛詩大雅縣章に予曰有禦侮傳に武臣折衝曰禦侮さあり原本切を功に侮を侮に作る諸本に據て改む
 ○衰邁、邁は老也
 ○佩刀、原本刀を力に作る諸本に據て改む
 ○螻蟻之舉斧、文選陳琳檄に欲以螻蟻之斧禦降車之陸さあるに據る莊子韓詩外傳等にも出づ

幸甚不許之○八月己卯朔辛巳上爲先太上天皇及太皇太后置酒於冷然院上自奉玉卮伶官奏樂令源氏兒童舞于殿上極歡而罷以綿一万屯賜五位已上并院司祿各有差太上天皇及太皇太后將遷御嵯峨新院故有此謙設也○壬午授无位益野女王從五位下以右中弁正五位下伴宿禰氏上爲造船使長官○乙酉宗康親王始謁觀焉于時春秋七歲也○丙戌賜攝津國西成郡閑地一百町於諱諱之所指已見於上○丁亥先太上天皇遷御嵯峨院○戊子任遣唐錄事准錄事知乘船事各一人以外從五位下三嶋公嶋繼爲造船都匠○庚寅上内宴清涼殿號曰芳宜華謙賜近習以下至近衛將監祿有差○壬辰以遣唐都匠外從五位下三嶋公嶋繼爲兼阿波權掾准錄事兼外國介者一人○戊戌遣使平城七大寺始自當日一七日夜令轉讀大般若經其由不詳○己亥暴風大雨相并折拔樹木壞民廬舍由是走幣畿内名神祈止風雨○庚子夜裏風雨猶切達且不罷城中人家往往倒塌賜紀伊國人從七位下紀臣國奈須等五人朝臣姓○甲辰左大臣藤原朝臣緒嗣抗表曰云々不許之○乙巳

○退食之間、毛詩召南羔羊章に退食自公箋に退食謂減膳也さあり
 ○服餌、餌は藥餌なり
 ○允矜、原本危矜に作る諸本に據て改む
 ○八月、己卯朔、此三字宮本に據て補ふ
 ○自奉、原本奉白に作る諸本に據て改む
 ○玉卮、卮は酒器也
 ○源氏兒童、弘仁中嵯峨天皇皇子女の未だ親王たらざる者卅餘人に源朝臣の姓を賜ふ其兒童を云
 ○院司、仙洞の職員を云
 ○嵯峨新院、葛野郡嵯峨にあり大覺寺は其舊趾
 ○宗康親王、天皇の皇子御母は贈皇太后藤原澤子なり
 ○諱、文德天皇に坐す諱道康と申せり諱下の注は後人の加る所なるべし
 ○内宴、諸本及類史曲宴に作る
 ○芳宜、秋なり佳字を借用ひたるにて漢名に非ず抄草木部に鹿鳴草爾雅集注云秋一名蕭(和名波木)さあり
 ○平城七大寺、東大、興福、元興、大安、藥師、西大、法隆の七寺を云

久子内親王爲可侍伊勢齋宮先禊祓賀茂川始入野宮○九月戊申朔乙卯左大臣藤原朝臣緒嗣重復上表曰云云優詔不許○丙辰是重陽節也天皇御紫宸殿宴侍從已上自外非侍從及諸司綠衫官人堪應詔者并文章生等侍焉同賦秋風歌之題宴訖賜祿○戊午天皇御大極殿奉幣帛於伊勢大神宮是日僧正傳灯大法師位護命卒法師俗姓秦氏美濃國各務郡人年十五以元興寺萬耀大法師爲依止入吉野山而苦行焉十七得度便就同寺勝處大僧都學習法相大乘也月之上半入深山修虛空藏法下半在本寺研精宗旨教授之道遂得先鳴弘仁六年擢任少僧都七年轉大僧都僧統之職非其好尙上表曰不能者止曩愆之格言前而不休前修之所誠雖教有眞俗緇素之趣非同而既曰綱維止足之義何異護命戒緒多紊定惠或虧譬大地之一塵有之不增其重如鄧林之片葉无之未滅其茂而夙稟恩緒忝掌法務質均宋棘四衆之望已違聲混齊筭三輩之心不服況乎甲子荏苒年七十四蒲柳之形先衰桑榆之景復促浮生若此前途幾何當今甘露之門鶯鷺成列旃檀之

○壤民廬舍、原本壤字を脱し廬下に房字あり壤は紀略に據て補ひ房は諸本に據て削る
 ○城中、城は恐くは城の誤ならむか
 ○紀臣國奈須、原本臣國を朝臣に作る諸本に據て改む
 ○甲辰、此條紀略に據て補ふ
 ○乙巳、此條九月丙辰の次にありしを紀略並に類史に據て此に移す
 ○久子内親王、齋宮記に久子内親王仁明皇女在任十四年さあり
 ○九月、戊申朔、此三字宮本に據て補ふ
 ○上表曰云々、云々の二字は紀略に據て補ふ
 ○綠衫官人、綠衫は六位の朝服なり六位の官人を云
 ○侍焉、原本焉を爲に作る西本及類史に據て改む
 ○奉幣帛於伊勢大神宮、帛字は諸本及類史に據て補ふ狩谷氏曰九月奉幣元正帝養老五年始見此後率在他日是年已後在九月且七年九年並云例也據此爲永例可知
 ○是日、此二字紀略に據

苑龍象比肩豈可叨竊非據綿歷年序伏望免茲所職栖託山林持四句而終年向一人而奉福儻迴神鑒俯允愚衷則片瓊殘魂不妨賢路提綱要職更得良材天皇不許然而屏居古京山田寺喫飯口中得佛舍利一粒復在普光寺講唯識論疏時於頂上亦得一粒靈異頻彰使人驚感天長四年特任僧正年八十五終于元興寺少塔院未及氣絕時同寺僧善守欲致問訊自石上寺尋向比到少塔院忽聞微細音聲髣髴院裏可謂浮剎所迎天人之樂也○辛酉河内國古市郡人從六位下縣犬養宿禰小成改本居貫附右京一條○壬申勸解由主典阿直史福吉散位同姓核公等三人賜姓清根宿禰核公之先百濟國人也○冬十月戊寅朔己卯佐渡國言慶雲見焉於是下詔曰朕恭臨紫宙撫字蒼元化異成平道慙交泰將何以繼明前燭通感上靈去年景雲見筑前國演九玄之潛貺綴五彩而擒章朕之非虛推而不處前距公卿之奏寢慶賀之言而復有同瑞出佐渡國公卿重表稱慶洵陳朕固辭不免詳求諸己豈伊寡德克致此乎祇由宗廟之靈載効肝蠻之應今者嘉茲休祉用答昊穹覃以湛

て補ふ、傳は元亨釋書
 ○護命卒、傳は元亨釋書
 ○高僧傳にも見ゆ
 ○各務郡、抄國郡部各務
 (加加美)とあり今稻葉郡
 に入る
 ○依止、釋氏要覽上に師
 有二種、一親教師即是依
 止之家、授經剃髮之者二
 依止師即是依之、受三
 藏學者とあり
 ○先鳴、尸子に戦如、鬪
 鶏、勝者先鳴とあるに據
 れり
 ○擯任、原本擯を權に作
 る閣本西本中本に據る
 ○不能者止、論語季氏篇
 周任の言に出づ
 ○前修、曩哲に同じ
 ○綱維、即ち僧綱なり
 ○止足之義、老子第四十
 四章に出づ
 ○護命、原本唯命に作る
 閣本西本尾本に據て改む
 ○戒緒多紊定惠或虧、戒
 定慧之を三學と云三學の
 或は缺るを恐るとなり西
 本尾本等或を戒に作る
 ○鄧林、列子に鄧林彌廣數千里焉とあり
 ○奈掌法務、原本奈を參に作る西本に據て改む
 ○四衆之望已違、四衆は比丘
 比丘尼優婆塞優婆夷を云違は原本違に作る諸本に據て改む
 ○聲混齊等、韓非子七術に齊宣王使人吹竽必三百人南郭處士請爲王吹竽宣王說之云
 々宣王死潛王立好二一聽之處士逃とあるに出づ
 ○三輩、淨土に往生を願ふ人の行業に上中下の三類あり之を三輩と云無量壽經に出づ
 ○蒲柳、其
 實の弱きを云
 ○桑榆之景復促、文選劉鑠擬古詩注に日在桑榆以喻人之將老とあり促は原本沒に作る諸本に據て改む
 ○浮生云々、此二句李白宴
 桃李園序に出づ原本幾を況に作る閣本宮本に據て改む
 ○甘露之門、智度論に一切衆生甘露門開如何不出とあり
 ○鶯鷺成列、鶯は原本鷺に作る
 西本中本に據て改む祖庭事苑に鶯鷺梵云舍利弗此言鶯鷺子
 ○旃檀之苑、旃檀は香木なり藉りて僧苑の名とす
 ○龍象、僧侶の俊秀なるものを

恩、普霑富縣、其初見人五位者、進位一階、六位已下二階、正六位上廻授
 一子二階、白丁免當戶、今年調庸、又内外文武官主典已上、加位一級、但
 正六位上、廻授一子二階、若無子者、宜量賜物、五位以上子孫年廿已上
 者、亦叙當蔭之階、天下老人百歲已上、賜穀三斛、九十已上二斛、八十已
 上一斛、鰥寡孤獨不能自存者、量加賑恤、孝子順孫義夫節婦、旌表門閭、
 終身勿事、○辛巳、以昔被沒官橋朝臣奈良麻呂家書四百八十餘卷、賜
 彈正尹三品秀良親王、以外戚之財也、○壬午、後太上天皇幸雲林院、遊
 獵北郊、有内裏藏人所、隼從之、○甲申、嵯峨院寢殿新成、今上遣使奉獻
 以賀之、○乙酉、從四位下高階真人淨階卒、○戊子、車駕幸栗隈野、放鷹
 鷓、日暮還宮、○壬寅、山城國愛宕郡閑地六町、賜從四位下滋野朝臣貞
 主、

云中阿含經に出づ ○非據、易繫辭傳に非所據而據焉身必危とあるに出づ ○四句、偈を云偈は必ず四句なるが故に四句と云 ○一人、至尊を云
 ○片瓊殘魂、原本片を夢に作る山崎校本に據て改む ○古京、原本右京に作る西本各本等に據て改む ○山田寺、大和國十市郡山田村にあり一名華
 嚴寺 ○普光寺、河内志に普光廢寺在大縣郡高井田村 ○少塔院、大和志に元興寺院有三一曰少塔院、在奈良西新屋町僧正護命所住持とあり
 ○問訊、原本問訊に作る諸本に據て改む ○石上寺、大和國山邊郡石上布留村にあり ○比到、原本比を此に作る西本中本に據て改む ○勢罷、原
 本此下に癸酉能登國氣多禰宜祝把笏一條あり類史に據て十一月に移す ○十月、冬十月、冬字は宮本に據て補ふ ○戊寅朔、此三字は伴イ本に據て
 補ふ ○恭臨紫宙云々、以下終身勿事に至る二百六十九字は原本之を略して云々の二字に作る林本及類史に據て補ふ ○紫宙、徐彦伯南郊賦に告
 紫宙之成功一定皇天之寶位とあり ○化異成平、尙書大禹謨に地平天成六府三事允治とあるに據れり ○道懸交泰、易泰卦の象傳に天地交泰后以財
 成天地之道輔相天地之宜以左右民とあるに出づ ○演九玄之潛觀、九玄は九天なり、演は長流貌、擒は舒也、天より賜はれる美しく五色に彩れ
 る雲は空に文章を成せりとなり ○辟靈之應、漢書司馬相如傳補註に靈知聲蟲也凡言辟靈者蓋聲入則此蟲知之其應最捷故以喻靈感通微之義と
 あり ○吳穹、天なり ○湛恩、湛は深貌、深恩と云に同じ ○寓縣、寓は縮文の字なり宇宙の意、縣は赤縣にて天下と云に同じ ○孤獨、林本孤
 を悼に作る ○勿事、調庸を免するを云 ○奈良麻呂、諸兄の子なり寶字中押勝を除かむとて流罪に處せらる其子清友の女即ち檀林皇后なり ○
 秀良親王、嵯峨天皇第三皇子、御母檀林皇后 ○雲林院、字類抄に仁明天皇皇子常康親王の舊居とあり ○内裏藏人所、原本内裏を四圍に作る閣本
 西本及類史に據て改む ○寢殿、一家の正殿を云 ○滋野朝臣貞主、原本此下に癸丑及甲寅の二條あり之を十一月の條に移す

○十一月丁未朔、此三
 字類史に據て補ふ原本此
 に丁巳の條ありしを下に
 移せり
 ○辛亥、此條原本丁巳の
 次にあり林本に據り干支
 を推して此に移す
 ○安義、諸本及類史安を
 奉に作る
 ○授從五位下、原本此次
 に丙子條あり下に移せり
 ○癸丑、此條及次の甲寅
 條は原本十月壬寅の次に
 あり林本に據て此に移す
 ○蕃良朝臣、貞觀六年八
 月辛未紀に蕃良朝臣豐村
 等に菅野朝臣を賜ふと見

○十一月丁未朔、辛亥、正六位上百濟王安義、正六位上百濟王慶仁、並
 授從五位下、○癸丑、右京人陰陽寮允正六位上葛井宿禰石雄、兵部省
 少錄正六位上同姓鮎川、賜姓蕃良朝臣、○甲寅、改常陸國人外從五位
 下有道宿禰氏道本居、貫附左京七條、○丁巳、左近衛將曹佐伯宮成獻
 白鳥、女孺河内國若江郡人浮穴直永子、賜姓春江宿禰、○辛酉、加置
 施樂院主典一員、○癸亥、依兵部省所請、以國造田廿町地稅、永充親王
 已下五位已上廿人、調習內射之資、○乙丑、以從五位下清原真人秋雄

○宮野朝臣同祖なり
 ○丁巳、此條原本十一月朔の次にありて、己未に作る今閣本及類史に據て丁巳に改め此に移す
 ○宮成、紀略宮を重に作る
 ○白鳥、原本鳥を馬に作る諸本及類史紀略に據て改む
 ○若江郡人、人字は閣本西本に據て補ふ
 ○辛酉、此條原本なし西本本宮本及類史に據て補ふ
 ○癸亥、此條二年十一月に重出す類史に據て此を存し彼を削る
 ○國造田、政事要略所載延喜十四年八月八日太政官符に諸國國造田四百一十町五段を載す其内なり
 ○調習、原本調を試に作る西本及類史に據て改む
 ○兵部大輔、原本兵を刑に作る諸本に據て改む
 ○己巳、十一月廿三日なり原本此上に十二月の三字あるは衍なり林本及類史に據て削る
 ○勘備、原本勘備に作る諸本に據て改む
 ○夏日、西本尾本夏月に作る

爲侍從、從四位下紀朝臣深江爲兵部大輔、從五位下藤原朝臣貞公爲出雲守、從五位上紀朝臣良門爲紀伊守、○己巳、佐渡國言、國例每郡郡司一人、專當貢賦、冬中勘備、夏日上道、而或遭風波、留連海上、或供相撲、節、不得早歸、此際無人充用、郡政擁滯、請正員外、每郡置權任員、支配雜務、許之、○壬申、制囚獄司物部、刀緒、用胡桃染、從四位上勳七等清原真人長谷卒、年六十一、○癸酉、坐能登國正三位勳一等氣多大神宮禰宜祝二人、始令把笏、○丙子、以越前國坂井郡荒田廿町賜基貞親王、○十二月丁丑朔辛巳、施行天長年中所新撰令義解、下詔曰、納諸軌物、王道所先、制以度量、皇猷斯在、故知弼成、五教、銜勒万方、垂拱而理、其法令乎、後太上天皇、修機玄扈、比德丹陵、事勤遠圖、慮在長策、以爲法令、文義隱約難詳、前儒註釋、方圓遞執、豈使三家異說、輕重參差、二門殊躅、舞文弄法、永言於此、固切宸冲、爰勅在朝、迺令討覈稽之於典籍、參之以古今、迄于滯疑、祇稟聖斷、咸加辨析、已盡會通、裁爲十卷、名令義解、屈飛龍之眇轡、顧汾陽之宵然、未有施行、藏之祕府、朕以寡昧、臨馭寰宇、思通明謨

○胡桃染、類史胡を吳に作る抄飲食部鹽梅類に胡桃(久留美)博物志云張騫使西域、還得之、之あり、胡桃を以て染めたるを胡桃染と云
 ○從四位上、以下年六十一に至る十八字紀略に據て補ふ
 ○清原真人長谷卒、補任に一品舍人親王三世孫石浦王二男延曆十七年月初賜長谷清原真人姓とあり天長八年七月參議に任じ在官四年卒年六十二と見ゆ
 ○癸酉、此條原本九月辛酉の次にありしを類史に據て此に移す
 ○氣多大神宮、神名式羽咋郡氣多神社名神大とあり同郡一宮村に鎮座國幣大社に列す
 ○丙子、此條原本上文辛亥の次にありしを尾本林本に據て此に移す
 ○以越前國坂井郡、原本以を改に坂を板に作る以は宮本に據り坂は諸本に據て改む
 ○基貞親王、淳和天皇の皇子
 (十二月)十二月、此三字原本十一月己巳上にあ

導揚景業、宜頒天下、普使遵用、畫一之訓、垂於萬葉、○乙未、大僧都傳燈大法師位空海上奏曰、空海聞、如來說法、有二種趣、一淺略趣、二祕密趣、言淺略趣者、諸經中、長行、偈頌是也、言祕密趣者、諸經中、陀羅尼是也、淺略趣者、如大素本草等、經論說病源、分別藥性、陀羅尼祕法者、如依方合藥、服食除病、若對病人、披談方經、无由療痾、必須當病合藥、依方服藥、乃得消除疾患、保持性命、然今所奉講最勝王經、但讀其文、空談其義、不曾依法畫像、結壇修行、雖聞演說甘露之美、恐闕嘗醍醐之味、伏乞、自今以後、一依經法、講經七日之間、特擇解法僧二七人、沙彌二七人、別莊嚴一室、陳列諸尊像、奠布供具、持誦真言、然則顯密二趣、契如來之本意、現當福聚、獲諸尊之悲願、勅依請修之、永爲恒例、散位外從五位下、大戶首清上、雅樂笙師正六位上、同姓朝生等十三人、賜姓良枝宿禰、安倍氏之枝別也、諸陵少允正六位上、中科宿禰直門、左少史從七位下、同姓繼門等、賜姓菅野朝臣、津連之別姓也、散位從七位下、川上造吉備成、賜姓春道宿禰、伊香我色雄命之後也、○辛丑、雷聲鼓動、

り干支を推して此に移す
 ○丁丑朔、此三字は宮本に據りて補ふ
 ○所撰撰令義解、天長三年十一月詔して之を作らしめ十年十二月書成りて奏進す施行は此に五日とあれど義解には十八日とす蓋奏可と施行の日とによりて異なるなるべし撰は原本撰に作る諸本に據りて改む
 ○軌物、左傳隱五年に度軌量章物采見ゆ法則を云
 ○五教、五常の教を云尙書舜典に出づ
 ○御勅方方、大戴禮に法御人御勅也とあり、原本御を衝に勅を勅に作る林本及類史令義解に據りて改む
 ○修機玄扈、機は萬機なり藝文類聚に黃帝坐元扈洛水上云々とあり元扈は山の名なり ○丹陵、帝王世紀に堯生於丹陵とあり堯を云なり ○慮在長策、原本慮を廣に在を存に作る慮は諸本に據りて改む ○隱約、文章簡約にして意義の隱れ明ならざるを云 ○三家、後漢書陳寵傳に律有三家其說各異とあり ○會通、原本會を倫に作る西本及類史に據りて改む會通は易繫辭傳に出づ ○爲十卷、原本爲を卷に作る諸本及類史に據りて改む ○屈飛龍之眇響云々、藝文類聚所載沈約賀帝登祥啓に屈飛龍之眇響紆汾陽之遠情とあり飛龍は易乾卦に飛龍在天とあり天子に譬ふ眇は遠也微也汾陽は莊子逍遙遊に堯見四子藐姑射之山汾水之陽一皆然喪其天下焉とありに出づ皆然は深遠貌なり淳和帝の脱履を云なるべし ○寰宇、令義解及類史字を區に作る ○遵用、原本遵用に作る條本林本及義解に據りて改む ○畫一、漢書注に言整齊也 ○萬葉、原本葉を業に作る諸本に據りて改む、萬葉は萬世に同じ ○長行偈頌、長行は偈頌に對して經文中の散文の部分に云 ○陀羅尼、梵語なり漢譯して總持と云 ○大素本草等經、日本現在書目に内經大素卅卷、隋書經籍志に神農本草經三卷とあり ○服藥、類史服食に作る ○疾患、類史性靈集病患に作る ○不曾依法畫像云々、徒に經のみ講説し本尊以下の畫像を懸けず祭壇を設けて行法を修することなしとなり ○甘露之美、性靈集美を義に作る ○醍醐、抄飲食部に本草注蘇敬曰醍醐是酥之精液也とあり酥は同云酥(音與蘇同俗音會)牛羊乳所爲也と見ゆ ○擇解法僧、原本擇を釋に作り解下に之字あり諸本類史性靈集に據りて改め削る解法とは修法を解するを云 ○雅樂笙師、雅字は諸本に據りて補ふ ○朝生、原本朝下に臣字あるは衍なり林本宮本に據りて削る ○散位、原本散上に乙未の二字あるは衍なり尾本林本に據りて削る ○川上造、姓氏録に見えず右京神別に川上首見ゆれど火明命の後に異姓なり

續日本後紀卷第三

續日本後紀卷第四

起承和二年正月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉 勅撰

○承和、此の二字は宮本水戸校本に據りて補ふ
 ○臣、原本脱す諸本に據りて補ふ
 ○承和二年、童小、時に御年十歳に坐す
 ○傳燈大師、燈は原本灯に作る閣本西本及類史に據る下同じ灯は燈の俗字
 ○五十人、原本十を千に作る諸本及類史に據りて改む
 ○東寺、山城志に東寺在九條大宮西、河海抄曰遷都之始東西大宮置玄蕃寮弘仁以來東鴻臚爲東寺賜空海とあり
 ○三密門、身密・語密・意密を三密と云
 ○利濟人天、原本此下に皇字あり諸本及類史百七十九紀略に據りて削る
 ○冊餘町、冊は原本卅に作る今諸本及紀略に據る
 ○高岳親王、紹運錄に法名眞如大同四年四月十三日立太子弘仁元年九月十三日廢之貞觀二年入唐元慶五年十月十三日自唐申遷化之由母伊勢繼子贈從三位、從四位下老人女也とあり
 ○第三子、紹運錄歷代皇記並に長子とす

二年春正月丁未朔、天皇御大極殿、受群臣朝賀、皇太子不朝、以童小也、還御紫宸殿、宴侍從已上、賜御被、○己酉、天皇謁觀先太上天皇、及太皇太后於嵯峨院、○壬子、大僧都傳燈大師位空海奏曰、依弘仁十四年詔、欲令眞言宗僧五十人、住東寺、修三密門、今堂舍已建、修講未創、願且割被入東寺、官家功德料、封千戶之内二百戶、甲斐國五十戶、下總國百五十戶以充僧供、爲國家薰修、利濟人天、許之、平城舊宮處水陸地冊餘町、永賜高岳親王、親王者、天推國高彥天皇第三子也、大同年末、少登儲貳、世人號曰蹲居太子、遂遭時變、失位、落髮披緇、住于東寺、○癸丑、天皇御豐樂院、宴百官於朝堂、詔授從三位源朝臣信正三位、從四位下藤原朝臣良房從四位上、從五位上永野王正五位下、從五位下三繼王、津守王、並從五位上、无位

○大同年末、原本年下に
 中字あり諸本に據て削る
 ○遭時變失位云々、弘仁
 元年九月藥子の亂に依て
 皇太子を廢せられ東寺に
 入て空海の弟子となり給
 ふ
 ○披緇、披は字彙に荷
 衣曰披あり
 ○住于東寺、原本住を位
 に作る閣本西本尾本及紀
 略に據て改む
 ○癸丑、以下院に至る八
 字類史九十九及紀略に據
 て補ふ
 ○宴百官於朝堂、以下是
 首名之孫也に至る三百五
 十字原本には癸亥天皇
 御豐樂院觀射焉の下に
 收む類史及紀略に據て此
 に移す
 ○津守王並、原本王字な
 く並を兼に作る王は宮本
 類史に據て補ひ並は閣本
 西本宮本等に據て改む
 ○門繼、門字は宮本及類
 史に據て補ふ
 ○邑樂、原本邑を色に作
 る類史に據て改む
 ○藤原朝臣豐仲、朝臣の
 二字は宮本及類史に據て
 補ふ
 ○鷹守、原本鷹を應に作
 る諸本及類史に據て改む

嶋江王、正六位上廣坂王、並從五位下、從四位下藤原朝臣廣敏、紀朝臣
 善岑、百濟王勝義、並從四位上、正五位下田口朝臣佐波主、從四位下、從
 五位上藤原朝臣長岡、當宗宿禰家主、並正五位下、從五位下藤原朝臣
 行道、紀朝臣名虎、高階真人石川、永原朝臣門繼、小野朝臣篁、並從五位
 上、正六位上藤原朝臣廣野、文室朝臣邑樂、橘朝臣宗雄、藤原朝臣豐仲、
 伴宿禰諸山、安倍朝臣濱成、紀朝臣鷹守、出雲宿禰岑嗣、並從五位下、外
 從五位下御船宿禰賀祐、外正五位下、正六位上廣井宿禰弟名、長岑宿
 禰高名、刈田首種繼、宋人朝臣垣麻呂、春峯朝臣廣津麻呂、門部連貞宗、
 大村直福吉、並外從五位下、宴畢賜祿、各有差、左京人遣唐史生道公廣
 持、賜姓當道朝臣、和銅年中、肥後守正五位下道君首名、治迹有聲、永存
 遺愛、廣持、是首名之孫也、○乙卯、授正六位上永原朝臣貞主、從五位下、
 ○丁巳、正三位源朝臣信爲、近江守、左兵衛督如故、正四位下源朝臣弘
 爲、信濃守、宮内卿如故、從五位上小野朝臣篁爲、備前權守、遣唐副使彈
 正少弼如故、三品秀良親王爲、大宰帥、彈正尹如故、○庚申、去年有勅、令

○賀祐、祐は原本祐に作
 り諸本及類史祐に作る祐
 は祐の訛なること明なれ
 ば改む
 ○正六位上廣井宿禰弟
 名、原本六を五に作り弟
 を第に作る六は閣本前本
 宮本及類史に據り弟は諸
 本及類史に據て改む
 ○刈田首、原本刈を川に
 作る閣本前本宮本及類史
 に據て改む
 ○宋人朝臣垣麻呂、原本
 宋を宮に作る宮本及類史
 に據て改む垣は閣本西本
 及類史恒に作る
 ○宴畢、畢は原本了に作
 る類史及紀略に據て改む
 ○當道朝臣、他に見えず
 ○首名、養老二年四月紀
 (續紀上一三四頁)に傳見
 ○乙卯、此條類史九十九
 に據て補ふ
 ○丁巳、此條原本壬子の
 次にあり閣本前本に據て
 此に移す
 ○正三位源朝臣信、按正
 三位の上疑くは參議の二
 字を脱せしならむ
 ○正四位下源朝臣弘云
 々、纂註に按天長十年三
 月載、從四位上源朝臣弘
 爲、信濃守、宮内卿如故與

相摸、上總、下總、常陸、上野、下野等國奉寫一切經、今亦貞元并梵釋寺目
 錄所載律論疏章紀傳集抄、每國均分、令加寫之、○癸亥、天皇御豐樂院
 觀射焉、○丙寅、天皇內宴於仁壽殿、公卿近習以外、內記及直授書殿文
 章生一兩人、殊蒙恩昇、共賦春色半暄寒之題、宴訖賜祿、是日授正六
 位上壬生公永繼、外從五位下、○戊辰、令鑄新錢、下詔曰、懋遷之軌、標自
 昌言、交貿而退、取諸噓嗑、則知龜文、人幣、興於曠時、蝸影、栖於舊術、
 姬王圖法、有無以之化居、漢室泉刀、斂散由斯不匱、斯固邦家所要、配地
 馬而无疆、公私攸宜、擬天龍而自遠、然而權輕作重、沿世或悛、子去母隨、
 適時開務、況年祀浸久、資幣已賤、不有平量、何救流弊、是以今制新錢、以
 叶通變、文曰承和昌寶、以新幣之一、當舊錢之十、新之與舊、宜令並用、
 大僧都傳燈、大律師位空海、上表請度、眞言宗年分、僧三人、許之、是日雷
 三聲、○己巳、天皇御射場常陸大守葛井親王、右大臣清原真人夏野等
 侍焉、至中鵠之人、及取御箭、內豎大舍人、賜布有差、是日後太上天皇幸
 姬橋氏所、誕育皇子、爲親王、左京人右馬寮權大允清友宿禰眞岡、散

位同姓魚引等賜姓笠品宿禰非其願也公家避贈太政大臣橘氏之名耳左近衛戶嶋守右兵衛同姓眞魚等賜姓安岑連焉嶋守之先百濟國人也○甲戌行幸芹川野遊獵日暮車駕還宮

此相同但從四位上作正五位下爲異據三代實錄此惡衍文也
○從五位上小野朝臣篁上は原本下に作る癸丑條及宮本に據て改む
○庚申此條原本癸亥の次にあり西本前本に據て此に移す
○下總此二字は宮本及元年五月乙丑紀に據て補ふ
○貞元并梵釋寺貞元寺は詳ならず梵釋寺は續紀下(四四九頁)に注す
○癸亥此條原本庚申の前にあり類史七十二に據て此に移す
○仁壽殿拾芥抄中末に南殿(紫宸殿也)北とあり
○按書殿同に月花門北とあり
○殊蒙恩昇特に昇殿を許さるゝを云
○春色云々白居易の詩句なり
○永繼繼字は中本宮本及類史に據て補ふ
○懋遷之軌云々尙書益稷に帝曰來禹汝亦昌言禹曰云々懋遷有無化居云々皋陶曰兪師汝昌言とあるに出づ昌は美懋は勉也交易して有無を相通する法は禹の言によりて立てられたりとなり
○交貿而退云々易繫辭傳に日中爲市云々交易而退各得其所蓋取諸噬嗑とあるに出づ噬嗑は卦の名なり
○龜文人幣史記平準書に有人は入の誤なるべし
○蝸影栖縉縉は廣雅に蝸魚伯書缺也淮南子注に用母血塗八十一錢子血塗八十一錢置母用子置子用母皆自還故謂錢爲青蚨とあり蝸影は錢を云なるべし縉は錢貫なり
○姫王團法漢書食貨志に太公爲周立九府團法注に掌財幣之官有九故云九府團謂均而通也補注に團法二字統金錢布帛言之とあり
○有無以之化居尙書益稷の文に出で上に引けり注に交易變化其所居積之貨也とあり
○漢室泉刀云々漢書食貨志に凡貨寶於金利於刀流於泉注に名錢爲刀者以其利於民也泉者流行如泉也また民有餘則輕之故人君斂之以輕民不足則重之故人君散之以重凡輕重斂散之以時則準平とあるに出づ原本斯を其に置を遺に作る並に宮本に據て改む
○所要所は原本取に作る宮本に據て改む
○地馬龜文の下に注す
○天龍同上
○或悛原本悛を按に作る宮本に據て改む
○子去母隨漢書食貨志に量貨幣輕重以救民民患輕則爲之作重幣以行之於是母權子而行民皆得焉若不堪重則多作輕而行之亦不廢重於是有子權母而行小大利之注に母重也其大倍故爲母子輕也其輕少半故爲子也とあり
○年祀祀は年也
○通變通は原本適に作る閣本西本に據て改む
○新幣幣は原本錢に作り閣本西本前本帝に作る帝は幣の訛なるべし今紀略に據て改む
○眞言宗年分僧三代格卷二大政官符に之を廿三日とす類史百八十七に正月二日とすは誤なるべし
○葛井親王桓武天皇皇子
○内豎原本内豎に作る西本に據て改む下同
○橘氏眞言に一代要記を引き氏は氏子なりとす氏下疑脫字字と云り
○皇子名闕く
○橘氏檀林皇后の父清友を云
○戸嶋守戸上恐脫橘字と纂註に云
○眞魚魚は原本兼に作る諸本に據て改む

○二月准判官准は宮本に據て補ふ
○松川造詳ならず
○吉彌侯字如奴原本侯を雙に作る西本宮本等に

○二月丙子朔丁丑以外從五位下長岑宿禰高名爲遣唐准判官從七位上松川造貞嗣爲錄事從八位下大和眞人耳主大初位下廬原公有

據て改む
○朝野宿禰延曆十年正月紀(續紀下五〇三頁)に見ゆ
○製津彦津字は宮本に據て補ふ
○授无位源朝臣以下從四位上に至る十一字は類史九十九に據て補ふ
○善世宿禰録に見えず
○天忍人命之後也原本此下壬寅丹後國人云々の三十字あり下文壬寅條に重出す此を削て彼を存す
○庚寅此條類史百七に據て補ふ
○秩歷類史に琳曆に作る今纂註に據て改む
○前格類史百七に天長八年三月癸卯周防鑄錢司に命じて秩期一準諸國とあり是なるべし
○芝草治部式に下瑞とす
○武茂神神名式に下野國那須郡健武山神社とある是なり今同郡健部村武部にあり
○採沙金之山下野國より沙金を出すこと民部式内藏式に見ゆ
○日暮還宮此四字は類史卅二に據て補ふ
○金氏諸本金を全に作る

守並爲譯語○己卯俘囚勳五等吉彌侯宇如奴勳五等吉彌侯志波宇志勳五等吉彌侯億可太等賜姓物部斯波連○庚辰大和國人正六位上忍海原連嶋依同姓百吉等賜姓朝野宿禰葛城襲津彦之後也○戊子授无位源朝臣鎮從四位上河内國人右少史掃守連豐永少典鑑同姓豐上等賜姓善世宿禰天忍人命之後也○庚寅勅鑄錢司職異於國司而秩歷限四年每煩交替宜改前格更定六年○丙申天皇御紫宸殿右大臣從二位清原眞人夏野獻芝草一莖有兩枝者一枝長一尺六寸其色紫緋相雜每莖之末有菌而產于大臣山莊双岳之下是日賜酒侍臣以賀祥芝賜祿有差○戊戌坐越前國正三位勳一等氣比大神祝禰宜准鹿嶋能登兩大神祝禰宜令以把笏下野國武茂神奉授從五位下此神坐採沙金之山○壬寅行幸水生瀨野遊獵賜扈從者祿日暮還宮丹後國人從八位上久美公金氏賜姓時統宿禰伊枳速日命之苗裔也賜大學寮印一面○三月丙午朔天皇御紫宸殿侍從廚獻御贄設酒饌侍臣具醉賜祿有差○丁未地震○庚戌出雲國言灾于官舍○癸丑以

○時統宿禰、他に見えず
 ○三月、侍從所、拾芥抄
 中末に侍從所在、厨美福
 門内東掖也とあり
 ○庚戌、此條類史百七十
 三に據て補ふ
 ○以備前國、以下勅旨田
 に至る十八字類史百五十
 九及紀略に據て補ふ
 ○豐安法師、元亨釋書十
 三に見ゆ
 ○大僧都、山田以文曰此
 時空海大僧都たり疑くは
 權字を脱す
 ○並爲律師、並は原本直
 に作る諸本に據て改む
 ○皇太后、紀略此下に宮
 字あり
 ○冷然院、嵯峨上皇の始
 に坐し、宮なり拾芥抄中
 末に大炊御門南堀川西、
 此院累代後院弘仁亭本名
 冷然院云々而依「火災改」
 然字爲「泉」とあり
 ○令全進之、全字は諸本
 に據て補ふ
 ○仰大宰府、仰は原本帥
 に作る諸本西本及紀略に
 據て改む
 ○四百腰、紀略四を一に
 作る
 ○山城國持山、以下十五
 字は宮本及類史百七に據

備前國御野郡空閑地百町、爲（後和）後院勅旨田、右京人近江少目從七位
 下伊蘇志臣廣成、大和國人正六位上同姓人麻呂、紀伊國人外正八位
 上紀直繼成等十三人、賜姓紀宿禰、○丙辰、豐安法師爲大僧都、明福法
 師爲少僧都、泰景法師、善海法師、並爲律師、○丁巳、勅後太上天皇御封
 二千戶、皇太后御封一千戶、准冷然院御封行之、若當有損年、以公相補
 令全進之、仰大宰府、綿甲一百領、胄一百口、袴四百腰、充遣唐舶不虞
 之備、山城國持山一處、爲內藏寮所領之地、○己未、大宰府言、壹伎嶋
 遙居海中、地勢隘狹、人數寡少、難支機急、頃年新羅商人來窺不絕、非置
 防人、何備非常、請令嶋、倭人三百卅人、帶兵仗、戍十四處要害之崎、許之
 甲斐國言、灾于不動倉二字、及器仗、屋一字、皆悉煨燼、○庚申、鑄印一面、
 充冷然院、○辛酉、下總國人陸奧鎮守將軍外從五位下勳六等物部臣
 瑳連熊猪、改連賜宿禰、又改本居貫附左京二條、昔物部小事大連、錫節
 天朝、出征坂東、凱歌歸報、藉此功勳、令得於下總國、始建匝瑳郡、仍以爲
 氏、是則熊猪等祖也、鑄錢司言、被給俸料一分之人、唯一千束、僅支朝

て補ふ、持は宮本類史共に
 杵に作れるを天長十年三
 月紀に據て改む、持山は相
 樂郡にあり
 ○壹伎嶋、伎は原本岐に
 作る諸本西本前本等に據
 て改む
 ○隘狹、隘は原本溢に作
 る諸本に據て改む
 ○戍十四處、戍は原本戎
 に作る宮本に據て改む
 ○甲斐國言、以下二十一
 字は類史百七十三に據て
 補ふ
 ○辛酉、此條三年三月紀
 に重出す此を存して彼を
 削る
 ○鎮守將軍、將軍の二字
 は宮本及下文に據て補ふ
 ○物部小事大連、舊事紀
 に物部小事連公志隨連等
 祖とあり
 ○錫節、節刀を賜なり
 ○匝瑳郡、抄國郡部に下
 總國匝瑳（佐布佐）とあり
 ○鑄錢司言、以下倍給之
 まで元年三月紀に出づ、類
 史八十三に據り彼を削り
 て此を存す
 ○處分、類史八十四には
 處の上に奉安の二字あり
 同八十三には無し
 ○下總國云々、紀略之を
 丁巳に係げ上に出す

夕、不足衣服、遷替之日、无糧還京、右大臣處分、班舉正稅十六万束於備
 後、安藝、周防、長門、豐前等國、各三万二千束、以其息利、每人倍給之、下
 總國言、民飢、賑給之、○丙寅、大僧都傳燈大律師位空海、終于紀伊國禪
 居、○庚午、勅遣内舍人一人、弔法師喪、并施喪料、後太上天皇有弔書曰、
 眞言、洪匠、密教、宗師、邦家憑其護持、動植荷其攝念、豈圖掩蔽、未逼、无常
 遽侵、仁舟廢棹、弱喪失歸、嗟呼哀哉、禪關僻左、凶問晚傳、不能使者奔赴、
 相助茶毘、言之爲恨、悵悵曷已、思付舊窟、悲涼可料、今者遙寄、單書弔之、
 著錄、弟子入室、桑門、悽愴奈何、兼以達旨、法師者、讚岐國多度郡人、俗姓
 佐伯直、年十五就舅從五位下阿刀宿禰大足、讀習文書、十八遊學槐市、
 時有一沙門、呈示虛空藏聞持法、其經說、若人依法、讀此眞言、一百万遍、
 即得一切、教法文義、諳記、於是信大聖之誠言、望飛焰、於鑽燧、攀躋阿波、
 國大瀧之嶽、勤念土左國室戶之崎、幽谷應聲、明星來影、自此慧解日新、
 下筆成文、世傳三教論、是信宿、間所撰也、在於書法、最得其妙、與張芝齊
 名、見稱草聖、年卅一、得度、延曆廿三年、入唐留學、遇青龍寺惠果和尚、稟

○禪居、金剛峯寺を云
○動植荷其攝念、動物植
物に至るまで其慈悲を蒙
れりとなり
○嵯峨未遁、嵯峨は離騷
注に日所、入之山也、こ
り死期に譬ふ山海經に出
つ未遁は未だ迫近せざる
なり遁は原本處に作る諸本に據て改む

學眞言、其宗旨義味莫不該通、遂懷法寶、歸來本朝、啓祕密之門、弘大日
之化、天長元年、任少僧都、七年轉大僧都、自有終焉之志、隱居紀伊國金
剛山寺、化去之時年六十三、

○遺侵、違は原本處に作る諸本に據て改む
○弱喪失歸、沈約佛記序に行迷復路弱喪知歸とあるに據
れり足弱く路に踏迷ひしもの、歸する所を知らずなりしを云
○禪關僻左、金剛峯寺の都より遠く隔れるを云
○凶問、問は開の誤なるべし
○茶
毘、釋氏要覽下に茶毗梵云關鼻多此云焚燒とあり
○單書、書は原本言に作る諸本中本宮本に據て改む
○著録弟子、著録は記簿に載せらる、
弟子を云か
○入室桑門、高足の弟子を云
○槐市、大學を云三輔黃圖に禮小學在公宮之南、大學在東去城七里東爲常滿倉倉之北爲槐市列槐樹
數百行爲、遂無墻屋、諸生朔望會且市云々とあり
○時有一沙門云々、大師傳に延曆十二年勸操虛空藏求開持法授大師とあり、開持法は大集經虛空
藏菩薩所問品に出づ原本開上に求字あれと諸本及寬平七年空海傳記にもなし故に削る
○諸記、諸は原本論に作る諸本に據て改む
○大聖、釋迦を
云
○望飛焰於鑽燧、修道研鑽の大勇猛心を起すを云
○大瀧之嶽、那賀郡加茂谷村大字加茂にあり寺は大瀧寺と稱す
○勤念、勤は宮本に觀歎と
云り
○室戸之崎、安藝郡にあり今室戸町大字室津
○明星來影、廣傳に明星落入口中、影、佛法之奇異とあり
○慧解、慧は原本專に作る諸本西
本に據て改む
○三教論、三教指歸を云
○信宿、信處と云に同じ二泊を云左傳莊三年に一宿爲舍再宿爲信とあり
○張芝、後漢書張奐傳注に芝
號張有道尤好草書學崔杜之法爲世所寶寸紙不遺章仲將謂之草聖也とあり
○年卅一得度、行狀集記廣傳に空海の得度せしは延曆十四年四月
にて廿二歳とあれば廿二歳とすべきなり然るに寬平七年傳記に延曆廿三年四月九日東大寺戒壇院受具足戒、時年卅一とあるに據れば誤と云べからず
故に改めず
○延曆廿三年、唐貞元二十年、空海時に年三十一歳
○懷法寶歸來、歸朝は大同元年十月にて携帶せし經律論疏章紀傳影像佛具等は傳
記に詳なり
○金剛山寺、山は峯の誤か拾芥抄中末に高野寺紀伊國傳法院在此内號金剛峯寺とあり
○六十三、編年記行狀等に六十二とあれど
寬平傳記には承和二年三月廿一日卒去時六十三蕙冊三とあれば輒く改めず

〔四月〕夏四月乙亥朔、
夏字及乙亥朔の四字は宮
本に據て補ふ
○象著損上、象は易の象
なり益卦の象傳に損上
益下民說無疆とあり
○禮存寧儉、論語八佾に
禮與其奢也寧儉とある

○夏四月乙亥朔丙子、勅曰、象著損上、禮存寧儉、王者則之、古今合契、朕
雖菲昧、跂予思齊、去泰就約、夙關情慮、如今所有、朕之兒息、除親王之號、
賜朝臣之姓、先太上天皇、丕恩罔極、玄澤更加、不令別姓、被以源氏、使與

に據れり
○跂予思齊、毛詩衛風河
廣章に跂予望之、傳に跂
足則可、以望見之、また
論語里仁爲美に見賢思齊
焉とあり跂は企と同じ
○去泰、泰は侈也
○丕恩罔極、原本恩を息
に、罔を罔に作る恩は水
戸校本、罔は罔本前本及
格に據て改む
○與會枝而同蔭云々、枝
も幹も同じ蔭にあり本流
も分派も同じ河を流れし
むる意にて世々別姓を設
けず何れも源氏を冒さし
むるを云原本枝を稱に作
る諸本西本に據て改む渭
は三代格濟に作る
○弘仁五年、三代格卷十
七に八月八日の詔とし紀
略は五月に係く
○天長九年、同十七に出
て二月十五日の詔なり
○馬相野、纂話に甲斐叢
記を引て御救使川南有
駒場有野二村、有野或馬
相野之遺名蓋謂八田御
牧邪と云り
○葛原親王、桓武天皇皇
子
○丁丑、此條類史百七十
三に據て補ふ
○仲丸子連、錄大和神別

曾枝而同蔭、共渭派而混流、其前號親王、仍舊不改、同母後產、猶復一例
等制、准弘仁五年天長九年兩度、勅書、宣告中外、咸俾聞知、甲斐國巨
麻郡馬相野、空閑地五百町、賜一品式部卿葛原親王、○丁丑、勅曰、如聞
諸國疫癘流行、病苦者衆、其病從鬼神來、須以祈禱治之、又般若之力不
可思議、宜令十五大寺、轉讀大般若經、拯夫沉病、兼防未然焉、○己卯、勅
令天下諸國、修文殊會、其會料者、每年割取救急稻利三分之一充用、○辛
巳、叙從四位上藤原朝臣良房從三位、爲權中納言、○戊子、无品叡努內
親王薨、天皇爲之不親事三日、親王者平城天皇第二皇女、母紀氏、從三
位木津魚朝臣之女、從五位下魚員是也、○庚寅、以參議正三位源朝臣
信爲左近衛中將、近江守如故、權中納言從三位藤原朝臣良房爲兼左
兵衛督、參議從四位上文室朝臣秋津爲右近衛中將、春宮大夫武藏守
如故、大和國人正七位上仲丸子連乙成、同姓從八位上眞當等、賜姓
仲宿禰、○甲午、高子內親王禊于賀茂川、始入齋院、○丁酉、右大臣從二
位兼行左近衛大將清原眞人夏野上表、請辭大將之任、不許、○戊戌、先

に仲九子日臣命九世孫金村大連之後也とあり
 ○高子内親王、高は原本亮に作る類史及紹運錄に據て改む仁明天皇第十二皇女天長十年三月卜定○中使輪轉、類に御使を遣さる、を云
 ○授正六位上、正は原本從に作る西本宮本及類史九十九に據て改む
 ○嶋上郡、今三嶋郡
 ○緒嗣、原本緒を諸に作る閣本前本等に據て改む
 ○五月、原本月を日に作る諸本に據て改む
 ○乙巳朔、此三字宮本水戸校本及紀略に據て補ふ
 ○壬子、此條甲寅の次にありしを干支を推して此に移す
 ○長門等國、等は諸本に據て補ふ
 ○于侍臣、水戸校本子の下に時字あり
 ○永原朝臣子伊太比卒、太は原本大に作る諸本に據て改む、子伊太比は大同四年四月戊辰紀に典侍從五位上あり
 ○河繼、河は原本阿に作る山崎校本に據て改む
 ○廣野宿禰、他に見えず
 ○備前備中、備前は原本

太上天皇不豫也、中使輪轉、候間起居、尋亦平復、○己亥、授正六位上文室朝臣茂道從五位下、外從五位下賀茂縣主廣友外從五位上、正六位上賀茂縣主廣雄外從五位下、○庚子、越前國飢賑給之、○癸卯、攝津國嶋上郡荒廢田三町、賜左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、○甲辰、天皇御武德殿、閱覽左右馬寮御馬也、應供奉五日節者、惣牽於此、○五月乙巳朔丁未、近江國飢、賑給之、○己酉、天皇御武德殿觀馬射、○庚戌、亦御同殿覽種種馬藝、○壬子、伊勢、加賀、長門等國飢、並賑給之、○甲寅、叙從五位上紀朝臣名虎正五位下、外從五位下善世宿禰遠繼從五位下、○乙卯、天皇幸神泉苑、追涼酣暢、于侍臣賜祿、商布、各有差、是日便令捕池魚、奉嗟峨淳和兩院、○丁巳、以美作權掾外從五位下長岑宿禰高名轉任權介、遣唐判官如故、正四位下永原朝臣子伊太比卒、○甲子、宮内卿正四位下源朝臣弘爲刑部卿、信濃守如故、○辛未、正七位上勳七等伴、刈田臣繼守、外從八位上眞髮部公吉人、並授外從五位下、○癸酉、右京人丹波權大目昆解宮繼、内豎同姓河繼等、賜姓廣野宿禰、百濟國、人夫子之

備中の下にありしを換改めたり
 ○生絲、生は原本上に作る諸本に據て改む
 ○六月、百繼、補任に木津魚一男と見え弘仁十三年十一月從三位に叙す
 ○大膳職、以下二員に至る十三字は宮本及類史百七に據て補ふ
 ○藤原朝臣松子卒、弘仁元年十一月己未後紀一四五頁、正五位下を授く
 ○紀朝臣田村子卒、大同三年十一月同二二頁、无位より從四位下を授く
 ○辛丑、此條類史百九十に據て補ふ
 ○宇漢米公、弘仁三年正月乙酉紀に夷外從五位上宇漢米公色男見ゆ
 ○爾散南公、同紀に外從五位下爾散南公獨伎特聽節會入京と見ゆ
 ○中務省、省は原本少輔の二字に作る諸本及紀略に據て改む
 ○勅如聞、以下用救急稻に至る八十字は類史八十三及河海抄符木卷に據て補ふ、亦三代格十六に見え文異同あり參看すべし
 ○東海東山兩道河津、河は墨俣・餉海・矢作・大井・

後也、太政官處分、伊賀、尾張、出雲、美作、備前、備中、備後、安藝、紀伊、阿波等國、年料貢賦、練絲等、宜減其色、令進生絲、○六月乙亥朔丁丑、從二位右衛門督紀朝臣百繼上表辭職、不許、大膳職職掌、准之諸職、加置二員、○己卯、從四位下藤原朝臣松子卒、○癸未、從四位下紀朝臣田村子卒、○辛丑、俘囚第二等宇漢米公何毛伊、從八位下爾散南公志禮初、並授外從五位下、賞其不從逆類也、○壬寅、令中務省進佛舍利七粒於内裏、不知其所從來、○癸卯、勅、當今嘉穀初秀、秋稼方實、如風雨失時、恐致損害、宜令十五大寺常住僧、各於本寺轉讀大般若經、憑其靈護、必致豐稔、勅、如聞、東海、東山兩道、河津之處、或渡舟數少、或橋梁不備、由是貢調擔夫、來集河邊、累日經旬、不得利涉、宜每河加增渡舟二艘、其價直者、須正稅、又造浮橋、令得通行、及建布施屋、備橋造作料者、用救急稻、○秋七月甲辰朔、天皇宴群臣於紫宸殿、左右近衛、遞奏音樂、勅令四位已上開襟、至夕宴罷、賜祿有差、○乙巳、走幣於天下名神、預攘風雨之灾、○丙午、漕讚岐國正稅穀、以賑淡路國飢民、○戊申、奉幣於伊勢大神宮、亦爲防風雨

阿倍・太日・石瀨・住田、
 渡は草津なり
 ○浮橋、後の船橋、浮橋
 は富士河船川二處に設く
 ○布施屋、旅人の宿泊す
 る家を云後訓葉に臥屋の
 義なるべし云墨俣河の
 左右兩岸に設く渡船故障
 の時宿泊に便ならしめむ
 が爲なり
 ○七月、宴群臣、旬宴
 ○後漢書、一百廿卷宋太
 子詹事范曄撰後漢十二
 帝の事を紀す
 ○有所以也、所字は紀略
 に據て補ふ
 ○爲參議、原本參議の二
 字を云々に作る尾本宮本
 に據て改む
 ○近江國、以下禁其私採
 に至る十九字は紀略に據
 て補ふ
 ○八月、甲戌朔、戊辰原
 本辰に作る宮本及紀略に
 據て改む
 ○負籌、類史七十三籌下
 に也字あり、籌は算也
 ○輸物、正韵に俗謂、勝
 負爲輸贏さある輸なり
 ○先是稟食云々、以下更
 延三年也に至る三十三字
 は類史八十四之を七月甲
 子の條に係く
 ○貧民、原本貧民に作る

之災也。○辛亥、行幸神泉苑、觀相撲節。○乙卯、賜讚岐國三野郡空閑地
 百餘町、時子內親王。○丁巳、天皇御紫宸殿、正四位下菅原朝臣清公侍
 讀後漢書、數日之後不遂而輟、有所以也。○癸亥、以從二位紀朝臣百繼
 爲參議、近江國所出雲母、殊是精好、爲充公用、禁其私採。○甲子、以空
 閑地山城國愛宕郡二町、上野國山田郡八十町賜諱。○八月甲戌朔、
 天皇御紫宸殿、先是左右四衛府相撲於殿庭、右方負籌、今日獻其輸物、
 各奏音樂、是日霖雨霽焉、頒幣畿內名神、以賽于禱、其丹生川上社、殊
 奉白馬一疋、佐渡國言、去歲風雨爲災、年穀不登、今茲飢疫相仍、死亡
 者多、詔賑恤之、先是稟貸筑前國貧民正稅一萬束、限以五年、而窮乏
 之輩、餘弊未復、因更延三年也。○乙亥、且禁京畿之內、來月供北辰、灯、以
 齋內親王可入伊勢也。○戊寅、是釋奠、後朝也、天皇御紫宸殿、喚明經、碩
 儒鴻生昇殿、遞令論義、畢賜祿有差。○丁亥、從四位下滋野朝臣貞主爲
 兵部大輔、相摸守如故。○甲午、天皇御紫宸殿、侍從厨獻御贄、爲侍臣設
 酒饌、賜見參五位已上祿、各有差。○己亥、內侍臨東櫓、計見陪五位已上、

西本宮本に據て改む
 ○窮乏之輩、之字は類史
 八十四に據て補ふ
 ○且禁、纂註に按字典且
 姑且也、且禁猶權停也
 ○可入伊勢也、宮本伊勢
 の下齋宮の二字あれど類
 史にもなければ採らず
 ○是釋奠後朝也、釋奠は
 上丁即ち四日に行はれ其
 翌朝宮中にて論議せしめ
 らる後朝は釋奠の翌朝の
 意なり、原本是下、日字
 あるは後人の私意を以て
 加ふる所に諸本及紀略
 になし故に之を削る
 ○論義、論は原本講に作
 る紀略に據て改む是内論
 義なり
 ○東櫓、紫宸殿の東方の
 櫓なり
 ○見陪、現在陪從せる人
 々を云
 ○源朝臣信、嵯峨天皇皇
 子母は廣井氏
 ○九月、朝調、山崎校本
 及纂註調を觀に作る
 ○所番、番は原本蕃に作
 る水戸校本に據て改む
 ○才巧、類史百七巧を功
 に作る
 ○轆轤工、抄調度部造作
 具に四聲字苑云轆轤俗
 云六路圓轉木機也

賜大宰府所貢染綾各一疋、色隨其人位。○辛丑、天皇御紫宸殿、左近衛
 中將源朝臣信、聊有奉獻、賜侍從已上衣被、外從五位下廣井宿禰弟名
 授從五位下、信朝臣之舅也、齋內親王祓于賀茂川、爲可入伊勢齋宮也、
 是日自嵯峨院、御馬十疋奉內裏。○九月癸卯朔、天皇御紫宸殿、皇太子
 朝謁、賜群臣酒、具醉而罷、先是木工寮中所番長上雜工、隨其才巧、各有
 品數、而承前考文、惣注長上木工、不別其品色、至是長上及工品、選其人、
 每色辨置、隨闕補之、木工八人、土工二人、瓦工二人、轆轤工一人、檜皮工
 二人、鍛冶工二人、石灰工一人。○乙巳、右京人散位宇自可臣良宗賜姓
 春庭宿禰、彥狹嶋命之苗裔也。○丙午、授正五位下藤原朝臣長岡從四
 位下。○丁未、天皇御大極殿、發遣齋內親王於伊勢大神宮。○辛亥、天皇
 御紫宸殿、賜菊醕宴於侍從已上、但召非侍從、及諸司綠衫官人、堪應詔
 者、并文章生等如常、同賦秋氣搖落、効梁元帝體之題、宴訖賜祿。○乙卯、
 外從五位下嶋木史真、機巧之思、頗超群匠、欲備邊近兵、自製新弩、縱令
 四面可射、廻轉易發、是日大臣以下執政、於朱雀門、召集諸衛府、以新弩

あり今俗に云挽物師なり
 ○石灰、抄居處部墻壁具
 (以之波比)燒青白石成
 熟冷竟澆之碎成灰也
 ○宇自可臣、錄右京皇別
 彦狹嶋命之後也
 ○丙午、原本丙子に作る
 類史九十九に據て改む
 ○丁未、原本乙未に作る
 紀略に據て改む
 ○發遣、遣は原本道に作
 る原本尾本宮本及類史紀
 略に據て改む
 ○菊醕宴、醕は原本醋に
 作る水戸校本に據て改む
 關本體に尾本類史醋に作
 るは共に訛なり醕は美酒
 にて是即ち菊花宴なり天
 長十年九月壬戌紀に見ゆ
 ○秋氣、纂詰氣を風に改
 む
 ○元帝、帝字は諸本及類
 史七十四に據て補ふ
 ○嶋木史、錄河内諸蕃に
 嶋木高麗國人伊理和須使
 主之後也
 ○邊近兵、纂詰に癸本(大
 江本)に近字なし云是
 なるに似たり
 ○新弩、抄調度部征戰具
 に兼名苑注云弩(和名於

試射之、向南而發、唯聞機發之聲、不視矢去之影、亦其矢所止、不得的知、
 河內國人左近衛將監伊吉史豐宗、及其同族惣十二人、賜姓滋生宿禰、
 唐人楊雍之孫、貴仁之苗裔也、○辛未、以上野國群馬郡伊賀保社、預之、
 名神、○冬十月壬申朔、賜親王以下侍從已上祿、綿有差、以寒服之初也、
 ○乙亥、丹波國人右近衛醫師外從五位下大村直福吉、及其同族并五
 人、賜姓紀宿禰焉、武內宿禰之支別也、福吉妙得療瘡之術、當時諸醫不
 得間然、天皇寵愛、至賜宅居、遂據其口訣、令撰治瘡記、勘解由使言、使
 局、雜使十二人之中、給服食者二人、便以此二人、號爲使掌、准省掌、令把
 笏、許之、○甲申、行幸箕津野、遞放鷹鷄、賜扈從者祿、日暮還宮、○丁亥、賜
 右京人遣唐譯語廬原公有子、兄散位栢守等朝臣姓、春宮坊小屬佐太
 忌寸道成、兄散位道純等、賜姓滋原宿禰、八多真人同族也、○戊子、攝津
 國人從五位下長我孫葛城、及其同族合三人、賜姓長宗宿禰、事代主命
 八世孫、忌毛宿禰苗裔也、○己丑、延曆寺僧傳灯大法師位義真奏言、天
 台一門、已立圓宗、大乘、三學、流傳未周、伏請宣簡、堪爲講讀師者各一人、

保由美)黃帝造也
 ○亦其矢、亦是原本述に
 作る諸本及紀略に據て改
 む
 ○伊吉史、錄左京諸蕃に
 伊吉連出自長安人劉楊
 雍也
 ○群馬郡、神名式傍訓に
 クルマと訓り
 ○伊賀保社、神名式に群
 馬郡伊賀保社(名神大)
 あり今伊香保町にあり
 縣社に列す
 ○十月、支別、支は原本
 枝に作る原本西本前本等
 に據て改む
 ○許之、許は原本行に作
 る類史百七に據て改む
 ○箕津野、山城國綴喜郡
 にあり今美豆村と稱す淀
 町に近し
 ○丁亥、此條原本十一月
 癸亥の次にありしを原本
 尾本に據て此に移す
 ○栢守、栢は原本栢に作
 る原本西本前本等に據る
 ○道純、純は原本繼に作
 る原本前本に據て改む
 ○八多真人、錄左京皇別
 に出自謚應神皇子稚野
 毛二侯王也
 ○長我孫、原本我を茂に

每年申官補之、演傳此宗、然則皇風遠振、慧日再明、宣揚像教、弘闡妙法、
 作菩提之由、漸爲彼岸之良因、勅許之、○庚寅、以從六位下藤原朝臣貞
 敏爲遣唐准判官、○壬辰、先是五月六日、左右馬寮、於武德殿前、競馳御
 馬、以決勝負、右御馬負焉、至是右方三衛府、及右馬寮、共奉輸物、兼奏雜
 樂、宴竟、賜祿有差、○癸巳、河內國人散位正六位上林連馬主、賜姓伴宿
 禰、又改本居貫、附右京、○甲午、令大藏省進新錢、分賜見參親王以下
 五位已上、又奉嵯峨、淳和、兩院各十萬、又賜皇太子一萬、○丁酉、雷電
 殊切、四衛府陣于清涼殿前、計見參、賜祿、賜讚岐國人從六位上秦部福
 依、弟福益等三烟、秦公姓、攝津國人散位矢田部造聰耳、弟從八位上貞
 成等、賜姓興野宿禰、○戊戌、遣唐錄事松川造貞嗣、散位同姓家繼等、賜
 姓高岑宿禰、其先高麗人也、賜左京人內豎從六位上上毛野公諸兄朝
 臣姓、近江國人彈正大疏、嶋朝臣眞行、賜姓高生朝臣、其先觀松彦香殖
 稻、天皇之後也、左京人正六位上秦忌寸、賜姓朝原宿禰、○己亥、勅以新
 錢四萬文、分之供施京城及平城有名之寺佛僧也、每寺內舍人爲其使、

作諸本に據て改む長我孫は復姓なり、長は録和泉神別長公大奈牟智神兒積羽八重事代主命之後也、見ゆ我孫は網曳にて職掌を以て氏さす
 ○其同族、其字は諸本に據て補ふ
 ○忌毛、原本忌寸に作る諸本に據て改む
 ○義真、第一世天台座主なり天台座主記に天長十年七月四日歿されど此に奏言あれば誤なるべし
 ○圓宗、圓は原本丹に作る諸本に據て改む圓宗は圓教(偏教の對)の宗旨の意
 ○伏請、此二字類史に據て補ふ類史には請下の宜字なし
 ○慧日、慧は原本惠に作る關本西本に據て改む
 ○善提之由漸、由は因也漸は進也善提に進むの因由なるを云
 ○彼岸之良因、因は原本田に作る格に據て改む、彼岸は生死の海を超て涅槃の岸に達するを云
 ○藤原朝臣貞敏、朝臣は宮本に據て補ふ
 ○甲午、此條紀略に據て補ふ
 ○丁酉、此條雷電殊切以下賜祿までは紀略に據て補ひ賜祿岐國人以下與野宿禰に至るまでは原本十一月丁酉の次に西云々ありしを堀本山崎校本に據て此に移す
 ○松川造、姓氏録に見えず高岑宿禰も同じく載せず
 ○賜左京人、以下朝原宿禰に至るまでは原本十一月丁酉の次にありしを此に移す
 ○彈正大疏、疏は原本聯に作る諸本に據て改む
 ○鳴朝臣、鳴は宮イ本に鳥さあり朝は諸本脚に作る按に或は鴨脚の誤か姓氏録に嶋史(高麗種族)は見ゆれと嶋朝臣は見えず別系なるべし纂註に或は脚身の誤かとも云り
 ○秦忌寸賜姓朝原宿禰、矢野翁曰天長十年二月己卯左京人左大史正六位上秦忌寸眞仲賜姓宿禰與此文甚似蓋錯簡而此缺名未詳
 ○己亥、以下下爲其使に至る迄は類史百八十六及紀略に據て補ひ左京人以下當道朝臣まで十三字は原本十一月戊戌の次にありしを尾本堀本に據て此に移す
 ○庚子勅、諸本此下に旨曰の二字あり
 ○民首、録山城諸蕃に民首水海道同祖百濟國人努理使主之後也
 ○焉氏主等、焉及等は衍
 ○時子内親王、今上の皇女
 ○十一月、宮道宿禰、舊事紀に稚武王宮道君之祖也とあり
 ○知乘船事、知は原本智に作る諸本に據て改む
 ○兄二人、狩谷氏曰兄下恐脫弟字
 ○百濟國人也、原本此下に癸亥兵部省云々の三十二字あり元年十一月紀に出でたれば彼を存して此を削る尙ほ此下に丁亥、丁酉、戊戌、己亥の四條あり何れも上文十月の條に移す
 ○木工寮置寮掌二員、此八字類史百七に據て補ふ
 ○庚午、此條類史百五十九に據て補ふ但類史庚午を庚子に作る誤なれば改む

左京人道公安野賜姓當道朝臣、○庚子、勅左京人從六位下民首氏主賜姓長岑宿禰焉氏主等與白鳥村主同祖、出自魯公伯禽云、○辛丑、河内國荒廢田八十五町、賜時子内親王、○十一月壬寅朔戊申、賜主計頭從五位上宮道宿禰吉備麻呂、玄蕃少允同姓吉備繼等朝臣姓、○甲寅、左京人正六位上越智直年足、伊豫國越智郡人正六位上越智直廣成等七人、改直賜宿禰、○辛酉、遣唐使知乘船事從八位上香山連清貞兄二人、改連賜宿禰、其先百濟國人也、木工寮置寮掌二員、○庚午、以美濃

荒廢田十町爲後院勅旨田

○十二月、楓里第、山城志に桂別墅在葛野郡桂村(今同郡桂村上桂下桂)原本第を弟に作る宮本及類史に據て改む
 ○彌雲、彌は原本慶に作る諸本及類史紀略に據る奉覽、奉は原本奏に作る諸本及類史紀略に據る借遣唐使位、原本借を授に作り使位の二字なし關本西本宮本等に據て補ふ借位は外國に使用するに就きて假に授るなり
 ○前爲大宰大貳、弘仁十三年三月廿日なり
 ○續命院、大宰府の南廓にあり
 ○至疾病纏身、至疾の二字は宮本及格に據て補ふ
 ○官司、司は原本舍に作る宮本及格に據て改む
 ○主家、主は原本王に作る諸本及格に據て改む
 ○忌死之人、忌は原本惡に作る西本に據て改む
 ○十而七八矣、八は原本也に作り諸本九に作る宮本及格に據て改む
 ○十四町、四は宮本及格に據て補ふ
 ○以擬飢病、格(前田本)擬を救に作る是なるべし
 ○公力、公は原本心に作る

○十二月辛未朔、天皇御紫宸殿、賜群臣酒、先是右大臣清原真人夏野、在楓里第、見五彩卿雲、是日以其圖畫并相共見人姓名奉覽、且効慶賀之誠、左右近衛府遞奏音樂、既而賜見參親王以下五位已上祿、各有差、○壬申、借遣唐使位、大使從四位上藤原朝臣常嗣正二位、副使從五位上小野朝臣篁正四位上、並大臣口宣、不授告身、○癸酉、故參議刑部卿從四位上小野朝臣岑守、前爲大宰大貳、時建續命院一處、以備往來之舍宿、但不藉公力、恐不得長存、乃叙本意、具修解文曰、管九國二嶋之民、或公或私、往來相續、其求輕者、暫經時月、其事重者、竟歲始還、客宿於府倉之下、賃寄於閭閻之間、若至疾病纏身、手足不隨、官司督察、非養病之處、主家爭趁、皆忌死之人、遂使露臥道路、暴死風霜、縱有時得痊愈、亦以飢寒死者、十而七八矣、見其如此、心深救恤、聊建續命院一處、檜皮葺屋七宇、鼎一口、墾田百十四町、以擬飢病、有志無力、庶幾萬一、地隔人遠、執檢難周、轉以屬人、更增疎廢、若遂不因公力、恨心願之徒、已伏望、令府監或典一人、及觀音寺講師、勾當其事、相替之日、一事已上、皆依實勸附、若

○格に據て改む
 ○徒已、徒は原本從に作る諸本及格に據て改む
 ○勸附、附は原本謝に作る諸本及格に據て改む
 ○獎納、獎は原本非に作る諸本及格に據て改む
 ○宜速令所司、宜字は宮本及格に據て補ふ
 ○解由、由は原本田に記れるを諸本及格に據る
 ○按察使、使字は諸本及類史百九十に據て補ふ
 ○日割御子神云々、神名式尾張國愛智郡日割御子神社(名神大)孫若御子神社(名神大)高座結御子神社(名神大)日割御子神社(名神大)熱田神宮南八劍神社の東に、孫若御子神は神宮境内に、高座結御子神は神宮の北十町幡綾村に坐す
 ○奉預名神、奉は原本舉に作る諸本に據て改む
 ○阿耶賀大神、神名式伊勢國壹志郡阿射加神社(名神大)祭神猿田彦神、同郡阿坂村
 ○丙戌、此條類史百七十七に據て補ふ
 ○聖上、原本主上とす諸本及類史紀略に據て改む
 ○早疫、疫は原本疫に作る諸本及紀略に據て改む

不加修理令致破損及非法費用之類、並以官法論、未及上聞、岑守物故、其家就大臣、追以陳請、勅報曰、思撫黎甿、不忘鑿寐、宇縣復遠、无聞控告、見此獎納、爰知忠槩、宜速令所司、俾允所請、勾當之官、遷替之日、與奪解由、一准國司、○甲戌、夷俘出境、禁制已久、而頃年任意入京、有徒、仍下官符、譴責陸奥出羽按察使并國司鎮守府等、左中弁從四位下笠朝臣仲守卒、○壬午、尾張國日割御子神、孫若御子神、高座結御子神、惣三前奉預名神、並熱田大神、御兒神也、○甲申、奉授阿耶賀大神從五位下、此神坐伊勢國壹志郡、○乙酉、行幸芹川野遊獵、○丙戌、四天王寺十禪師、准梵釋常住兩寺僧、每年一口、預宮中金光明會聽衆、○庚寅、聖上始於清涼殿、限三夜裏、禮拜佛名經、能登國言、旱疫相仍、人民飢苦、賑給之、○壬辰、天皇幸神泉苑、放隼拂水禽、○乙未、以參議從四位上藤原朝臣常嗣爲兼左大弁、近江守如故、云云、

續日本後紀卷第四

續日本後紀卷第五

起承和三年正月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉 勅撰

○承和、此二字は宮本水戸校本に據て補ふ
 【承和三年】御杖、剛卯杖なり倭訓栞に正月上卯日桃梅椿柳などにて杖を作り五色の糸にて巻きて大やけに奉る也建武年中行事に作物所生氣の方獸のすがたを作りて卯杖をおはす云々あり尙ほ公事根源・延喜式・内裏式・江次第等に詳なり
 ○時宗王、及大縣王の二の王字は諸本及類史九十九に據て補ふ
 ○弟綱王、原本弟を第に作る諸本及類史に據て改む
 ○正五位上源朝臣寬、諸本及類史に五を六に作るは非なり
 ○清貞、貞は原本眞に作る宮本及類史に據て改む
 ○英多麻呂、英は原本美に作る諸本及類史に據て改む抄郡郷部に河内國河内郡英多郷をアガタと訓めば此例にてよむべし
 ○木連、連は連に作るべきなり
 ○外從五位下廣宗宿禰、從は原本正に作る宮本に據て改む
 ○藤原朝臣俊繼、朝臣の

三年春正月辛丑朔、天皇御大極殿、受羣臣朝賀、畢宴侍從已上於紫宸殿、賜御被、○癸卯、天皇御紫宸殿、皇太子獻御杖、是日天皇拜賀先太上天皇及太皇太后於嵯峨院、○丁未、天皇御豐樂院、宴百官於朝堂、詔授從四位上藤原朝臣常嗣正四位下、无位時宗王從四位下、從五位上大縣王正五位下、正六位上弟綱王、愛宕王、並從五位下、正五位上源朝臣寬從四位上、正五位下坂上大宿禰淨野、藤原朝臣長良、安倍朝臣安仁、並從四位下、從五位上丹墀真人清貞、小野朝臣篁、並正五位下、從五位下藤原朝臣眞主、丹墀真人興宗、安倍朝臣濱主、石川朝臣英多麻呂、良峯朝臣木連、橘朝臣峯繼、並從五位上、外從五位下廣宗宿禰系繼、紀朝臣國守、正六位上藤原朝臣吉繼、藤原朝臣俊繼、文室朝臣笠科、紀朝

○網雄、綱は原本細に作る諸本及類史に據て改む
 ○天足、足は原本定に作る諸本及類史に據て改む
 ○且還御紫宸殿以禮佛、原本且下以字あり類史に據て削り以禮佛の三字は水戸校本及類史に據て補ふ
 ○數子、數は原本赦に作る閣本西本宮本中本等に據て改む
 ○穎子、穎は原本額に作る閣本西本中本等に據て改む
 ○刑部卿、卿は原本郷に作る閣本に據て改む
 ○延祥、元亨釋書卷三に傳あり
 ○永刀自、類史卅一に永貢の二字に作る
 ○勳十等、勳は原本勳に作る閣本西本に據て改む
 ○八溝黃金神、神名式に陸奥國白河郡八溝嶺神社ある是なり今常陸國久慈郡上野宮村にあり
 ○沙金、原本沙を砂に作る紀略に據て改む和漢三才圖會金類に沙金所謂鉄金は也、鉄金即如沙屑在江沙水中淘汰而得其色淺黄云々に見ゆ

臣綱雄、橘朝臣千枝、橘朝臣起奈理、藤原朝臣板野麻呂、淡海真人眞淨、清瀧朝臣河根、大原真人宗吉、大中臣朝臣天足、並從五位下、正六位上、蕃良朝臣弟主、山田宿禰古嗣、住吉朝臣氏繼、御船宿禰清風、物部首廣國、並外從五位下、賜祿有差。○戊申、天皇御大極殿、聽講最勝王經、且還御紫宸殿、以禮佛、授從五位下安倍朝臣室子、三原朝臣數子、並從五位上、无位紀朝臣清子、橘朝臣穎子、丹墀真人冬子、並從五位下。○辛亥、以四品忠良親王爲上總大守、從四位下藤原朝臣長良爲右馬頭、云云。正四位下源朝臣弘爲兼美作守、刑部卿如故、云云。○甲寅、最勝會竟、引其講師及僧綱等論義殿上、於是勅以元興寺傳灯大法師位、延祥法師任權律師。○丁巳、天皇御豐樂殿、觀大射。○庚申、內宴於仁壽殿、以詩興爲先、同賦理殘粧之題、訖賜祿。是日叙從七位上飯高宿禰全繼子外從五位下。○壬戌、天皇幸神泉苑遊賞、賜見參五位已上祿。叙无位飯高宿禰永刀自外從五位下、云云。○乙丑、詔奉充陸奥國白河郡從五位下勳十等八溝黃金神封戶二烟、以應國司之禱、令採得沙金、其數倍常、能

○戊辰、辰は原本戌に作る宮本及紀略に據て改む
 ○天皇幸神泉苑、天皇の二字は類史に據て補ふ
 ○二月廢務、諸省職察等の事務を廢するを云
 ○祠天神地祇於北野、使を蕃國に遣す時神祇を祀ることを臨時祭式に見ゆ
 ○注、其詞書笏云々、内記式に凡宣命文者、皆以黃紙書之とあり笏に書くことは笏紙に書きしなるべし
 ○賞布、抄布帛部に賞布漢語抄云佐與美乃沼能とあり既に注す
 ○譯語、原本譯を訣に作る諸本に據て改む
 ○還學僧、山崎校本に還恐遊とあり纂詰遣に作る
 ○益雄父、原本父を文に作る閣本西本尾本に據て改む
 ○丹比郡、古市郡と共に今南河内郡に入る
 ○繁子内親王、紹運錄に嵯峨天皇皇女依嬰病爲尼母文屋氏と見ゆ
 ○將從、原本將を侍に作る閣本中本谷本に據て改む
 ○交野、原本交を郊に作る宮本に據て改む交野は

助遣唐之資也。○戊辰、天皇幸神泉苑、放隼拂水禽。○二月庚午朔、廢務爲遣唐使、祠天神地祇於北野也。○丙子、遣唐使奉幣帛賀茂大神社。是日以從四位上藤原朝臣文山爲內藏頭、云云。從四位下橘朝臣氏人爲大藏大輔、云云。正四位下菅原朝臣清公爲兼但馬守、左京大夫文章博士如故、云云。○戊寅、天皇御紫宸殿、引見遣唐大使副使等、參議右近衛大將橘朝臣氏公降殿宣詔、云云。其詞書笏、賜祿有差、大使綵帛百匹、賞布廿端、副使綵帛八十匹、賞布十端、判官并准判官各綵帛十五匹、賞布六端、錄事綵帛十匹、賞布四端、知乘船事譯語各綵帛五匹、賞布二端、還學僧各綵帛十匹、和泉國人遣唐使准錄事縣主益雄、父散位文貞等、賜姓和氣宿禰、又改本居貫附右京二條二坊。○壬午、天皇幸神泉苑、放鶴隼、山城國綴喜郡空閑地四町、賜掌侍從五位上大和宿禰館子、河内國丹比郡荒廢田十三町、充皇太后宮、後院、古市郡空閑地四町、賜繁子內親王。○丙戌、於八省院、賜遣唐使史生已下將從已上位記。○戊子、先太上天皇遊獵河內國交野。○己丑、天皇幸神泉苑、放隼、愛其逸氣、橫生。

交野郡(今北河内郡に入
る)にあり
 ○愛其逸氣横生、原本愛
を受に横を摸に作る愛は
諸本及紀略に據り、横は
水戸校本及類史卅一に據
て改む
 ○正六位上百濟王慶苑、
正六位上の四字は類史九
十九に據て補ふ慶は原本
度に作るを諸本及類史に
據て改む
(三月)算師、蒲生氏職
官志に算師置未詳其始
延喜木工式此准二寮算
師二寮謂主計主稅とあり
 ○彌繼、原本彌を弘に作
る關本西本尾本等に據て
改む
 ○八戸史、録河内諸蕃に
八戸史後漢光武帝孫章帝
之後也とあり
 ○職分資人、既に注す
 ○尸素、尸位素餐なり
 ○外從五位下飯高宿禰、
全雄は天長十年三月(一
一頁)從五位下に叙せら
る、と見えなれば外字
は衍なるべし
 ○弟高、諸本矛盾に作る
 ○右少史、庚戌條には左
大史とあり
 ○正六位上坂本臣、正六

磨則應機、招則易呼、是日授无位百濟王永琳從五位下、元仁是
婦人也○癸巳、授正
六位上百濟王慶苑、百濟王元仁、並從五位下、
 賑給之、三月庚子朔、天皇御紫宸殿、賜侍從已上酒、具醉而罷、壬寅
 木工寮算師八戸史儀益、同姓彌繼等廿人、賜姓常澄宿禰、其先高麗人
 也、甲辰、天皇御前殿、授无位藤原朝臣方子從四位下、云云、以從五位
 下藤原朝臣泉子爲掌侍、云云、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、請返上職
 田職分資人雜色考人衛士、以避尸素之譏、助國用之費、不許、丙午、左
 京人外從五位下飯高宿禰全雄、外從五位下同姓弟高等五烟、改宿禰
 賜朝臣、讚岐國人右少史正六位上坂本臣鷹野、請除讚岐之籍帳、復和
 泉舊墟、許之、其去就由、具于古記、庚戌、是中旬之初也、天皇御紫宸殿
 賜侍臣酒、至御床之下、促侍臣座、令以圍碁且彈琵琶、日斜酒罷、賜大臣
 御衣、是日左大史正六位上坂本臣鷹野等十三人、改臣賜朝臣、建内
 宿禰男紀角宿禰之後也、辛亥、地震、壬子、授造西寺勾當僧九口、位
 各一階、但傳燈住位明遠二階、癸丑、授擬遣唐僧傳燈法師位俊貞等

は原本從四に作る宮本及
 下文に據る又臣字は尾本
 ○和泉舊墟、抄和泉國和
 泉郡坂本郷あり此地なる
 べし
 ○紀角宿禰、原本角を伊
 に作る諸本に據て改む
 ○壬子、此條宮本及類史
 百八十五に據て補ふ
 ○造西寺勾當、西寺は九
 條坊門南にあり東寺と對
 峙す勾當は寺務を司る人
 ○癸丑、此條も亦宮本及
 類史百八十五に據て補ふ
 ○丙辰、此條原本戊午の
 次にありしを干支を推し
 て此に移せり
 ○右近衛、右字は關本西
 本尾本に據て補ふ
 ○百濟國人也、原本此下
 二條に至る四十字あり
 已に二年三月辛酉紀に出
 てたれば宮本に據て削る
 ○大錄、原本大丞に作る
 關本西本中本に據て改む
 ○四條三坊、四條の上に
 某京の二字あるべし
 ○陸奥俘囚、以下以勳功
 足勳也に至る四十字類史
 百九十に據て補ふ
 ○以山城國願安寺云々、
 此十一字類史百八十八に據

八口位各一階、丙辰、大和國山邊郡荒廢田十町、賜宗康親王、戊午、
 外從五位下大判事明法博士讚岐公永直、右少史兼明法博士同姓永
 成等合廿八烟、改公賜朝臣、永直是讚岐國寒川郡人、今與山田郡人外
 從七位上同姓全雄等二烟、改本居貫附右京三條二坊、永直等遠祖、景
 行天皇第十皇子神櫛命也、己未、尾張國飢、賑給之、辛酉、能登史生
 馬史眞主、右近衛同姓貞主等、賜姓春澤史、其先百濟國人也、甲子、山
 城國人式部大錄秦宿禰氏繼、改本居貫附四條三坊、陸奥俘囚外從
 八位上勳五等吉彌侯部於加保、勳九等伴部子羊等、並授外從五位下、
 以勳功足勳也、乙丑、石見國飢、賑給之、以山城國願安寺爲眞言院、
己巳、飛驒國人散位三尾臣永主、右京史生同姓息長等、賜姓笠朝臣、貫
 附右京五條二坊、永主、稚武彥命之後也、伯耆國人陰陽師穴人首玉成
 賜姓春苑宿禰國牽クニケル、壬寅、天皇第一皇子大彥命苗裔也、夏四月、戊寅、遣唐
 使於八省院朝拜、天皇不御例也、但大臣已下參議以上、各在其位、一如
 天皇視告朔之儀、癸未、散位從四位下藤原朝臣眞川卒、乙酉、天皇

るべきか
 ○淵醉、深く酔ふを云
 ○大臣口宣曰、續紀寶龜七年四月壬申遣唐使に節刀を賜ふ詔を參考すべし
 ○聞食止詔布、原本聞上に紫字あり閣本柳本西本等に據て削る
 ○大使共稱唯、狩谷氏云此五字宜分行小字、按に遣唐使に宣る詔なるが故に紫字は云はず聞食止宜と云ふ承る使人唯(ヲ、)と稱す例なるべし
 ○藤原常嗣朝臣、かく名を先にし姓を後に書けるは令制(公式)三位以上先名後姓とあるによれるなり
 ○使次止遺物會、原本止を爾に作る諸本に據る
 ○應爲久、原本久を氏に作る諸本に據て改む
 ○驚呂之伎、伎は原本岐に作る柳本西本に據る
 ○事行奈世曾、原本奈の下に者字あり諸本に據て削る
 ○(五月)己亥朔、此三字宮本に據て補ふ
 ○垂緝、緝は釣糸
 ○陶暑、陶は洵に通ず滌也
 ○伊波比主命、下總國香

唐錄事高岑宿禰貞繼、改宿禰賜朝臣、其先高麗人也。○五月己亥朔庚子、授无位小野神從五位下、依遣唐副使小野朝臣篁申也。山城國人遣唐史生大宅臣福主、改臣賜朝臣。○辛丑、天皇御神泉苑釣臺、且以垂緝、且以陶暑、見參五位已上、不論侍從非侍從、皆賜祿。○癸卯、天皇御武德殿、閱覽四衛府馬射、及五位已上所貢走馬、勝負。○甲辰、亦御同殿觀種種馬藝。○丁未、奉授下總國香取郡從三位伊波比主命正二位、常陸國鹿嶋郡從二位勳一等建御賀豆智命正二位、河內國河內郡從三位勳三等天兒屋根命正三位、從四位下比賣神從四位上、其詔曰、皇孫命爾坐、四所大神、爾申給波久、大神等、彌高彌廣、爾仕奉止奈毛、思保志食、是以件等冠、爾上獻狀乎、中務少輔從五位下藤原朝臣豐繼、內舍人正六位下藤原朝臣千葛等、爾令捧持、奉出、事乎、申給久止、申辭別、氏申給久、神那我良、母皇御孫之御命乎、堅磐、爾常磐、爾護奉幸、爾奉給部、又遣唐使參議正四位下藤原朝臣常嗣、路間无風波之難、久、慈賜比矜賜比天、平久可太良可、爾歸之賜、倍止稱辭、定奉久止、申、是日勅、去歲冬雷、恐有水害

取郡香取神宮の祭神
 ○建御賀豆智命、常陸國鹿嶋郡鹿嶋神宮祭神
 ○河内國、此三字宮本に據て補ふ
 ○天兒屋根命、河内國河內郡枚岡神社祭神
 ○比賣神、兒屋根命の妃天美豆玉照比賣命を云景雲二年四神を大和三笠山に遷祀し春日四所大神と申す
 ○從四位上、上字は諸本に據て補ふ
 ○四所大神、大は原本太に作る諸本に據て改む
 ○上獻狀乎、乎は原本爾に作る諸本に據て改む
 ○千葛、葛は原本万に作る諸本に據て改む
 ○皇御孫之御命乎、乎は諸本に據て補ふ
 ○常嗣乎、嗣下に等字あるべきか
 ○可太良可、堅固らかにてすこやかにの意
 ○稱辭定奉久止、原本稱を爾に久を之に作る稱は閣本柳本中本西本に據り久は諸本に據て改む定は狩谷氏の説に竟の誤なるべしと云其意にて訓べし
 ○冬雷、原本冬雪に作る諸本に據て改む

疫氣之災、宜於東大寺眞言院、建立灌頂道場、置廿一僧、夏中及三長齋月、修息災增益之法、以鎮國家、永爲恒例。○戊申、便附聘唐使、贈遣往歲銜本朝、命入唐使并留學等、在彼身歿者八人位記、以慰幽魂、其詔詞曰、故入唐大使贈正二位藤原朝臣清河可贈從一品、昔膺帝簡、遠効皇華、不利歸帆、還苦漂梗、終在殊域、俄從閔川、瞻彼云亡、良深嗟悼、宜加異代之寵、以申追遠之恩、故留學問贈從二品安倍朝臣仲滿、大唐光祿大夫右散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公贈潞州大都督朝衡、可贈正二品、身涉鯨波、業成麟角、詞峰聳峻、學海揚漪、顯位斯昇、英聲已播、如何不愍、莫遂言歸、唯有揆天之章、長傳擲地之響、追賁幽壤、既隆於前命、重叙崇班、俾洽於命詔、故入唐使贈從四品下石川朝臣道益、可贈從四品上、忘軀徇節、奉使先朝、履義資忠、修聘唐國、路嘗艱苦、泊邁沉痾、未達於中京、奄淪於下窆、興言及此、追以悼傷、傳道靈芝、產兮墳裏、蓋由幽感、克致之歎、宜錫寵章、式旌泉壤、故入唐判官贈從五品下紀朝臣馬主、可贈從五品上、故入唐判官從五品下勳十二等田口朝臣養年、富可贈從五品

○灌頂道場、道字は諸本及類史紀略に據て補ふ
 ○三長齋月、釋氏要覽に不空編案經云諸佛神通之月と見え又涅槃經に年常三長月恒六齋蔬菜節味とあり正五九月を云
 ○増益、東大寺要録に延命に作る
 ○留學、此下に生字あるべきなり
 ○入唐大使、大は關本西本柳本及紀略に據て補ふ
 ○正二位、紀略位を品に作る
 ○藤原朝臣清河、續紀實龜十年二月乙亥に傳見ゆ
 ○從一品、紀略品を位に作る從二品の條亦同じ
 ○普濟帝簡云々、帝簡は尙書に惟簡在上帝之心とあるに據れり簡拔せられて異朝に使し皇威を海外に播けるを云
 ○還苦漂梗、漂梗は駱賓王晚度天山詩に旅思徒漂梗と見ゆ
 ○關川、天長十年三月乙卯紀(四頁)に出づ
 ○瞻彼云亡、瞻は原本勝に作る關本柳本尾本西本に據て改む云は語助の辭
 ○仲滿、續紀仲麻呂に作り唐書日本傳此に同じ

上餘如故、入唐判官從五品下甘南備真人信影可贈從五品上、故入唐判官贈從五品下紀朝臣三寅可贈從五品上、故入唐判官從七品下掃守宿禰明可贈從五品上、馬主以下至明五人位記、共用同詞、往參高選、出使大邦、俄淹泉臺、不歸本土、仁惻念舊、彝典无愆、義不忘勞、朝章斯在、宜申寵渥、用慰亡魂、是日以傳灯大法師位實惠爲律師、○己酉、中納言從三位兼行民部卿藤原朝臣愛發上表曰、云云、○庚戌、駕齋飛來、双集辨官東廳南端、是日右近衛中將從四位下藤原朝臣助衛、勅語、向攝津國難波、海口、慰勞聘唐使發遣、其宣命曰、天皇詔旨、良麻止宣大命、平聞食止宣、大使藤原常嗣朝臣等、奉命退罷以來、幾日、母經須在禮止、旅情波遠、近志止波、不言苦之久、在良幸止奈母所念行、又遠出退、良須在間、波心、良母慰米遣給、路間、无恙、久珍重、久退出、今日乃已止、變顏容、世須、早還參來、止之氏奈母、御酒肴賜、久止、勅大命、平聞食止宣、○辛亥、右少弁藤原朝臣當道、於濱、頭稱揚太政官宣曰、遣唐使判官以下、爲國家、爾有犯事者、隨罪輕重、死罪以下科決、止志氏、大使主小使主、節刀給部、理、諸、知此

○右散騎、唐書右を左に作る
 ○朝衡、原本衡を衛に作る關本柳本尾本に據る
 ○身涉鯨波、大洋を渡るを云
 ○業成麟角、北史文苑傳に學者如牛毛、成者如麟角とあるに出づ稀に見る學術の修得者なるを云
 ○如何不怒、毛詩小雅十月之交章に不怒遺一老箋に心不欲自彊之辭也とあり
 ○揆天之章、文選蜀都賦に揆藻揆天庭注に揆猶發也揆猶蓋也とあり
 ○擲地之響、晉書孫綽傳に綽嘗作天台山賦、辭致甚工、以示范榮期、云卿試擲地當作金石聲也とあり此二句仲麻呂の詞藻文章の雄麗なるを形容せり
 ○隆於前命、曩に從二位を贈れるを云
 ○俾洽於命詔、洽は原本に據る關本柳本中本等に據て改む命は纂詔諸本に據れりさて今に改むれど諸本何れも原本に同じ
 ○石川朝臣道益、紀略に延暦廿年八月庚子從四位下藤原葛野麻呂爲遣唐

狀、謹勸仕奉止宣、是日使等駕舶、○壬子、四船共解纜發去、○癸丑、以治部卿三品阿保親王爲宮內卿、上野大守如故、宮內卿正四位下安倍朝臣吉人爲治部卿、參議從四位上朝野宿禰鹿取爲民部卿、云云、參議從四位上民部卿朝野宿禰鹿取上表曰、臣屈計年算、頽仄已臻、當視朝章、實有期矣、而今嚴旨忽降、以臣拜民部卿、恩貸不訾、懼慙愍萃、臣華顛朽叟、苦羸頓至、於劇官不堪自審、加以臣見中納言從三位藤原朝臣愛發抗表、以茲顯職、讓于愚臣、其文曰、鹿取智涉、古今此詞尤糝、臣器所乖、捫已多慙、豎毛何息、古之人士、不處空名、況臣之庸虛、豈須不避、再三惟忖、無或可安、伏望還收恩詔、免臣憂負、不許、○丙辰、夜裏大風暴雨交切、折樹發屋、城中人家、不壞者希、斯時入唐使舶寄宿攝津國輪田泊、遣看督、近衛一人於舶處、河水汎溢、不得通行、更遣左兵衛少志田邊吉備成、問其安危、播磨國神埼郡荒廢田卅三町、賜宗康親王、○丁巳、河內國入散位鴨部船主武散位同姓氏成等、賜姓賀茂朝臣、速須佐之雄命之苗裔也、○戊午、地大震、○庚申、爲遣唐使、奉山階、田原、柏原、神功皇后等

大使^一從五位下石川朝臣道益爲^副、また廿四年七月壬辰故副使從五位上道益贈^{從四位下}道益頗有^{才幹}美^於風儀^一卒^於大唐明州^一朝廷惜^之卒時四十三^{あり}

○下^多、墓^穴なり

○追^以悼^傷、原本追^を進^に作^る關^本中^本宮^本尾^本等に^據て^改む

○傳^道、道^は原本^導に作^る宮^本水^戸校^本に^據る禮^記大學^の注^に道^は言^也こ^{あり}

○養^年富^可贈[、]贈^字は水^戸校^本に^據て^補ふ

○餘^如故[、]恐^くは誤^脱あ^らむ

○信^影可^贈從^五品^上、原本^信を^言に、品^を位^に作^る諸^本に^據て^改む信^影は延^曆廿^四年^七月^壬辰^遣唐^使判^官なる

○從^七品^下掃^守宿^禰、七^は五^の誤^{なる}べし

○本^土、原本^本大^に作^る宮^本水^戸校^本に^據る

○仁^惻、原本^仁則^に作^る宮^本に^據る孟子^公孫^丑上^篇に^惻隱^之心^仁之^端也^こあり

○實^惠、原本^實を^關に^作る諸^本に^據て^改む惠^は水

陵幣帛曰、天皇大命以、掛畏岐山階御陵、爾恐美恐美毛、申賜部止白久、參議正四位下藤原朝臣常嗣等、爲大使、遣唐國使人、止母、路間無風波之難、久慈賜比矜賜比氏、平久可太良可、爾歸志賜止志氏、參議從四位上文室朝臣秋津、常陸權介正五位下永野王、內舍人正六位上良岑朝臣清風等、平差使、氏恐美恐美毛、申賜久止申、○壬戌、東西兩京人民病苦、賑給之、○癸亥、以平城京內空閑地二百卅町、奉充太皇太后、朱雀院、○甲子、皇太子入朝、問安而退、中使出傳勅答、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、從二位行大納言兼皇太子傳藤原朝臣三守、正三位行中納言藤原朝臣吉野、從三位藤原朝臣愛發、權中納言從三位兼行左兵衛督藤原朝臣良房、從四位下行勸解由長官藤原朝臣雄敏等上表言、臣聞、順風呼者、易爲氣、因時行者、易爲力、今之所祈、蓋此之謂矣、故左大臣贈正一位藤原朝臣冬嗣、情深謙挹、義貴能施、遂乃折割食封千戶、貯收於施藥勸學兩院、藤原氏、諸親絕乏者、同氏子弟勤學之輩、量班與之、但封邑之賞、人歿則已、所以買置田業、散在諸國、創業之始、壤利所輸、不須督促、全入

戶校本懸^に作^る元^亨釋^書三^に實^慧傳^{あり}

○辨^官東^廳、辨^官廳^は太^政官^の東^西に^{あり}東^廳は左^辨官^の廳^{なり}東^は原本^なし諸^本惠^に作^るは東^字の訛^{なり}故^に之^を補^ふ

○慰^米、原本^米を^未に^作る諸^本に^據て^改む

○御^酒香[、]原本^香を^有に^作る諸^本に^據て^改む

○濱^頭、難^波津^の海^門御^津埒^{なり}

○爲^國家^爾有^犯事^者、纂^詰に^按爾^有問^蓋有^脱字^也宜^補丹^誠乎^竭世^若等^數字^こ云^り

○大^使主^小使^主、大^使副^使を^かく^記せ^り古^語なる^べし

院廩、大臣歿後、巧避多端、合輸不輸、十而八九、此則物色非公、人情不畏、州縣僻遠、投覈不由之所致也、伏以臣因舊績、永錫功封、悠悠眇身、靡不沾澤、夫毀家益國、臣節攸先、以此拜章、血誠奉返、於是逸恩者戢翼、赴賞者反蹤、憑力大臣、理固宜然、而墳土未乾、陵遲儻及、在於生者、不忍緘吞、伏冀乾慈殊賜接援、下知國司、令加檢送、然則勢易於走、丸焉事同於轉、圓矣、擾公之妨細、而濟物之矜大也、緬彼幽魂、戴光寵於窀穸、凡厥眷屬、陶寶化而俯仰、詔報曰、情切仁義、事憑興復、宜依來請、助彼周急、焉賜信濃國小縣郡公田十二町、彈正尹秀良親王、

○知^此狀[、]原本^知を^如に^作る諸^本に^據て^改む ○解^纜、抄^舟車^部に^纏考^聲切^韻云^纜（度^毛豆^奈）維^舟索^也こ^{あり} ○鹿^取爲^民部^卿、鹿^字は諸^本に^據て^補ふ ○類^仄、類^類仄^景なり補^任に^據るに^鹿取^此時^年六^{十三} ○當^視朝^章、視^は原本^諦に^諸本^諦に^作る水^戸校^本に^據て^改む視^朝章^こは官^職を^視ふ事^{なり} ○不^嘗、嘗^は量^也 ○華^頭朽^叟、華^頭は白^髮、朽^叟は老^翁なり原本^華頭^を華^頭に^作る關^本柳^本に^據る但^し諸^本頭^を頭^に作^るは訛^{なり}故^に之^を改^む ○苦^羸頓^至、苦^み疲^る、こ^の卒^に至^るなり ○於^劇官[、]於^上に^脱字^{ある}べし ○愛^發抗^表、已^酉條^に愛^發上^表曰^云々^こある是^なら^む ○讓^于愚^臣、于^は原本^分に^作る誤^なれば^改む ○智^涉古^今、智^は原本^知に^作る諸^本に^據る ○尤^批、後^漢書^儒林^傳注^に批^粟不^成喻^義之^乖僻^也こ^{あり}讓^るを^云 ○捫^己、捫^は摸^也は^かる^{なり} ○惟^村、原本^惟を^推に^作る諸^本に^據て^改む惟^は思^也村^は度^也 ○夜^裏、原本^裏を^暴に^作る諸^本に^據て^改む ○發^屋、原本^發を^廢に^作る諸^本に^據て^改む ○輪^田泊[、]原本^泊を^澳に^作る紀^略に^據て^改む古^への務^古兵^庫津^の別^名なり ○看^賢、檢^非違^使廳^に看^賢長^六十^六人^{あり}諸^國發^遣に^充つ ○問^其安^危、原本^問を^取に、安^危を^充の^一字^に作^る問^は尾^本に^據り安^危は關^本柳^本水^戸校^本及^紀略^に據^て改^む ○宗^康親^王、仁^明天^皇皇^子 ○武^散位[、]武^官の^散位 ○速^須佐^之雄^命、之^雄の^二字^は伴^イ本^に據^て補^ふ ○地^大震[、]原本^大地^震に^作る諸^本に^據て^改む ○奉^充、原本^充を^先に^作る諸^本に^據て^改む ○朱^雀院[、]拾^芥抄^中未^に累^代後^院或^號四^條後^院三^條北^朱雀^西四^町四^條北^面坊^城東^中又^至亦^如之^及莫^又至^亦如^之 ○從^三位^藤原^朝臣^愛發[、]私^記に^從三^位上^或云^據補^任當^有中^納言^三字 ○上^表言[、]紀^略言^を曰^に作^る ○順^風呼

者云々、此の二句鹽鐵論論功篇に出づ。○所祈、祈は求也。○謙挹、挹は通抑退也。○折割、原本割を割に作る諸本に據て改む。○食封千戸、祿令に左右大臣食封二千戸とあり其半を割て施樂勸學の料に充つるなり。○於施樂勸學兩院、於字は柳本及紀略に據て補ふ施樂院は拾芥抄中末に藥院唐橋南室町西云々、施樂院同所也東五條藤氏先祖申納諸國藥種養病人所也有使以辨別當主典及外記爲別當とあり天平二年始て之を置き藤原氏の一人を別當とし東西悲田院の別當を兼ねしめ飢餓病癘疾の人々を救濟する所とす勸學院は同抄に三條北壬生西(一丁)藤氏學生住也とあり弘仁十二年藤原冬嗣藤氏の子弟を教育せむが爲に之を設く。○勸學之輩、原本勸を勸に作る閣本柳本宮本に據て改む。○封邑之賞云々、祿令に四等の區別あること見ゆ。○買置田業、田業は田地と云が如し業は財產田地の屬を云、閣本柳本等置を立に作る。○壤利、原本壤利に作る閣本柳本等に據て改む。○歿後、原本歿を没に作る今諸本に據て改む。○合輪、原本合を令に作る文意を檢へて改む。○物色非公、原本公を分にする諸本に據て改む私領の地にして公の物にあらずるを云。○人情不異、諸本人を之に作る。○功封、原本封を賞に作る諸本に據て改む。○以此拜章、纂詰に以此以下恐有「錯誤」と云り。○逸恩者、私記に按逸浴乎と云り。○陵運橋及、忽ちに衰ふるを云。○緘吞、纂詰に吞疑口字之訛と云、或は緘管吞聲の略にもあるべし隋書王孝籍傳に風霜侵骨髓安可謂舌緘管吞聲歟と見ゆ。○勢易於走丸焉、漢書通傳に猶如阪上走丸とあるに出づ。○事同於轉圓矣、孫子に如轉圓石于千仞之峯者勢也とあるに出づ原本圓を閣に作る諸本に據て改む。○窳劣、窳を云窳は原本宅に作る諸本に據て改む。○陶寶化、寶化は皇化に同じ陶は陶冶也化育の意、藤氏一門皇化に浴して聖德を仰ぎ奉るべしとあり。○情切仁義、原本切を功に作る諸本に據て改む。○周急、既に注す急迫せるものより先づ救濟するを云。○秀良親王、嵯峨天皇太子

(閏五月) 閏五月、按此月庚午以下錯簡多し原本戊寅(十日)丙子(八日)壬戌(五月廿四日)壬午(十四日)壬辰(廿四日)癸巳(廿五)辛巳(十三日)壬午(十四日)乙酉(十七日)丁酉(廿九日)庚午(二日)戊寅(十日)辛卯(廿三日)以上の如く列叙す今宮本及紀略に據て訂正す

○閏五月己巳朔、皇太子朝覲、是日以越中介從五位下石川朝臣越智人爲大膳亮、大膳亮外從五位下吉田宿禰高世爲越中介、○庚午、伯耆國飢、賑給之。○丙子、以西大寺僧傳灯大法師位慈朝爲律師、河内國人遣唐音聲、長外從五位下良枝宿禰清上、遣唐畫師雅樂答笙師同姓朝生、散位春道宿禰吉備成等、改本居貫附右京七條二坊。○戊寅、右京人內藏大屬百濟連清繼、賜姓多朝臣、清繼誤負後父之姓、今有落葉歸根之請、右京人左衛門權少志大原史河麻呂、改史賜宿禰、河麻呂

次にありしを此に移す
○遣唐音聲長、大藏省式に見ゆ
○答笙師、原本答を笛に作る閣本柳本中本等に據て改む令集解所引亦同じ纂詰に凡笙合六管成聲故曰合笙含味吹之故曰合笙後世冠竹作答作蓋蓋本邦會意字と云り
○多朝臣、録左京皇別に見ゆる多朝臣とは同名異系なり
○後父、原本父を文に作る柳本宮本に據て改む
○落葉歸根之請、岑參詩に隱几聞吹葉乘秋眺歸根とあり
○大原史、録左京及右京諸蕃に見ゆ
○河麻呂之先、河字は諸本に據て補ふ
○若狹薩摩云々、此十二字原本下文辛卯條の上にあり宮本に據て此に移す
○鄰穆、玉篇に穆は和也又與睦同とあり隣邦と和睦するを云
○皇華、原本華を帝に作る柳本に據て改む
○巨唐、大唐と云に同じ
○雖知利涉、利涉は易需卦に利涉大川、疏に不

之先、百濟國人也、若狹薩摩兩國飢、並賑給、云云。○辛巳、恐遣唐使舶、風濤或變、漂著新羅境、所以太政官准舊例、牒彼國執事、先告諭之曰、不漁舊好、鄰穆彌新、迺發皇華、朝章自遠、仍今遣使修聘、聘巨唐、海晏當時、雖知利涉、風濤或變、猶慮非常、脫有使船漂著彼境、則扶之送過、不俾滯闕、因以武藏權大掾紀三津爲使、費牒發遣、賜三津御被、是日大安寺僧傳灯大法師位惠靈俗姓名紀朝臣春主、叙正六位上、爲遣唐譯語、兼但馬權掾。○壬午、右京少屬秦忌寸安麻呂、造檀林寺使、主典同姓家繼等、賜姓朝原宿禰、染作遣唐料雜物處、權用皇帛一匹、忽隨颺風、飛揚卅許丈、須臾墮侍從所。○乙酉、美濃國人主殿寮少屬美見造貞繼、改本居貫附左京六條二坊、其先百濟國人也。○辛卯、改大和國人大宰大典正七位下神服連清繼本居貫附右京。○壬辰、左京人從五位下清峯宿禰門繼、改宿禰賜朝臣。○癸巳、河内國人美濃國少目下、村主氏成、散位同姓三仲等、賜姓春瀧宿禰、其先遠祖出自後漢光武帝之後者也。○丙申、授遣唐留學元興寺僧傳燈住位常曉滿位。○丁酉、奉貴布禰、丹生川上等

患於險あるに據れり
 ○滯閣、原本閣を邊に作
 る閣本柳本中本等に據て
 改む閣は遮翬也止也塞也
 ○紀三津、紀字は宮本及
 紀略に據て補ふ山崎校本
 には堀本に據れりて紀
 朝臣の三字を補へり
 ○是日大安寺僧云々、私
 記に日一作月或云以下
 三十七字疑當、在前月中
 ○右京少屬、以下賜姓朝
 原宿禰に至る廿八字原本
 壬辰條の上にありしを此
 に移す
 ○檀林寺、嵯峨野にあり
 橋太后の所建なり
 ○廳風、抄地部に廳文
 選詩云廻廳卷高樹和名
 豆无之加世、兼名苑注云
 廳者暴風從下而上也
 ○冊許丈、原本冊を廿に
 作る諸本に據て改む
 ○侍從所、原本所を前に
 作る閣本柳本中本等に據
 て改む
 ○美見造、續紀延暦七年
 九月丁未紀(下四七一頁)
 に見ゆ
 ○大宰大典、原本大を太
 に作る諸本に據て改む
 ○神服連、神祇令神衣祭
 條に見ゆ

神幣帛也、是日大索城中、○六月戊戌朔、能登國飢、賑給、太政官牒僧
 綱曰、奉勅、日者、陰雨不降、陽早擲旬、不有預慎、恐損秋稼、宜告東西二寺、
 并十三大寺、畿内諸寺、轉讀經王、令祈甘雨、○癸卯、奉松尾賀茂、御祖、住
 吉、垂水等社幣、祈雨也、○戊申、天皇於神嘉殿視神事、○庚戌、地震、○壬
 子、山城國人右大衣阿多隼人逆足、賜姓阿多忌寸、○戊午、天皇御紫宸
 殿、賜侍臣酒、且令圍碁、天皇依炎熱、脫御靴、勅侍臣同亦脫之、喚相撲司
 鼓、令奏音樂、侍臣具醉、賜親王已下五位已上御衣被、有差、○壬戌、美濃
 國席田郡空閑地七十町、賜宗康親王、近江國荒廢田十七町、加賀國百
 九十町、備前國空閑地冊四町、賜三品彈正尹秀良親王、○秋七月戊辰
 朔、天皇御紫宸殿、皇太子朝謁、賜侍臣酒、是月、元據頒曆爲小月、而更據
 七耀曆、改爲大月、又八月、大改爲小月、九月、小改爲大、十月、大改爲小、時
 有曆博士二人、其執見不同也、議者討論、以七耀之說爲得、故改從之、○
 癸酉、以文章博士從五位下惟良宿禰貞道爲圖書頭、是日東方白虹
 見、○乙亥、天皇於神泉苑、觀相撲節、○丙子、御紫宸殿、覽相撲司、音樂奏

○壬辰、此條及癸巳條は
 原本辛巳條の上にありし
 を此に移せり
 ○下村主、錄左京諸蕃に
 見ゆ
 ○三仲等、原本仲を使に
 作る諸本に據て改む
 ○丙申、此條宮本及類史
 百八十五に據て補ふ、宮本
 元興を興福に作る
 ○常曉、元亨釋書卷三に
 傳見ゆ
 ○丁酉、此條原本乙酉條
 の次にありしを此に移す
 ○幣帛也、也字は中本及
 紀略に據て補ふ
 ○是日大索城中、此六字
 閣本柳本中本宮本及紀略
 に據て補ふ
 ○(六月)能登國飢賑給、
 原本此六字下文甘雨の下
 に重出す此を存して彼を
 削る
 ○日者、原本日を日に訛
 れるを改む
 ○擲旬、私記云擲按涉乎
 ○秋稼、閣本柳本中本等
 秋を百に作る
 ○祈甘雨、原本祈を降に
 作る柳本に據て改む
 ○垂水、神名式に攝津國
 豐嶋郡垂水神社(名神大
 月次新嘗)あり今豐能
 郡豐津村垂水にあり

舞、將夕乃罷、○辛巳、因幡國飢、賑給、伊勢國壹志郡空閑地百卅町、賜左
 近衛少將從五位下橘朝臣岑繼、○壬午、勅曰、方今時屬西成、五穀垂穗、
 如有風雨、愆序、恐損秋稼、宜令五畿内七道諸國、奉幣名神、攘災未萌、其
 幣帛料用正稅、長官率僚屬、自親齋戒、祭以神在、必致徵應、大宰府馳
 驛言、今月二日、遣唐使四舶共進發畢、是日大宰府馳驛、奏遣唐使第一
 第四兩船、漂蕩却廻之狀、兩船密封、奏同共到來、○癸未、復勅曰、如聞諸
 國疫癘間發、天死者衆、夫銷灾肯招福祐者、唯般若冥助、名神嚴力而已、宜
 令五畿内七道諸國司、轉讀般若、走幣名神、○甲申、勅符大使藤原朝臣
 常嗣、判官菅原朝臣善主等、得今月六日九日二道飛驒奏狀、具知漂苦
 廻著肥前國也、使等忠貞之操、不敢告勞、蒙冒險難、廻涉蒼海、而事不諧
 偶、中路却廻、靖言念之、憂心何已、今案奏狀、兩船並已無完、必須改營、宜
 俟修造畢、以遂渡海耳、其第二第三等船、未知平不、鬱嗟于懷、又勅符大
 宰大貳藤原朝臣廣敏等、得今月十日飛驒奏、知遣唐使第一第四兩船
 廻著肥前國之狀、使等不利西颿、漂廻營艱、宜安置府館、迄于更發、依舊

○神嘉殿、拾芥抄中末に神嘉殿中院正殿あり中院は一に中和院又神今食院と云武徳門の西にあり○庚戌、此條は宮本及類史紀略に據て補ふ
○右大衣、準人司式に凡大衣者撰譜第内置左右各一人(大隅爲左阿多爲右)教道準人催造雜物云々あり
○阿多準人、録山城神別に富乃須佐利乃命之後也○相撲司鼓、原本鼓を并に作る諸本に據て改む下文七月乙亥條參考すべし
○席田郡、抄國郡部美濃國席田(無之呂太)あり今本巢郡に入る
○卅四町、原本卅四町に作る諸本に據て改む
○(七月)七耀曆、唐書藝文志に吳伯善陳七耀曆五卷あり是なり
○八月大改爲小月、閣本西本小月の月の字なし
○執見、紀略說の一字をす
○故改從之、原本故を放し作る宮本水戸校本及紀略に據て改む
○是日東方白虹見、東以下の五字紀略壬申に係く
○壹志郡、原本壹志を堂に

供億、又案使奏、兩船摧殘、更須改營、府宜便修造、令得渡海、其匠手者、復將擇遣、又第二第三兩船、疑亦或廻著、宜值嘉鳴涯畔、可著船處、爲置斥候、以備接援、如有漂著、亟以上奏、是日安房國無位安房大神、奉授從五位下、○戊子、雷雨殊切、人皆警伏、至于夜分、震朱雀柳樹、○己丑、遣唐持節大使藤原朝臣常嗣等上表言、伏奉今月十七日璽書、精守飛越、手足未厝、是知玄鑿無私、能照表裏、潢渥不匱、普霑巨細、臣常嗣等、自營艤甫畢、遠入大瀛、日夜漂簸、了無生賴、只待蕭鏐於水波、占殯葬於魚腹、而天不殲人、裁泊舊壤、臣等固雖、万禱靈祇、再延瞬息、猶傷給詔未達、心神半死、今特賣叡旨、慰喜非常、臣等願躬庸櫟、曷答重厚、更煩天覽、伏增怙焦、○辛卯、大宰府馳驛奏、第二船漂廻之狀、○壬辰、勅符副使小野朝臣篁得、今月八日飛驒奏狀、知歸著肥前國松浦郡別嶋也、近聞第一第四兩隻船、半路漂廻、疾壞未弭、尋省茲奏、轉以驚嗟、本謂忠貞、必蒙利往、不知此行何負、幽明雖无巨災、艱虞足患、今案來奏、船船有損、舩艇亦失、還大宰府、繕補其不完不足者、然後與持節使等、共果國命、

作る諸本に據て改む ○壬午、原本此二字なし類史十一及紀略に據て補ふ ○時屬西成、時字は柳本及類史紀略に據て補ふ西成は尙書堯典に平秩西成あり秋に物の成熟するを云 ○撰災、原本撰を撰に作る閣本柳本に據る ○齋戒、原本戒を或に作る水戸校本に據て改む ○祭以神在、祭字は柳本宮本に據て補ふ宮本水戸校本以を如に作る以は似と同じ論語八脩に祭神如在に據れり ○兩船、原本船を舩に作る諸本に據て改む ○癸未、此條類史百七十三及紀略に據て補ふ ○菅原朝臣、朝臣の二字は宮本に據て補ふ ○漂著廻著、原本漂廻共著に作る柳本に據て改む ○嗟乎懷、原本于を乎に作る柳本に據て改む ○第一第四兩船、兩字は柳本に據て補ふ ○西颺、颺は帆の字なり玉篇に颺馬疾歩也風吹船進也とあり ○便修造、原本便を便に作る諸本に據て改む ○安房大神、神名式に安房國安房郡安房坐神社(名神大月次新嘗)とあり今同郡神戶村太神宮に鎮座官幣大社に列す ○朱雀柳樹、朱雀は朱雀門を云 ○潢渥不匱、纂註に潢渥渥字之譌と云蔡襄謝官表に誕推渙渥施及愚蒙と見え恩澤の淺からざるを云 ○巨細、原本巨を臣に作る諸本に據て改む ○營艤、營は船を造る、艤は船を整ふるを云 ○生賴、晉書に衆役煩興軍旅不息加以久早穀貴百姓無生賴矣とあり生むとする時みなしと云なり原本賴を類に作る諸本に據て改む ○蕭鏐、詳ならず ○占殯葬於魚腹、原本葬を蓋に作る水戸校本に據て改む屈原懷沙賦に寧赴常流而葬乎江魚之腹中耳と見え水中に溺死するを云 ○裁泊舊壤、原本裁を載に作る閣本柳本中本等に據て改む裁は僅也僅かに死を免かれて本土に漂泊せりとなり ○雖萬禱靈祇再延瞬息、靈祇は神明、瞬息は瞬間の生命なり原本雖を維に作る諸本に據て改む ○給詔、山崎校本閣本に據て詔を詮に作る ○今特、原本今持に作る諸本に據る ○庸櫟、凡庸不才なるを云魏書宗欽傳に伊余櫟散才至庸微とあり ○怙焦、文選思支賦に怙焦原而跟とあるに據れり戰々兢兢と云が如し ○兩隻船、原本隻を隻に作る閣本柳本中本に據て改む ○漂廻疾壞、原本廻及壞字なく疾ん疾に作る紀略に據て補ひ改む ○尋省茲奏、原本省を有に作る諸本に據て改む ○必蒙利往、易復卦等に利有故往とあるに據れり ○何負幽明、幽明は鬼神を云 ○艱虞、原本艱を難に作る柳本中本宮本等に據て改む閣本は原本に同じ ○舩艇、抄舟車部に艇唐韵云艇(楊氏漢語抄云艇乎天福游艇波師不禱)小船也釋名云二人所乘也とあり原本舩を艇に作る水戸校本に據て改む

○(八月)戊戌朔、朔字は宮本水戸校本に據て補ふ
○十六人、原本六を三に作る諸本及紀略に據る
○編板、板を以て編める所謂筏なり
○水脚十六人、水脚は水手に同じ原本六を三に作る諸本及紀略に據て改む
○桴、抄舟車部に論語注云桴編竹木大曰桴小曰桴(以賀多)とあり
○判官已上、山崎校本に

○八月戊戌朔、大宰府馳驛奏、遣唐使第三船水手等十六人、駕編板漂著之狀、○己亥、勅符遣唐大使藤原朝臣常嗣、省大宰府去月廿日飛驒奏言、第三船水脚十六人、編板如桴、駕之漂著對馬鳴南浦、其水脚等申云、舶實依數解散者、翻水不收、悔而何及、言念災變、永用憫傷、又案同府別奏言、彫弊未復、旱疫相仍、使人等六百有餘、不堪供給、伏望准實字寶龜

上疑下云云、從ふべし
 ○還堵、説文に堵垣也、また相安曰「安堵」とあり故郷を云
 ○使下之徒、纂詰に下を丁に改るは非なり
 ○知乘船事、原本乘を來に作る諸本に據て改む
 ○諸路之人、原本諸路を謫居に作る闍本柳本に據て改む海路をよく知れる人なり
 ○善世宿禰、録に見えず
 ○慶命、鎮守將軍教俊の女、嵯峨天皇の後宮に入り二皇子源定源鎮を生む
 ○甲寅、此條は宮本及類史十九に據て補ふ
 ○乙魚、原本魚を兼に作る諸本に據て改む
 ○女御、女御の名正しく史に見えたるは之を始とす雄略紀七年に見えたるは天皇のめし給ふ御女(ミメ)といふ義なり此後令制の妃夫人を立てず女御益々貴くして皇后に亞げり
 ○眞濟、元亨釋書三に傳見ゆ
 ○柂折棚落、柂は抄舟車部に舵唐韻云舵正、船木也漢語抄云柂(船尾也或作柂和語云太以之云々)

例、使人入京、水脚還郷、又留判官錄事各一人、與府司共修造破船者、並依來奏、使等宜知此情、判官已上、至于水手、惣自舟途入京還堵、脱有不欲更入都者、隨願駐之、但大使副使、去留任意、其緣修造事、應留判官并錄事者、任大使之簡定、○辛丑、遣唐第三船人九人、駕桴漂著肥前國、○乙巳、勅曰、遣唐第三船、未遂利涉、半途漂損、纔乘桴所著、使下之徒廿有五人、漂著之後、已經旬日、而判官錄事史生知乘船事等惣一百餘人、未知所去、存亡難量、宜仰大宰府、差海邊諸路之人、遣絕鳴無人之處、漂損人物、一向尋覓、募以穀帛、○辛亥、河内國人左少史善世宿禰豐上等、改本居、貫附右京四條二坊、○癸丑、正三位百濟王慶命爲尙侍、○甲寅、伊勢大神宮禰宜正六位上神主繼麻呂、豐受神禰宜正六位上神主虎主、並授外從五位下、○丁巳、正五位上紀朝臣乙魚授從四位下、柏原天皇(稱武)女御也、是日大宰府奏言、問遣唐第三船漂蕩之由、眞言請益僧眞濟等、僅作書答云、柂折棚落、潮溢人溺、船頭已下百卅人、任波漂蕩、爰船頭判官丹墀文雄議云、我等空渴死船上、不如壞船作筏、各乘覓水、錄事已下、

柂は向に柂野王案柂(不奈太那)大船旁板也
 ○百卅人、原本卅を卅に作る諸本に據て改む
 ○醋食、醋は類史醋に作る諸本に據て改む
 ○施布帛、原本布施の二字に作り帛字なし施布は闍本柳本中本及類史百八十七に據り帛は類史に據て補ふ
 ○慧解者、原本慧を惠に作る諸本に據て改む
 ○掛衣、抄裝束部に釋名云挂(音圭漢語抄作掛云字知岐)婦人上衣也あり此は常の掛なり
 ○九月侍臣、原本侍を待に作る諸本に據て改む
 ○於敷政日華兩門、拾芥抄中末に敷政門は宜陽殿の北に在りて東向、日華門は春興殿宜陽殿の間に在りて同じく東向と云原本於字なく兩を西に作る於は類史七十五に據て補ひ兩は諸本に據て改む
 ○壬申、原本申を午に作る紀略に據て改む
 ○尙縫、後宮職員令に尙縫一人掌裁縫衣服纂組之事兼知女功及朝參あり
 ○和氣朝臣緒繼、氣字は

爭放取舶板、造桴各去、自外无復所言、○辛酉、延五十日禪僧於八省院、轉讀大般若經、以禦疫氣、諸司醋食、○壬戌、大宰府馳驛、奏遣新羅使進發、并遣唐第三船漂著對馬嶋上縣郡南浦、船上唯有三人之狀、○丙寅、八省院禪僧轉經、竟施布帛及度者各一人、天皇御紫宸殿、引禪僧中慧解者十人、令一一論義、亦施掛衣并御被各有差、○九月丁卯朔、天皇御紫宸殿、賜侍臣酒、遣近衛官人於敷政日華兩門、闕外、制五位已上遲參者、唐突而入也、計闕內所陪非侍從以上、賜綿有差、○壬申、尙縫從四位下和氣朝臣緒繼卒、○乙亥、天皇御紫宸殿、宴重陽節、令文人賦蟋蟀吟之題、日暮宴罷、賜祿有差、○丁丑、遣左兵庫頭從五位上岡野王等於伊勢大神宮、申今月九日、宮中有穢、神嘗幣帛、不得奉獻之狀、右京人造兵司大令史朴弟春、賜姓貞宗連、其先百濟國人也、○辛巳、遣唐大使副使等、自大宰府入京、奉還節刀、○乙酉、參議從二位紀朝臣百繼薨、年七十三、○辛卯、以右中弁正五位下伴宿禰氏上、爲修理遣唐舶使長官、大工外從五位下三嶋公嶋繼爲次官、○乙未、山城國久世郡空閑地三町、

紀略に據て補ふ
 ○令文人、原本令を命に作る類史七十四に據る
 ○鷓鴣、夏ぜみ所謂蝸にして莊子逍遙遊篇及王維詩に出づるに據れり
 ○神嘗幣帛、神嘗は諸神に先だちて新穀を伊勢神宮に奉る祭なり
 ○奉獻、原本獻を致に作る紀略に據て改む
 ○朴弟春、閩本中本水戸校本等弟を矛に作り宮本第に作る今西本に據る
 ○奉還節刀、節刀を賜ふこと四月丁酉紀に出づ
 ○乙酉、此條紀略に據て補ふ
 ○次官、原本官を宮に作る柳本西本に據て改む
 ○十月丁酉朔、此條類史百五十九に據て補ふ
 ○丙午、此條紀略に據て補ふ
 ○中使、宮中よりの使
 ○十三箇寺、十五大寺より二箇寺を除きたるものなるべし
 ○眞繼、眞字は閩本に據て補ふ
 ○鹿嶋神禰宜、神禰の二字は宮本水戸校本及類史十九に據て補ふ
 ○以山城國處之第一、平

賜无品時康親王、○丙申、備前國人外從八位上石生別公諸上等、改本居貫附右京八條三坊、美濃國人正親大令史勝廣吉等、改本居貫附左京四條三坊、○冬十月丁酉朔、出雲國出雲郡古荒地卅町、爲勅旨田、○丙午、遣中使於十三箇寺、令行讀經事、以綿千屯爲布施、緣內裏有物恠也、
 ○己酉、讚岐國人散位佐伯直眞繼、同姓長人等二煙、改本居貫附左京六條二坊、○丙辰、下總國言香取神禰宜、准常陸國鹿嶋神禰宜、遷代相續、同令把笏、許之、○戊午、遣新羅使紀三津還到大宰府、○己未、承前之例、畿內國次、以大和國處之第一、勅宜據新式改之、以山城國處之第一、
 ○癸亥、肥前國神埼郡空閑地六百九十町、爲勅旨田、○十一月丙寅朔、勅護持神道、不如一乘之力、轉禍作福、亦憑修善之功、宜遣五畿七道僧各一口、每國內名神社、令讀法華經一部、國司檢校、務存潔信、必期靈驗、
 ○丁卯、山城國綴喜郡乘田二町、河內國荒廢田卅三町、賜時子內親王、
 ○戊辰、近江國野洲郡空閑地卅五町、賜本康親王、○己巳、美濃國不破郡仲山、金山彦、大神、奉授從五位下、即預名神、○庚午、從四位上今木大

安に遷都し給へるによれり
 ○癸亥、此條宮本及類史百五十九に據て補ふ
 ○十一月神道、神社及祭祀の意
 ○不如一乘之力、原本如を知に作る水戸校本西本中本に據て改む一乘とは大乘に權實の別あり法相三論等を權大乘とし華嚴天台眞言等を實大乘と稱す權大乘は三乘各別法を立つるが實大乘は之を立てすして一切衆生を成佛せしむるが故に一乘法と稱すといふ
 ○時子內親王、仁明天皇皇女
 ○仲山金山彦大神、神名式に美濃國不破郡仲山金山彦神社(名神大)、今同郡宮代村に鎮座南宮神社と稱し國幣大社に列す
 ○今木大神、神名式に山城國葛野郡平野祭神四座とある其の一座なり久度古開兩神亦同じ古開は柳本には古開とあり
 ○酒解神、神名式に山城國葛野郡梅宮神四座(並名神大月次新嘗)とある四座の一座なり
 ○大若子神、梅宮四座の一なり大字は宮本に據て補ふ
 ○小若子神、同上
 ○梅宮社、以上の三座に酒解子神を加へ四座とす同郡梅津村西梅津に鎮座官幣中社に列す
 ○水主神、神名式讚岐國大内郡水主神社、今大川郡譽水村水主に坐す
 ○高子內親王、仁明天皇皇女、原本高を亮に作る山崎校本に據て改む
 ○恠異之雲、之字は柳本に據て補ふ
 ○消滅、閩本中本銷滅に作る
 ○幹了、考課令義解に強幹了自能堪事也とあり
 ○道善宿禰、姓氏錄に載せず山崎校本道善を善道に作る
 ○故從七位下我孫公諸成、錄攝津雜姓に我孫豐城入彦命男八綱多命之後とあり和泉雜姓には我孫公見ゆ、纂詰に故疑外字譌故殺故也故人賜姓於理無之と云り
 ○阿比古、原本比を北に作る諸本に據て改む
 ○癸巳、此條宮本及類史五十四に據て補ふ粟は類史粟に作る今宮本に據る

神奉授正四位上、從五位下、久度古開兩神並從五位上、○壬申、奉授无位酒解神從五位上、无位大若子神、小若子神、並從五位下、此三前坐山城國葛野郡梅宮社、讚岐國水主神、奉授從五位下、○癸酉、山城國久世郡空閑地二町、賜高子內親王、○甲戌、有恠異之雲、竟天、其端涯在良坤兩角、經二尅程、稍以消滅、○庚辰、仰石見國、選幹了、百姓四人、習採銅、免其雜徭、右京人散位正五位下、道善宿禰眞貞、一烟、改宿禰賜朝臣、○壬辰、河內國人故從七位下我孫公諸成、散位同姓阿比古道成等、賜姓秋原朝臣、○癸巳、因幡國八上郡人私部粟足女、一產二男二女、給正稅三百束、及乳母一人、公糧、令以養育、

○十二月乙未朔、此三字宮本に據て補ふ

○十二月乙未朔丁酉、遣新羅國使紀三津復命、三津自失使旨、被新羅

作る閣本柳本に據て改む
宮本に阻歎あり
○貞觀、唐太宗の年號、
廿三年にて盡く、我推古
天皇三十五年より大化五
年に至る
○骨齒相須、左傳停五年
に諺所謂輔車相依唇亡齒
寒者あるに出で利害の
最密なるを云原本唇を唇
に、須を預に作る諸本に
據て改む
○支給、原本支を與に作
る閣本中本等に據て改む
○建禮門南、大内の南面
の門なり宮本及類史三に
は南を而に作る
○困心、毛詩大雅皇矣章
に出づ注に困親也親親
あり
○戸田租、原本租を祖に
作る諸本に據て改む
○且旌門閭、原本旌を旗
に作る閣本柳本等に據り
且字は柳本に據て補ふ
○誕皇子、四年正月戊辰
紀に淳和院皇太后所誕
皇子焉焉あり

○二荒神、神名式に下野
國河内郡二荒山神社(名神大)とあり今國幣中社に列す
○餘如故、此三字恐衍文之山崎校本及私記に云り
○秀良親王、嵯峨天皇皇子
○奉獻清涼
殿、私記に清涼殿一作「物及酒三字」とあれど未ださる本を見ざれば姑く舊に従ふ
○藤原朝臣貞子、右大臣三守の女、清和紀貞觀六年八月三日條に
傳見え成康親王の外に親子平子の二皇女を誕育すとあり
○誕皇子、成康親王に坐す
○卷第五、卷第の二字は閣本柳本尾本宮本等に據て補ふ

誕皇子也、○丙辰、天皇於神泉苑放隼、獲水鳥百八十翼、是日侍從及非
侍從見參者、賜祿有差、○丁巳、奉授下野國從五位上勳四等二荒神正
五位下、餘如故、三品秀良親王、奉獻清涼殿、以賀女御藤原朝臣貞子、誕
皇子也、

續日本後紀卷第五

續日本後紀卷第六

起承和四年正月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉 勅撰

○承和、此二字は宮本に
據て補ふ
【承和四年】戊辰、原本
辰を申に作る干支を推し
て改む
○皇子殤焉、三年十二月
丁未に生れ給へる皇子に
坐す殤は假令義解に謂
未成人死曰殤也とあり
○聽講最勝王經、聽字は
類史百七十七及紀略に據
て補ふ
○崇朝之講竟而、崇朝は
終朝也、而字は諸本に據
て補ふ
○乘輿、乘は閣本西本前
本等變に作り尾本鷲に作
る
○右近衛中將如故、右字
は諸本に據て補ふ
○豐樂殿、紀略殿を院に
作る
○殿上所設、殿字は宮本
及類史七十二に據て補ふ
○忽有物恠、忽字は水戸
校本及類史に據て補ふ物
恠はものけなり

四年春正月乙丑朔、天皇御大極殿、受群臣朝賀、畢宴侍從已上於紫宸
殿、賜御被、○丁卯、天朝朝觀先太上天皇、及太皇太后於嵯峨院、日暮賜
扈從者祿、車駕還宮、○戊辰、淳和院皇太后所誕皇子殤焉、○庚午、恒例
內記今日預設明日可叙五位已上位記、而此般停之、應无叙位事也、是
日勅遣參議民部卿朝野宿禰鹿取於淳和院、奉弔皇子殤、○辛未、天皇
御豐樂院、宴于群臣、賜祿有差、○壬申、天皇御大極殿、聽講最勝王經、皇
太子侍焉、崇朝之講竟、而乘輿還宮、○癸酉、伊豫國人典藥權允物部首
廣宗、其弟眞宗等、改本居貫附左京二條四坊、○丙子、以從五位上良岑
朝臣木連爲右衛門佐、從五位下惟良宿禰春道爲伊勢介、從四位下藤
原朝臣助爲兼尾張守、右近衛中將如故、云云、○戊寅、大極殿最勝會竟

○花欄開鶯、原本花を苑に作る諸本及類史紀略に據て改む鶯は關本西本鶯に作る
 ○賜獻詩大臣以下綿、賜字は類史七十二に據て補ひ綿字は原本給祿の二字に作れるを諸本及類史に據て改む
 ○五箇郡、安濃、邇摩、那賀、邑智、美濃郡なり
 ○神名式所載の神社三十四座あり此十五社は其中にあり
 ○(注)神祇官帳、即ち神名帳なり
 ○(二月)愛宕郡家、愛宕は倭名抄に於多岐と訓り郡家は郡衙なり
 ○廢務、前に注す
 ○十一面大悲者、大悲者は觀世音菩薩の一名、者字は諸本及類史百七十八に據て補ふ
 ○伯耆神、神名式に川村郡波伎神社、今東伯郡日下村福庭
 ○會見郡、此三字山崎校本に據て補ふ
 ○大山神、神名式に會見郡大神山神社、今西伯郡大高村尾高、國幣小社に列す
 ○久米郡、此三字山崎校本に據て補ふ

引其講師及智德僧於仁壽殿、遞令論義、訖施御被、○庚辰、天皇御紫宸殿、觀踏歌、皇太子侍焉、賜侍從已上祿、○辛巳、天皇御豐樂殿、觀射、○壬午、亦欲御同殿、殿上所設御座緣邊、忽有物恠、因停降臨、遣大臣閱視、六衛府射昨日之餘、○甲申、天皇內宴於仁壽殿、令賦花欄開鶯之題、賜獻詩大臣以下綿有差、○丙戌、河內國荒廢田卅町、賜本康親王、○辛卯、在石見國五箇郡中神、惣十五社、始預官社、以能應吏民之禱、久救旱疫之災也、其神名具在神祇官帳、○二月甲午朔、遣唐使祠天神地祇於當國愛宕郡家門前、諸司爲之廢務、○乙未、勅曰、令人主安穩、黎庶和樂、不如十一面大悲者祕密神咒之力、宜普告五畿內七道諸國、請淨行僧七口於國分寺、一七日夜、薰修十一面之法、○戊戌、伯耆國川村郡无位伯耆神、會見郡大山神、久米郡國坂神、及對馬嶋上縣郡无位和多都美神、胡籙御子神、下縣郡无位高御魂神、住吉神、和多都美神、多久都神、太祝詞神、並奉授從五位下、○辛丑、陸奧國言、劍戟者交戰之利器、弓弩者致遠之勁機、故知五兵、更用廢一不可、況復弓馬戰鬪、夷獠之生習、平民之十、不能敵其一、

本に據て補ふ
 ○國坂神、神名式に久米郡國坂神社、今東伯郡中北條國坂
 ○和多都美神、神名式に對馬嶋上縣郡和多都美神社、(名神大)同郡峯村木坂、國幣中社に列す
 ○胡籙御子神、同式に上縣郡胡籙御子神社、同郡琴村
 ○高御魂神、神字は諸本に據て補ふ同式に下縣郡高御魂神社、(名神大)同郡豆酸村東神田
 ○住吉神、同式に同郡住吉神社、(名神大)同郡鷓知村白江山
 ○和多都美神、同式に下縣郡和多都美神社、今住吉神社に合祀
 ○多久都神、同式に下縣郡多久頭神社、同郡豆酸村
 ○太祝詞神、同式に下縣郡太祝詞神社、(名神大)今同郡鷓知村加志、太祝詞は原本大調の二字に作る宮本に據て改む
 ○五兵、弓矢、爰、矛、戈、戟是なり(周禮夏官司右注に據る)
 ○夷獠、廣韻に西南夷謂之獠とあり

然至于弩戟、雖有方方之獷賊、不得對一弩之飛鏃、是即威狄之至尤者也、今見庫中弩、或大體不調、或機牙差誤、又雖有生徒、无人督習、是不置其主司之費、望請准鎮守府置弩師、其公廩不更加舉、分所有准一分給許之、○癸卯、以從五位上藤原朝臣貞雄爲左兵衛佐、是日勅聽大春日、布瑠、栗田三氏、五位已上、准小野氏春秋二祠、時不待官符、向在近江國滋賀郡氏神社、○甲辰、散位從四位下和氣朝臣綱繼卒、○丙午、授從五位下藤原朝臣高扶從五位上、以遣唐大使參議正四位下藤原朝臣常嗣爲兼大宰權帥、左大弁如故、云云、○庚戌、近江國人散位永野忌寸石友、散位同姓賀古麻呂等、改本居貫附左京五條三坊石友之先、後漢獻帝苗裔也、○癸丑、備前國飢、賑給之、○庚申、從五位下菅野朝臣永岑言、亡父參議從三位眞道朝臣、奉爲桓武天皇、所建立道場院一區、在山城國愛宕郡八坂鄉、雖其疆界接八坂寺、而其形勢猶宜別院、由是道俗號曰八坂東院、伏望限以四至、別爲一院置僧一口、永俾護持、許之、○癸亥、近江國野洲郡公田、并荒廢田二百八十五町、賜親子內親王、○三月甲

○大方之廣賊、廣は原本横に作る諸本に據て改む集韻に廣は惡貌とあり
 ○機牙差誤、機は字書に凡發動所由皆謂之機とあり牙は弩牙即ち弦を鈎して矢を發するものなり
 ○又、諸本に據て補ふ
 ○准一分給、主稅式に凡國司處分公解差法者大上國長官六分云々史生一分云々弩師准史生
 ○大春日布瑠粟田三氏、姓氏錄に並に同祖出自、孝昭天皇皇子天足彦國忍人命也とあり小野氏も同祖なり
 ○准小野氏云々、承和元年二月辛丑紀に出づ
 ○甲辰、此條及丙午條は原本庚戌條の下にあり今干支を推して此に移せり
 ○和氣朝臣綱繼卒、氣字は紀略に據て補ふ綱は西本宮本繩に作る訓同
 ○高扶從五位上、原本高扶を常嗣に、從五位上を正五位下に作る西本及類史に據て改む原本此下に爲兼大宰權帥左大弁如故云々の十三字あり西本に據るに衍文なり故に削る
 ○兼大宰權帥、兼字は西本及紀略に據て補ふ

子朔丁卯、彗星見于東南、其光芒東至天涯。○戊辰、天皇御內裏射場、有右大臣從二位兼行左近衛大將清原真人夏野奉獻之設、因賜侍臣酒、是日右大臣上表、請褫宿衛職、言臣再陳款心、兩隔天睠、祈請无驗、精爽有迷、臣聞秉權兼二者、永難俱存、量力處一者、終得能全、臣文非專業、武非折衝、忝帶二官、恭奉三主、剛柔遞生、歲月稍深、夫近衛者、帝王之爪牙、國家之干城、守備不虞、義在禦侮、夙夜靡盬、老臣難任者也、所以去夏瀝款、乞脫斯任、陛下特降渥恩、逾錫寵命、於是感戴昌運、猶冀終身、而頽齡行邁、眼眸暗朦、霜華雙鬢、風嚴兩耳、瞻聽之智、猶非先聰、侍衛之勤、亦異昔力、夫疲驂畏路、夕鳥懷歸、況臣厄腰帶劍、有煩步趨、弱手撫弓、無力弛張、揆己三省、無其一可、伏乞幸免警衛之任、避銳兵於賢將、專守宰衡之職、餌醫藥于公隙、若天鑒廻照、特賜稱力之矜、微臣知足、則免負乘之責、不許、右京人遣唐知乘船事槻本連良棟、民部少錄同姓豐額等、賜姓安埤宿禰、其先出自後漢獻帝後也。○庚午、詔尾張國課口三分之一、特從優復、河流漲溢、民多病水、故降此恩。○辛未、和泉淡路兩國飢、賑給之。

○道場院、雲居寺と號す要記字類抄並に雲居寺は承和四年菅野眞道建とあり山城志に廢雲居寺祇園南有地一名雲居寺と見ゆ今高臺寺の地なりと云
 ○八坂寺、字類抄に八坂寺法觀寺と號す天長中小野篁の建つる所と云山城志に法觀寺一名八坂寺今屬建仁寺とあり
 ○日八坂東院、日字は紀略類史に據て補ふ
 ○永傳護持、護字は諸本及類史に據て補ふ
 ○親子内親王、仁明天皇皇女
 ○三月、甲子朔、此三字宮本に據て補ふ
 ○彗星、彗は關本西本宮本等を作る
 ○光芒、原本光を先に作る諸本及紀略に據て改む
 ○因賜、因字は宮本水戸校本及類史に據て補ふ
 ○隔天睠、天皇の顧み給はぬを云
 ○乘權、原本乘を乘に作る山崎校本に據て改む
 ○俱存、原本俱を具に作る關本西本前本に據て改む
 ○二官、大臣と大將
 ○三主、嵯峨、淳和、仁

○壬申、彗星猶見、但爲月光所奪、其光芒微少耳。○癸酉、美作國飢、賑給之。○甲戌、賜餞入唐大使參議常嗣、副使篁命五位以上、賦春晚陪餞入唐使之題、日暮群臣獻詩、副使同亦獻之、但大使醉而退出。○丙子、遣唐使朝拜、豐後國人外從五位下吉彌候龍麻呂、賜姓貞道連、授內舍人正六位上和朝臣豐永從五位下。○戊寅、賜入唐使節刀、大臣口宣、詞同去年、大使進賜節刀、擊當于左肩退出、副使趁在大使前、相連而退。○壬午、遣唐大使藤原朝臣常嗣出自鴻臚、發向大宰府。○癸未、美濃國言二月廿五日、兵庫自鳴、至三月十五日亦鳴、同前。丹波國人右近衛府將曹和邇臣龍人、改本居貫附左京五條二坊。○甲申、近江國蒲生郡荒廢田卅三町、爲勅旨後院田。○乙酉、依遣唐使進發、差內匠頭正五位下楠野王等、奉幣帛於伊勢大神宮、是日天皇不御大極殿、雨也、權中納言從三位兼行左兵衛督藤原朝臣良房、率諸司行事也。○丙戌、以參議從四位下和氣朝臣眞綱爲兼左近衛權中將、右大弁如故、云云。○丁亥、遣唐副使小野朝臣篁發自鴻臚、向大宰府。○戊子、常陸國新治郡佐志能神。

明天皇
 ○帝王之爪牙、毛詩小雅祈父章に祈父予王之爪牙とあり
 ○國家之干城、同周南兔置章に越々武夫公侯干城とあり原本干を扞に作る水戸校本に據て改む扞扞共に扞にて外を扞ぐもの義在禦侮、同大雅縣章に予曰有禦侮注に武臣折衝曰禦侮とあり
 ○靡盬、同小雅四牡章に王事靡盬、傳に盬不堅固也とあり
 ○去夏瀝款云々、本史に載せず
 ○霜華雙鬢、原本雙を衰に作る閣本西本に據て改む華は西本條本奉に作る○疲軫、疲は原本疫に作る閣本宮本水戸校本に據て改む軫は副馬なり
 ○三省、論語學而篇に吾日三省吾身とあり
 ○宰衡之職、宰衡は原本寄衛に作る宮本に據て改む漢書王莽傳に民上書者八千餘人咸曰伊尹爲阿衡周公爲太宰云々采伊尹周公稱號加公(王莽)爲宰衡とあり
 ○負乘之責、易の語、前

眞壁郡大國玉神並預官社、以此之中特有靈驗也。○夏四月癸巳朔、天皇御紫宸殿、皇太子侍焉、賜群臣酒、酒罷賜祿。○丁酉、大和國人內藏史生大保連福山、賜姓大貞連。○戊申、陸奥國言、玉造塞溫泉石神、雷響振動、晝夜不止、溫泉流河、其色如漿、加以山燒谷塞、石崩折木、更作新沼、沸聲如雷、如此奇恠、不可勝計、仍仰國司鎮謝災異、教誘夷狄。○癸丑、陸奥出羽按察使從四位下坂上大宿禰淨野馳傳奏言、得鎮守將軍匝瑳宿禰末守牒、稱自去年春、至今年春、百姓妖言、騷擾不止、奧邑之民、去居逃出事、須加添戍兵、靜騷赴農、又栗原賀美兩郡百姓逃出者多、不得抑留者、臣淨野商量、防禍靜騷、須慎未然、加以栗原桃生以北、俘囚控弦巨多、似從皇化、反覆不定、四五月、所謂馬肥虜驕之時也、儻有非常、難可支禦、伏望差發援兵一千人、四五月間結般上下、暫候事變、其糧料者、用當處穀、依例支給、但上奏待報、恐失機事、仍且發且奏者。○乙卯、賜勅符曰、事緣慎機、依請許之、唯克制權變、威惠兼施。○丁巳、僧綱奏言、出家入道、爲保護國家、設寺供僧、爲滅禍致福、頃者天地災異、處處間奏、今須每月

に出づ責は原本噴に作る水戸校本に據て改む
 ○槻本連、朱鳥元年六月紀に槻本村主賜姓曰連と見ゆ
 ○優復、優は優賞、復は課役を免すること
 ○故降此口恩、西本尾本谷本此下一字空白とす今之に據る恩は西本尾本前本息に作り閣本中本原本に同じ
 ○辛未、此條及癸酉の條原本下文戊子條の次にあり紀略に據て此に移す
 ○甲戌、此條紀略に據て補ふ
 ○吉彌侯、原本彌を弘に作る諸本に據て改む
 ○貞道連、原本貞を眞に作る諸本に據て改む
 ○授内舍人云々、此條印本類史九十九乙亥に係け同書乙本は本書に同じ
 ○詞同去年、同は原本月本作る紀略に據て改む閣本前本中本等周に作るも同の訛なり水戸校本には去年上下疑有脱字と云
 ○出自鴻臚、鴻臚館は拾芥抄中末に見ゆ宮本臚下に館字を補ふ下文亦同じ
 ○甲申、此條類史百五十九に據て補ふ
 ○佐志能神、神名式常陸國新治郡佐志能神社、今西茨城郡等間町
 ○大國玉神、同式常陸國眞壁郡大國玉神社、大國

三旬三箇日間、輪轉諸寺、晝讀大般若經、夜讚藥師寶號、以此奉答國恩、勅報曰、佛旨冲奧、大悲爲先、攘災致祥、諒在妙典、今省來奏、自叶心期、宜令梵釋、崇福東西兩寺、東大寺、興福新藥、元興、大安、藥師、西大寺、招提、本元興、弘福、法隆、四天王、延曆、神護、聖神、常住等廿箇寺、每旬輪轉、自五月上旬迄八月上旬、誓願薰修。○戊午、天皇於清涼殿曲宴、奏音樂侍臣具醉、賜祿有差。○庚申、天皇御武德殿、閱覽左右馬寮駒、後太上天皇附參議源朝臣定貢、獻御馬二疋於天皇。○五月癸亥朔丁卯、天皇御武德殿、觀馬射。○己巳、近城諸寺住持寂絕、淫濫屢聞、詔定別當、令其糾正、以文武官五位中明察鯁直者充之。○丁酉、授遣唐第一舶其號太平良從五位下。○癸未、上野國言、御馬疫死、遣使監察、伊豫國飢、賑給之。○丁亥、賜正五位上伴宿禰益立本位從四位下、益立、寶龜十一年爲征夷持節副使、發京之日、叙從四位下、厥後遭讒奪爵、其男越後大掾野繼、上書冤訴久矣、遂辨明得雪父耻。○庚寅、大宰大貳從四位下藤原朝臣廣敏卒、

村大國玉 ○此之中、比年の誤か(四月)大保連、原本保を保に作る關本西本尾本に據て改む ○大貞連、前に注す ○温泉石神、神名式陸奥國玉造郡温泉石神社、川度村大口 ○振動、動字は尾本及紀略に據て補ふ ○山燒、山字は紀略に據て補ふ ○折木、原本木字なく折を拆に作る諸本及紀略に據て改む ○新沼、原本沼を治に作る宮本及紀略に據て改む ○未守、原本未を未に作る西本宮本に據て改む ○栗原、原本栗を栗に作る宮本に據て改む ○結般、原本般を番に作る諸本及紀略に據て改む ○控弦、漢書婁敬傳に控弦四十萬騎、注に控弦引弓也とあり辭源に猶後世驍騎弓手之類と云 ○虜驍、原本虜を虜に作る西本宮本に據て改む ○乙卯、原本五月丁巳に作る水戸校本に按是月干支多誤乙卯作丁巳加五月二字丁巳作丁丑今據類史紀略改之といひ山崎校本も亦紀略に據り五月の二字を削りて乙卯に作る今之に據る ○丁巳、原本丁丑に作る類史紀略に據て改む ○沖奥、沖は深也奥は藏也 ○東西兩寺、原本東西大寺に作る山崎校本に據て改む ○東大寺、原本大を北に作る尾本水戸校本及類史に據て改む ○新藥、新藥師寺なり ○聖神常住、二寺並に山城國にあり ○戊午、原本戊戌に作る類史紀略に據て改む ○曲宴奏音樂、原本曲を内に音を奇に作る諸本及類史に據て改む ○左右馬寮駒、五月五日の馬射に用ふる馬を云 ○貢獻、原本貢を員に作る諸本及類史に據て改む ○糺正、原本糺を紀に作る關本西本尾本宮本等に據て改む ○五月、水戸校本に按是月無干支必有二誤云り山崎校本及纂詁は之を四月丁酉とし四月に移したれど丁丑の誤ならむも計り難ければ水戸校本に從て改めず姑く此に置く ○上野國言云々、左馬寮式に上野國に御牧九所見ゆ御料の馬なれば御馬といひて兵部省に隸する諸牧の馬と區別せり ○賜正五位上云々、宮本賜を贈に作る ○辨明、辨字は關本西本尾本に據て補ふ

(六月)壬辰朔、此三字宮本に據て補ふ此月原本錯亂多く丁未(十六日)庚戌(十九日)甲寅(廿三日)戊午(廿七日)己未(廿八日)辛酉(三十日)己巳(七月八日)丁酉(六月六日)以上如く次第せり今干支を推して改め叙し己亥、甲辰、壬子、癸丑條は類史紀略に據て補へり ○乙未、此條原本己未條に係く紀略に據て此に移す ○丁酉、此條西本には低書別提す ○濟善院、行旅飢病者を

○六月壬辰朔乙未、備後國飢、賑給之、○丁酉、依從五位下勳六等小野朝臣宗成、請勅聽出羽國最上郡建立濟善院一處、又宗成所同國分二寺、奉造佛菩薩像并寫得雜經四千餘卷、並令附官帳、不紛失、事具官符 ○己亥、右大臣夏野上表、詔唯停大將之任、不令還食封、○甲辰、六虹一時見于內裏、○丁未、賜人康親、王山城國葛野郡空閑地一町、○庚戌、地震、○壬子、勅、如聞疫癘間發、疾苦者衆、夫銷殃未然、不如般若之力、宜令五畿內七道諸國內行者、廿口已下、十口已上、於國分僧寺、始自七月八日、三

救濟する處なり天長十年五月紀に武藏國多磨郡に悲田所を設くること見ゆ參考すべし ○所同、纂詁に龍野本に據れりさて同を司に改めたれと聞えず所字或は衍か然らざれば所下に脱字あるべし ○紛失、原本失を迷に作る西本中本前本等に據て改む ○己亥、此條紀略に據て補ふ ○甲辰、同上 ○六虹、抄天地部に虹毛詩注云蟠蜺(帝董二音蟠又作蜺和名爾之)虹也兼名苑云虹一名蜺(今按雄曰虹雌曰蜺)とあり ○人康親王、仁明天皇々子 ○一町、此下原本勅令云々の廿一字あり類史紀略に據て下文己未條に移す ○壬子、此條類史百七十八及紀略に據て補ふ ○癸丑、此條類史百七十三に據て補ふ ○鎮祭彼壇界、臨時祭式に畿内堺十處疫神祭見え其場所を詳に擧げたり ○時氣、抄形骸部病類に疫說文云疫(衣夜美一云

簡日、晝讀金剛般若、夜修藥師悔過、迄于事竟、禁斷殺生、○癸丑、遣使山城大和河內攝津近江伊賀丹波等七國、鎮祭彼壇界、以禦時氣、○甲寅、宮內卿三品阿保親王爲兼兵部卿、上野大守如故、左衛門督從四位上百濟王勝義爲兼宮內卿、相摸守如故、中納言正三位源朝臣常爲左近衛大將、權中將從四位下和氣朝臣眞綱爲兼中將、右大弁如故、正三位源朝臣信爲兼左衛門督、近江守如故、○戊午、散位正四位上小野朝臣野主卒、○己未、勅云々、宜遣使山城大和等、奉幣名山、以祈甘雨、又勅、令五畿內七道諸國、奉幣名神、豫防風雨、莫損年穀、正三位行中納言兼左近衛大將源朝臣常、上表請解左大將職、曰云云、右京人左京亮從五位上吉田宿禰書主、越中介從五位下同姓高世等、賜姓興世朝臣、始祖鹽垂大倭人也、後順國命、往居三己汶地、其地遂隸百濟、鹽垂津八世孫、達率吉大尙、其弟少尙等、有懷土心、相尋來朝、世傳醫術、兼通文藝、子孫家居奈良京田村里、仍元賜姓吉田連、○辛酉、從四位下紀朝臣善岑卒、○秋七月壬戌朔甲子、延十五口、僧於常寧殿、晝則讀經、夜便悔過、以內裏有

度岐乃介、民皆病也。
 ○爲兼兵部卿、宮本に兼字なし。
 ○正三位源朝臣常、三は原本二に作る宮本及八年十一月紀に據て改む。
 ○爲左近衛大將、左上に兼字あるべし、狩谷氏曰將下恐當有、中納言如故五字、また曰將下原有、權中將云々廿二字上文既出此衍文削之云々。
 ○權中將、山崎校本は極齋の説に從て權中將以下の廿二字を削りしが、纂註は三月丙戌以參議兼左近衛權中將至是即眞也云々、今之に從ふ。
 ○勅云々、以下又に至る廿一字は紀略に據て補ふ。
 ○勅令五畿内七道云々、以下穀に至る廿一字は原本上文丁未條にあり類史及紀略に據て此に移す。
 ○曰云々、原本曰下五字空白と爲せるを宮本に據て云々の二字を補ふ。
 ○鹽垂、鹽は原本監に作る宮本に據て改む下同じ鹽垂即ち鹽垂津彦なり。
 ○三已汝地、初め任那國に屬す繼體紀七年六月條(書紀下一六頁)に見ゆ參看すべし。

物恠也。○己巳、天皇御紫宸殿、觀相撲節、散位正六位上八多真人清雄言、姓氏錄所載始祖、錯謬非實、私門之大患也、詔令刊改之。○丁丑、地震、式部省言、大學寮言、去天平二年三月格、文章生廿人、簡取雜任及白丁聰惠者、今諸生等器少岐嶷、才多晚成、至應文章之選、皆及二毛之初、而人雖賢良、未必位蔭、望請、白丁文章生預之出身、勅許之。○庚辰、以從四位上南淵朝臣永河爲大宰大貳。○癸未、大宰府馳傳言、遣唐三箇舶、共指松浦郡旻樂崎發行、第一第四舶、忽遇逆風、流著壹伎嶋、第二舶、左右方便、漂著值賀嶋、是日先太上天皇皇子從四位上源朝臣鎮攀陟神護寺、剃頭入道、城中聞者、爲之隕淚。○丙戌、天皇御後庭、命左近衛府奏音聲、令弄玉及刀子。○庚寅、先太上天皇奉還源朝臣鎮位記於內裏、是日勅、以宮城北園池司地卅二町內荒廢地二町、充典藥寮。○辛卯、加賀國石川郡荒廢田卅九町、賜三品彈正尹秀良親王、近江國荒田六十四町、勅充太皇太后後院。○八月壬辰朔、日向國子湯郡都濃神、妻神、宮崎郡江田神、諸縣郡霧嶋岑神、並預官社。○丙申、勅曰、頃年眞言法教、雖流

○達率吉大尙其弟少尙、達率は百濟の爵名、吉大尙は天智天皇十年正月紀に見ゆ原本弟を第に作る諸本に據て改む。
 ○家居、居字は關本尾本に據て補ふ。
 ○元賜姓吉田連、元字恐は衍、連の下に原本備後國云々の條ありしを紀略に據て上に移す。
 (七月)壬戌朔、此三字宮本に據て補ふ。
 ○常寧殿、拾芥抄中末に承香殿北とあり。
 ○散位、以下令刊改之に至る卅五字は原本己巳の二字を冠して六月辛酉の次に置り千支を推して此に移す。
 ○式部省言、以下勅許之に至るまでは紀略に據て補ふ。
 ○晚成、老子に大器晚成とあり。
 ○二毛之初、左傳僖廿二年に不禽二毛注に二毛は頭白有二色也とあり。
 ○位蔭、選叙令に詳なり。
 ○以從四位上南淵朝臣云々、以下十六字は原本除目云々の四字に作る宮本に據て改む。
 ○旻樂崎、萬葉十六に肥

傳京城、而未遍邊境、宜選彼宗僧堪講讀及修法者、毎年任諸國講讀師、依法薰修、其僧不限年、騰惟選堪之者。○戊戌、伊豫國從四位下大山積神、從五位下野間神、並預名神。○辛亥、大宰府奏、遣唐使三箇舶、漂廻之狀、并上使等奏狀。○癸巳、勅使云々。○丁巳、无位正道王於殿上冠焉、即叙從四位下、正道王者、故中務卿三品恒世親王之子、而後太上天皇之孫也、後太上天皇殊鍾愛、令天皇爲子、每陪殿上、因有此叙。○庚申、勅陸奧國課丁三千二百六十九人、給復五年、安慰其情、以國司言也。○九月辛酉朔壬戌、地震。○甲子、聖躬不豫、羞之御藥、頒遣中使、誦經於七箇寺。○戊辰、勅、令式部少輔良岑朝臣木連、賫幣帛、向八幡大神宮、天皇元有所禱、今以奉賽也。○己巳、天皇御紫宸殿、宴重陽節、命文人同賦露重菊花鮮之題、宴畢、賜祿有差。○甲戌、攝津國人右衛門醫師辟秦眞身、武散位同姓仲主等三烟、改本姓賜秦勝。○辛巳、以從五位上藤原朝臣當道爲河內守、右少弁如故、散位從五位下丹墀真人石雄爲伯耆守、豐前守從五位上石川朝臣橋繼爲修理船使、長官、筑前權守從五位下小野朝

前國松浦縣美彌良久崎、見ゆ往時對馬に渡る船及遺唐使の宿泊所なり今南松浦郡三井樂村の小澳なり

○壹伎嶋、伎は原本岐に作る諸本に據て改む

○值賀嶋、既に出づ肥前國南松浦郡に屬する五嶋列嶋を云

○奏音聲、即ち音樂なり

○令弄玉及刀子、抄術藝部に弄丸梁武帝千字文注云宜遊者楚人也能弄丸(此間云多未斗利)八在空申二在手中今人之弄鈴是也、又弄槍楊氏漢語抄云弄槍(保古斗利)なご見えたれば珠或は刀子を弄する一種の藝なり

○奉還源朝臣鎮位記、入道せしを以てなり

○秀良親王、嵯峨天皇皇子

○荒田、山崎校本に荒下恐脫(廢字)云

○大皇太后、檀林皇后

○八月壬辰朔、朔字は宮本に據て補ふ

○子湯郡、湯郡の二字は關本西本中本に據て補ふ抄國郡部に日向國郡名兒湯古由とあり

○都濃神、神名式に日向

臣末嗣、遣唐判官從五位下長岑宿禰高名、並爲次官、自從今月一日、至于卅日、五畿內七道、豫申損者、惣三十一國、○己丑、聖體平復、金銀長上工正六位上丹波直廣主、年老還鄉、勅給正稅穀五十碩、○冬十月辛卯朔、天皇御紫宸殿、賜群臣酒、是日喚、左右京亮、右衛門、檢非違使、佐并四人於殿前、宣勅、遣勘錄東西兩京飢病百姓、特加賑恤、以陰霖經日、穀價踊貴也、○丁酉、右大臣從二位清原真人夏野薨、遣使監護喪事、有賻物、天皇不聽朝三日、夏野、正三位御原王孫、正五位下小倉王之第五子也、薨時年五十六、○癸丑、左京人從七位上佐伯直長人、正八位上同姓眞持等、賜姓佐伯宿禰、○乙卯、授正六位上清科朝臣弟主從五位下、○丙辰、聽齋院司私養鷹二聯、○戊午、授從五位上百濟王慶仲正五位下、正六位上百濟王忠誠從五位下、先太上天皇自交野遊獵處、有諷旨、因所叙也、○十一月辛酉朔、天皇御紫宸殿、賜侍臣酒、皇太子朝覲、○戊辰、天皇於神泉苑放隼、○丁丑、加賀國言、管能美郡人財部造繼麻呂、父母存日、定省之禮、無失其節、沒後操行不變、朝夕哀慕、隣里鄉邑、莫不推

國兒湯郡都農神社、都濃村川北、國幣小社に列す

○妻神、同式兒湯郡都萬神社、今妻町字妻村

○江田神、神名式宮崎郡江田神社、意村江田

○諸縣郡、抄國郡部日向國郡名諸縣幸良加多と訓り今東西北の三郡に分る

○務嶋岑神、神名式諸縣郡務嶋神社、今西諸縣郡小林町細野、並字は關本前本中本等に據て補ふ、○丙申、此條類史百七十九に據て補ふ、○大山積神、神名式伊豫國越智郡大山積神社(名神大)、宮浦村宮浦、國幣大社、○野間神、同式野間郡野間神社(名神大)乃萬村野間神宮、○辛亥、此條紀略に據て補ふ前月癸未紀を參看すべし、○癸巳、此條も紀略に據て補ふ巳は丑の訛なるべし、○丁巳、此條原本庚申の次にありしを千支を推して此に移す、○子而、而字は紀略に據て補ふ、○以國司言、司字は宮本に據て補ふ、(九月)辛酉朔、此三字宮本に據て補ふ、此月原本錯亂多く壬戌(二日)辛巳(廿一日)甲戌(十四日)甲子(四日)己丑(廿九日)己巳(九日)斯くの如く次第す今千支を推して改め叙し戊辰條を宮本及類史紀略に據て補へり、○羞之御藥、此四字諸本及類史に據て補ふ、○於七箇寺、於字は類史に據て補ふ、○戊辰、此條は宮本及類史(五)紀略に據て補ふ、○八幡大神宮、宇佐神宮、○宴華、原本華を了に作る類史紀略に據て改む、○賜祿、原本祿を錄に作る諸本に據て改む、○醫師、原本醫を督に作る諸本に據て改む、○辟秦眞身、辟秦氏は詳ならず辟字醫師の師字と字形相似たるより誤りて加へたるか然らば秦は氏にて眞身は名なるべし原本眞を直に作る諸本に據て改む、○長官、原本官を宮に作る諸本に據て改む、○末嗣、原本末を未に作る西本宮本に據て改む、○申損、賦役令に凡田有永旱蟲霜不熟之處國司檢實具錄申旨十分損五分以上免租損七分免租調損八分以上課役俱免と見ゆ、○長上工、山崎校本に長上工當作工長上と云、○五十碩、碩は字書に碩石通と云、(十月)辛卯朔、此月原本錯亂多く癸丑(廿三日)丙辰(廿六日)戊午(廿八日)乙卯(廿五日)丁酉(七日)斯くの如く次第せり今千支を推して改叙せり、○賜群臣酒、孟冬旬宴なり、○右衛門、山崎校本本堀本に據れりさて右上に左字を補ふ、○并四人、山崎校本本宮本考語に據れりさて并を廿に作る然るに廿とある本なく左右京亮右衛門檢非違使佐以上四人にて廿四人に非ず、○清原真人夏野薨、真人は原本朝臣に作る宮本及紀略に據て改む皇代略に承和四年六月左大將を辭し十月七日薨とあり、○遣使監護喪事云々、以下十六字は紀略に據て補ふ、○御原王、補任に舍人親王の曾孫とあり、○小倉王、此王右馬頭朝野朝臣綱手女家主を娶りて夏野を生めり、○眞持、原本眞を直に作る諸本に據て改む、○有諷旨因所叙也、延暦二年十月戊午行幸交野放鷹遊獵庚申百濟王等供奉行在所者一兩人進階加爵と見えれば此度も其芳躅を紹がせ給ひて進階の事を嵯峨上皇の御諷旨あらせ給へるなるべし、(十一月)辛酉朔、原本十一月の上冬字あり西を丑に作る冬字は衍なれば之を削り西は宮本及類史紀略に據て改む此月原本戊辰(八日)丁亥(廿七日)甲申(廿四日)丁丑(十七日)の次序とせるを千支を推して改め叙せり、○管能美郡、管は原本菅に作る諸本に據て訂す能美郡は今も同じ

服可謂孝子、勅宜叙三階、終身免其戶租、旌表門閭、令衆庶知、○甲申、山城國人造酒司史生秦忌寸伊勢麻呂等、改本居貫附右京九條四坊、○丁亥、天皇於神泉苑放隼、

○十二月庚寅朔、日有蝕之、○辛卯、是夜、盜開春興殿、偷取絹五十餘

春興殿日華門南あり
 ○志賀史、錄攝津諸蕃に志賀忌寸後漢獻帝之後也
 ○錦部村主、錄山城諸蕃に錦織村主同祖波能志之後也
 ○大友村主、姓氏錄に見えず
 ○大友村主、姓氏錄に見えず
 ○春良宿禰、春は原本審に作り宮イ本蕃に作る閣本西本尾本等に據て改む
 ○春良宿禰、春は原本審に作り宮イ本蕃に作る閣本西本尾本等に據て改む
 ○逐捕之、原本逐を遂に作る諸本に據て改む
 ○銅壺、銅は説文に金飾器口也、鑿は彫刻也とあり彫刻して口の邊を飾れる銅壺を云木壺と銅壺と二重にして毛髪を納め奉るなり
 ○(注)監察、原本察を發に作る諸本に據て改む

正、宿衛之人不得見著、右兵衛督從四位下百濟王安義卒、○癸巳、近江國人左兵衛權少志賀史常繼、左衛門少志錦部村主藥麻呂、越中少目錦部忌寸人勝、太政官史生大友村主弟繼等、賜姓春良宿禰、常繼之先、後漢獻帝苗裔也、○甲午、夜分女盜二人昇入清涼殿、天皇愕然、命藏人等告宿衛人逐捕之、纔獲一人、其一人脫亡、○丁酉、勅令造轆轤木壺一合、銅壺釦鏤者一合、備于奉納天王寺聖靈御髮、事由未詳但口傳曰、深藏于四天王寺塔心地下、去年冬、霹靂彼寺塔心時遣使監察、而其使私偷靈髮與之已妻、由是後日成祟、因更搜索還藏本處云云、是日左大臣正二位藤原朝臣緒嗣上表言、臣年老病重、出入絕望、疾床引日、既過一紀、臣竊見天下官庫空罄、國用闕乏、況今年不稔、衣食共損、倉廩不實、何知禮節、臣前以此義、去天長之初、上意見之日、奏言、省不要之官、斷文華之費、而臣久沉痼疾、空積星霜、曠官之責、可謂其首、其文章者、歷代不朽也、豈口奏其言、久居職哉、加以陰陽不調、責在臣子、伏望停不當之號、開賢德之進、然則天道無災、自作中興、非敢逃天澤之榮、名飭之利、內侍宣久、國老止志氏波獨能美許曾坐世、朝夕政波不申給阿禮止毛、國家事波定申任爾止志氏、

○(同)與之、原本與を興に作る諸本に據て改む
 ○一紀、一年を云
 ○倉粟不實云々、管子に倉粟實則知禮節衣食足則知榮辱とあり
 ○痲疾、原本痲疾に作る諸本に據て改む水戸校本には疾に作る疾は疹の俗字、疹は熱病也疾と同じ
 ○天澤之榮、易履卦の象傳に上天下澤履君子以辯上下正民志とあり
 ○内侍宣久、原本宣を宜に作る西本に據て改む
 ○國老、國家の元老の意に作る西本に據て改む
 ○宣岐、岐は原本波に作る西本尾本前本に據て改む
 ○返給、返字は諸本に據て補ふ
 ○旭旦、且は原本且に作る西本に據て改む早旦に同じ
 ○香春岑神、抄郡郷部豊前國田河郡香春郷あり風土記には鹿春に作る
 ○辛國息長火姬大日命、此神は神功皇后なりさいひ或は比賣許曾神ならむとも云り火姬大日は宮本大姫大目に作る此社は元香春山の第一嶽に坐せり
 ○忍骨命、天忍穗根尊に

前前、爾辭申事爾附氏、自今以後、如此久辭申事不得止宣、岐、今毛モ又志賀奈毛思行須、然今進禮留辭書、非御意、止志氏、左近衛中將從四位下和氣朝臣眞綱、乎差使返給止宣、○庚子、自旭旦至戌時、大風、京中屋舍徃徃破壞、大宰府言、管豐前國田河郡香春岑神、辛國息長火姬大日命、忍骨命、豐比咩命、惣是三社、元來是石山、而土木惣無、至延曆年中、遣唐請益僧最澄、躬到此山、祈云、願緣神力、平得渡海、即於山下、爲神造寺、讀經、爾來草木蒼鬱、神驗如在、每有水旱疾疫之灾、郡司百姓就之祈禱、必蒙感應、年登人壽、異於他郡、望預官社、以表崇祠、許之、○庚戌、是夜、盜穿大藏省東長殿壁、竊取絁布等、不知幾匹、端、○辛亥、遣六衛府、大索城中、○丙辰、以從四位下橘朝臣永名爲兼右兵衛督、播磨守如故、

坐ます同山第二嶽に坐せり
 ○豐比咩命、肥前止與日女神にして即ち海神豐玉姫神なりと云第三嶽に坐せり
 ○惣是三社、三社並に神名式に豐前國田川郡三座(並小)辛國息長大姫大目命神社、忍骨命神社、豐比咩命神社と見え今田川郡香春町香春に祀る
 ○土木惣無、元來石山にして土も木も無しとなり纂詰は土を山の訛として艸也といひ宮本には木は人の誤とすれど舊の儘にて通ず
 ○請益僧、原本請を諸に作る諸本に據て改む
 ○神驗如在、論語八脩に祭神如在神在とあり
 ○庚戌、原本戌を子にする水戸校本に據て改む
 ○東長殿、標註職原抄別記下に省(大藏)中に長殿とて今の長屋の如く一棟に造つたけたる數戸の藏いくつもありて一戸を一國と定めこれに調庸を納め入らるゝことなりとあり
 ○大索城中、賊を搜索するなり

續日本後紀卷第六

○承和、此二字は宮本に據て補ふ

續日本後紀卷第七

起承和五年正月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉 勅撰

【承和五年】

○眞真正五位上、正五位上の四字は原本空白とす水戸校本及類史九十九に據て補ふ
 ○坂上大宿禰鷹主藤原朝臣嗣宗、原本禰字より宗に至る約八字は空白とす類史九十九に據て補ふ
 ○藤原朝臣良相藤原朝臣氏宗、朝臣は並に宮本及類史に據て補ふ

五年春正月庚申朔、天皇御大極殿受朝賀、畢宴待從已上於紫宸殿、賜御被、○壬戌、天皇朝覲先太上天皇、及太皇太后於嵯峨院、賜扈從五位已上祿有差、○丙寅、天皇御豐樂殿、覽青馬、宴百官、詔授從五位上豐江王正五位下、從五位下豐村王從五位上、正六位上高原王從五位下、從四位下和氣朝臣眞綱、笠朝臣梁麻呂、藤原朝臣雄敏、大枝朝臣總成、並從四位上、正五位下藤原朝臣豐主、紀朝臣名虎、丹墀真人清貞、從五位上笠朝臣廣庭、並從四位下、正五位下善道朝臣眞貞、正五位上、從五位上坂上大宿禰鷹主、藤原朝臣嗣宗、並正五位下、從五位下紀朝臣椿守、百濟王永豐、大藏宿禰橫佩、並從五位上、外從五位下門部連貞宗、无位興我朝臣三夏、正六位上藤原朝臣良相、藤原朝臣氏宗、丹墀真人貞

○橘朝臣、原本橘を林に作る諸本及類史に據て改む
 ○二腹、二は三に作るべきか下同じ
 ○高村宿禰、録右京諸蕃に高村宿禰魯恭王之後とあり
 ○秦宿禰、秦字は原本二字空白とす宮本及類史に據て補ふ
 ○清繼並外從五位下、繼並外の三字は原本空白とす宮本及類史に據て補ふ
 ○御杖、剛卯杖なり三年正月癸卯紀に注す原本杖を杖に作る關本尾本前本に據て改む
 ○從二位藤原朝臣三守、原本二を三に作る諸本に據て改む
 ○當道爲□□辨、西本尾本爲の下二字空白とし尾本には辨字なく三字共に空白とす今西本尾本に據て辨上二字空白とす纂註は源義公の説に據て爲右中辨に改む
 ○仲野親王、桓武天皇皇子
 ○忠良親王、嵯峨天皇皇子
 ○葛原親王、桓武天皇皇子

峰、橘朝臣諸成、小野朝臣興道、淨野宿禰二腹、林朝臣常繼、並從五位下、正六位上出雲朝臣全嗣、高村宿禰清直、飯高公常比鷹、秦宿禰氏繼、神服連清繼、並外從五位下、宴畢賜祿有差、○丁卯、天皇御紫宸殿、皇太子獻御杖、授正五位下田口朝臣善子從四位下、是日大極殿最勝會之初也、○己巳、以從二位藤原朝臣三守爲右大臣、正三位源朝臣常爲大納言、從三位橘朝臣氏公爲中納言、從四位下安倍朝臣安仁爲參議、○壬申、從五位上藤原朝臣當道爲□□辨、河內守如故、從五位下藤原朝臣豐嗣爲左少弁、從五位下藤原朝臣氏宗爲式部少輔、云云、三品仲野親王爲上總大守、四品忠良親王爲常陸大守、從五位下藤原朝臣貞公爲介、一品葛原親王爲兼上野大守、式部卿如故、從五位下淨野宿禰二腹爲下野介、從四位上源朝臣明爲兼加賀守、大學頭如故、從五位下丹墀真人貞峰爲介、云云、從三位源朝臣定爲兼播磨守、中務卿如故、云云、是日從四位下藤原朝臣河子卒、○癸酉、最勝會竟、更引其講師及名僧十餘口於禁中、令論議、訖施御被、○乙亥、天皇御紫宸殿覽踏歌、宴竟賜

○從五位下丹墀真人貞峰爲介、此十二字宮本に據て補ふ
 ○源朝臣定、原本源を藤原に作る諸本に據て改む
 ○藤原朝臣河子卒、河は原本阿に作る諸本に據て改む河子の事は貞觀九年正月戊午紀仲野親王の傳に詳なり
 ○觀射云云、云云の二字は諸本に據て補ふ
 ○才知文士、才字は諸本に關く山崎校本には才知の二字を削る
 ○有差云々、云々の二字は諸本に據て補ふ
 ○正六位上豐、原本此下約五字空白とす錄攝津諸蕃に豐津造見之續紀寶龜十一年五月紀攝津豐嶋郡人韓人稻村等豐津造を賜ふこと見ゆるに據れば空白は津造とあるべきか
 ○二條、此下某坊の二字あるべし諸本には二條の二字を削る
 ○繼諸蕃歸化之餘種也、繼上一字脱せるなるべし西本には字ありて偏旁のみ存せり
 ○乙酉、此條類史百九十に據て補ふ
 ○二月己丑朔、此三字

侍從已上祿有差、○丙子、天皇御豐樂殿觀射、云云、○己卯、天皇內宴于仁壽殿、喚公卿及才知文士、令賦雜言遊春曲之題、宴畢賜祿有差、云々、
 ○辛巳、攝津國豐嶋郡人正六位上豐□□嗣、民部史生同姓吉雄等廿八人、改本居貫附右京二條、繼諸蕃歸化之餘種也、○乙酉、授勳五等吉彌侯部東人麻呂、同姓玉岐、並外從五位下、以不從逆類、久効功勳也、
 ○二月己丑朔、庚寅、丹波國桑田郡空閑地三十町賜諱邑、春宮坊主□、永聽把笏也、○癸巳、天皇御內裏射場、命侍臣射之、是日右大臣從二位藤原朝臣三守奉獻盡美、亦積置錢布、備于賭物、○乙未、從五位下藤原朝臣氏雄爲縫殿頭、云々、○丁酉、畿內諸國、群盜公行、放火殺人、下知國司、令以糺勘、○戊戌、令山陽南海道等諸國司捕糺海賊、○庚子、行幸水生瀨野遊獵、賜扈從五位已上祿有差、日暮車駕還宮、云々、
 ○癸卯、勅齋院雜使四右衛門府生看督等於畿內諸國、追捕奸盜、云云、○癸卯、勅齋院雜使四人、宜准二宮并淳和院、舍人等與之公驗、嵯峨院、勘籍廿人亦宜准此、詔授陸奥守從五位上良岑朝臣木連正五位下、○庚戌、武藏國都筑郡粉

宮本に據て補ふ
 ○春宮坊主口、原本春宮家令に作り諸本には家字なく令を宮に作る今類史百七に據て改む纂註に按主口疑主典と云り
 ○永聽把笏、原本聽を預に作る類史に據て改む
 ○爲縫殿頭云々、云々の二字は諸本に據て補ふ
 ○公行、原本横行に作る諸本に據て改む
 ○水生瀨野、攝津國三嶋郡島本村附近
 ○車駕還宮云々、云々の二字は諸本に據て補ふ
 ○勅旨曰、諸本曰を田に作る纂註には此三字を削りて蓋三月癸亥條錯出于此と云り
 ○看督、看督長に作るが通例なり職原抄に補看督長六十六人此爲遺諸國也云々とあり檢非違使に屬す
 ○追捕、諸本追を逐に作る
 ○齋院、賀茂の齋院なり
 ○二宮、纂註に按六年八月庚戌紀云三宮舍人并雜勅人三宮謂春宮皇后宮中宮也據此二宮蓋三宮之譌と云り
 ○公驗、式部式に凡諸司

山神社、預之官幣、以靈驗也。○三月戊午朔癸亥、以攝津國八部郡田并乘田廿一町爲後院勅旨田。○乙丑、散位從四位下池田朝臣春野卒、春野者、天應以往之人也、至延曆十年、始預官班、補内舍人、十四年任左衛門少尉、轉大尉、十九年叙從五位下、除内藏助、兼丹波守、大同元年、加從五位上、職歷中務少輔、彈正少弼、弘仁元年任大藏大輔、三年叙正五位下、頻兼遠江越中守、遷宮内大輔、天長三年遷圖書頭、四年叙正五位上、除掃部頭、六年正月授從四位下、春野宿禰、能說故事、或可採容、此十年冬、將有大嘗會事、天皇欲修禊祓、幸賀茂河、春野以掃部頭奉鹵簿陣、看諸大夫所著當色、其裾曳地、大咲曰、是尋常之裝束、非神事之古體、便指自所著爲古體之證、其裾離地差高、而袴襪露見矣、諸大夫皆驚云、古之儀制、應與唐同、後代當效之、春野衣冠古樣、身長六尺餘、稠人之中、揭焉而立、會集衆人、莫不駐眼、瞻々國老如此者、今則不見也、卒時年八十二。○壬申、左京二條二坊十六町二分之一、賜掌侍正五位下大和宿禰館子。○丙子、大法師靜安爲律師、授勳六等夷守志爲奈、深江枚

番上把笏者、不與公驗其舍人使部伴部之類皆與公驗とあり
 ○宜准此、原本置於此に作る類史百七に據て改む
 ○詔授陸奥守云々、詔以下正五位下に至る十九字は類史九十九に據て補ふ
 ○都筑郡、倭名抄に都筑は豆々岐と訓り今都築郡に作る
 ○粉山神社、神名式武藏國都筑郡粉山神社とあり粉は杉の草體より誤れるなるべし
 (三月)戊午朔、此三字宮本に據て補ふ
 ○癸亥、此條類史百五十九に據て補ふ「」字恐くは荒廢の二字ならむか
 ○八部郡、倭名抄に八部夜多倍と訓り今武庫郡に入る
 ○預官班、官吏となりしを云
 ○任大藏大輔、原本任を仕に作る諸本に據て改む
 ○春野宿禰、宿禰は誤なるべし宮本朝臣に作り纂註は禰を老に改めたれど尙よく考ふべし
 ○或可採容、纂註或を式に改め類史可有に作る
 ○其裾離地差高云々、是

子等外從五位下、以有勳功也。○戊寅、火于彌勒寺、焚堂舍五宇。○癸未、勅曰、諸衛府及劇官雜色人、特聽著緋色袴、自餘諸人不聽著染袴、而特聽之徒、所著之袴、或用黑緋、或用淺緋、著人任意、不拘文法、大夫當色之服、還爲士庶之袴、知而不糺、事涉僭濫、宜自今以後、一切禁止、不得令著、但慮嚴制下入罪者衆、須六十日內皆令換却、其權宜行制、省弊爲貴、如今吳桃染、黃墨染、杉染、皂染等色、染作無貴、著服難汚、宜四色袴、不謂色淺深、不論公私所、特聽著服、其參議已上、聽通著四色、自餘諸人、不得著吳桃染一色。○甲申、勅曰、遣唐使頻年却廻、未遂過海、夫冥靈之道、至信乃應、神明之德、修善必祐、宜命大宰府監已上、每國一人、率國司講師、不論當國他國、擇年廿五以上、精進持經心行、無變者、度之九人、香襲宮二人、大臣一人、八幡大菩薩宮二人、宗像神社二人、阿蘇神社二人、於國分寺及神宮寺、安置供養、使等往還之間、專心行道、令得穩平、云云。○乙酉、授正六位上佐伯宿禰長人從五位下。○丙戌、山城國葛野郡空地一町、賜春宮坊。○夏四月戊子朔己丑、勅遣使者於大和國、實錄富豪之資、借

○揭焉、原本揭を揚に作る諸本及類史に據て改む
 ○幡々國老、文選兩都賦に出づ注に幡幡老人貌也とあり鬢髮の白きを云
 ○左京二條二坊十六町二分の一、拾芥抄中末に凡一條之内有「四坊」一坊之内有「十六町」十六町之内有「四保」一町之内有「四行」二行之内有「八門」二戸至長十丈弘五丈云々あり
 ○靜安、元亨釋書卷九に見ゆ
 ○授勳六等夷守志爲奈、以下以有功勳也に至るまでは類史百九十に據て補ふ
 ○深江枚子、元慶三年正月十三日癸卯紀に授出羽國俘囚外正六位下深江三門外從五位下云々賞
 軍功也と見ゆ此族人なるべし
 ○彌勒寺、豐前國宇佐にあり天長十年十月紀に出づ
 ○黒緋、黒は色の深きを云
 ○不拘文法、文法は法律を云漢書酷吏傳に出づ
 ○大夫當色之服、大夫は五位以上の稱、衣服令諸臣禮服條に四位深緋衣五位淺緋衣以外並同二位服云々あり
 ○吳桃染、元年十一月壬申紀には胡桃染に作る
 ○黄墨染、西本墨を熏に作る
 ○杉染、既に出づ
 ○皂染等色、皂は令にクリと訓り黒き色なり色は原本也に作る諸本に據て改む
 ○染作無貴、貴は西本尾本責に作る纂註に疑費字と云
 ○特聽著服、原本特を待に作る西本尾本に據る
 ○過海、海字は關本前本等空白とす山崎校本には海堀本作涉とあり是なるべし
 ○香襲宮、香椎宮
 ○大臣一人、大臣は香椎に祀れる武内宿禰を云
 ○八幡大菩薩宮、宇佐八幡宮
 ○宗像神社、神名式に筑前國宗像郡宗像神社三座(並名神大)とあり
 ○阿蘇神社、同に肥後國阿蘇郡健甕龍命神社(名神大)とあり
 ○令得穩

貸困窮之輩、至秋收時、依員俾報、○壬辰、勅、自遣唐使進發之日、至歸朝之日、令五畿内七道諸國、讀海龍王經、○甲午、勅、去歲年穀不稔、疫癘間發、夫般若之力、不可思議、宜令十五大寺、五畿七道諸國及大宰府、奉讀大般若經、一七箇日、禁斷殺生、○庚子、勅、筑前、筑後、肥前、豐後等五箇國、頻年遭疫、死亡者半、蘇息之輩、既疲造船、就中擇窮貧者、給復一年、○辛丑、大宰管内諸國飢、賑給之、○壬寅、右京人正六位上春男王、賜姓宗高真人、○戊申、備前國飢、賑給、○乙卯、勅、遣唐大使藤原朝臣常嗣、副使小野朝臣篁、使等本期鳳舉用涉鼃波、心事多睽、滯留逆旅、朕眷言艱節、憂念于懷、方今信風甫臻、嚴程已迫、如靡鹽何、因雲輅往、付之示意、仍遣從四位下右近衛中將藤原朝臣助、勸發遲怠之由、是日天皇遷御常寧殿、以避暑也、

平云云、云云は諸本に據て補ふ
 ○丙戌、此條類史百七に據て補ふ
 ○四月、戊子朔、此三字宮本に據て補ふ
 ○己丑、此條原本辛丑條の次にあり干支を推して此に移せり
 ○進發之日、原本日本を月にする山崎校本に據て改む
 ○海龍王經、聖教目錄に佛說海龍王經四卷晉竺法護譯と云、王字は宮本及紀略に據て補ふ
 ○甲午、此條類史(百八十一)紀略に據て補ふ但し類史は去より議に至る十九字を云々に作り畿下に内字あり
 ○五箇國、五は四の誤か或は一ヶ國を脱せしなるべし
 ○賑給之、此三字紀略に據て補ふ
 ○宗高真人、姓氏錄に載せず
 ○備前國飢賑給、此六字紀略に據て補ふ
 ○乙卯、遣唐使勸發の事原本戊申に係く今紀略に據る下文遣唐使の上癸五月己未なり戊申にては緩慢の嫌あり乙卯を可とす
 ○本期、原本期を朝に作る尾本に據て改む
 ○鳳舉、文選演連珠に鳳舉之使、注に如鳳鳥之舉也とあり天子の使を云
 ○鼃波、東海の海中に神山あり鼃に支へらると云因て海波の意に用ひしか
 ○多睽、原本睽を月偏に作る宮本に據て改む睽は違也
 ○逆旅、客舎なり
 ○信風、字書に東北風謂之信風とあり今所謂恒信風の吹く時期に至れりとなり
 ○嚴程已迫、出帆の期の迫れるを云
 ○靡鹽、毛詩小雅四牡章に王事靡盬不遑啓處とあるに據れり鹽は原本監に作る宮本に據て改む
 ○因雲輅往、因は原本困に作る關本西本尾本に據て改む雲輅は雲は車に雲氣を畫けるをいひ輅は文選丘希範書に乗輅建節奉輿場之任、注に二馬爲輅傳、使車也とあり
 ○付之示意、原本示を樂に作る諸本に據て改む使者に付して聖旨を示し給ふとなり
 ○勸發遲怠之由、原本勸發之の三字に作る紀略に據て改む山崎校本勸書と遣使勸發の事を別項とし日を改めたるは非なり

○五月丁巳朔己未、遣唐使上奏言、使等漂廻、嚴綸未允、雖風信之愆、乃是天時、而重行之累、類有冥妨、況巨海之程、艱虞無測、不資靈祐、何以利征、請令諸國轉讀大般若經、是日詔、令五畿内七道諸國、始自今月中旬、至使等歸朝之日、堅固講海龍王經、相并轉讀大般若經、○辛酉、天皇御武德殿、觀騎射、○乙丑、安藝國言、管驛家十一處、驛家別驛子百廿人、山路險阻、送迎繁多、良倍他國、勞逸不等、始自今年、減公廩穎、加舉三万一千二百束、以彼息利、充給驛子等食、許之、○丁卯、奉授出羽國從五位上勳五等大物忌神正五位下、餘如故、美濃國言、古樣弓弩、不可中用、徒

○五月丁巳朔、此三字宮本に據て補ふ
 ○無測、原本測を側に作る宮本水戸校本に據て改む諸本則に作るも亦測の訛なり
 ○利征、原本利往に作る諸本に據て改む此條四月壬辰紀を參考すべし
 ○乙丑、此條類史八十三に據て補ふ
 ○驛家十一處、兵部式には安藝國十三驛を載す此後二驛を増せるなるべし
 ○大物忌神、神名式に出羽國飽海郡大物忌神社(名神大)、今羽後國島海山下殿岡村吹浦村の兩所に祀り國幣中社に列す
 ○徒加修理、原本徒を從

に作る諸本に據て改む
 ○甲戌、此條紀略に據て補ふ
 ○辛巳、此條原本七月甲申條の次にあり紀略に據て此に移す
 ○甲申、此條類史百七十一及紀略に據て補ふ
 (六月)丁亥朔、此三字宮本に據て補ふ、原本六月七月次序倒置し錯亂多し壬子(廿六日)丁未(廿一日)乙未(九日)甲午(八日)斯くの如く次第す今干支を推して改め叙し類史紀略に據て戊子(二日)丙申(十日)辛丑(十五日)戊申(廿二日)の四條を補ふ
 ○戊子、此條類史百七十一及紀略に據て補ふ
 ○雜藥、原本藥を物に作る類史に據て改む、原本前本等には空白す諸國貢進年料雜藥の種目は典藥式に之を擧ぐ
 ○不論未進多少、原本論を許に、多を及に作る類史に據て改む
 ○畢而後充行、原本畢を了に作り而字なし水戸校本及類史に據て改め補ふ
 ○丙申、此條紀略に據て補ふ

加修理、何用之有、今須弄古樣廿脚、更造新樣四脚、許之、○甲戌、百僧於八省院限五箇日、轉讀大般若經、爲令天下豐樂也、○辛巳、山城國飢、以近江國正稅穀賑給之、○甲申、地震、○六月丁亥朔、戊子、地震、○甲午、勅令貢雜藥之國、不論未進多少、拘留醫師公廨、待返抄畢、而後充行、以爲恒例、○乙未、勅、諸所貢蔭子孫位子等、須式部民部丞勸籍之日、於其戶籍姓名之上、具注合否之狀、兩省之丞、署名其下、治部兵部省亦宜同之、自今以後、立爲恒例、○丙申、治部卿正四位下安倍朝臣吉人卒、年五十八、○辛丑、勅、天平寶字元年勅書曰、諸學生等、被任諸國博士并醫師之後、所給公廨一年之分、必應令送本受業師、夫全取一年俸、物情難和、分之事、宜有節級、須不論在國兼任、大國二百束、上國百五十束、中國百束、下國五十束、每年拘留、隨國所出、交易輕物、博士料送大學寮、醫師料送典藥寮、大學博士侍醫等兼任之類、不在此限、○丁未、大宰府言、府吏公廨、雖有未納、猶被以正稅全給之、彼代令國司徵填、若當國正稅數少者、管內通行、許之、授正六位上橘朝臣貞根從五位下、○戊申、勸發遣

○辛丑、此條類史八十四に據て補ふ
 ○戊申、此條紀略に據て補ふ
 ○篋依病不能進發、篋は不平あり病と稱して進發せざりしなり其事下文十二月己亥紀に見ゆ
 ○詳書治要、五十卷唐魏徵撰
 ○五經文、五字は類史及紀略に據て補ふ
 ○勸解由使言、以下許之に至る廿一字は類史百七十一に據て補ふ
 (七月)丙辰朔、朔字は紀略に據て補ふ、此月全文六月條の前にありて錯亂多し丙寅(十一日)戊辰(十三日)癸酉(十八日)甲申(廿九日)辛巳(五月廿五日)壬申(十七日)丁丑(廿二日)丙寅(十一日)丙辰(朔日)以上の如く次第す今干支を推して改め叙し紀略に據て辛巳條を五月に移し庚申(五日)乙亥(廿日)庚辰(廿五日)の三條を補へり
 ○卑濕、原本卑を早に作る閣本に據て改む
 ○水葱、抄菜蔬部藻類に水葱唐韻云菘(楊氏抄云水葱奈岐一云菘菜)水葱

唐使右近衛中將藤原朝臣助奏、副使小野朝臣篁、依病不能進發、○壬子、天皇御清涼殿、令助教正六位上直道宿禰廣公讀群書治要第一卷、有五經文故也、勸解由使言、使局史[]下名簿、不給監試、便被補任、許之、○秋七月丙辰朔、勅、如聞諸家京中、好營水田、自今以後、一切禁斷、但元來卑濕之地、聽殖水葱芹蓮之類、○庚申、大宰府奏、遣唐使第一第四船進發、○丙寅、天皇幸葛野川、觀魚、賜扈從五位已上祿有差、令僧沙彌各七口、讀經於柏原山陵、以有物恠也、兵部省言、准式部省置扶省掌二人、許之、大和國飢、賑給、○戊辰、以仕町地長廿四丈廣四丈、爲陰陽寮守辰丁廿二人廬一居、○壬申、分幣內外諸國名神、以祈秋稼也、○癸酉、有物如粉、從天散零、逢雨不銷、或降或止、○乙亥、東方有聲、如伐大鼓、○丁丑、勅、從彼青春、終此朱夏、雲膚屢興、雨液應作、隴畝之苗、秋稼可期、宜奉幣帛於伊勢大神宮、以祈成熟、○庚辰、令七大寺僧卅口於紫宸殿、限三箇日講仁王經一百卷、以恠異也、○甲申、天皇御八省院、奉幣伊勢大神宮、以禱豐年也、大宰府奏、遣唐第二船進發、○八月丙戌朔、丁

可食とあり
 ○芹、同に本草云水芹(勢利)味甘平無毒一名水英
 ○蓮之類、之字は諸本及類史に據て補ふ
 ○庚申、此條紀略に據て補ふ
 ○第四、第字は紀略になし上文に據て補ふ
 ○丙寅、原本天皇より有差までを一條とし令僧沙彌より有物性也までを又別條として掲げたるを紀略に據て此に合せ收む
 ○葛野川、一名大堰川といひ上流を保津川と云
 ○兵部省言、以下許之に至る十六字は類史百七に據て補ふ
 ○大和國飢賑給、此六字は紀略に據て補ふ
 ○以仕町地、狩谷氏は町恐丁といひ宮本には仕下に丁字を脱する歟と云
 ○守辰丁、職員令に掌伺漏冠之節以時擊鐘鼓とあり
 ○廬一居、纂詰廬舎に作る是なるが如し
 ○内外諸國名神、名神の名は臨時祭式に詳なり
 ○乙亥、此條紀略に據て補ふ矢野玄道翁曰七年九月紀云去承和五年七月五

亥、釋奠文宣王也、○戊子、天皇御紫宸殿、召大學博士學生等十一人、遞令論難昨日所講尙書之義、賜祿有差、是日遣唐使表奏到來、其表曰、臣常嗣等言、伏奉四月廿八日勅書慰問、臣等捧戴顛倒、涯分不次、施無遠近、資生之道潛通、恩及客旅、感化之心更切、臣等自辭闕庭、載離寒暑、國命未宣、勞動頻年、雖有一生、分當萬死、不悟運闕三秋、嚴霜不行、常殺之命、天爲一物、偏恩曲煦、埋枯之根、是知臣等年齊柏寢、酬恩何期、紙罄蘭臺、書罪空滿、謹拜表以聞、○庚寅、以刑部卿正四位下源朝臣弘爲治部卿、信濃守加故、參議正四位下安倍朝臣安仁爲兼刑部卿、云云、○壬辰、奉授美濃國多紀郡无位久久美雄彥神從五位下、勅、五畿内七道諸國勅旨、并親王以下寺家所占墾田地、未開之間、公私共利、若不隨憲法、令民愁苦者、國宰郡司解却見任、專當莊長科違勅罪、○乙未、大舍人頭從四位下占野王卒、○己亥、霹靂於監物前柳樹、往還人休于樹下、一男震死、一女傷脛、一童纔存、一女無恙、○甲辰、奉幣帛并白馬於貴布禰神、丹生河上雨師、以祈止雨也、○乙巳、暴風大雨、壞民廬舍、○戊申、備前

日伊豆國上津島神異噴火是其聲響也
 ○青春、類書纂要に春日青陽言氣清而温陽也亦曰青春とあり

國飢賑給之、○癸丑、降雨殊切、奉幣賀茂上下、松尾、乙訓、垂水、住吉等名神、以祈霽焉、

○雲膚、雲を云、○雨液應作、西本尾本等及類史雨を句に作を候に作る、○庚辰、此條紀略に據て補ふ、(八月)丙戌朔、此三字宮本に據て補ふ、○文宣王、我國にて孔子を文宣王と稱するは神護景雲二年七月紀大學助教膳臣大丘の奏に據る、○大學博士、原本博を轉に作る諸本に據て改む、○四月廿八日勅書、四月戊申に賜ひしものなり、○捧戴、原本戴を載に作る諸本に據て改む、○涯分不次、身分不相應なるを云、○施無遠近云々、遠く離る、客旅の身にも天恩を施さる、こゝ隔なく是を以て感激の心更に切なりとなり資生之道は易坤卦の象傳に至哉坤元萬物資生とあるに出づ、○離寒暑、離は歴也、○運闕三秋云々、三秋は孟仲季の三秋を云古へ刑獄の事は秋を以て行ふ故に周禮刑官を秋官に入れたり即ち幸にして臣等に對しては三秋行刑の時なく天皇の御寛宥に據て嚴罰を免れたりとなり常殺は纂詰に肅殺と改めたり、○天爲一物云々、一物は淮南子に樹一物而萬葉生とあり煦は字彙に烝也温也又熱也と云、○年齊柏寢云々、藝文類聚四十九所載隋江總の表文に年齊柏寢(柏は柏の俗字)豈報恩榮紙罄蘭臺、未書棟戴とあるに據れり柏寢は詳ならず蘭臺は漢書百官表に御史大夫有兩丞一曰中丞二在殿中蘭臺掌圖籍秘書とあり幾年を経るも恩を酬ゆる時なく罪多くして書き盡し難きを云、○刑部卿正四位下、卿の字は宮本に據て補ふ、○爲治部卿、原本には治の上に兼の字あり衍なれば宮本に據て削る、○參議正四位下、安仁は補任に從四位下とす、○多紀郡、今養老郡に入る、○久久美雄彥神、美雄の二字は宮本及神名式に據て補ふ式に美濃國多藝郡久久美雄彥神社、今養老郡養老村澤田に祀る、○未開之間、之字は類史に據て補ふ、○不隨憲法、隨は類史慎に作る、○占野王卒、世系詳ならず、○監物前、纂詰に前上恐脫「所字」とあり前或は所の譌か、○甲辰、此條原本乙巳條の次にあり、干支を推して改め叙す紀略亦原本に同じ、○貴布禰神、神名式に山城國愛宕郡貴布禰神社(名神大月次新嘗)とあり貴船村に祀り官幣中社に列す祭神は罔象女神臨時祭式祈雨神祭の條に丹生川上社貴布禰社各加黑毛馬一疋其霖雨不止祭料亦同但馬用「白毛」と見え祈雨止雨には必ず此神を祭る、○丹生河上雨師、寶字七年五月紀に注せり、○戊申、此條紀略に據て補ふ、○乙訓、神名式に山城國乙訓郡乙訓坐大雷神社(名神大月次新嘗)とあり後廢亡して今は向日町向神社の相殿に奉祀すと云り、○垂水、同式に攝津國豐嶋郡垂水神社(名神大月次新嘗)、今豐能郡豐津村垂水に祀る

(九月)丙辰朔、此三字宮本に據て補ふ、
 ○三和神、神名式に下野國那須郡三和神社、今同郡那珂村三輪に祀る、
 ○菊醋、原本菊醋に作る水戸校本に據て改む二年九月辛亥紀に注す

○九月丙辰朔辛酉、下野國那須郡三和神、預之官社、○癸亥、又奉幣馬於貴布禰、丹生河上雨師、以祈止風雨也、○甲子、是重陽之日也、天皇不豫、停廢節會、但賜菊醋、見參親王已下侍從已上、於廊下賜祿有差、○乙

○親王已下、已下の二字宮本に據て補ふ
 ○壬申、此條類史百五十九に據て補ふ
 ○神祇、原本神社に作る類史に據て改む
 ○畿内七道、七の字は紀略に據て補ふ
 ○米華、華は諸本花に作る

(十月)乙酉朔、此三字宮本に據て補ふ此月原本錯亂多く戊子(四日)甲午(十日)甲寅(二十日)乙未(十一日)丁酉(十三日)癸巳(九日)戊戌(十四日)丙午(廿二日)以上の如く次第せり今干支を推して改め叙せり
 ○永大帳、民部式に凡京職諸國大帳者毎至班田之年五歳已下男女類注年記あり之を永大帳と云なるべし
 ○多丁之戸、戸字は西本に據て補ふ
 ○多課之烟、課口多き家を云烟は戸に同じ
 ○比奈麻治比賣神、神名式隱岐國知夫郡比奈麻治比賣命神社、黒大村宇賀に祀る比奈の比字は宮本及神名式に據て補ふ
 ○雜官、原本官を宮に作る

丑、頒使七大寺誦經、以聖體未康平也、寺別御被一條、以充布施○己巳、定大宰管内地子交易法、綿一屯直稻八束、○壬申、近江國愛智郡荒廢田百七十町爲勅旨田、○甲戌、勅令修理天下定額寺堂舍、并佛像經論及神祇諸社、○甲申、從七月至今月、河内、參河、遠江、駿河、伊豆、甲斐、武藏、上總、美濃、飛彈、信濃、越前、加賀、越中、播磨、紀伊等十六國、一一相續言、有物如灰、從天而雨、累日不止、但雖似恠異、無有損害、今茲畿内七道、俱是豐稔、五穀價賤、老農名此物米華云、○冬十月乙酉朔、戊子、遣左兵庫頭從五位上岡野王等、奉神寶於伊勢大神宮、○癸巳、民部省言、永大帳口率之數、或國戸到二三丁、或國戸到三四丁、而頃年檢損田使帳、多丁之戸定是遭損、多課之烟、必以爲得也、通計之率、理不可然、自今以後、損得戸丁、彼此同率、許之、○甲午、奉授隱岐國无位比奈麻治比賣神從五位下、○乙未、勅畿内諸國雜官稻代收錢、一切禁之、○丁酉、喚集諸司官人能書者五位已下册人於冷然院、奉寫金剛壽命陀羅尼經一千軸、是日天皇遷自常寧殿御清凉殿、詔曰、人之度量器非一同、識鑒行能、各

る諸本及類史に據て改む
 ○册人、原本册人に作る
 ○關本西本前本及紀略に據て改む
 ○金剛壽命陀羅尼經、大藏目錄に佛說一切如來金剛壽命陀羅尼經一卷唐金剛智共智藏譯あり
 ○遷自常寧殿、常寧殿に御するこ四月乙卯紀に見ゆ
 ○詔曰、以下爲例進之に至るまでは類史百七十九に據て補ふ
 ○翹楚、毛詩周南漢廣章に翹々錯薪言刈其楚とあるに出づ衆に卓出するを云
 ○道棟梁、漢書陳球傳に公爲國棟梁とあり此は佛道の統領たる人の義
 ○年薦、釋氏要覽下に夏臘即釋氏法歲也凡序長幼必問夏臘多者爲長云々臘接也前安居入制至七月十五日爲受臘之日若俗歲除日也至十六日名新歲也とあり
 ○須綱一人、纂詰に須綱疑僧綱と云
 ○擧頭、一同より選舉せられたる人を云
 ○丙午、此條紀略壬寅に係く壬寅は十八日なり

有歸趣、宜智德翹楚、爲道棟梁者、無問隱顯、不限員數、同共選舉、其道業優潤、能堪傳燈、及精進苦行、衆所共知、每大寺、簡擇七人已下、具注年薦、若無此類、不可強舉、縱雖人多、同宗之人、不得專舉、遍詢諸業、仍須綱一人、每寺須顯對大衆而撰之、令別當三綱并舉頭同署其帳、皆三年一度造簿、十月之内、爲例進之、○戊戌、酉剋、白虹竟、西山南北、長卅許丈、廣四許丈、須臾而銷焉、○丙午、是夜彗星見東南、其氣赤白、竟天數許里、須臾而不見、授正六位上安倍朝臣綱繼從五位下、○庚戌、彗星猶見、○甲寅、太政官處分、大宰府例進緋綿紬一百端、今定紺紬十端、黑緋紬卅端、緋紬五十端、畫革五十枚、今定白革卅枚、畫革廿枚、○十一月乙卯朔、辛酉、勅、廼者妖祥屢見、氛祲不息、思民與歲、忘寢與食、其令黎庶無疾疫之憂、農功有豐稔之喜、不如般若妙詮之力、大乘不二之德、普告京畿七道、令書寫供養般若心經、仍須國郡司并百姓、人別俾出一文錢、若一合米、郡別於一定額、寺若郡館、收置之、國司講師惣加檢校、所出之物、分爲二分、一分充寫經料、一分充供養料、其米來年二月十五日、各於本處、屈請精進

○是夜、是字は紀略に據て補ふ
 ○數許里、里字は關本西本前本に據て補ふ
 ○庚戌、此條紀略に據て補ふ
 ○黑緋袖、民部式大宰府別直條には黑緋を深緋に作る
 ○畫革五十枚、原本革を華に、枚を枝に作る關本尾本前本に據て改む下同
 (十一月)乙卯朔、此三字宮本に據て補ふ
 ○酒者、原本酒を廻に作る關本西本宮本に據て改む
 ○氣稜、氣は原本氣に作る諸本に據て改む字書に氣稜妖氣也とあり
 ○妙詮、詮は原本經に作る諸本に據て改む詮は字書に解喻也とあり
 ○其米、其は關本西本前本等取に作る
 ○公家、朝廷を云
 ○丁卯、此條類史九十九に據て補ひ又授以下は同百九十に據る
 ○七八許丈、原本七尺許に作る紀略に據て改む
 ○侍從從四位下正行王、關本前本中本等從一字な

練行堪演說者、開設法筵、受持供養、當會前後并三箇日內、禁斷殺生、公家所捨之物、每一會處、以正稅稻一百束充之、庶使普天之下、旁薰勝業、率土之民、共登仁壽、○丁卯、授正六位上百濟王教凝從五位下、又授外從六位下字漢米公毛志外□五位下、以曾經征戰有勳功也、○辛未、彗星見東方、是星起十月廿二日、至今月十七日、每夜寅剋見東方、其長七八許丈、○甲戌、以從五位上眞國王爲大舍人頭、從五位下文室朝臣氏雄爲內匠頭、正五位下藤原朝臣嗣宗爲兼兵部大輔、少納言如故、從五位下岡於王爲內膳正、從四位下滋野朝臣貞主爲彈正大弼、從五位下藤原朝臣諸氏爲右衛門權佐、侍從從四位下正行王爲兼越中守、從四位下和氣朝臣仲世爲阿波守、從五位下在原朝臣仲平爲豐前守、右京人散位從七位上勳九等坂上忌寸豐雄、改忌寸賜宿禰、○辛巳、皇太子於紫宸殿加元服、詔皇太子恒貞、風標岐嶷、元稟溫潤、毓問東華、守器上序、離幼從長、日以躋昇、令月休辰、肇修元服、義兼四禮、道重三加、盛德以之克融、承祧由其逾楸、嘉慶之事、豈獨在予、宜洽愷澤、被之率土、可賜

○山崎校本には侍從の二字を衍文とす
 ○風標岐嶷、風標は風采なり疑は原本山疑の二字に作る諸本に據て改む岐嶷は既に注す
 ○元稟溫潤、元稟は天稟に同じ温潤は原本温潤に作る水戸校本に温潤疑温潤之訛と云るに據て改む
 ○毓問東華云々、毓問の二字は關本西本に據て補ふ藝文類聚十六所載宋(南北朝)謝莊皇太子元服表に毓問東華飛英上序とあるに據れり東華は宋史地理志に東京宮城東西面門曰東華西華とあり上序は上位と云に同じ守器は易序卦傳に圭器者莫若長子とあるに據れり
 ○離幼從長、今年御年十四歳になり給ひしを云
 ○令月休辰、令は原本今に作る諸本に據て改む
 ○義兼四禮、白虎通に四禮謂君臣父子兄弟朋友也とあり
 ○道重三加、禮記冠義に三加彌尊、注に初加緇布冠次加皮弁次加爵弁とあり即ち元服の儀式なり

天下爲父後者、六位已下爵一級、承和四年以徃言上租稅未納、咸從免除、普告中外、俾知此意、无位佐伯宿禰貞子、紀朝臣是子、栗前眞人永子、吉野眞人高子、並授從五位下、以東宮侍女也、是日亦源朝臣融於內裏冠焉、天皇神筆叙正四位下、嵯峨太上天皇第八皇子、大原氏所產也、賜之天皇令爲子、故有此叙、賜見參親王已下五位已上祿有差、○癸未、先太上天皇先御冷然院、次御神泉苑、放隼擊水禽、天皇獻御馬四疋、鷹鷄各四聯、嗅鳥犬、及御屏風、種々翫好物、授无位源朝臣生從四位上、從五位下滋野朝臣貞雄從五位上、從四位上笠朝臣繼子正四位下、從五位上內藏宿禰影子從四位下、无位菅原朝臣閑子、大中臣朝臣岑子並從五位下、以當日陪奉先太上天皇近臣侍女之類也、賜扈從諸臣、及外記官吏內記等祿、各有差、○甲申、律師傳灯大法師位慈朝卒、俗姓長尾氏、右京人、神護景雲四年、得度法相宗、住西大寺、故少僧都常騰之入室也、卒時年八十二、嵯峨太皇太后御朱雀院、宴五位已上、賜祿有差、○十二月乙酉朔甲午、彈正臺奏朝服之色、明在法條、而今會集之時、

○承祧由其逾祿、祧は始祖の廟なり之を承繼すべき徳の彌盛なりとの意宮本其を斯に作る
 ○嘉慶之事云々、孝經に一人有慶萬邦賴之とあるに出づ
 ○性澤、原本澤を決に作る諸本に據て改む
 ○栗前真人、原本栗を粟に真人を直久に作る閣本西本前本等に據て改む
 ○吉野真人、原本眞を直に作る閣本に據て改む録左京皇別に吉野真人出自、諡敏達孫百濟王之後也とあり
 ○神筆、原本抽筆に作る諸本に據て改む宸筆と云に同じ
 ○嵯峨太上天皇、太上の二字は諸本に據て補ふ
 ○第八皇子、皇字は紀略に據て補ふ
 ○大原氏、宮人、名は全子
 ○嗅鳥犬、獵犬なり元年正月紀に見ゆ
 ○源朝臣生、嵯峨天皇の皇子
 ○慈朝卒、元亨釋書に載せず
 ○故少僧都常騰之入室也、故は原本效に閣本前

有綠無縹僭上之弊、遂失致敬、稽之朝儀、理不可然、紫緋之品、其灼然、易就而正、綠縹之次、其類猥多、難得而糺、若非早糺、正恐流連忘返、望請、仰式兵兩省、俾文武諸司、移八位以下人位、姓名於臺、仍遣巡察等對勘、位色、若猶不改、年五六月、爲例令移、奏許之、○丙申、山城國宇治郡公田一町五段三百步、賜左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、○丁酉、延名僧百口於八省院、令轉讀御願奉寫金剛壽命陀羅尼經千軸也、○己亥、天皇於清涼殿、修佛名懺悔、限以三日三夜、律師靜安、大法師願安、實敏、願定、道昌等、遞爲導師、內裏佛名懺悔、自此而始、是日勅曰、小野篁、內含綸旨、出使外境、而稱病故、不遂國命、准據律條、可處絞刑、宜降死一等、處之遠流、仍配流隱岐國、初造船使造船之日、先自定其次第名之、非古例也、使等任之、各駕而去、一漂廻後、大使上奏、更復卜定、換其次第、第二船改爲第一、大使駕之、於是副使篁怨對、陽病而留、遂懷幽憤、作西道謠、以刺遣唐之役也、其詞率興多犯忌諱、嵯峨太上天皇覽之、大怒、令論其罪、故有此竄謫、○壬寅、佛名懺悔、竟施導師僧五口、物及得度者各一人、○甲辰、從

本中本放を作る西本に據て改む常騰は弘仁六年九月紀(後紀二五頁)に傳見ゆ入室は高弟を云
 ○嵯峨太皇太后、原本太皇を天皇に作る諸本に據て改む
 ○朱雀院、拾芥抄中末に累代後院或號四條後院三條北朱雀西とあり
 ○十二月乙酉朔、此三字宮本に據て補ふ山崎校本に類史廿八云十二月辛酉朔乙丑天皇始御紫宸殿按此月乙酉朔非辛酉朔以朔爲辛酉乙丑五日也然與本史及通曆不合恐類史當有誤故今不取と云り
 ○明在法條、衣服令を云
 ○有綠無縹、衣服令に朝服六位深綠衣七位淺綠衣八位深縹衣初位淺縹衣見ゆ縹と縹との區別は説文に綠帛青黃色、縹青白色也とあり
 ○其灼然、纂註に其下に色字を補へり
 ○流連忘返、原本連を遁に忘を忌に作る連は纂註に據り忘は諸本に據て改む
 ○式兵兩省、式部兵部の二省

五位上藤原朝臣春津爲侍從、○乙巳、山城國紀伊郡空閑地二町八段賜繁子內親王、○庚戌、芳子內親王薨、嵯峨太皇太后所誕第五皇女也、依太后旨、停監護使、○辛亥、追小野篁所帶正五位下之告身、大安寺僧傳灯大法師位壽遠卒、俗姓椋橋部氏、武藏國人也、延曆之末、出家得度、大法師安澄之入室、而三論之學有聲、最精、因明、諸人推服、卒時年六十八、

○臺、彈正臺なり
 ○巡察等、職員令に巡察
 彈正十人掌、巡察内外
 糾彈非違あり
 ○對勘位色、令制示す所
 の色と實物を對比して
 勘檢するを云
 ○陀羅尼經、奉寫の事十
 月丁酉紀に見ゆ
 ○佛名懺悔、公事根源に
 佛名さいふは三世の諸佛
 の名號を唱て六根の罪を
 滅する心なりあり
 ○靜安、元亨釋書九に靜
 安從西大寺常騰學法
 相嘗居比良山讀十二佛
 名經禮拜修懺其聲聞帝
 闕諸州間有聞者因茲
 勅賜僧官承和五年奏置
 宮中季冬佛名懺あり
 ○自此而始、元亨釋書資
 治表に天長七年冬十有二
 月修佛名懺禮于宮中と
 見ゆ
 ○小野篁云々、六月戊申
 紀を參看すべし
 ○降死一等、原本死下に
 罪字あり諸本に據て削る
 ○西道謫、佚して傳はらず
 作而註す ○有此竄謫、篁流謫のこま今昔物語古事談江談抄等に見ゆ ○導師僧五口、名は上に見ゆ ○得度者、山崎校本に得疑賜と云類史百七十八には者字なし ○繁子内親王、嵯峨天皇の皇女 ○停監護使、親王の薨去には治部大輔喪事を監護すること喪葬令に見ゆ ○追小野篁云々告身、追は禊、告身は位記なり ○壽遠、元亨釋書に見えず ○椋橋部氏、錄攝津雜姓に椋橋部連伊香我色乎命之後とあり ○安澄、元亨釋書二に安澄善議之上足とあり ○因明、翻譯名義集五(攝拖必駄條)に大論言五明者云々四因明考定正邪一研覈眞偽とあり今の論理學なり

續日本後紀卷第七

○承和、此二字宮本に據て補ふ

【承和六年】廢朝賀、朝野群載廿一中原師平寬治三年廢朝勘文に天皇是嵯峨天皇第二子也雖爲淳和天皇之養子若就本生被停朝賀歟とあり
 ○薨背、薨去と云に同じ
 ○弟河王、原本弟を第に作る前本及類史九十九に據て改む
 ○並從四位上、並字は宮本及類史に據て補ふ
 ○正五位上善道朝臣、原本上を下に、朝臣を宿禰に作る宮本及前後の文に據て改む
 ○濱雄、濱字は宮本及甲子條に據て補ふ水戸校本には關に作る

續日本後紀卷第八

起承和六年正月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉 勅撰

六年春正月甲寅朔、廢朝賀、緣天皇之同產芳子内親王去月薨背也、是日、天皇不御紫宸殿、但於陣頭、賜侍從已上酒及祿、○庚申、天皇御紫宸殿、覽青馬、宴百官、詔授正四位下菅原朝臣清公從三位、正五位下基棟王從四位下、從五位下有雄王、岡於王、並從五位上、正六位上弟河王、野長王、並從五位下、從四位下橘朝臣氏人、滋野朝臣貞主、藤原朝臣助、並從四位上、正五位上善道朝臣眞貞、百濟王慶仲、並從四位下、從五位上藤原朝臣貞雄、橘朝臣岑繼、高道宿禰鯛鈞、並正五位下、從五位下藤原朝臣岳守、大春日朝臣公守、並從五位上、外從五位下御船宿禰清風、正六位上藤原朝臣良方、藤原朝臣近主、藤原朝臣濱雄、朝野宿禰貞吉、藤原朝臣友長、佐伯宿禰三松、藤原朝臣正雄、橘朝臣枝主、丹墀眞人

○宮城、城は類史成に作る
 ○御園、原本園を國に作る諸本に據て改む
 ○志紀、原本志を老に作る水戸校本に據て改む
 ○藤原朝臣貞子、臣字は諸本に據て補ふ貞子は今の女御
 ○種子、種は原本種に作る閣本西本に據て改む種子は今上の更衣
 ○鳳子並從五位下、原本下を上に作る誤りなること明なれば改む
 ○從四位上藤原朝臣雄敏、原本上を下に作る閣本西本中本に據て改む
 ○興道、原本眞道に作る水戸校本及前後の文に據て改む諸本奥に作るは興の訛なり
 ○長良、良字は宮本に據て補ふ
 ○伊□守、原本伊豫守に作れど諸本には之を闕く今前後の文を考へて姑く諸本に從ひ缺字とす
 ○在原朝臣仲平、朝臣の二字は宮本に據て補ふ

氏永、高階真人黑雄、佐伯宿禰宮成、吉野真人宮城、紀朝臣松永、並從五位下、正六位上清内宿禰御園、志紀宿禰永成、直道宿禰廣公、物部首廣泉、春江宿禰安主、尾張連濱主、並外從五位下、○辛酉、於大極殿、始修最勝會、是日授從四位下藤原朝臣貞子從三位、无位紀朝臣種子正五位下、從五位下橋朝臣枝子、无位藤原朝臣仲子、安倍朝臣貞子、並從五位上、无位橋朝臣小數、藤原朝臣鳳子、並從五位下、○甲子、以從五位下藤原朝臣秋常爲少納言、正五位下藤原朝臣嗣宗爲右中弁、從四位下百濟王慶仲爲民部大輔、從五位下藤原朝臣濱雄爲少輔、從四位上藤原朝臣雄敏爲兵部大輔、從四位上滋野朝臣貞主爲兼大和守、彈正大弼如故、從五位下小野朝臣興道爲左衛門佐、從四位下藤原朝臣長良爲左馬頭、正五位下高道宿禰調釣爲攝津守、從四位下大枝朝臣總成爲伊□守、從五位下惟良宿禰貞道爲兼伊勢介、圖書頭如故、從五位下在原朝臣仲平爲駿河守、從五位下藤原朝臣友永爲介、從五位下藤原朝臣伊勢雄爲甲斐守、從五位上藤原朝臣貞成爲相摸權守、外從五位

○全嗣、原本全を金に作る西本尾本前本及五年正月丙寅紀に據て改む
 ○源朝臣明、原本源を藤原の二字に作る諸本に據て改む
 ○良方、原本良房に作る諸本に據て改む
 ○正躬王爲丹波介、七年八月辛亥紀に據るに介は守の誤なるべし
 ○令論義訖施御被云々、原本義を議に作り訖字なし柳本水戸校本に據て改め補ふ又云々の二字は諸本に據て補ふ
 ○雪裏梅、裏字は原本裡に作る閣本柳本宮本及紀略に據て改む
 ○兌方、西方なり
 ○一許丈、原本一丈許に作る閣本柳本及紀略に據て改む

下出雲朝臣全嗣爲武藏介、從四位上源朝臣明爲兼近江守、大學頭如故、從五位上安倍朝臣濱主爲介、從五位下出雲朝臣岑嗣爲美濃權介、權中納言從三位藤原朝臣良房爲陸奥出羽按察使、左兵衛督如故、從五位下紀朝臣松永爲若狹守、從四位上源朝臣寬爲加賀守、從五位下藤原朝臣良方爲介、從五位下眞福良王爲能登守、從五位下丹墀真人氏永爲越後守、從四位下正躬王爲丹波介、正五位下坂上大宿禰鷹主爲但馬守、外從五位下志紀宿禰永成爲伯耆介、從五位下藤原朝臣貞根爲出雲守、從五位下朝野宿禰貞吉爲美作介、云云、從五位下菅野朝臣永岑爲兼豐前守、主殿頭齋院長官如故、○丁卯、最勝會竟、更引名僧十餘人於禁中、令論義、訖施御被、云云、○己巳、天皇御紫宸殿、覽踏歌、宴侍從已上、賜祿有差、○庚午、天皇觀大射於豐樂院、○癸酉、天皇內宴于仁壽殿、公卿及知文者三四人得昇殿、同賦雪裏梅之題、訖賜祿有差、○丙子、彗星見兌方、長一許丈、參議從四位上民部卿勳六等朝野宿禰鹿取、抗表乞老、優詔不許、伊勢守從四位下丹墀真人清貞卒、○己卯、

○多度大神宮寺、多度神社は神名式伊勢國桑名郡多度神社(名神大)是なり同寺資財帳に天平寶字七年僧滿願の創立せし所なり(閏正月)先太上天皇、先字は類史廿八及紀略に據て補ふ
 ○三坂神、神名式周防國佐婆郡御坂神社、出雲村岸見
 ○織手町、拾芥抄中末に織部町鷹司北猪熊西さあり
 ○美都野、左馬寮式に山城國美豆厩あり今久世郡佐山村御牧村及木津川を隔て綴喜郡美豆村あり並に古の美都野なり
 ○如坻之貯、毛詩小雅甫田章に曾孫之庾如坻如京、注に坻水中之高地也さあり倉庫に山の如く粟を貯ふるを云原本坻を垣は西本中本前本垣に作るは垣の訛なれば改む
 ○多稔之穫在務業、同周頌豐年章に豐年多稔多稔、注に稔は稻也さあり收穫の多きは農民の勤勉に據れりさなり原本在上に之字あり山崎校本に據て削る

以伊勢國桑名郡多度大神宮寺爲天台一院。○閏正月甲申朔乙酉天皇朝觀先太上天皇於嵯峨院。是日以正四位下源朝臣融從四位下正道王並爲侍從。賜扈從群臣祿有差。○丁亥奉授周防國無位三坂神從五位下。○甲午內藏助從五位上藤原朝臣良相爲頭。○戊戌織部司織手町災燒百姓廬舍數烟。○己亥行幸美都野山城國獻御贄賜親王已下國司判官已上祿各有差。日暮還宮。○丙午勅如坻之貯由有年多稔之穫在務業。去年勸農諸國致稔。今茲不勸習俗猶怠。宜令諸道諸國勸課農桑必期豐衍。上野國言前年綱領郡司等稱填調庸欠并減直物借取諸司諸家出舉錢其手實云附來年使將報上而不令後年綱領知情而封家諸司等便割調物先補錢代廻利爲本動成數倍年中所報殆及萬貫官物未進大率由此望請下知諸家以除此煩者仰下諸司諸家七道諸國禁制之。勅如聞諸國疾疫百姓夭折宜令天下國分寺限七ケ日轉讀般若兼遣僧醫隨道治養又令鄉邑每季敬祀疫神。○辛丑行幸水成瀨野遊獵山城攝津兩國獻御贄賜親王已下侍從及國司

○去年原本去上に得字あり諸本に據て削る
 ○豐衍原本豐年作る西本柳本尾本及紀略に據て改む衍は饒也
 ○綱領郡司民部式に凡官物運京應差綱領者米三百石已上差國司史生已上勝任者充不滿此數差郡司及子弟並百姓殷富家口重大者云々さあり
 ○手實戶令義解に手實者戸頭所造之帳さあり手づから書ける帳簿なり
 ○下知諸家以除此煩者諸家以下勅如聞に至るまでは閣本柳本水戸校本及類史七十九に據て補ふ
 ○敬祀疫神原本祀を禮に作る諸本に據て改む原本神下に伊勢守以下十四字あり柳本なし既に正月丙子條に出でたれば削る
 ○辛丑類史紀略も亦同じけれ紀略に閏正月の最末に置けば辛亥の誤なるべし故に此に存して改めず辛亥は二十八日なり
 ○國司已上國司の下主典の二字を脱せるか
 ○二月駐蹕原本蹕を驛に作る閣本前本及類史卅一に據て改む

已上祿有差。○二月癸丑朔乙丑天皇先幸神泉苑次遊覽北野皇太子從駕山城國獻御贄便駐蹕於右近衛馬埒命先驅近衛等騁試御馬之遲疾日暮還宮。○丁卯令東西兩寺講讀般若心經以彗星頻見也。○庚午以從五位下文室朝臣助雄爲玄蕃頭從四位下和氣朝臣仲世爲刑部大輔從五位下豐前王爲大膳大夫外從五位下大岡宿禰豐繼爲木工助從四位上紀朝臣名虎爲兼掃部頭備前守如故從五位下愛宕王爲內膳正外從五位下秦宿禰氏繼爲造酒正從五位上岡於王爲齋宮長官從四位下坂上大宿禰清野爲右馬頭從五位下佐伯宿禰宮成爲助正五位下永野王爲下野守從五位上山名王爲阿波守從五位下文室朝臣笠科爲土左守。○丁丑授從四位上百濟王勝義從三位正六位上百濟王永仁從五位下。○戊寅播磨國印南郡佐突驛家依舊建立越前國氣比大神宮雜務停預國司隸神祇官。○三月壬午朔勅遣唐三艘船恐有風波之變宜令五畿內七道諸國及十五大寺轉讀大般若經及海龍王經待使者歸朝爲轉經之終。○乙酉陸奧國百姓三萬八百五

○右近衛馬埒、右近衛馬埒は一條大宮にあり河海抄に見ゆ
 ○豐前王、原本王を守貞成の三字に作る諸本に據て改む
 ○齋宮長官、原本宮を官に作る諸本に據て改む
 ○山名王爲阿波守、七年六月甲寅紀に再び見ゆ
 ○佐突驛家、兵部式に載せず倭名抄郷名にも見えれど今同郡別所村大字に佐土、佐土新あり是佐突驛家の址ならむと地理志料に云り
 ○三月窮弊、原本窮を究に作る諸本に據て改む
 ○下野、諸本に據て補ふ
 ○通爲同色云々、爲字は關本柳本に據て補ひ云々の二字は諸本に據て補ふ
 ○長訓、文德紀齊衡二年九月己巳紀に傳見え亦釋書にも出づ
 ○修理坊城使、標注職原抄に三代格天長元年の官符に左右坊城使あり坊は京内諸坊、城は宮城にて大内の外郭又は左右京の坊門など修理の職ならん歟云々あり

十八人給復三年爲濟窮弊也、勅令相摸武藏上總下總常陸上野下野七國相分卷數寫進一切經一部其經修飾通爲同色云云、○壬辰授掌侍正五位下大和宿禰館子從四位下從五位下菅原朝臣閑子爲掌侍、○乙未大法師長訓爲律師、○丙申修理坊城使員左右各二員今省定置各一員、停給内外權任郡司職田云云、○丁酉遣唐三箇舶所分配知乘船事從七位上伴宿禰有仁曆請益從六位下刀岐直雄貞曆留學生少初位下佐伯直安道天文留學生少初位下志斐連永世等不遂王命相共亡匿稽之古典罪當斬刑勅特降死罪一等配流佐渡國、○己亥授從四位下百濟王惠信從三位、○庚戌奉幣貴布禰兩師二神以祈雨也、比及晚頭雷雨賜諸衛府等祿有差從四位下永原朝臣眞殿卒云云、加賀國高雄山寺爲眞言別院、○夏四月壬子朔癸丑遣右近衛將監正六位上坂上大宿禰當宗近衛及俘夷等於伊賀國索捕名張郡山中私鑄錢群盜凡十七人進鑄錢作具及錢等、○甲寅中納言兼右近衛大將從三位橘朝臣氏公上表請辭大將職優詔不許云云、○乙卯授

○内外權任郡司職田云々、内は畿内、外は畿外の諸國なり郡司の職田は田令に大領六町少領四町主政主帳各二町とある是なり職田下の云々の二字は諸本に據て補ふ
 ○曆請益、原本請か諸に作る諸本に據て改む
 ○刀岐直、原本岐を波に作る諸本に據て改む
 ○亡匿、原本亡を已に作る水戸校本に據て改む
 ○庚戌、原本戌を成に作る諸本に據て改む
 ○貴布禰兩師二神、兩師は丹生川上神社を云
 ○永原朝臣眞殿、水戸校本殿を敏に作る
 ○加賀國高雄山寺云々、加賀以下は類史百八十に據て補ふ高雄山寺の所在詳ならず
 ○四月俘夷、原本俘を浮に作る諸本に據て改む
 ○伊賀國、賀は原本勢に作る柳本宮本に據て改む
 ○進鑄錢作具及錢等、此八字柳本前本等分注とす
 ○優詔不許云々、云々の二字は諸本に據て補ふ
 ○良山從五位上、原本此下に女御藤原朝臣淨子(澤子の誤)の傳見え六月

從五位下淨野宿禰良山從五位上、○戊午地震改越前國人造兵司正六位上味眞公御助麻呂本居貫附左京五條二坊、美濃國惠奈郡飢賑給之、○庚申右京人正六位上次田連魚麻呂等七人賜姓忠宗朝臣、○辛酉遣使祈雨於丹生雨師神、以從四位下云云、○壬戌天皇曲宴于紫宸殿賜大臣御衣自外群臣祿各有差、○甲子奉授无位自玉手祭來酒解神從五位下、○乙丑授正六位上大神朝臣野主從五位下、○丙寅火于左馬寮國飼町其燼飛落中院細殿之上撲滅焉、○丁卯兵部省言頻年王臣并非參議四位已上走馬不據召計越次競入或由人情或在馬力前後倒錯難禁亂奔望請走馬到埒南頭令各從者攝其馬銜即應召計隨序放進亂奔埒中扣留其次先亂馬依止奏訖然則甲乙分明朝禮儼然依請許之、○戊辰誦經于都下七寺以天皇不豫也、勅頒幣於松尾賀茂上下貴布禰丹生川上兩師住吉諸社令祈澍雨又限七箇日令讀仁王經於十五大寺兼通城外崇山有驗之寺同俾轉經並以自春迄今不雨也、○辛未一向令七道諸國宰奠幣名神雩致甘雨、○

字あり諸本に據て削る志
 紀郡は今南河内郡に屬す
 ○延曆寺、近江國滋賀郡
 比叡山にあり天台宗の大
 本山なり
 ○高天彦神、神名式大和
 國葛上郡高天彦神社(名
 神大月次相嘗新嘗)、今南
 葛城郡葛城村北窪
 ○戊申、此條柳本及類史
 九十九に據て補ふ
 ○宮田鷹、類史富田鷹に
 作るは非なり
 (六月)庚戌朔、此條及
 癸丑、甲寅、乙卯の四條
 は紀略に據て補ふ
 ○丹貴二社、丹生川上及
 貴布禰神社なり
 ○元早、元は本書咒に作
 るは誤なり故に改むべし
 ○臨東西市人云々、纂諸
 臨を驅に改む朱雀路は京
 城の正中朱雀門より南極
 羅城門に達する最大道路
 なり市人を此に集めて雨
 を祈らしむるなり
 ○己卯、此條山崎校本に
 は推于支移于月末己卯
 條之下といひ水戸校本
 には今推前後于支己卯
 當作乙卯と云り乙卯は
 六日なり今姑く舊に依り
 此に存して後考を俟つ
 ○彼此一同、原本一を亦

國志紀郡志紀鄉百姓志紀、松取宅中、所生橘樹、其高僅二寸餘而花發者、殖于土器進之。○丁酉、於延曆寺轉讀仁王經五千卷、御願也。○丙午、大和國葛上郡從三位高天彦神爲名神。○戊申、授從五位下文室朝臣宮田鷹從五位上。○六月庚戌朔、遣使於丹貴二社祈雨。○癸丑、勅、頃者元早涉旬、宜告諸寺、三日三夜讀經悔過、念致甘雨。○甲寅、詔曰、朕外祖父贈正一位橘朝臣清友、宜贈太政大臣。○乙卯、臨東西市人於朱雀路中、令、零。○己卯、勅、彈正臺及檢非違使、雖配置各異、而糾彈違犯、彼此一同、但至犯人逃走、姦盜隱遁、彈正之職、不堪追捕、自今以後、緣糾違犯、有可追捕者、臺使相通、遣檢非違長等、隨事追捕、立爲永例。○甲子、公卿咸會東寺、緣御願諸佛開眼也。○乙丑、勅、頃緣阜涸、頒使祈雨、頗似有應、未能普潤、宜請七大寺僧於東大寺、三日三夜間、令稱讚龍自在王如來名號。○壬申、奉授上野國无位拔鋒神、赤城神、伊賀保神、並從五位下。○丁丑、勅、國分二寺、建立自遠、一則名爲金光明護國寺、一則號爲法華滅罪寺、先帝救世利物之法、遠傳不朽者也、而頃年僧寺安居之會、獨

に作る柳本及類史に據て
 改む
 ○緣糾違犯、原本糾を紀
 に作る柳本宮本及類史百
 七に據て改む
 ○檢非違長、看督長なり
 ○稱讚、讚字は柳本及紀
 略に據て補ふ此事東大寺
 要錄にも見ゆ但し五月乙
 丑とするは非なり
 ○壬申、原本甲申に作る
 水戸校本に是月無甲申
 甲當作壬と云るに從ふ
 ○拔鋒神、神名式上野國
 甘樂郡貫前神社(名神大)
 北甘樂郡一宮町、國幣中
 社に列す
 ○赤城神、同式同國勢多
 郡赤城神社(名神大)、宮
 城村三夜澤
 ○伊賀保神、同式同國群
 馬郡伊賀保神社(名神大)
 伊香保村伊香保
 ○國分二寺云々、國毎に
 國分二寺を置くこと聖武
 天皇天平十三年紀に出づ
 ○無二無三之勝理、法華
 經方便品に十方佛土中唯
 有二乘法無二亦無三
 とあるに據れり
 ○方冊文、原本冊を冊に
 作る諸本に據て改む
 ○藤原朝臣澤子卒、原本
 澤を淨に作る柳本水戸校

講最勝王經、尼寺滅罪之場、無說法華妙典、所設法藏、用有不同、是忍而
 不行、恐修善闕如、宜令五畿内七道諸國、安居之會、先於僧寺講最勝王
 經、次於尼寺講法華經、所願無二無三之勝理、開示國家、除災植福之大
 善、廣被衆庶、是夜、有赤氣、方冊丈、從坤方來、至紫宸殿之上、去地廿許
 丈、光如炬火、須臾而滅。○己卯、授无位藤原朝臣數子從五位下、女御
 從四位下藤原朝臣澤子卒、故紀伊守從五位下總繼之女也、天皇納之、
 誕三皇子一皇女也、宗康時康人
康新子是也寵愛之隆、獨冠後宮、俄病而困篤、載之小
 車、出自禁中、纔到里第、便絕矣、天皇聞之哀悼、遣中使贈從三位也、右京
 大夫從四位下藤原朝臣文山、少納言從五位下藤原朝臣秋常等、並監
 護喪事。○秋七月庚辰朔、癸未、右京人散事從四位下內藏宿禰影子、右
 衛門大尉正六位上內藏宿禰高守、散位從六位上井門忌寸諸足、山口
 忌寸永嗣、大藏宿禰雄繼、大藏忌寸繼長、從八位下檜原宿禰聰通等、男女
 十二人、賜姓內藏朝臣也、高守遠祖後漢靈帝之苗裔、云々。○甲申、延僧六
 十口於紫宸殿、常寧殿、令轉讀大般若經、以禁中有物恠也。○丁亥、地震、

本に據て改む澤子卒去の事原本四月乙卯條にも載す柳本には此にのみ見ゆ三代實錄にも贈皇太后承和六年六月晦崩あり故に彼を削て之を存す
 ○總繼、原本總繼を綱に作る諸本に據て改む
 ○里第、原本第を弟に作る柳本宮本に據て改む
 ○監護喪事、此下原本女御已下至喪事重出の九字を分注す諸本になく後人の加注なること明なれば削る
 (七月)庚辰朔、此三字宮本に據て補ふ
 ○散事從四位下、原本事を位に作る諸本に據て改む散事は職事に對して云
 ○聰通、原本聰を總に作る閣本柳本前本等に據て改む
 ○賜姓内藏朝臣也、原本朝臣を宿禰に作り爾下に雄繼の二字あり閣本柳本尾本に據て朝臣に改め雄繼を削る山崎校本及纂註にも説あれど採らず
 ○苗裔云々、云々の二字は柳本に據て補ふ内藏山口檢原諸氏は並に姓氏錄右京諸蕃に載せ井門大藏は載せず

是日讀經訖、施物各有差、復施大法師僧度者各一人法師位以下僧各授一階、○己丑、勅令檢非違使等當色之外著雜色袍、○壬辰、令左右京職并五畿内七道諸國寫進庚午年籍、以收之中務省庫、○丙申、令大宰府造新羅船、以能堪風波也、大和國人酒人真人廣公等一烟、改本居貫附右京五條二坊、○庚子、令畿内國司勸種蕎麥、以其所生土地、不論沃瘠、播種收穫、共在秋中、稻梁之外、足爲人天也、○甲辰、左京人外從五位下安倍宿禰眞男等賜姓御輔朝臣、○八月庚戌朔、嗟峨太上天皇不豫、天皇爲之朝覲、黃暉還宮、左近衛府言、補近衛事、春宮坊、皇后宮、中宮、舍人、内匠、木工、雅樂寮考人等、並是内考、至有才能、府自試補、而今兵部省勘返云、大同元年格、倂蔭子孫、式部兵部散位、位子、留省、勳位等之類、聽本府試補、外考白丁者、勅使覆試、然後補之、件人等非格所指、須准外考白丁、勅使覆試者、其三宮舍人、并雜勘籍人、已預内考、何准白丁、又格舉大例、不勞細色、而兵部省偏執格文、還乖舊貫、太政官處分、便弓馬者、因循舊例、本府試補之、是日勅曰、文殊會事、起自天長之年、而今

○施物、原本賜物に作る水戸校本に據て改む柳本施を於に作るは訛なり
 ○庚午年籍、庚午は天智天皇九年なり
 ○中務省庫、職員令に中務卿掌云々諸國戶籍租調帳僧尼名籍事あり
 ○新羅船、新羅の風に造れる船なり
 ○大和國人、人字は諸本に據て補ふ
 ○酒人真人、錄大和皇別に酒人真人繼體天皇皇子兔王之後也あり
 ○蕎麥、抄稻穀部に孟詵食經云蕎麥(曾波牟岐一云久呂無木)性寒者也あり
 ○足爲人天、原本人天を食の一字に作る諸本に據て改む人天は管子に王爲天とあるに據れり
 (八月)黃暉、暉は玉篇に黃昏時と注す原本訛せるを諸本に據て訂せり
 ○兵部省勘返、狩谷氏云返恐文
 ○位子、位字は閣本柳本に據て補ふ
 ○三宮舍人、三宮は春宮皇后宮中宮を云
 ○預内考、原本預を豫に

聞、諸國或乖官符旨、不有遵行、宜重下知令、以修之、○癸丑、嗟峨太上天皇、聖躬未平復、天皇重亦朝覲、奉爲太上天皇、讀經于延曆寺、祈翌日之瘳、○丙辰、遣使奉幣丹生川上雨師、祈止雨也、云云、○壬戌、勅令内外諸國奉幣神祇、以期西成焉、○己巳、勅大宰大貳從四位上南淵朝臣永河等、得今月十四日飛驒所奏遣唐錄事大神宗雄送大宰府牒狀、知入唐三箇船、嫌本舶之不完、倩駕楚州新羅船九隻、傍新羅南以歸朝、其第六船、宗雄所駕是也、餘八箇船、或隱或見、前後相失、未有到著、艱虞之變、不可不備、宜每方面重戒防人、不絕炬火、贏貯糧水、令後著船共得安穩、其宗雄等安置客館、得待後船、是日、令十五大寺讀經祈願、以船到著、爲修法之終、遣神祇少副從五位下大中臣朝臣磯守、少祐正七位上中臣朝臣蔭守、奉幣帛於攝津國住吉神、越前國氣比神、並祈船舶歸著、○辛酉、以東鴻臚院地二町、充典藥寮、爲御藥園、○壬申、請眞言僧十六口於常寧殿、令修息災之法、依有物恠也、○癸酉、以攝津國嶋上郡荒田九段、賜明經碩儒從四位下善道朝臣眞貞、大宰府飛驒、上奏入

作る柳本宮本に據て改む
 ○天長之年、水戸校本之
 丙戌條參看すべし
 ○乖官符旨、原本旨を而
 に作る水戸校本及類史紀
 略に據て改む諸本百に作
 るは旨の訛なり
 ○祈翌日之謬、原本之字
 祈の下にあり諸本及類史
 に據て改替ふ翌日之謬は
 直に謬るを云既に注す
 ○遣使奉幣丹生川上、遣
 使以下十六字は柳本に據
 て補ふ紀略には丹生川上
 雨師を丹賀二社に作り之
 を癸丑に係く
 ○壬戌、此二字柳本に據
 て補ふ
 ○勅令内外諸國云々、原
 本之を丙辰に係く今柳本
 に據て壬戌に係く
 ○期西成、堀氏日期當
 作祈
 ○西成、秋の收穫を云
 ○入唐、原本大唐に作る
 諸本に據て改む
 ○九隻、原本隻を雙に作
 る諸本に據て改む下同じ
 ○重戒防人、原本戒を戎
 に作り重字なし諸本に據
 て改め補ふ
 ○羸貯、原本羸を羸に作
 るは誤なれば改む漢書刑

唐大使藤原朝臣常嗣等歸著之由、兼使等奏狀。○甲戌、勅參議大宰權
 帥正四位下兼左大辨藤原朝臣常嗣、大貳從四位上南淵朝臣永河等、
 得今月十九日奏狀、知遣唐大使藤原常嗣朝臣等、率七隻船廻著肥前
 國松浦郡生屬嶋、與先到錄事大神宗雄船、摠是八艘、宜依例勞來、式寬
 旅思、但自陸入京、事須省約、何則時屬秋穫、恐妨民業、宜以大使常嗣朝
 臣爲第一般、令備後權掾伴須賀雄、知乘船事春道永藏兩人相隨之、其
 判官長岑宿禰高名、菅原善主、准判官藤原貞敏、錄事大神宗雄、准錄事
 高丘百興、讚岐權掾丹墀高主、知乘船事槻本良棟、深根文主、舌人大和
 耳主、陰陽師春苑玉成等十人、各造般聯次入都耳、就中如有大使常嗣
 朝臣引之共發者、任聽之、又信物要藥等、差檢掾使、取陸路遞運、自餘人
 物等、陸行水漕可有議定、宜待後勅、又未到第二船、并一隻船、復能規候、
 來輒奏聞。○戊寅、改加賀國人正六位上百濟公豐貞本居、貫附左京四
 條三坊、豐貞之先、百濟國人也、以庚午年被貫河內國大鳥郡、以乙未年、
 被貫加賀國江沼郡也。

法志に羸は謂擔負也とあり ○中臣朝臣禪守、山崎校本堀本に據れりて中上に大の字を補ふ ○辛酉、水戸校本に辛酉十二日當在二十日己巳
 上蓋二十日辛未之訛也といふ今之に據て改移さす後考を俟つ ○生屬嶋、兵部式諸國馬牛牧に肥前國生屬馬牧見ゆ今肥前國北松浦郡生月村とあ
 る是なり平戸嶋の西北にあり ○勞來、遠來を勞らふなり ○爲第一般、原本般を艘に作る諸本に據て改む般は番に同じ纂語に甲庚辛本に依りて船
 に改むとあれど諸本何れも般とあり船に作れるはなし ○令備後權掾、原本令を并に作る諸本に據て改む ○長岑宿禰高名、原本禰の下に高禰の二
 字あり宮本山崎校本に據て削る ○菅原善主、原本主を立に作る諸本に據て改む宮本には原の下に朝臣の二字を補へり ○槻本良棟、内藤廣前説に
 四年三月戊辰紀遺唐知乘船事槻本連良棟賜姓安瑛宿禰此云槻本蓋史官之失也と云 ○深根文主、文主は本姓蜂田藥師、元年六月辛丑紀に見ゆ
 ○舌人、周語に使舌人體委與之、韋昭注に舌人能達異方之志象胥之官也とあり今の通譯なり ○各造般、原本般を船に作る諸本に據て改む ○
 遞運、原本遞を通に作る諸本に據て改む ○一隻船、柳本船上に船字あり是なるが如し ○以庚午年、以字は柳本尾本に據て補ふ

○九月伊豫親王墓、諸
 陵式に巨崎墓贈一品伊豫
 親王在山城國宇治郡今
 紀伊郡堀内村大字六地藏
 にあり親王は桓武天皇の
 皇子、大同二年十月事に
 坐して河原寺に幽死す
 ○捐柩館云々、原本館を
 棺に作る水戸校本に據て
 改む柩館は漢書班婕妤賦
 注に館名也とあり上林苑
 にありと云損館にて薨去
 の意、泉臺は春秋文十六
 年に見ゆる臺名なれど此
 には墳墓の意なり
 ○悲倚伏之難測、老子に
 禍兮福之所倚福兮禍之
 所伏とあるに據れり原
 本測を側に作る關本柳本
 に據て改む
 ○追榮於前詔、贈二品の
 御事ありしを云
 ○欲増飾、關本柳本前本
 等増字なく柳本には飾下

○九月己卯朔癸未、中使就故贈二品伊豫親王墓、詔曰、早捐柩館、長掩
 泉臺、悼福祿之不融、悲倚伏之難測、雖既追榮於前詔、逾欲増飾於當年、
 宜贈榮班、以賁幽窆、可贈一品、又詔曰、親王母故无位藤原朝臣吉子屬
 遇轆軻、墜失爵位、時移事賈、追悼營魂、宜贈本班、照之窆窆、可贈從三位、
 是日、授无位吉岡女王從四位下、○乙酉、從五位上永原朝臣門繼爲神
 祇大副、從五位下藤原朝臣諸成爲治部少輔、從五位下田中朝臣眞成
 爲立蕃頭、從四位上大枝朝臣總成爲刑部大輔、從五位下文室朝臣助
 雄爲少輔、從五位上文室朝臣永年爲宮内少輔、從五位下嶋田朝臣清
 田爲伊賀守、從四位下和氣朝臣仲世爲伊勢守、從五位上藤原朝臣貞
 主爲近江權介、從五位下小野朝臣千株爲備中守、○丁亥、是重陽之節

に終字あり
 ○幽電、墳墓なり
 ○吉子、右大臣是公の女
 延暦二年從三位を授けら
 れ夫人となり親王を生む
 ○轉軻、原本軻を賦に作
 る關本柳本尾本に據て改
 む軻軻は車の進行の自由
 を失ふことより轉じて人
 の志を得ざるに喩ふ吉子
 は親王の事に坐して大同
 中河原寺に幽死す
 ○事實、實は原本實に、
 關本前本中本等實に作る
 實は實と同じければ之に
 據て改む實は易なり
 ○營魂、文選文賦に覽
 營魂以深々、注に營謂
 心府中也とあり
 ○本班、本位なり
 ○吉岡女王、原本岡を國
 に作る諸本に據て改む
 ○支蕃頭、原本蕃を蕃に
 作る諸本に據て改む
 ○從四位上大枝朝臣、尾
 本上を下に作る纂詰は丁
 巳諸本に據りて改めたり
 ○菊潭引之題、原本菊を
 兼に作り之字なし諸本に
 據て改め補ふ菊潭は風俗
 通(藝文類聚所引)に南陽
 縣有甘谷水谷甘美山
 其山有大菊水從山上
 流下得其滋液谷中有三

也、天皇御紫宸殿、宴公卿已下及文人同賦菊潭引之題、宴畢賜祿有差
 ○甲午、遣唐持節大使參議正四位下行左大弁兼大宰權帥藤原朝臣
 常嗣進節刀、○乙未、天皇御紫宸殿、右大臣從二位兼行皇太子傅藤原
 朝臣三守、奏大唐勅書、獨召大使藤原朝臣常嗣、昇自東階、天顏咫尺、勅
 曰、遠涉危難之途、平安參來、嘉賜都々、大坐、常嗣朝臣稱唯、拜舞庭中、更
 召殿上置酒焉、于時使旨及路中艱難、一一以聞、內侍持御被一條御衣
 一襲、佇立、大臣命常嗣朝臣云、今勅久、汝銜國命、遠涉滄海、每聞險難、憐
 愍殊深、仍賜纏頭物、即稱唯、賜御被、拜舞退出、○丙申、權中納言從三位
 兼行左兵衛督陸奧出羽按察使藤原朝臣良房、召內記、賜大唐勅書、令
 以藏之、○己亥、勅、如聞、所以神護景雲二年以還、令諸國國分寺、每年
 起正月八日、至于十四日、奉讀最勝王經、并修吉祥悔過者、爲消除不
 祥、保安國家也、而今講讀師等、不必其人、僧尼懈怠、周旋非法、國司檢校、
 亦不存心、徒有修福之名、都無殊勝之利、此則縑素異處、不相監察之所
 致也、宜停行國分寺、而於廳事修之、自今以後、立爲恒例、○辛丑、紀伊國

十餘家不復穿井、悉飲
 此水上、壽百二十、中百
 餘七八十者、名之天、云
 ○天顏咫尺、左傳僖九年
 在天威不遠、顏咫尺、注に
 八寸曰咫尺あり
 ○嘉賜都々、紀略嘉を喜
 に作る
 ○使旨、原本使者に作る
 諸本及紀略に據て改む
 ○御被一條御衣一襲、關
 本に一條御衣の四字なし
 ○今勅久、山崎校本には
 久字一本になし、こて削り
 たり、汝銜國命以下も古
 語なり、こを撰者が漢文に
 譯せしかと思はる、故に削
 らす
 ○賜纏頭物、原本頭字な
 し、諸本及紀略に據て補ふ
 關本柳本等賜を贈に作る
 ○召內記云々、內記は職
 員令に掌、造、詔、勅、凡御所
 記録事とあり、故に之を
 藏せしめらる
 ○所以、此二字類史紀略
 になし
 ○諸國國分寺、原本國字
 一字なし、類史百七十八及
 紀略に據て補ふ
 ○廳事、官府治事之處
 即ち國衙を云、此語隋書鄭
 譯傳に見ゆ
 ○弟日、原本弟を第に作

人直講正六位上名草直豐成、少外記從六位上名草直安成等、賜姓宿
 禰、兼貫附右京四條四坊、元右京人宗形、橫根、娶紀伊國人名草直弟日
 之女、生男鳴守、養老五年、冒母姓、隸名草氏、鳴守即豐成之祖父也、是日
 令大宰府進上自大唐所奉請大元帥畫像、○癸卯、制、選叙令、帳內資人
 者、並以八年爲限、神龜五年格、外五位資人、十年成選、自今而後、外五位
 資人選限者、宜依令行之、唯神宮司禰宜、祝國造、外散位、郡司、及俘夷之
 類、不在此限、○丙午、詔曰、天皇我詔旨、長万止宣、大命乎衆、聞食、世止宣、遣
 唐使藤原常嗣朝臣等朝、乃遣、乃道爾、遠路荒海、歷苦美、大唐天子止毛、治
 勞、禮、返事、毛、早速申賜、倍利、是乎、念行、久波、常嗣朝臣、長我、勤、仕、奉、禮、留、勇、止、奈
 毛、喜、賜、大坐、須、故、是以、常嗣、乎、始、天、水、手、爾、至、万、天、爾、冠、位、上、賜、比、治、賜、不、在
 唐、天、身、罷、太、留、判、官、藤、原、豐、並、乎、毛、哀、愍、賜、比、追、天、冠、位、賜、久、度、詔、不、天、皇、我
 大命乎衆、聞食、止宣、授大使正四位下藤原朝臣常嗣、從三位、判官從五
 位下長岑宿禰高名從五位上、判官正六位上菅原朝臣善主從五位下、
 贈在唐身亡判官正六位上藤原朝臣豐並從五位上、○冬十月己酉朔、

る諸本に據て改む
 ○大元帥畫像、帥は原本師に作る柳本に據て改む
 大元帥法は公事根源に小栗栖常曉律師仁明天皇承和五年に入唐して華林寺の元照といふ人に達て此大元帥法を傳ふ其後歸朝して小栗栖の法琳寺云所にて修しける也(簡略)と見ゆ
 ○帳内資人者云々、選叙令集解に釋云慶雲三年格帳内以六考爲限職分資人亦同神龜五年三月廿六日格位分資人内位資人以八考爲限外位資人以十考爲限云々あり
 ○宣大命乎、原本宣を宜に作る山崎校本に據て改む
 ○衆聞食世止宣、原本食字なく世を與に作る食は山崎校本に據り世は狩谷氏の說に衆聞世止宣云々續紀文例也今作與止恐以世謬訓與而作與歟云るに據て改む
 ○朝乃遣乃道爾、纂詰は道を隨に改む
 ○天子止毛、止は爾の誤か或は衍なるべし
 ○是乎念行久波、纂詰乎を爾に改む

天皇御紫宸殿、賜群臣酒、召散位從五位下伴宿禰雄堅魚、備後權掾正六位上伴宿禰須賀雄於御床下、令圍碁、並當時上手也、雄堅魚下、賭物新錢廿貫文、一局所賭四貫、所約惣五局、須賀雄輪四、籌一籌亦令遣唐准判官正六位上藤原朝臣貞敏彈琵琶、群臣具醉、賜祿有差、越前國言慶雲見焉、山城國宇治郡荒田一町賜无品秀子内親王、○甲寅、遣唐大使已下朝拜於八省院、無有天臨、唯大臣行事例也、○乙卯、贈從三位藤原朝臣吉子、更贈從二位、以有祟也、○丙辰、制大小兩麥、耕種勞少、而夏月早熟、支急力多、若不刈青苗、令其成熟、貧賤之民、將以療飢、屢下禁制、不聽爲芻、而頃年奢侈之俗、收青苗以飼馬、庶民之愚、利得直以暫用、積習至今、不畏憲法、宜令左右京、五畿内諸國、不得更然、其百姓不改悛、及所容隱、准大同三年格、隨狀科處、○丁巳、遣唐使錄事正六位上山代宿禰氏益所駕新羅船一隻、歸著筑前國博多津、○辛酉、奉唐物於伊勢大神宮、○乙丑、出羽國言、去八月廿九日、管田川郡司解僂、此郡西濱達府之程五十餘里、本自無石、而從月三日、霖雨無止、雷電鬪聲、經十餘日、乃見晴天、時

○勇止奈毛、原本勇を會に作る前本宮本中本等に據て改む勇はイサヲにて功績なり
 (十月)賜群臣酒、孟冬旬宴なり公事根源に先御衣かへあり掃部寮夏の御裝束を撤して冬のに更め給ふ天皇南殿に出御有て節會あり云々と見ゆ
 ○須賀雄、西宮記に遣唐使基師伴菅雄とあり
 ○令圍碁、此事同記十月旬記に詳なり
 ○新錢、承和昌寶を云
 ○一局、一の字は紀略に據て補ふ
 ○(注)贏、原本贏に作るは誤なれば改む
 ○秀子内親王、嵯峨天皇皇女
 ○以有祟也、原本祟を崇に作る西本宮本に據て改む下同
 ○大小兩麥、抄稻穀部に大麥蘇敬曰大麥一名青科麥、布度半較一云加知加太、小麥周禮注云九穀者稷黍稻粱糜麻大豆小豆小麥(古无較一二万半較)
 ○支急、原本支を與に作る諸本に據て改む
 ○頃年、原本累年に作る西本に據て改む

向海畔、自然隕石、其數不少、或似鏃、或似鋒、或白或黑、或青或赤、凡厥狀體、銳皆向西、莖則向東、詢于故老、所未曾見、國司商量、此濱沙地、而徑寸之石、自古無有、仍上言者、其所進上、兵象之石數十枚、收之外記局、勅曰、陸奥出羽并大宰府等、若有機變、隨宜行之、且以上言、克制權變、令禦不虞、又轉禍爲福、佛神是先、宜修法奉幣、○丁卯、攝津國人直講博士從六位下佐夜部首領主賜姓善友朝臣、編附左京四條二坊、○癸酉、以右中弁正五位下藤原朝臣嗣宗爲左中辨、從五位上良岑朝臣高行爲兼右中弁、右近衛少將如故、從四位下和氣朝臣仲世爲治部大輔、正五位下小野朝臣眞野爲諸陵頭、從五位下橋朝臣起奈理爲大藏大輔、外從五位下御輔朝臣眞雄爲大膳亮、從四位上橋朝臣弟氏爲右京大夫、參議正四位下三原朝臣春上爲兼伊勢守、從五位上長岑宿禰高名爲權介、從五位下紀朝臣盛麻呂爲常陸介、是日、建禮門前、張立三幄、雜置唐物、内藏寮官人及内侍等交易、名曰宮市、○丁丑、奉授坐下總國香取郡正二位伊波比主命、坐常陸國鹿嶋郡正二位勳一等建御加都智命、

並從一位、坐河內國河內郡正三位勳二等天兒屋根命從二位、從四位上比賣神正四位下、散事從四位下丹墀真人祖子卒、

○收青苗、原本收を休に作る山崎校本に據て改む
○氏益、原本氏を武に作る宮本及下文十年正月庚子紀に據て改む
○西濱、原本濱を濱に作る諸本に據る ○達府之程、府は國府、拾芥抄中末に出羽國府は出羽郡にあり云 ○月三日、山崎校本に月上恐當、脱一字云云 ○或亦、或の字は宮本に據て補ふ ○厥狀、原本狀を壯に作る諸本に據て改む ○兵象之石、兵器の形せる石を云原本象を家に作る諸本に據て改む ○克制權變、原本克を充に作る諸本に據る權變は後漢書賈逵傳に出て臨機の謀略を云 ○佐夜部首、錄攝津神別に佐夜部首伊香我色雄命之後也 ○真雄、原本直雄に作る西本前本宮本に據て改む ○權介、權字は條本宮本に據て補ふ天安元年九月丁酉紀に傳見ゆ參看すべし ○雜置唐物、原本雜置を置雜に作る諸本及紀略に據て改む ○宮市、建禮門前に帳を立て内藏寮の官人及内侍等をして交易の任に當らしめられたればか稱せしなるべし唐鑑卷十六貞元十三年の條に宮市の文字見ゆれど此意義異なり ○散事、原本散位に作る諸本に據て改む

○十一月官舎、原本宮舎に作る前本中本及紀略に據て改む
○左衛門佐、房富は七年五月癸未紀に左衛門權佐あり
○齊内親王、皇女久子内親王に坐す
○左大史、原本史を夫に作る諸本に據て改む
○改直字、纂詁に字疑衍云
○飛鳥戸、録河内諸蕃に飛鳥戸造百濟國末多王之後也とあり
○對策、文官採用試験の如きものなり
○處之中上、紀略之を手に作る
○叙三階、原本叙を取に

○十一月己卯朔庚辰、天皇御大極殿、遣使奉幣於伊勢大神宮、○癸未、災于伊勢齋宮、燒官舎一百餘宇、遣左衛門佐從五位下田口朝臣房富、費絹百疋、綿三百屯、調布五十端、存問齋内親王、左京人左大史正六位上山直池作等十人、改直字賜宿禰池作之先、出自天穗日命之後也、左京人正六位上御春宿禰春長等十一人、改宿禰賜朝臣、是百濟王之種、飛鳥戸等之後也、文章得業生從六位下菅原朝臣是善對策、處之中上、進叙三階、伊豫國人外從五位下風早直豐宗等一煙、賜姓善友朝臣、兼除邊籍貫、附左京四條二坊、天神饒速日命之後也、○十二月己酉

作る水戸校本及紀略に據て改む
○風早直、國造本紀に風速國造輕嶋豐明朝物部連祖伊香色男命四世孫阿佐利定賜國造とあり其裔なるべし
○十二月奉珍幣、珍字は宮本及類史に據て補ふ
○天長元年、原本元を九に作る宮本及類史四に據て改む
○多氣齋宮云々、類史四所載天長元年九月乙卯詔に多氣の齋宮は大神宮と遠離れて每事無便、茲に因て度會の離宮を下定めて常の齋宮とすとあり
○多氣宮地、後醍醐天皇の御代まで此地に齋宮あり後廢す其址は今多氣郡齋宮村齋宮の地なるべし
○伊勢守、原本伊豫守に作る宮本及上下の文に據て改む
○惟天玄默、惟神著明と對句にて天は幽玄にして默然たるを云
○匪德不動、天は人の德にあらざれば感動せずとの意原本匪を逃に作る西本宮本及類史に據て改む
○惟神著明、神德の顯著にして明かなるを云

朔庚戌、遣參議從四位上行春宮大夫兼右衛門督文室朝臣秋津、奉珍幣於伊勢大神、以齋宮燒損也、又去天長元年九月、依多氣齋宮遠離大神宮、每事無便、卜定度會離宮、以爲齋宮焉、今依火災、卜定多氣宮地、可爲常齋宮之狀、同令此使祈申於大神宮、○丙辰、太政官左大臣正二位臣藤原朝臣緒嗣、右大臣從二位兼皇太子傅臣藤原朝臣三守、大納言正三位兼左近衛大將臣源朝臣常中、納言正三位臣藤原朝臣吉野、中納言從三位臣藤原朝臣愛發、中納言從三位兼右近衛大將臣橘朝臣氏公、權中納言從三位兼行左兵衛督陸奧出羽按察使臣藤原朝臣良房、參議正三位行左衛門督臣源朝臣信、參議從三位行中務卿兼播磨守臣源朝臣定、參議大宰權帥從三位兼行左大弁臣藤原朝臣常嗣、參議正四位下行伊勢守臣三原朝臣春上、參議從四位上守民部卿勳六等臣朝野宿禰鹿取、參議從四位上行春宮大夫兼右衛門督臣文室朝臣秋津、參議從四位下守刑部卿臣安倍朝臣安仁等奏言、臣聞惟天玄默、匪德不動、惟神著明、有誠必感、故人君孝治、昊穹不能愛其靈貺、至德

○吳寧不能愛其靈祝、吳寧乃天、靈祝は神の賜物なり人君徳あれば天神賜物を惜まずとなり下文の慶雲の事を云

○岳瀆云々、岳瀆は山岳河川を云上文の吳寧に對して山も川も瑞祥をあらはすなり原本岳瀆を丘瀆に作る西本水戸校本等及類史に據て改む

○徇齊倅徳云々、徇齊は史記五帝本紀に黃帝生而神靈幼而徇齊、注に徇疾齊速也とあり允恭は尙書堯典に允恭克讓とあり天皇の聖徳の聰明なること黃帝にひそしく恭謙なること堯に比すべしとなり

○徇は原本洵に作る閩本水戸校本に據て改む

○纂洪基於累聖、列聖の大統を承け繼がせ給ふことなり

○弘前烈於重光、列聖の御徳を彌々耀かし益々弘め給ふことなり

○淡宇食和云々、淡は周、宇は天下也食は玉篇に吞也俗淡字又啖也とあり環瀛は瀛は大海にて四海の内を云、天下平和に海内道を樂しむことなり

○寶飫郡、飫は原本飯に

潛通、岳瀆以之効其禎祥、伏惟、皇帝陛下、徇齊倅徳、允恭配美、纂洪基於累聖、弘前烈於重光、淡宇食和、環瀛樂道、凡厥群生、孰不霑仁、伏見、參河國守從五位下橘朝臣本繼等奏、偁、去年十一月三日、五色雲見、寶飫郡形原郷、又越中國介外從五位下興世朝臣高世等奏、偁、去六月廿八日、慶雲見、新川郡若佐野村、並皆彩色奇麗、形象非常、臣等謹檢、孫子瑞應圖曰、慶雲、太平之應也、禮斗威儀曰、政和平則慶雲至、又孝經援神契曰、德至山陵、則慶雲出、普閱曩篇、緬尋夙牒、兩國上奏、事叶古典、夫自非道格、區宇、仁覃海隅、何亦降斯玄符、錫彼景福、臣等幸屬生涯、榮叨簪紱、見未見於今日、遇未遇於茲晨、不任抃躍之至、謹拜表陳賀、以聞、勅、上靈施祝、允歸神功、玄鑒降休、必佇茂烈、是以德佩就日、猶揚克讓之謙光、化揮仁風、逾發靡記之挹損、朕祗承丕緒、嗣守宗祧、履薄以想邕熙、馭朽以求至道、而誠慙經遠、明謝動天、何以致景雲之禎祥、當槐棘之奏賀、若嘉穀栖畝、種陸亘原、雖匪郁々之非烟、而朕之往甯也、古人不云乎、見祥增戒、則休徵應機至也、人貢忠誠、以輔不逮、重賀之事、都所不允、○丁巳、奉

作る閩本西本前本等に據て改む寶飫は抄國郡部參河國郡名寶飫(德)とあり今ホイと呼べり形原は倭名抄に見え今も形原村存す山崎校本に見下寶上に于參河國の四字を補へるは蛇足なり諸本になきがよし

○外從五位下興世朝臣、外字は山崎校本に據て補ふ

○新川郡、新川は倭名抄に瀨布加波と訓り今上中下の三郡に分れニヒカハと呼べり山崎校本新上にも于越中國の四字を補へり採らず

○若佐野村、中新川郡立山村板津より流る、板津川を一名若狹川と云其西岸は古は一面の曠野なり是即ち若佐野村なるべし

○瑞應圖、及禮斗威儀は元年四月紀に出づ

○孝經援神契、同上

○曩篇、古書を云夙牒も亦同じ天より降す祥瑞にして宋書樂志に出づ

○玄符、天符に同じ

○簪紱、高位高官を云元年正月紀に出づ

○抃躍、原本抃を持に作

授越前國正三位勳一等氣比大神從二位、餘如故、伊勢國正五位下多度大神正五位上、○辛酉、天皇御建禮門、分遣使者、奉唐物於後田原、八嶋、楊梅、柏原等山陵、○癸亥、勅、以經于興福寺維摩會講師之僧、宜爲宮中最勝會講師、自今以後、永爲恒例、○乙丑、車駕遊獵於水成瀨野、山城、攝津、河内等國、司獻御贄、賜扈從群臣、及國司等祿、各有差、○庚午、天皇御建禮門、奉唐物於長岡山陵、爲漏先日之頒幣也、

る宮本に據て改む
 ○上靈施賜云々、上靈は上帝、支靈は天鑿なり神功は神の如き功、茂烈は盛なる功烈なり原本休な狀に作る水戸校本に據て改む諸本伏に作るは休の訛なり
 ○德佩就日、就日は其の德太陽の如く盛なるを云既に注せり
 ○發願記之抱損、願記は文選封禪文に或曰且天爲寶閣三示珍符固不可辭若然辭之是泰山願記而梁父罔幾也、注に泰山之上無所表記あり抱損は抱は退損は減なり聖化を記載して後世に傳ふるを欲し給はざる謙遜を云原本抱を樞に作る諸本に據て改む

續日本後紀卷第八

○宗統、宗廟に同じ統は承統(四頁)に注す ○履薄以想邕熙、履薄は既に注す邕熙は文選東京賦に上下共其雍熙注に雍熙盛也あり邕は雍に同じ原本筮に作る諸本に據て改む ○馭朽以求至道、馭朽は既に注す至道は天下を太平ならしむべき政道を云 ○誠慙經遠云々、經遠は魏志毛玠傳に出づ誠明或は位置顛倒せるにや ○槐棘、三槐九棘の略、周禮秋官司朝士條に面三槐三公位焉また左九棘孤卿大夫位焉あり三公九卿を云 ○種稜、原本種種に作る種は水戸校本に據り種は尾本西本前本等に據て改む種は晚稻種は早稻 ○郁々之非烟、即ち景雲を云原本兆烟に作る諸本に據て改む ○往壽、壽は寧に同じ願也往壽は素願の意 ○輔不逮、原本輔を轉に逮を遠に作る宮本水戸校本に據て改む史記文帝紀に直言極諫匡朕之不逮あり ○都所不允、原本允を卒に作る類史に據て改む ○從二位、原本二を三に作る宮本に據て改む ○多度大神、正月紀に出づ ○辛酉、此條全文天長十年十二月紀に出づ纂註に推長曆天長十年十二月無辛酉又無唐國使聘事故刪彼而存此云り ○後田原、光仁天皇田原東陵、大和國添上郡田原村日笠 ○八嶋、光仁天皇皇子崇道天皇御陵、大和國添上郡東市村八嶋 ○楊梅、大和國添上郡都跡町佐紀 ○柏原、山城國紀伊郡堀内村堀内 ○水成瀨野、攝津國三嶋郡嶋本村一帯の地、關本西本前本成字なし ○庚午、此條も天長十年十二月紀に重出す ○長岡山陵、式に高島陵在山城國乙訓郡あり今向日町寺戸にあり

續日本後紀卷第九

起承和七年正月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉 勅撰

七年春正月戊寅朔、天皇御大極殿受朝賀、禮畢宴侍從已上於紫宸殿、賜御被、○甲申、天皇御紫宸殿垂珠簾、覽青馬、詔授三品秀良親王二品、從三位藤原朝臣愛發正三位、從四位上朝野宿禰鹿取正四位下、無位世宗王從四位下、正六位上美志眞王、長川王並從五位下、正五位下橋朝臣岑繼從四位下、從五位上宮道朝臣吉備麻呂、長岑宿禰高名、並正五位下、從五位下伴宿禰成益、佐伯宿禰利世、並從五位上、外從五位下山田宿禰古嗣、正六位上平朝臣春香、橋朝臣眞直、藤原朝臣春岡、橋朝臣眞雄、藤原朝臣行繩、丹墀眞人雄濱、田口朝臣門長、下毛野朝臣文繼、當麻眞人松成、大神朝臣宗雄、長岑宿禰秀名、菅原宿禰豐道、並從五位下、正六位上山宿禰池作、額田部湯坐連長良、並外從五位下、宴竟賜

○承和、此二字は宮本水戸校本に據て補ふ
 【承和七年】珠簾、始めて見ゆ纂註に晉書符堅載記及裴元略諫を引て帝好華美蓋紀實也云

○春香、尾本香を雪に作る
 ○眞直、直字は諸本及類史九十九に據て補ふ
 ○行繩、原本繩を綱に作る諸本及類史に據て改む下同じ
 ○長良、良は類史吉に作る關本前本等空白とす

○御春朝臣、前に見ゆ
 ○甘南備真人、錄左京皇
 別に出自、諡敏達皇子難
 波王也とあり
 ○清科朝臣、姓氏録に見
 えず
 ○正三位源朝臣常、原本
 正を從に作る上文に據て
 改む常は天長十年三月癸
 巳(一頁)正三位に叙す
 ○閔視、紀略觀の一字に
 作る
 ○龍蟠、聖體の不豫なる
 を云原本蟠を幡に作る諸
 本及類史卅四に據て改む
 ○秋雄爲侍從、右大臣夏
 野の子なり侍從とされる
 こと已に元年紀(五一頁)
 に見ゆ三代實錄に秋雄承
 和四年十月父の喪に遭て
 解官、五年正月本官を以
 て起つと見えたれど本史
 に其事なし此に爲侍從と
 さあるは疑ふべし
 ○慶苑、原本苑を宛に作
 る諸本に據て改む
 ○飯高公、原本公を宿禰
 に作る山崎校本及上下の
 文に據て改む
 ○葛井親王、此親王常陸
 太守に任ぜらるること已
 に元年正月癸亥紀に見ゆ
 ○書主、原本主を王に作

祿有差、○乙酉、於大極殿、始修最勝會也、是日授正六位上御春朝臣
 濱主從五位下、無位高宗女王從五位上、正五位下橋朝臣影子從四位
 下、從五位上紀朝臣清子正五位下、無位藤原朝臣潔子、和氣朝臣數子、
 並從五位上、無位甘南備真人眞數、清科朝臣殿子、並從五位下、○戊子、
 天皇不豫也、○庚寅、地震、○辛卯、最勝會畢、引名僧於內裏、令論義、訖施
 御被、○癸巳、天皇御紫宸殿、不卷珠簾、而宴侍從已上、覽踏歌、畢賜祿有
 差、○甲午、大納言正三位源朝臣常奉、勅閱視六衛府、射於豐樂院、○丁
 酉、內宴罷焉、以聖躬龍蟠也、○丁未、以從五位下清原真人秋雄爲侍從、
 從五位下藤原朝臣仲統爲右兵衛佐、從五位下百濟王慶苑爲河内介、
 從五位下豐前王爲參河守、從五位下文室朝臣助雄爲遠江守、外從五
 位下飯高公常比麻呂爲伊豆守、從四位下正道王爲武藏守、四品葛井
 親王爲常陸太守、從五位上興世朝臣書主爲信濃守、從五位下御春朝
 臣濱主爲鎮守將軍、從五位上藤原朝臣宮房爲出羽守、從五位上有雄
 王爲越前守、外從五位下山宿禰池作爲介、從五位下長岑宿禰秀名爲

る諸本に據て改む
 ○濱主、原本主を王に作
 る諸本に據て改む
 ○二月、先太上天皇、先
 字は山崎校本に據て補ふ
 ○太皇太后、上の太字は
 類史廿八に據て補ふ
 ○久賀朝臣三夏、紀略
 弘仁九年八月甲戌紀に四
 品明日香親王之男女四人
 賜姓久賀朝臣と見ゆ
 ○仲平、原本仲を永に作
 る水戸校本に據て改む仲
 平は阿保親王の子天長中
 姓を賜ふ
 ○都努朝臣、錄左京皇別
 角朝臣紀角宿禰之後也と
 あり天武紀十三年十一月
 朝臣を賜ふ
 ○六衛府、原本六を左に
 作る閣本西本尾本に據る
 ○朴消、消石なり天應元
 年六月壬子紀(續紀下三
 七六頁)に注す
 ○柴田郡、今陸前國に屬
 す
 ○文部豐主、原本丈を大
 に作る宮本に據て改む錄
 左京皇別に丈部天足彦國
 押人命孫比古意那豆命後
 也とあり
 ○伊具郡、今磐城國に屬
 す
 ○擬大毅、纂訪は十五年

越中介、外從五位下高田宿禰家守爲越後介、參議從四位上文室朝臣
 秋津爲兼丹後守、春宮大夫右衛門督如故、從五位下藤原朝臣良相爲
 兼因幡守、內藏頭如故、從五位下藤原朝臣行繩爲石見守、從四位下清
 原真人瀧雄爲美作守、外從五位下紀宿禰福吉爲掾、從四位上藤原朝
 臣濱主爲安藝守、從五位下菅野朝臣永岑爲兼伊豫介、主殿頭如故、三
 品賀陽親王爲大宰帥、從五位下紀朝臣綱麻呂爲筑前守、從五位下藤
 原朝臣板野麻呂爲肥前守、從五位上藤原朝臣貞守爲兼豐前守、春宮
 亮如故、○二月戊申朔己酉、天皇朝覲先太上天皇及太皇太后於嵯峨
 院、賜扈從群臣并院司祿有差、○壬子、以從五位下久賀朝臣三夏爲雅
 樂頭、從五位下小野朝臣宗成爲民部少輔、從五位下在原朝臣仲平爲
 兼刑部少輔、駿河守如故、從五位上清原真人遠賀爲大膳大夫、從五位
 下近棟王爲正親正、從五位下都努朝臣福人爲左京亮、○己未、殊令六
 衛府夜行京城、緣群盜逼起也、○庚申、令大宰府停止例進、朴消、○辛酉、
 召流人小野篁、○癸亥、陸奧國柴田郡權大領丈部豐主、伊具郡擬大毅

五月紀に陸奥國磐城團擬少殺陸奥丈部臣繼鳴伊具郡麻績鄉戶主磐城團擬主帳陸奥臣善福等八烟賜姓阿倍陸奥臣さあるに據て伊具郡の下に人磐城團の四字を補へり○丈部繼成、原本丈を大に作る西本尾本谷別本等に據て改む

○勅喚流人云々、此人等佐渡に配流せられしこと六年三月丁酉紀に見ゆ

○狩宥、原本宥を宥に作る尾本水戸校本に據る

○寔蕃有徒、左傳昭廿八年に惡直醜正實蕃有徒さあり三代格蕃を繁に作る

○靜言流弊云々、言は思也納隍は寶龜元年六月紀に注す三代格は文少しく異同あり參看すべし

○賑恤、原本賑恤に作る紀略に據て改む

○壬生直、原本壬を玉に作る關本西本宮本に據る

○假外從五位下、假は借に同じ假りに授くるなり

○耕耘時必致京坻之蕃云々、六年閏正月丙午紀に注す坻は原本坻に作る諸本に據て改む

○候違、原本違を還に作る

陸奥眞成等戸二烟賜姓阿倍陸奥臣同國人丈部繼成等卅六人賜姓下毛野陸奥公、勅喚流人伴有仁、刀伎雄貞○戊辰、參議左大辨從三位藤原朝臣常嗣、去年遭母喪、今日有勅、起觀事○庚午、勅、如聞、奸宄之賊、寔蕃有徒、或暗夜放火、或白晝奪物、靜言流弊、情切納隍、宜下知左右京職五畿內七道諸國嚴加督察、搜認閭里、隨獲且進、莫作留連○辛未、勅、京中高年隱居、并飢病百姓等加賑恤○壬申、相摸國大住郡大領外從七位上壬生直廣主、代窮民輸私稻一万六千束、戶口增益五千三百五十人、褒此善狀、假外從五位下○癸酉、勅、國家隆泰、要在富民、倉廩充實、良由有年、故耕耘時、必致京坻之蕃、稼穡候違、招飢饉之憂、農之爲道、豈不勗歟、去年炎旱作災、嘉穀彫萎、百姓阻飢、國用闕乏、雖災異之臻、則是天道、而庶民之愚、恐有倦惰、方今青陽入序、假載南畝、勸課之事、適在此時、宜告五畿內諸國、戒以農事、隨時催勤、莫致懈怠○甲戌、夜中雷雨交切、遣中使左近衛少將橘朝臣岑繼於嵯峨院、右近衛中將藤原朝臣助於淳和院、祇候先後太上天皇起居○三月丁丑朔己卯、勅、遣唐

○山崎校本に據て改む

○青陽入序、青陽は春なり

○假載南畝、毛詩小雅大田章に以我覃耜假載南畝さあるに出づ假は始載は事なり

○戒以農事、戒字は水戸校本及紀略に據て補ふ

○岑繼、原本岑を助に作る諸本に據て改む

○三月進發、進字は關本西本尾本に據て補ふ

○第二船、原本船を船に作る諸本に據て改む

○耶磨郡、倭名抄耶麻に作る今岩代國に屬す

○人磨、原本磨を磨に作る諸本に據て改む

○上毛野陸奥公、神護景雲元年七月丙寅紀に見ゆ

○因授外從五位下、原本下を上に作る類史百九十に據て改む

○磐城郡、今磐城國に屬し石城郡に作る

○假外從五位下、山崎校本假を叙に改作る

○庚寅、此勅は三代格十四に見ゆ

○所施、類史百七十七所充に作り同八十三は本書に同じ

○澆醜、原本澆醜に作る

三箇船、去年夏六月進發、今諸船廻來、稍經年月、伺候之事、恐有懈怠、宜命大宰府及緣海諸國、爲未廻來第二船、依例舉火候之○庚辰、陸奥國耶磨郡大領外正八位上勳八等丈部人磨戶一烟、賜姓上毛野陸奥公○辛巳、以從五位下藤原朝臣氏雄爲縫殿頭、四品忠良親王爲兵部卿、從四位下橘朝臣岑繼爲兼兵部大輔、左近衛少將如故、從五位上藤原朝臣宮房爲少輔、從五位下高原王爲伊豆守、授正六位上和氣朝臣眞菅從五位下、卽爲出羽守、良吏之選也○壬午、分遣六衛府、搜捕京中盜竊○戊子、俘夷物部斯波連宇賀奴、不從逆類、久効功勳、因授外從五位下、陸奥國磐城郡大領外正六位上勳八等磐城臣雄公、遣卽戎途、忘身決勝、居職以來、勤修大橋廿四處、溝池堰廿六處、官舍正倉一百九十宇、宮城郡權大領外從六位上勳七等物部已波美、造私池、溉公田八十餘町、輸私稻一万一千束、賑公民、依此公平、並假外從五位下○庚寅、勅、去承和二年、文殊會料、所施之稻、不足周急、宜加舉正稅、以其息利、加之先數、大上國各二千束、中小國各千束、永充會料○乙未、勅、頃者風俗澆醜、